HYP
ハイプ3
フールズメイト6月号増刊
NUMBER.3
SPECIAL ISSUE
BUCK-TICK

HYP
NUMBER 3
SPECIAL ISSU
BUCK-TICK

BUCK-TICK

桜井敦司

今井寿
HS

星野英彦
hd

樋口曲豆
い

ヤガミトール
TL

CONTENTS

桜井敦司

退廃と破滅と愛の匂いを探して

「ここまでは運とカンだけで生きてきた」。ヴォーカリストはそうつぶやいた。煮えきらぬドラム時代、グレかけた高校時代と、自分の身をなげやりな破滅にさらしながらも常に探し続けてきたその場所から、時に激しく、そして甘く、限りなく切なくもあり、包み込むほど優しくもあるBUCK－TICKを、彼は歌う。華やかなその場所に立ち込める薫り──飽くことを知らない貪欲なアーティストの嗅覚がいまだ追い求めているその匂いは、蒼茫たる退廃か、楼閣の破滅か、真の愛か…。ステージで舞い歌う彼のその動きには、天性のヴォーカリストと呼ぶべきほかのない〝華〟があり、インタビューに答える素顔の中には鷹揚な気品がある。しかしその裏には、ノタウチ回りながら求め探したあまりに人間的な道程があった。ヴォーカリスト桜井敦司、その善悪の彼岸。

ATSINT.

歌謡曲とロック、都会と田舎、天国と地獄……

——歌謡曲でもいいんですけど、音楽というのを最初に意識して聴いたのは、いつ頃のどんなものでした?

A 意識して聴いたのは…小学校の時に「ザ・ベスト10」って番組が始まって、で、ああいうチャート番組って、何かまぁ珍しかったんで、その頃の皆んなの関心というか、学校中の話題になって。で、俺が好きだったのが原田真二とかチャーとかツイストの、あの御三家っていう(笑)。

——結局そういうロック系から入った?

A あぁ、でも凄いメジャーな歌謡曲でも、メロディーが綺麗なのは好きだった。山口百恵でも(笑)、なんでも。

——最初に買ったレコードと言うと。

A いちばん最初は原田真二のデヴュー・アルバム『FEEL HAPPY』っていうやつ(笑)。

——原田真二は、当時2~3曲チャートに入ってましたもんね。でも、それがバンドをやるキッカケにはならなかったわけですね。

A ええ、ぜんぜん。

——それが小学校のいつ頃?

A 小学校5年ですね。あと、それと同時にベイ・シティー・ローラーズとかキッスを。

——その辺の、いわゆる洋楽を聴き始めたキッカケというのは、やはり雑誌とか?

A 同級生の子のお姉ぇーちゃんが、中学2、3年生で、もうベイ・シティーに狂ってたんですね(笑)。その家に遊びに行くと流行りのレコードがあったりして…、で、そこに原田真二もあって、それを聴いて"ああ、いいなぁ"と思ったんです。それでステレオと一緒に原田真二のLPを買ってもらった。

——じゃあ、最初から洋楽が好きというのではなく、そういうのも平行して聴いていた感じ?

A うーん、でも殆ど歌謡曲だったです。それも、自分で"これが聴きたい"って言うんじゃなく、流行ってるから自然に耳に入ってくるような感じで…。

——ビートルズやストーンズみたいなのを遡って聴いたりは?

A うーん、ぜんぜん無かったですね。ビートルズなんかも、そういう、聞こえてくるものを自然に聴いてた。

——高校に入ってからもそんな感じで?

A そうですねぇ。あと'50Sが流行ったりしてたんです。

——ああいうのも聴いてたんですか。

A 中学に入った頃なんて、もう、それ一色でしたね、街中が(笑)。で、まぁ、ちょっとグレたようなやつらが'50Sを好んで聴いてるっていう。

——ヘアスタイルもああいう感じとか?

A いや、群馬県は坊主なんです、中学生は(笑)。

——あっ、そうか。じゃあ桜井君も坊主刈り?

A ええ(笑)。何かやっぱりああいう…感じなんですね。あっちの…群馬とか東北の方は。それで小学校6年くらいになると、だんだん坊主にして慣らしていくみたいな(笑)。

——私も群馬に一年半くらい居たんですよ、小学生の頃だったけど。早く引っ越してよかった(笑)。でも、都会より群馬とかあっちの方が、やっぱり落ち着いたりしますか、性格的に?

A うーん、そうですね。落ち着くっていうか、生まれ育った所だから、自然と…。うん、でもやっぱり落ち着きますね。東京って、どこ行くにしても、人、人、人だから、何か…俺はあんまり苦手なんです。人に酔っちゃうというか(笑)、田舎モンなんですね(笑)。

——や、街歩いてても、イヤんなる時あるもの。

A そう。俺、歩くのけっこう早いんですよ。せっかちな所があるかも知れない…何かこう…駅とかでもね、混雑してるとイライラしちゃって、"もうダメだ!"って思う時がある(笑)。

——ああ、クラクラってくる時ありますよね。

A ええ、そうですよねぇ。何かイライラっていうか、それだけでもう…なんか疲れちゃうんですよね、ドーッと。

——「TOKYO」って詞を書いていますよね。あの東京のイメージっていうか、朝の歌舞伎町とか、ああいう"終わった"感じって好きなんですよ。残飯にカラスが舞い降りてきたり…。

A ああ、なるほどね。うん、妙に切ないですよね、なんかね(笑)。

——そういう光景見ると、"ああ、こんなに終わり切った街って多分ないだろうなぁ"って。

A ああ、そういうのいいですね。こう…なにかこの…一晩にして天国と地獄みたいなね。

——で、本当に普通のサラリーマンみたいな人が出勤して来たりして、そのカラスの中を(笑)。

A そうそう。俺は一体なにをやってるんだって感じになりますよね(笑)。

ドラム時代はただバンドにしがみついてただけだった

——それじゃあ、バンドを始めるという、そういうキッカケになった音楽はなんだったんです?

A うーん、バンド始めるキッカケっていうと、やっぱりパンク。

——ピストルズとか、その辺の?

A 洋楽、邦楽問わずですね。スターリンや、ピストルズや、それにまぁ、やっぱりバンドっていう形ですね。クラッシュでもなんにしても…攻撃的で破壊的なところに惹かれた。

——感性がフィットした?

A ええ(笑)。それまでの自分の周りには、そういう物があまり無かったというか、気がつかなかったから。それまでは何か本当に、なんて言うのかなぁ、ただの不良って感じだったから(笑)。

——高校時代は不良だったってよく言ってるけど、実際はどんな事してたんですか?

A かわいい不良ですよね。ヤンキーとかっていうタイプじゃなく、ただツッパってた。皆んなで街中をバイクで突っ走って、女の子を意識してとか(笑)。

——じゃあ夜遊びするくらいで、特に悪いことをしたとか、そういうんじゃないんでしょ。

A や、結構しました(笑)。

——今だから言えるという程度でいいんですけど、どういう…。

A そうですねぇ。まぁ、タバコ吸ったり、酒飲んだり、カンパという名の恐喝みたいな(笑)…でも高校になって色々と縦の…先輩と後輩の付き合いってのが出てきて…凄い…地獄のようでしたね、アレ。無理を承知で『何時間以内にいくら集めてこい』とか頼むんですよ。そこで『無理ですよ』とか言うと、ポカッと(笑)。そんな毎日だったから。

——ケンカは強い方だった?

A いや、そんなことないです(笑)。嫌い…嫌いというか…好きな人はあんまりいないと思うんだけど、なにかイヤだなぁって思っていても…友達といるのがやっぱり好きだったから。

——じゃあ、けっこう"パンク的"な要素のあった学生時代というか、結局そういうものを発散する場を音楽の中に見つけたという、そういう感じですか?

A うーん、そうなのかなぁ、でも、最初はドラムをやりたいと思ってバンドを始めたんです。中学なんかで、音楽室に入ってドラムをコッソリ叩いたりして、まぁ叩くって言う程のものじゃないんだけど(笑)、見つかって怒られたり…。で、リズムって凄い面白いなぁって思って、あの"ズッダン、ズズダン"っていう単純なのが。それで"ドラムっていいなぁ、自分でも叩けたらいいなぁ"って。しかもキッスとか見て、ドラムがいちばんカッコいいと思ってたんですよ。それでまぁ、アニイがまだ他

のバンドをやってる時に教わったりして、やっていくうちに、"あ、こーりゃぁ難しいな"って(笑)。弦楽器なんかよりはぜんぜん難しいなぁと思い始めて。それでも一年ちょっとやってたんだけど…、で、なんか挫折したっていう感じですね。

——実のところドラムの素質はあったんですか？

A や、ぜんぜんお話しになりませんね(笑)。でも、アニイに言わせるとリズム感はけっこう良かったって(笑)。でも、自分じゃ何かねぇ、うーん…本気でやればどうにかなったかなとも思うんだけど…。その頃、俺だけ東京に出て行けなかったんですよ、事情があって。で、何かひとつ煮え切れなかった部分があって、ドラムもそんなに叩けないし、そこら辺で、あんまり何か…もうひとつ踏ん切りがつかなかった部分があって…ただバンドにしがみついてるみたいな、そんな感じだったから。

——そのドラム時代に聴いていた音楽というと。

A …やっぱりバンドもので、イギリスのパンク・バンドや、日本のバンドだとBOØWYとかローグ。当時は周りがみんなMODSとBOØWYのコピーバンドだったから。そうですねぇ…あと日本ではスターリンとかローグとか…。

——地元のバンドが多いですね(笑)。

A やっぱり凄かったですからね。ローグって言ったら、なにか地元のヒーローみたいな感じだったし。

——その頃はヴォーカルをやるなんて思いもよらなかった？

A ええ、やっぱり。その頃はぜんぜん。自分はそういうタイプじゃないと思ってたんです(笑)。

——でも昔から歌はうまかったとか、音楽の成績も実は良かったとか？

A いやもうぜんぜん(笑)。もぉー不真面目だったから。"歌なんか歌ってられっかよー、恥ずかし〜"って(笑)、そういう感じで。でもバンドやってると、ドラムやりながら、だんだんとハモリなんかを自分で思い浮かべるようになってきたんですよ。メロディーなんかも、もっと綺麗な方がいいなぁと思ったり…。でもドラムの時は本当にまぁ、みんなの後についていくみたいな感じだったから、自主的に「こうしよう、ああしよう」っていうのは無かったですけど。

——で、ある日ヴォーカルをやりたいと、自分から言い出すんですよね？

A はい。ドラムを一年半くらいやってるうちに、地方のバンドとか、TVに出てるバンドとか、外国のバンドのビデオなんかを見て、だんだんヴォーカルの威力っていうか存在感というのに惹かれ始めたのは確かですね"俺だったらもっとやれる！"とか思ってきちゃって、そう思い込むともうダメですね。もう何が何でもやりたいと思っちゃって…。

——頭の中にそれしか無くなっちゃう？

A そうなんです(笑)。ひとつのこと考え出すと、もう周りのことがぜんぜん目に入らなくなっちゃったりして、けっこうそれが災いしたりすることもあるんですけど(笑)。

思い込むと一点集中型

——でもドラムからヴォーカルって珍しいパターンですよね。

A ええ、昔からよく言われました。

——それでヴォーカルを始めて、最初から思ってた通りに出来ました？

A 初めは自分の声質にけっこう悩みましたね(笑)。もっとハードに行かなくちゃって。

——ああ、そういえば声質も『HURRY UP MODE』の頃と今ではだいぶ変わって来てますよね。初めの頃は高音ぽい感じだったけど、『SEVENTH HEAVEN』辺りから。

A ええ。

——あれは意識的に？

A いや、変わってきちゃったんです(笑)。でも『SEVENTH HEAVEN』の時には、色んな声を出そうということで、曲ごとにエフェクトを変えたりしたんですよ。

——声を楽器みたいに使ってますよね、あのアルバムでは。ノドは丈夫な方？

A いや全然、すぐカレちゃいます。楽屋にもホテルにも加湿器入れてます。

——例えば、歌ってみてキイの厳しい曲はコードを変えたりするんですか？

A うーん。そうですねぇ。でもそういうのは最近ですね。『HURRY UP MODE』の頃の曲は自分でもドラム叩いてて、もう全部あった曲だったし。

——再発された『HURRY UP MODE』のリミックス盤でも、ヴォーカルの差し替えはしてないんですよね？

A 差し替えは無いです。低音を上げたくらい、それだけです。あんまり変わったっていう感じはしないんですけどね。

——でね、今回のツアーのステージも見せてもらいましたけど、なにか生まれついてのヴォーカリストというか、アクションなんかもこう次々と自然に出るでしょ。ああいうのは自然と体が動くんですか。実は鏡の前で練習してたりとか(笑)。

A ハハハ。それはないですけど、うーん、自然っていうか、考えてても絶対そういう風にいかない部分ってあるから(笑)。やっぱりその場で、ステージに立ってやってみないと、何が何だか解んないというのがあるから。

——それにしちゃ初日からキマッてましたよね(笑)。BUCK-TICKのステージって、たいてい誰が見てもカッコいいって思うから。

A そうですかぁ(笑)。あの初日の大宮の時は、『悪の華ツアー』での初めてのライヴだし、"どうなるか解んないなぁ"と思って、まぁ本能に任せておけばいいやって。そうしたら瞬間瞬間にけっこうアイデアが湧いてきて、そういう…曲に乗って動いてみたいな感じですね。

——暗転して、ライトがパッと付いたらもう上着のコートが脱いであったりとかね(笑)。

A ああ、ああ。

——ああいうのも、全部その場その場で？

A ええ、そうですね。けっこう…そんな綿密には考えてないです。でも、考えてる人はやっぱり凄いんでしょうね。

——でしょうね。そのためのインストラクターとかコーディネーターみたいな人がいたり。

A MCを考えてくれる人なんかもいるんでしょうかね(笑)？

——らしいですよ。でもその点、MCはシンプルですよね、BUCK-TICKって。

A ハハハ。もう、喋るとボロが出るんで(笑)。結構ねぇ、普通のお兄いーちゃんになっちゃう(笑)。

——MCなんかも事前には考えてない？

A ええ、考えないですね、殆どと言っていいほど。コンサート始まって、で、MC前の曲の後半になってくると"ああどうしようかな"って考えるんだけど、"まぁいいや"って、結局は瞬間瞬間に思ったことをパッと言っちゃう(笑)。しかも喋ったことをすぐ忘れちゃって、憶えてないという(笑)。

——で、そしてヴォーカルになって、最初の2枚のアルバムでは、作詞はまだあまりしてないですよね？

A その頃は、なんていうのかな、何も解らなかったっていうか、やっと歌い出して、その時には『HURRY UP MODE』の曲はもう全部揃ってたし、メジャー・デビュー盤の『SEXUAL～』も、あれもやっぱり昔から演ってる曲が中心だったから、今井が殆ど全部やってて。で、それ以降からだんだんと自分で"歌う奴が書いた方がいいなぁ"と思って、それに俺自身、やっぱり自分で作った言葉っていうものを、それを歌ってインパクト与えたりするのにだんだんと欲が出て来て…。

—やはり他人が書いた詞は、歌う時に感情なんかがつかみにくい？

A うーん、つかみにくいですね。

—でも、そういう発想自体、前向きですよね。よくインタビューなどで、性格は優柔不断で今でもそういう所があるって言ってるけど、そう言う割には、やってきてる事を見ていくと凄いポジティヴなんですよね。

A でも、ほんのある一部分だけですけどね（笑）。一点集中型なのかも知れないです（笑）。一度思い込むと、もうそれ以外は本当に何でもいいって感じになっちゃいますから。

—恋愛なんかも（笑）？

A うーん、結論を急ぐような気配は…あるかも知れないですね（笑）。

自分でも思うけど、単純なんです

—それで『SEXUAL～』で2曲詞を書いて、そして『SEVENTH HEAVEN』から作詞が増えてきますね。

A はい。

—最初は、こういう感じというか、なにか作詞のイメージはあったんですか？

A うーん、やっぱりラヴ・ソングだったですね、単純に。でも、やっぱり何ていうのか、壊れやすいというか…あんまりこう…楽しいって感じでは書きたいとは思わなかったです。

—でも『SEXUAL～』とか、いきなりセックスが題材ですよね（笑）。その辺を聞きたがってる人ってけっこう多いと思うんですけど。

A そうですかぁ（笑）。

—ノーマルですか（爆笑）？

A ノーマル…だと思うんですよね、自分じゃあ。ハハハ…多分。人のは知らないですけどね（笑）。ホントは一番アブなかったりして（笑）。

—BUCK-TICKって、なにかほら、チラリズムっていうか…。

A そうそう、そうなんですよね。

—そこら辺のスレスレのエッチっぽさがうまいですよね。

A なにかヤバイっていう感じ、そういう感じでいきたいと思ってたんです。

—で、本当はエッチなんですか（笑）。

A 本当はエッチです（笑）。多分すごくエッチだと思うんですけど（笑）、ええ。

—本当？ コレ載せちゃいますよ（笑）。

A いや、それぐらいだったらまだ…。具体的になると困るんですけど（笑）。

—では、詞はどういう時に書くんでしょうか？

A やっぱり、曲が上がって来た時ですね（笑）。俺、迫ってこないと動かないタチなんです（笑）。

—歌詞のイメージを膨らませていくのはどういう感じで？

A レコーディングの時期になって曲が上がってくる頃に、まず、自分で書きたいと思う雰囲気を頭の中に作っておくんです。それで、今井のデモテープを初めて聞く時に、それはほんとにすごくラフなデモテープなんだけど、それから受ける印象というのを…こう…〝受けよう、受けよう〟って感じで聴いて、で、自分の中で考えてたことに色々と照らし合わせていくという感じで。だから、最初に受けるインスピレーションを凄い大事にしますね。

—じゃあ、曲と向かい合って、そこからバッと受けたそのイメージで書いていく？

A ええ。

—一回イメージを受けると、もう一気に書いちゃうタイプですか？

A あっ、それは曲によって、時と場合によります（笑）。時によっては半日で出来たり、イメージが出ないと一週間くらいかかったり。でも、やっぱり曲を聴いた時のインスピレーションを大事にして、で、いざ書こうとする時には、やはりノタウチ回って絞ぼり出すっていう感じですね。

—書いている詞と現実との違和感みたいなものは感じますか？

A うん、それはあります。昔は書いていることに自分のエゴとかが出るんだと思ったけど、人に聞かせる時には成り切ってないとダメだなと思った。そういう考え方でも変わってきた部分ってありますね。とことん見せるんだ、聴かせるんだ、みたいな。

—言葉の選び方とかつなぎ方とか、けっこう抽象的ですよね。ストーリー性の強い詞よりはイメージ的な詞が得意？

A 色々と書きたいとは思ってるんですけどもね。

—曲を作った側から、「こういうイメージ」でみたいな詞のアイデアが出ることは？

A うーん、あってもやっぱり部分部分ですね、うん。最近はもう勝手に書いてるんですけど。

—逆に、「この曲はこういう風に弾いてくれ」とか、作詞者・ヴォーカリストとして、曲の面に注文をつけることはあるんですか？

A そうですね。例えばギターのコード進行をこういう風にとか、そういうのではなく、雰囲気を大事にしたいんですよ。だからメロディーを聴いた時に、こういうアレンジが欲しいとか、漠然としたことばっかりなんですけどね、言うのは。だから、元のメロディーは曲を仕上げていく段階もいちばん変わらないです。リズムは多少変わるし、アレンジは大幅に変わったりもするし、でもメロディーにはやっぱり忠実ですね。

—今井さんとはけっこう世界が似てるんじゃないですか？

A うーん、そうですね。でも…。

—ちょっと違う？

A なにか最近ですね、似てきたなぁって思うのは…『TABOO』辺りから。

—表現者として、どっちかっていうと今井さんはちょっとヒネクレてて裏をかくけど、桜井さんの方はストレートっていうか…。

A そうですね。単純なんです（笑）。そう、自分でもそう思うけど、うーん、やっぱり『SEVENTH HEAVEN』が終わったところで、〝こういうのやりたい〟という意見が合ったというか…。あのアルバム自体は本当にリハーサルとかも出来なかったアルバムだし、不安定っていうか、どういう音作りっていうのもあんまりなかったんですけど、「VICTIMS OF LOVE」が出来た時に、〝あ、これ絶対カッコいいなぁ〟と思って、これはいまだにライヴでも演ってるんですけど、今井に『俺、こういうのやりたい』って言って、そういう感じを考えといて貰って、で、やるんだったらもう徹底的にやろうってことで、ああいう『TABOO』みたいなアルバムを作ったんです。だからあの「VICTIMS～」が『TABOO』につながったと自分では考えてるんです。

—そうですね、『TABOO』でBUCK-TICKのスタイルというか、ひとつの形が出てきましたものね。

A ええ。あれを出して凄い変わったと思うんですよ、方向性なんかも。ヒントになったアルバムだし、それにやっぱりダークなイメージっていうのも付いてきたし、ステージに関しても、男のファンも増えてきたしてね。

客席から一度 BUCK-TICKを見たい

—『TABOO』は凄く完成度の高い、いわゆる野心作という感じがして自分もすごい好きなんだけど、その分もしかしたら、それまでのファンの子、例えば中学生くらいの若い子なんかがついてこれるのかなって心配もしたんですよ。作ってる方としてそういうのは無かった？

A うーん、作ってる時にはそういう事は…でもその後に、やっぱりそう思いましたね。〝あ、こりゃちょっと重い

かな″（笑）って。

――あと逆にね、この次が凄く難しいだろうなぁって思ったんですよ。

A えぇ、えぇ。

――『TABOO』であそこまで行っちゃって、その後はどうやって行くんだろうって。

A ほんとはね、『TABOO』の次は、あれよりももっと、突っ込んでやりたかったなぁっていう感じがしたんだけど、何かちょっと、やっぱりポップになった（笑）

――もしね、『TABOO』出して、あのまま順調にツアーして、それからアルバム出すってことになってたら、恐らく『悪の華』は出来てなかったと思うんですよ。もうちょっと″行っちゃった″だろうって。

A うん、そうですね。

――それがちょっとブランクができて、仕切り直しみたいな感じになって、それで出来てきたのが、『TABOO』

の世界を保ちつつもよりポップで、しかも自らの世界を持つという、なんか、一番難しいことを成し遂げたあの作品なんですよね。だから、結果的には誰も裏切らなかったというか、待っていたファンはもちろん、BUCK-TICKに係わって一生懸命やってくれている人に対しても。無論そういうことを意識して作品を作ってるワケじゃないにしろ、そういう誰のマイナスにもならない作品を上げてくるという、そこが凄いっていうのを実感したんですよ、『悪の華』では。

A それは、もちろん自分達のやりたいことっていうのが前提なんだけど、何ていうのかな、サービス精神があると思うんですよ、今井なんかは。もう、ビックリさせてやろうっていう感じだから。だからまぁ、勢いがついたというか、戻ったっていう感じですね。ブランクがあったその反動っていうか。

——本当はチャートやセールスなんかも、いちいち気にはしていないんでしょ?

A ええ、チャートを意識してないって言ったら、個人的にはカッコ付けてるみたいですけど、無いんですよね。もちろん売れればそれにこしたことはないんだけど(笑)、自分が満足してればとりあえずいいみたいな……満足した作品が出来たり、コンサートが出来ればって。で、後で周りから何位だとか何枚売れてるだとか、色々な情報が入ってくるけど、それはあまり考えてないっていう……。

——そういうことは気にしてなくとも、〝これは売れるぞ〟みたいな実感というか、例えば初めて10位以内にチャート・インした『SEVENTH HEAVEN』を作り終えた時とか、そういう自信とか予感みたいなものも感じなかった?

A いや、そういうのもぜんぜん考えてなかった。『SEX-UAL～』出した時も、〝まあまあだ〟って言われたけど、どれくらい売れてるっていうのはぜんぜん解んなかったし、『SEVENTH～』の時も、〝そこそこは行く〟って言われてて、行けばいいなぁとは思ったんですけど、それよりも内容の方に納得できないことが多かったんで、リハーサルとかアレンジとか、やり残したことばっかりで、むしろそっちの方が気になってたから、だから……なんか戦略みたいなもんて考えてやってなくて、昔からスタイルや部分的には変わってきているけど、取りあえずはただもう好きなことをやりたいっていう気持ちだけなんです。

——それからね、『悪の華』を聴くと、今までに比べてすごくヴォーカルが前に出ているような気がするんですけど。

A ええ、ええ。ミックスの段階で、エンジニアの人が俺の思ったレベルよりも少しづつヴォーカルを出してるんです。でもやっぱり俺、ヴォーカルが出てるのが一番気持ち良いんですよね。ロック・バンドでヴォーカルが埋もれていると、聴いてて疲れちゃう。前の『TABOO』は音の分離が凄くハッキリしていて、どの音も均等に聞こえるけど、今回のはバンド・サウンドの上にヴォーカルがあるっていう感じで、俺としてはすごい気に入ってるんです。

——あの『悪の華』の曲って、ヴォーカリストとしては難しいというか、歌いにくい曲が多いんじゃありませんか?

A そう。歌入れの時に、〝時間がもっとあればなぁ〟って……すごく思った。その時にはあまり時間がなくて、歌い込めなかったんですよ。でもこれまでのレコーディングに比べれば時間はかなりあったから、各パートのリハーサルも積めたし、自分でも本当に楽しめてやったというか、〝もっとこうしたい〟という欲がすごいあって、それがやはり良い方向に出たと思います。

——「JUST ONE MORE KISS」辺りからですかね、今井さんの曲がヴォーカリストを困らすようになったのは(笑)。

A ああ、あの曲も難しいですね。事務所の社長が歌うんですけど、『難しい、難しい』って言って、笑わせてもらいますけど(笑)。

——ああ、カラオケでね。カラオケで「JUST ONE MORE KISS」歌ったことありますか?

A やー、それはさすがに無いです(笑)。カラオケだと何かショボくなってるような気がして(笑)。

——あの曲が『TABOO』に入るのは、あれは最初から決まってたんですか?

A いや、最後まで悩んだんです。「TABOO」で終わってた方が、雰囲気としてはバッチリだったんだけど……色々あって。

——うん、何となく解ります(笑)。あと、あのアルバムでは「SILENT NIGHT」のヴォーカル、あれにはビックリしましたね。なにか反則ワザって感じで(笑)。

A 反則ですか(笑)。

——ほら、耳元30センチで歌ってるようなね。

A 生々しいですからね。ハハハ、反則ねぇ(笑)。でも勉強になりました、エフェクトを何も使わないというのは。それまではエフェクターに頼ってた部分が多かったんで。

——個人的に、これまでで一番好きな曲というとどれですか?

A なんだろうなぁ……やっぱりアルバムによってもあるし、「VICTIMS～」も好きだし……

——では、自分で書いた詞の中で一番満足してるのは?

A んー、「MISTY ZONE」とか……『悪の華』で言うと「悪の華」ですね。

——作曲が『HURRY UP MODE』で一曲ありましたけど、作曲は何でするんですか?

A 俺、鼻歌ですね(笑)。でも作るって言っても、本当に後にも先にもあれしかないですからね(笑)。本当は作りたいなぁって思ってますけど。

——イメージとしてね、『HURRY UP MODE』と『悪の華』ってすごい似ている気がするんです。オリエンタル風の「HURRY UP MODE」と「幻の都」が大体同じ曲順の所に入っていたりして……。

A ああ、なるほどね。でも、自分たちの曲って、もうそういう客観的に比較する感じでは聴けないですから(笑)……。

——うーん、そうですよね。自分たちのステージを生で見たこともないわけだもんね(笑)。

A そうそう(笑)。

——一回見た方がいいですよ。ほんとにカッコ良いから(笑)。

A うん。一度、第三者になって見たいですね。

生まれて初めて感動した曲は「明日のジョー」

——あの活動停止期間はどういう風に過ごしていたんですか?

A 最初の三ケ月くらいは、やはりあまり外に出られない状態だったんで、まぁ、誰かの家に集まったりはあったんですけど、今まではほんと自然にいつも一緒にいるような感じだったのが、それがなにか〝会おう〟って意識して、〝集まって酒でも飲もうか〟っていう感じじゃないと会えないっていう……そういうのって初めてでしたからね。

——それまでは、ひとりでいるよりメンバーと一緒にいる方が多かった?

A ええ。そういうことすら意識して考えたことないくらいでしたし、ほんと自然にいるって感じだったから。あの時は本当にワケ解んなかったんですね、不安で……。どうなるんだろうと思って、やはり精神的にも参りました。

——その間の生活というのは?

A 家で……ビデオみたり、たまに酒を飲みに出たり、本読んだりと、そんな感じでしたね。

——外へフラッと飲みに行ったりするんですか?

A ええ。

——お酒は何が?

A バーボン。

――強い？

A と、言われます(笑)。

――覚えたてからバーボン？

A 初めはまだ群馬の田舎にいた頃で、高校卒業して焼酎ばっか飲んでました(笑)、ビールだとすぐ腹いっぱいになっちゃうから。その焼酎もだんだん度数が高くなっていって、35度とかね(笑)。でも、しばらくはウマイと思って飲んだことないんです。親父も凄い飲んだんで、〝あんまり酒飲みにはなりたくねぇな〟と思ってたのに、もう同じになってたという(笑)。

――酔うとどうなります？

A あんまり変わんないみたいですね。気前良くなってドボドボ注いだりとかはありますけど(笑)。

――ビデオの話もちょっと聞きたいんですけど、どんな映画をよく見ますか？

A やっぱり、ハッピーエンドじゃないやつですね。

――ヨーロッパ映画の単館上映ぽいやつ(笑)？

A ええ、やっぱり主人公の精神的な部分が出ていて、それで方向としては破滅型みたいな、そういうのを好んで見ちゃう。

――破滅に憧れますか？

A そうですね(笑)、頭の中でだけですけどね。現実的にそうなったら嫌だけど(笑)、作品としてはすごく憧れます。アメリカ映画の超娯楽大作なんかは、あんまり見ないんですよね。見てる時には楽しいのかも知れないけど、それで終わりっていう感じで、もっと自分の創造力をかきたててくれるようなものや、あとはサッパリし過ぎてるギャング物とか(笑)、かえってああいうのが好きなんですよ。

――「太陽がいっぱい」が好きだとか？

A ええ、ああいう凄い不安定な人間って好きで、またラストがドラマティックな…あとはゴダールの作品とか。小説にしても太宰治とかね、「コインロッカーベイビース」なんか、やっぱり良かったなぁ。

――太宰も自己破滅的に死んじゃいましたからね(笑)。そういう世界って、今回の『悪の華』に歌詞にも漂っているような気もしたんですけど。

A そうですね。今回は7曲書いたんですけど、色んな方向に土台を伸ばしたというか…。頭の中で自分だけのスリルを楽しみたいというか、破滅みたいなものから、色んなドラマの大ワクみたいなものを…自分の詞の中だけの主人公を設定しちゃうんですよ。それがどこかに向かって進んで行くようであったり、ま、破滅に漂ってたりとか…でもあんまりカッコつけて書けないっていうのはある。

――でも、破滅っていいですよね、なんか(笑)。

A そう、カッコイイと思っちゃうんですよ。破滅とか世紀末的な匂いって言うのを。頭の中でそういう場面に自分を置いちゃう。まぁ、書く詞によっても違うんですけどね。

――今回はセクシャリティというか、以前のようにセックスというものを強く感じさせる詞はないですね。

A そうですね、何というか、人間が極端なんですよ(笑)。中途半端な状態って好きじゃないし。

――あと、最近の、特に『悪の華』には、近未来SFみたいな、何かこう…都市の破滅と自己破滅みたいなのが交錯してる感じもあるように思うんですが？

A 自分では、けっこうレトロだと思うんですよ。一旦こうレトロに戻って、そこからまた未来を見てみたというか…。レトロな雰囲気って未だに好きなんですよね。

――レトロと言えば、小さい頃に見てたTV番組なんかで、好きなのとかありますか？

A TV番組でですか…。

――うん。ほら子供向けのTV番組の主題歌って、短調で突っ走るカッコいいメロディーが多いじゃない、それこそ「悪の華」風の(笑)。

A あ、そうそう。俺、「あしたのジョー」のテーマ・ソングがもぉー…凄い好きで、生まれて初めて感動した曲ってアレなんです(笑)。

――あー、あれはいい曲ですね。作詞は寺山修二なんですよ。

A えー、そうなんですか、へぇー。で、レコードも買ったんですよ、シングルを(笑)。そしたら歌が2番まであるとは知らなかった(笑)。

――そう。しかも2番の歌詞が、これがまた重いんだ(笑)。で、最近聴いてるのはどの辺の音楽？

A 今は…けっこうグチャグチャですね。えーと、具体的に言うと、まぁバウハウス系ですね。やっぱりピーター・マーフィーのソロとか、ラヴ&ロケッツとか、やはり根本的に暗ぁ〜くて、精神的に本当にズドーンって落ち込んでるのが凄く好きなんで(笑)、そういうのを探してるんですけどね。リズムがドカドカってきて、マイナーな突っ走る感じのって、今はあまりないですからね。あとはデヴィッド・ボウイとか、ホントに昔のを。

――じゃあ最近イギリスで流行ってるダンス系やハウスなんかは聴かない？

A ああ、あんまり聴かないですね、そっちは。だからラップとかって全然解んないんです。どういうのが良いんだろうとか、あれは踊るからいいのかなとか。やはりじっくり聴くという方がいいですね。

一滴の酒も口にしない ツアー中のストイシズム

――で、レコーディングが終わって、復然ライヴがいきなり東京ドームっていう、ほんとにBUCK-TICKらしい派手さで(笑)帰ってくるんですよね。

A やっぱりあの事があって、復帰っていったら派手にいきたかったしね。人が集まるからとかそういうんじゃなく、今までが変に派手だったから(笑)、派手なこと好きだし(笑)、何のコンセプトも無しでドームで本当に一発限りっていうのをやりたいって。でも、やってる側の気持ちとしては、場所だとか、何人入るだとかを考えててもツマんないっていうか、そういうんじゃなくて、今日はカッコ良く決めたいとか(笑)、そんなことばっか考えてるんですけどね。

――見せたいっていう？

A そうですね。自己満足の世界なんでしょうかね。詞でもレコードでもライヴでも、自分が〝ここでこうしよう〟と思って、ソレが出来た時は気分がいいし、それに対してお客さんがついてくる形だったら本当に嬉しい。だから自分が好きなことやってないと、お客さんがいくら盛り上がってもフラストレーションが残りますね。

――そういえば、お客さんを煽るようなMCはあまり無いですよね。

A うーん、アマチュアでライヴハウスでやってた頃は、何か必要以上に命令口調だったりっていうのはありましたけど、でもあとで自分がバカみたいだって思って(笑)。今はやはり見せるっていう事を凄く大事にしたいなと思ってるんで、何ていうか、見てる人には〝自分でイマジネーションを湧かしてくれ〟って言うような、そういう感じがあるんですよね。

――じゃあ、MCなんかで自分から〝こうしろ〟と言うのは避けてる？

A でもまぁ、あんまり頭に来ることがあると言いますよ、モノが飛んで来たりするとか(笑)。

――ツアー中は、乾杯のビールすら、お酒を一滴も口にしないんですってね？

A ええ、前にインディーズの頃に、前日にビール飲んで失敗したことがあって、それ以来。

――でも、けっこうツライものがありますよね。特に今回のツアーなんて6月までだし。

A そうですけどね、でも、体調悪くしてステージやるのも本当にイヤですから。自分の考えとは裏腹に、声が出なかったり、体が動かなかったりするとか、あっちが痛いこっちが痛いとかって、本当に憂鬱になりますから。

——あとね、ステージで今井君に絡むところがあるでしょ。で、今井君以外の人とはないですよね、ああいうシーンは（笑）。あれはやはり今井君がいちばんヤリやすいから（笑）？

A うーん、そうですね。ヒデなんかは、何かそういうタイプじゃないっていうか（笑）、こう、何ていうのかな…その場その場のハプニングを表現するみたいな感じは、やっぱり今井の方が見せやすいし、ヤリやすい気がする（笑）。それにヒデなんかは、しっかりリズム刻んでるから、〝あんまりマズイかなぁ〟とか思って（笑）。ユータも…職人かたぎみたいな感じでキッチリやってるから、やっぱり役割分担って言うんですかね（笑）。

——また、ステージとオフで、BUCK-TICK のキャラクターって変わるんですよね。取材なんかの時には一番話してくれるユータ君が、ステージではあんまり動かないとか。

A あいつが一番変わるんですよね、180度変わるから（笑）。でも普段のインタビューなんかではあいつが一番アピールしてくれるから、あいつの分までね、ステージではこっちがアピールしないと（笑）。

——最近目につくところでは、星野君のアクションがハッキリ言って大きくなりましたよね。

A そうですね。なにかアイツ、最近調子づいてますね（爆笑）。でも、アマチュアの頃から俺が真ん中でイバってる感じで、で、ギターとか下向いて弾いてたから『もっとアピールした方がいいよ』って（笑）、いつも言ってたくらいだから。

——ステージ衣装なんかは？

A あれは個人個人、自分でアイデア出すんです。

——ジャケットとかビデオとかステージなんかもメンバーでアイデア出すんですよね。そうするとBUCK-TICKって、凄くマルチ的な才能が要求されますね？

A でもけっこうね、何でもかんでも自分たちでヤリたいっていうのがあるから。人に任せといて、で、出来てきたものに文句言っても、じゃあ最初から言ってくれって話になるから。

——でもBUCK-TICKには、ブーブーと文句を言うというイメージは無いですね。

A うーん、そうですね、みんなお人好しが揃ってるから（笑）。

「愛し合う」なら男だってOK

——オフとか、普段は割と家にいる方ですか？

A そうですね、あんまり外に出ないですね。さっきも言ったけど、外に出ると疲れちゃうんですよ、だから買い物なんかも、本当に〝行かなくちゃ〟と思わないと行かない。

——でも、これだけ世間に顔が知られてると、買い物なんかも大変でしょう？

A うーん、でもけっこう平気で、行く時はひとりでポロッと出ます。でも本当にすぐに帰ってきますけどね（笑）。あまりダラダラできない。

——よくほら、デパート回ったりするのが好きな人とかいるけど、買い物なんかは本当は好きじゃなかったり？

A やぁー、ゆっくり選びたいんだけど、なにか落ち着かないというか…東京に来て初めて、あの…店員さんとか寄って来るでしょ。ああいうのどーも好きじゃないんですね（笑）。

——（笑）ああ、解る。『よろしかった、どーぞ』みたいなね。

A そう、で、どんどん出してくるんだけど、こっちはねぇー、別に…気に入ったのがあったら、そりゃあ着るけど…。

——ああいうの平気な人もいるんですよね（笑）。で、基本的にアレでしょ、優しいタイプというか、断れないタイプ（笑）？

A ええ（笑）。勧められると買っちゃうタイプですね（笑）。

——好きなブランドとか…下世話な質問で申し訳ないんですが、あるんですか？

A ブランド…服のですか？…アーストン・ボラージュとか、ルナマティーノなんかは好きなんですけどね。ステージ衣装にも使ってて…。でも、カッコ良きゃ何でもいいやって、最近はTシャツでライヴやりたいくらいですからねぇ（笑）。

——え、本当に。

A ええ、何でもいいやって感じで。

——下世話ついでに（笑）、使ってる化粧品などは（笑）？

A あんまりそういうのは…どれってないんですよ（笑）。ほんとに〝何でもいいや〟なんです。

——ほら、デヴュー当時からメンバーの意に反して、ヴィジュアルの事やなんかでも、戦略だ何だって言われてたでしょ。『なんで髪の毛を立ててるんだ』って、それこそ何百回もインタビュー訊かれたり（笑）。

A そうですね。昔から、計算を重ねてコンセプトを立ててるような感じに思われてきたんだけど、こっちはただ、好きなことやりたいって気持ちだけでやってきたんですよね、髪の毛を立てたのも下ろしたのも（笑）。あれもただ、もう面倒臭くなっちゃったから下ろしただけだし。

——もう一年くらい前でしたっけ？

A そのくらいですね。ほんとはもっと早く下ろしたかったんですけど、色々ありまして（笑）。あんまりね、型にハマるのが好きじゃないんです。人からこういう風にしろと言われると、逆にそういう風にはしたくなるタイプだから。自分がこうしたいと思った事をしちゃうタイプなんです。それが良いのか悪いのか（笑）…とにかく動くことの方が先に出ますから。自分は元々、何ていうか…運とカンだけで生きてるような気がするんです、あんまり考えないし（笑）。

——メンバー皆んなで外に出かけたりもしますか？

A 固まってるとけっこう目立つんで（笑）、みんなでワーッと表に行って酒を飲むなんてあんまりなかったんですけど、ブランクの期間にそういう生活になって、まぁ最近は店の隅で固まって飲んだりとか（笑）してます。でも普段はたいてい家にいますね。

——部屋はキレイに片付けてるタイプ？

A いや、けっこう汚いですよ（笑）。O型だからなのかどうかは知らないけど、思い立つとすっごい…その場でキレイにするんですけどね。一日経つとまたもう元に戻るっていう（笑）。

——キレイじゃないと性格的に落ち着かないとか、そういうのはあまりない？

A ないですね。〝ああ、汚いな〟って思ってはいても、〝まぁ、いいや〟って感じ（笑）。で、ふと思い立つともう徹底的にキレイにするみたいな。

——これ、超下世話な質問なんですけど（笑）…メンクイですか（笑）。

A いや、そうでもないです（笑）、とか言って…。

——性格重視？

A 重視はしてないんだけど、単純だから、優しくされると〝ああ〟とか、思っちゃったりすることもあります（笑）。単純なんですね、やっぱり。ホメられると調子に乗るし（笑）。

——でも、これだけのトップ・バンドになると、一般人的な〝彼女とデート〟みたいな世界とは縁遠いわけですよね。そういう興味はもう無くなったとか？

A ハハハ、そんなことないですよ。そうしたいなと思ったら多分するでしょうね。

——で、いま特定の人は（笑）？

A 彼女は、もう、いっぱいいますよ（笑）。

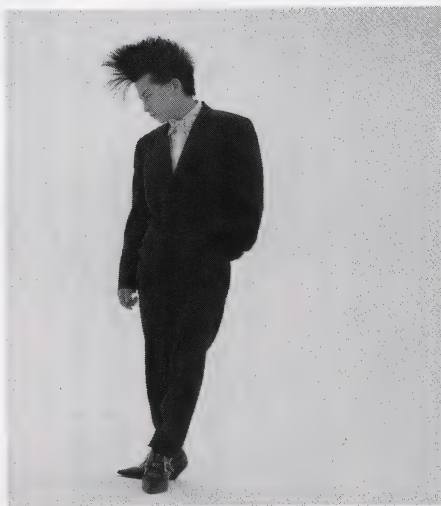
——何十人も？

A いや、いや、全国に何万人と（笑）

——ああ、「みんなで愛し合おう」というコンセプトですからね。

A ええ、何たって、男もOKですから（爆笑）。

樋口豊

意志の錬金術師

ひとりでも欠いていれば現在のBUCK－TICKがありえなかったことはもちろんだが、とりわけ活動上の諸問題に対して、ユータの果たしてきた役割りは大きい。言い古された感もあろうが、激動した近年のバンド内外を思う時、彼の行動力なくして難局を突破できたか否かは、はなはだ疑問。よくメンバーの考えをまとめ、適切な判断をつみ重ねてきたことによって、トップバンドの座がある。夢や憧れで終わってしまいそうな事柄を次々と実現させてきた者ならではの、さすがに見上げた説得力だ。実績に裏づけられた確かな信念が伝わる総括インタビュー。

UTINT.

ロックな環境に産まれる

——音楽を聴き始めたのは。

U　やっぱアニイがいましたからね。俺なんか比べものになんないぐらい、たくさん聴いてましたから。あと、いちばん上の死んだ兄貴もけっこういろんなレコード持ってたし。そういうのがあって、小学校ぐらいからキッスとかのロックが耳に入ってきてました。

——最初から洋楽だったんですか。

U　そうですね。アニイにしろ死んだ兄貴が残したレコードにしろ、洋楽ばっかでしたから。けっこう日本のロックが流行ってたんだろうけど、俺ら小学生の頃っていったら、〝ミュージック・ライフ〟とか全盛でしょう。結局アニイの場合、日本で最初にロックだと思ったのはキャロルだったみたいで(笑)、その前は邦楽にぜんぜん興味なかったし。だからそういう感じで、外タレいっぱい聴いてて、なりゆきで俺もそうなって。まだそんな、興味なかったたですけどね。

——キッスは強力でした?

U　インパクトありましたよね、ガキはガキなりに。今だに憶えてますもん。テレビでやってて、ダーダダダダ、ドッカーン！　なんて(笑)。うわスッゲー、みたいな。アニイが中三ぐらいの時ですか、知らず知らずのうちに見てたんだと思いますけど。

——いい環境ですね。

U　まあ、そうなのかな。あと、お姉さんもいて4人だったんですけど、やっぱりアニイが中3ぐらいの時、上の兄貴が死んで……。ドラマーだったんですよ、ドラムを残して。アニイもよくバンドやってましたしね。そういうのがあったんで、ぜんぜん意識しないでもレコード買ったりするようになったのかな。ザ・ナックとか(笑)ポリスとか、おもしろいなあ、なんて寝ながら聴いたり。

——日本の歌謡曲なんかはぜんぜん通らなかった?

U　そんなに歌謡曲を根強く聴こうっていうのはなかったですね。強烈に思い出すのって、ほとんどないし。中学に行ってからレコードを自分で買うようになったんですけど、その時期ではやっぱりナックとか。

——ナックはどういうところで?(笑)

U　たぶん、きっかけっていうのはテレビだったんでしょうね。プロモーション・ビデオでまっ白い所でただ演奏してるだけなんだけど、それがすごいおもしろくて。

——一応ニューウェイヴと呼ばれるものの最初ですか。

U　そうなりますかね。だから、ポリスなんかも最初に聴いた時はまだパンク・バンドの匂いがしたでしょう。そういう匂いで聴いてた気がしますね。だから自分に届いてくるもの以外は知らなくて。で、高校ぐらいになってから、ああ、こういうものもあるのかと思って、アニイの借りて聴いたり。コステロとかもあって、ニューウェイヴも何もわからないんだけど、すごいとっつきやすかったでしょう。単にロックンロールみたいなニュアンスでしたからね。

ピストルズはリスナーをプレイヤーに変えた

——じゃあ、ロックってものに対して積極的になり出したのは中学から高校の時期。

U　うーん、中学はまだ……。死ぬほど聴いてたってわけじゃないですよね。学校なんかでも周りにはそういう奴まったくいなかったし。日本では、ロックバンドってものがぜんぜんメジャーじゃないっていうか。メジャーからは出てるんだけど、大ヒットすることなんてないし、一般の人には浸透してないっていう。そういう中でドーッと出てきたのは、アナーキーぐらいで、それ以外は誰もが知ってるようなロックバンド、ほとんどいなかったから。

——アナーキー……。

U　聴きましたよ、けっこう。その頃、一世を風靡したでしょう。それがきっかけになってARBとかロッカーズ、ルースターズとか出てきましたもんね。今にしてみればマニアックなんだろうけど、より近い所にロックのバンドが出始めたっていう時代になって。自分の耳まで到達したっていうか、外タレを聴く層と、日本のロック層が一緒になって。

——パンクに刺激された人たちが日本でもやり始めましたからね。

U　ええ、そういう。例えばアニイが持ってたのをその辺からとってきて、ピストルズとかクラッシュ、ジャム、あとイーターとか(笑)聴くでしょう。で、アナーキー聴くとそんな変わんないんですよね。あ、同じだ、これこっちの歌だったんだ、みたいな(笑)。

——外国のパンクでは、やっぱり圧倒的にピストルズでした?

U　結局、自分でバンドやろうっていうきっかけになりましたからね。演奏なんかめちゃくちゃヘタクソなんだけど、映像見るとかっこいいでしょ。プロモーション・ビデオみたいのでジョン・ライドンがぜんぜん変な方を向いて歌ってるライヴなんか見ると。ドラマーのポール・クックとかも、叩いてるの見るとナンダこいつらみたいな(笑)。衝撃度は一番でしたよね。

——リアルなロックというか(笑)。

U　だから本当に貧乏みたいな。本当にパンクなんだなーっていうイメージがあったから。ほら、クラッシュなんかだときれいでしょう、コーラスうまいし。ジャムもなんかピシッとしちゃってるからあんまり興味なくて。パンクっぽさがないっていうか。そこへいくとぜんぜん違いましたからね。ピストルズのことを、パンクってものなんだと思ってましたもん。

——ダムド、ストラングラーズ辺りは。

U　それはぜんぜん後から。とにかく初めは大メジャーなところから聴いて、そういうのを知ってから、いろんなニューウェイヴって呼ばれるものを聴き出したんで。ニューウェイヴって言っても、当時の俺らにはどうしてもパンクにしか聴こえないんですよ。XTCにしたってそうですもんね。パンクだと思ってて。でも、すごく変だなあって感じはありましたけど。

——年代としては実体験なんですか。

U　まず、アニイとかに『ほら、同じだろう』って聴かせてもらった第一次ブームがあったでしょう。で、その次に流行ったブームがありましたよね。日本でもパンクってものが注目されてスターリンとか流行って。音楽雑誌で言えば〝DOLL〟が流行って、いなかじゃ売ってない、みたいな(笑)。その時期ですね、積極的になったのは。少ししてハードコア・パンクが出始めた頃は、もう自分でもインパクト受けたっていうか、いろんなものをもっと聴こう、もっと聴こうって思ってましたよね。

——立ち上がれ、自分でやれみたいなスローガンがあったでしょう(笑)。実生活で何か変わったりしましたか。

U　やっぱり変わったっていうと……、ヘアスタイルとか(笑)。

——それもんで学校行っちゃうわけですか。

U　妙に立ってたりするでしょう。学校にはそんなに立てて行かないけど、今みたく帽子かぶって行けるわけじゃないし。変な切り方なんですよ、てっぺんが立ってて、脇だけ長いとか。学校がわりと厳しかったんですけど、パーマかけてはいないから別にわかんないだろう、みたいな。横だけ思いっきり短かくて剃ってはないんだけど上は立ってるとか(笑)。それをまた、下ろしてるもんだから、なんかエライ妙なんですよ。でも1回、高校三年の時に、すごいモヒカンみたいにしてったら怒られましたけど(笑)。

〝ベース弾いてみなよ〟

——ベースを始めたのは。

U　高二の終りぐらいの時かな、アニイがやってたバンド

があったんですけど、そこのベースの人に遊びで弾かせてもらったのが最初で。本当、遊びでね、『ちょっと弾いてみなよ、ここをこうやるんだよ』みたいな。そのぐらいしかないのに、今度は自分らでバンドやろうってことになった時、弾いたことある楽器がベースだけだったから、じゃあベースだ、みたいな（笑）。

——楽器がそこら辺にころがってる状態ですか。

U　ええ、アニイたちの練習場だったから。家もなんか…、離婚しちゃったりしてオヤジが会社やってたから、昼間けっこう人がいない状態なんですよ。だからできちゃうみたいな、その意味ではラクでしたけど（笑）。アニイの部屋がすごい広くて、12畳ぐらいありましたからね。そこにドラムセットからアンプから全部置いてあるっていう。

——それがそのまま非難GO-GOの練習場になったわけですね。

——そうス。だからバンド始めた時も、じゃあ家で練習しよう、みたいな。アニイたちが練習してない時は俺らがやろうって具合に、適当に集まり始めたんですよ。

——ベースも家で鳴らしちゃうんですか？

U　もう苦情がすごかったですけどね。

——そんな子を持つ親は大変ですね（笑）。

U　かーちゃんの方は、もともとすごい好意的だったんです。でも、オヤジがね。どこの世界でもそうなんだろうけど、やっぱりオヤジは好意的じゃないんですよ。まだアニイに対しては好意的なんだけど。もうずっと、バンドばっかりやってたから『だったらおまえ、ドラムの学校行け』とか言ったり。そこへいくと、俺には違いましたもんね。

——差別待遇だった？（笑）

U　あ、ありましたよ！　そういうの。いちばん下だったし。何ていうのかな、アニイは高校も中退しちゃって、あきらめたっていうんじゃないスけど（笑）、もうイイみたいなとこあったんですよ。俺はその後も高校出て東京行ったりして、専門学校でオヤジみたく経営の勉強なんかしてたから、なおさらだったと思うんですけど。バンド始めてずいぶん経ってからまで、おまえは帰ってこい帰ってこいって言われましたよ。

——今でも言うんですか。

U　いや…（笑）。ずっとそう言ってたんですよね。要するに、インディーズからレコード出しても認めてくれない。『歌なんて俺でも歌えるよ、レコードなんか作れるよ』って。それからビクターと契約したんだって言ったんです、要するにプロになったってことを言ったら、だんだん認めるようになってきたんですよ。親とか変なもので、メジャーに行けば認めるっていう。

——そういうもんでしょう（笑）。

U　あい変わらず、周りからは白い目で見られてますけどね（笑）。あ、ジギーの話、知ってます？　すごいおもしろかったの、徳間に入っても親がぜんぜん信用しないらしいんですよ、バンドなんかどうしようもない、とか言って。それで、パーティーがあるでしょう、ヒット賞パーティーみたいなやつ。そこに五木ひろしさんがいて、五木さんすいません、一緒に写真撮ってくださいって（笑）。メンバーが集まって、五木さんを真ん中にして盛り上がってる写真を田舎に送ったら『えらくなったもんだ』つって説得できたと（笑）。

BOØWY、ローグの躍進

——バンド始めるきっかけはピストルズだったってことですけど、周りでもそういう気運があったわけですか。

U　高校の同い年にはそんなにいなくて、なぜか後輩にバンド始めるやつ多かったんですけど、学校に限らずコピーバンドがすごい出てきましたよね。始めたばっかの頃はまだ軽い気持ちっていうか、趣味で終わってしまうようなもんだと思ってましたけどね。

——趣味で終わらずにやっていけると感じたのは、一連のバンドが進出していたから？

U　ええ、やっぱりそれが大きいです。日本のロックが盛り上がるっていうんじゃないけど、次々と耳に入ってきた時代でしょう。レコード屋に行ってもルースターズのポスターが貼ってあったり。で、インディーズってものが巷で話題になって（笑）。あんまり分けて考えてなかっ

たけど……、ていうか聴く方にとってはインディーズもモッズやルースターズも同じだったんですけど、そういうのでロックってすごいすごいと思い直したっていうか。ごく限られたものだと思ってたのに、モッズがテレビに出ちゃったりね。で、これなら自分らも一生懸命やればできるんじゃないかって。だから今思えば、判断て言うとアレですけど、早かったんでしょうね。ここでコピーで終わるか、オリジナルでやっていくかっていうのが運命の別れ道みたいな。結局コピー3か月ぐらいしかやんなかったのも、そういう理由なんですよ。

――国内のパンク・シーンも活気がありましたよね。

U　すごい出てきたでしょう。前座とかいっぱいやりましたけど、完全にそういうパンクっぽい流れでしたもんね。オリジナルでやり始めた頃から、ガルシアっていうライブハウスでばちかぶりの前座とか(笑)。ゾルゲとかルーズとか、ツアーで来ると前座させてもらったり。

――東京でやろうと決めたのもその頃ですか。

U　ええ。『あ、俺らもできる』みたいなのがありましたから。特にBOØWYとかローグなんかが群馬から出てって、ロフトでやってたり屋根裏でやってたりしたでしょう。″ニューイヤー・ロック・フェス″に出てるのをテレビで見ちゃったり。それでなおさら、プロになる気があるんだったら、どうしても活動の場を移したいと思うようになりましたね。

――結成に前後して、例の今井宅でいろんなレコードを聴いた時期がありましたよね。どんな様子でした?

U　行き始めたのは高二ぐらいかな。それからは、今井さん家でかかってるものをいちばん聴きましたね。なにしろ情報がなかったんですよ、その頃。だから、今井さんが東京に行って仕入れてくるのを聴く、みたいな。要するに、群馬じゃ売ってないんですよ。レコードにしろ雑誌にしろ。DOLLなんか売ってないし、あってもアリーナぐらいでしょう。それもまだ、浜省、アルフィーぐらいしか載ってない頃だから。で、ああいうパンク雑誌を今井さんが″ラ・モスカ″とかで買ってくるという(笑)。

――今井君のところには、レコード相当あったんですか。

U　あった方だと思いますね。やっぱりパンク、ニューウェイヴ系が多かったんだけど、他にも日本のインディーズとかをよく聴いてましたよね。スターリン、リザードとかその辺の。オートモッドも流行ってて、おもしろいなあ、なんて。フリクションもすごいと思ったし。あと、はっきり言ってP　モデルなんかも群馬じゃ売ってませんでしたからね。

――テクノ・ポップもその頃ですね。メンバーの中にはYMOが印象深かったと言う人、けっこういるみたいですけど。

U　俺はそんなに聴かなかったです。今井さんはすごい興味あって聴いてたみたいですけどね。初めはクラフトワークなんかもしょっちゅう聴いてたし。

――オートモッドは布袋さんがギター弾いたりしてたから?

U　それもあるし。でも群馬では、オートモッドっつうのがある、ぐらいのことしか聞いてなくて。ポジパンとかいろいろ聴くようになったのは主にこっちに来てからなんですけど。なにしろ、ポジパン流行ってましたもん(笑)。マダム・エドワルダとかサディ・サッズとか(笑)、ひと通り聴きましたよね。オムニバスみたいのがあったでしょう、そういうのもけっこう聴いてました。″へぇ～″みたく思いながら。

認められない活動は、無いと同じだ!

――ハードコアなんかどうでした。

U　こっちもいましたよ、グリセリンとか(笑)。ディスチャージ、GBHのあたりは今井さんが持ってて、一種の何ていうか、憧れみたいのはありましたけど。とりあえず、とっつきにくいっていう方が大きかったんじゃないかな。

――最初コピーやってたぐらいで、スターリンは別格って感じだったんですか。

U　『ストップ・ジャップ』とか『虫』とか、すごい聴きましたけど。あとはビデオなんかも、インパクトじゃスターリンがいちばんでしたね。野音でスモークたいて、サイレンが鳴ると″ズンズンタン、ズンズンタン、メシ喰わせろー!″ってやり出すやつとか(笑)。ただ、ライヴ見てないんですよ、実は。東京来てからも何となく機会を逸しちゃって。だからなんていうか、すごく気持ちが熱くなってやったとかじゃなくて、安易な思い付きでやってましたから(笑)。単純に好きだったんです。当時としてはモッズとかのコピーバンドの方がぜんぜん多いわけでしょう、メジャーな印象があって。だからもっと、とてつもないコピーやってた方が目立つだろうってね(笑)。思い入れがない分だけ、簡単にすぐオリジナルができたんじゃないか、とも思うし。逆に、当時人気者だったルースターズやロッカーズのコピーやってたら、今ここにいないかもしれないですよね。

――で、そんな時期を経て、とりあえず専門学校へ行くと。

U　だから経営の勉強なんて、ハッキリ言って口実ですよね。まず東京に行くっていうのがひとつの条件だったから。もう音のヴォーカルと今井君が出てきてる時に、ライブハウスとか見に行くでしょ。そうすると、やっぱりこっちでやんなきゃ話になんないって、つくづく思ったり。簡単に言っちゃえば、群馬で活動してて音楽雑誌が取り上げてくれるかってことですよね。逆に、東京以外で誰にも知られずにやってても、それはゼロに等しいっていう。その辺はみんなも一致してたと思うし。仕事でも何でもよかったんですよ、目的はそれだけだから。実際、学校でなんかなーんもやんなかったですもん(笑)。変な簿記とかやってるんですけど、今思ってもつまんない学校で。

――衝撃の出会い(笑)とかもなかった?

U　友達がぜんぜん違うんですよ。ほら、今井さんなんかはデザインの学校だったから、まだ少しは近い匂いっていうか。ゲンドウ・ミサイルの人がいるらしいとか(笑)、なんとかベルゲルターってとこのマネージャーがいるとか(笑)、そういう盛り上がりがあったんですけどね。

――さっきチラッと媒体のことが出ましたけど、そんな早くからメディア進出のプランを持ってたんですか。

U　いや、それは気持ち的な……、気がまえみたいな意味ですけど。だって初めはDOLLに小さく載っただけでもタマゲましたからね。インディーズ・チャートに入っただけでもすごいすごい、信じられないって。雑誌の取材にしても『ああ、フールズメイトに出られるんだ!』みたいなところ、ありましたもん。

新しき波

――東京に来たら、ロックのシーンみたいなものに生で接するようになりましたよね。よそのライヴなんか行ってました?

U　イベントとか多かったでしょう、日比谷の野音とか、読売ホールとか。東横劇場でアナーキーやってたり。いろんなマイナーなイメージのバンドがいっぱい出てたから、そういうのを見てから、ロックのコンサートに行くようになりましたよね。

――レコードも品揃えが違って(笑)。

U　こっちに来てからは外国の輸入盤、自分で買えるようになったでしょう。だから最初、すごいXTC全部揃えたりしたのかな。

――XTCはポップ・センスに魅かれて?

U　あの、変わり様がすごいっていうか(笑)。普通のパンクみたいだったのが『ブラック・シー』ってアルバムあるじゃないですか、あれで完全に覆されましたね。うわ～、すごいなって。

――ルックスが良かったら、今ごろどうなってるだろう、みたいな?

Uそう(笑)、誰もが言いますよね。シンプル・マインズもそうでしょう(笑)。

――バウハウスは好きですか。

U俺はあんまりピンとこなかったんですよ、当時としては。いい曲もあるなあって程度で、自分から進んで聴く感じじゃなくて。アッちゃんとか今井さんとか、すごいバウハウス聴いてたんですよ。太陽がバァーッとなってるアルバムあったでしょう、あれ今井さんが持ってたんだけど、どっちかっていうと出た頃のキリング・ジョークとかキュアーの方がすんげえなって思いましたね。バニーメンもすごい好きだったし、全体的には洋楽を聴くのがいちばんおもしろい時期だったって気がしますね。

――80年代の中ごろですか。

――俗に"ブリティッシュ・インベーション"というやつ。

Uええ、80年代前半から中盤にかけて。やっぱり前半のうちがおもしろかったけど、その後キリング・ジョークとかがどんどんポップ路線に走ったりして。でも、あそこら辺までは『ああ、こういうのもアリかあ』みたいな驚きはあったんですよ。で、ヒップホップとか出てきて何とかヴァージョンつってやたらいっぱい出るようになったでしょう、それがつまんなくなる原因だったんですよね(笑)。そこまでは本当、好きなバンドがいっぱいあって。今でもそうだし。

――キュアー、やっぱり良かったですか。

Uですよねぇ。好きなアルバムと嫌いなアルバムがすごい徹底してあるんですけど。あの、赤い炎の中に3人いるやつ…『ポルノグラフィ』ですか、最初の頃の。あれがいちばん好きです。ギターの音色とか実験してたし。キュアーは割と一致してて、みんな好きみたいですよ。

――基本的に、のきなみギターバンドですね。ベーシスト的にはどうですか。

U洋楽だとやっぱりスティングかな。最初はそうでもなかったんですよ、初めの何枚かは周りが言うほど。で、

いちばんとんでもねーなあって思ったのが『シンクロニシティ』ってアルバムあったでしょ、あれでベーシストとしてすごいなって思いましたね。それまで3人の中のひとりっていうイメージしかなかったんだけど、ベーシストっていうのが明確に出てきたっていうか。注目するようになったアルバムで。

――いわゆるニューウェイヴ的な手法で成功しているのは、今やBUCK-TICKだけみたいなとこありますよね。

Uいやぁ、そんなことないスけど。けっこうチラホラ、いろんなとっから持ってきてんな、みたいな?(笑)この曲はアレの感じだよなあ、とか。これはリズムがアレだよとか(笑)。だから『SEXUAL～』なんかはそういうのが出てますね、好きなものがけっこう…。あと、この間の『悪の華』とかもそうだし。長い期間をおいて出すアルバムだってこともあるし、みんながいちばん好きだって思うことを全面に出していこうって。結局はそれがベストなんだってことで、ずっとやってきてますよね。

絶対、プロ志向でしたね

――『悪の華』では曲も書いてますね。

Uええ、今後も作っていきたいと思ってますけど。でもなんとなく、自分の好きなのがモロバレじゃん(笑)みたくなっちゃうと。やっぱアレンジがいちばん似ちゃうでしょう。意識してなくても、作ったものを聴いてるうちに"あれ、どっかで聞いたことあるな"とか。で、聴いてみるとやっぱりなあっていう(笑)。けっこうサイケデリック・ファーズとか好きで、作ってみたらメロディそっくりだったとか(笑)。オリジナリティって難しいんだなって、すごい思いますよね。

――詞は当分書かないって言ってましたけど…。

Uやっぱヴォーカルっていうのは、俺がベース弾くのと同じで歌が商売でしょう。てことは、自分のベースラインをアッちゃんに作ってもらうようなもんだって気がし

ちゃったんですよ。例えがちょっと、うまくないんですけど、そういう感じなのかなって。考え過ぎかも知れないですけど。

——メジャー志向って自主製作の頃からありましたか。

U 絶対ありました。

——もっと前からあったんですか。

U プロにならないと話にならないみたいな、そういうのはすごい昔からありましたね。何やるにも、周りからの評価を得なくちゃ絶対ダメだっていうか、しょうがないっていうか。どんなすごいことをやってようと、何をやってようと、やっぱり評価されるまでもっていかないと。逆に評価されないままだったら情けないっていうの、あるでしょう。やるからには。

——その辺は、バンド内でもユータ君がいちばんしっかりというかハッキリしてますね(笑)。

U いやいや(笑)。ぜんぜんそんなことないですけど。まあ、ブッキングとかやってたからじゃないですかね。だって、誰かがブッキング組まないと話にならないでしょう。そんなに前のことじゃないのに、最近のバンドとはだいぶ違いましたから。このごろのアマチュア・バンドすごいでしょ、ちゃんとしてて。すぐ事務所に入れるし(笑)いきなりファンの女の子がやってくれたりね。

——確かに、ラクはラクでしょう。

U だから、ぬるま湯につかったようなバンドがいっぱい出てくるっていうか(笑)。当時は考えられないぐらい壮絶だったですもんね。パンクがいっぱい出てきてるから、BUCK-TICKなんていう名前じゃライブハウス取らしてくんないとか(笑)。めちゃめちゃでしたよね。

——やりやすくなって、いいのか悪いのかわかんないですけどね。

U テレビとかでしょう、やっぱり。2、3回ちょっと名を売って、その勢いで武道館てパターンとかね。名前書くとマズイですけど(笑)、何もわからない状態で出てきちゃうっていう。まあ、俺らも同じって言えば同じなんだけど、けどなんか……、違うでしょう。

——プロ意識とか?

U この間、雑誌にそういうことが載ってて。イカ天みたいなバンドが『金もうけだけを考えてやるな、バイトしてでもライヴをやれ』とか言ってるんですよ。で、そんなことはわかるんですけど、兄貴とかはぜんぜんそれと逆のことを言ってて。『自分たちのステージを見せるんだったら金とってやる、ホコ天でも金をとる』ってね。無料ステージがいけないとは思わないけど、毎回毎回そこでやってたらどうなるんだって。だから最近、プロ意識のないバンドが多いんじゃないかな。

——本来、崖ぷっちの仕事ですよね。

U 絶対崖っぷちですよ！　将来、何の保証もないですから。人気商売だから先のことなんてぜんぜんわかんないし、ボーナスないし(笑)。ベビースターラーメンを3回喰って生きたりね。死ぬかと思いましたもん、枕を腹に抱えて〝ううーっ〟って言いながら(笑)。そういう知り合いとかもいましたよね(笑)。だからって、苦労してればエライってことは絶対言いたくないし。それを売りにするっていうことは。

——最近、ロフトでやりたいなんて発言が出てましたけど。

U あれは、どこでやっても見せられなきゃカッコよくないっていう意味で。ライブハウスでうまく見せられないやつがドームでやっても見せられないでしょう。逆に、ドームではいいステージできるのにロフトにいったらぜんぜんダメっていうのも嫌だし。気持ち的にそういうのがあって。

——シークレットとか？

U いえ、まだシークレットなんてできる御身分じゃないと思うし。そういうのは、本当に誰もが知ってるバンドにまでならないと。そうなれたら、堂々と発表してからやりたいですね。でも、1日しかやんないけど(笑)。すごい嫌いなんですよ。何日間もやるの。今まで最高2日しかやったことないですよ。

——それは方針上の理由で？

U そうですね。テンションが熱いのは2日間ぐらいだなと。これはもう、イベンターにも言ってあるんですよ。場所にかかわらず、絶対やんないって。本当にしたいのは1日だけ、それがいちばん好きなんですけど。一発入魂ていうか、その方がテンション高くていいでしょう。何日もやるのがそのバンドのスタイルだっていうのもあるから、そういう人には悪いんですけど、でも俺らはこういうやり方ですよっていう。

それなりにやってこれた自信はあります

——でもBUCK-TICKっていろんな節目があって、その都度いい方に向いてきたっていうのがありますよね。

U うーん、自分たちではわかんないですけどね。ただやってるしかないなって、それだけですもん、考えてみると。前もあったんだろうけど、これだけいろんなバンドがいると、逆に勝負どころがわかんなくなってきちゃって。昔だったら、例えば〝バンド・スタンド〟とかあったでしょう。あれに初めて出た時なんか、インディーズあがりが俺たちしかいないっていう。そういう時代だから、周りはなんか、コンテストに受かったバンドとか、あとは初めからプロにスカウトされて入ったバンドとか。そこで俺らだけ、違うんですよ。あれ見ろよ、俺たちだけだよインディーズあがり、カッチョワリィ(笑)みたいな。今なんて、逆にそれがあたりまえになっちゃってるでしょう。そんなやつ、逆に珍しいっていう。

——だいたい、インディーズって言いませんからね。

U 死語ですよね(笑)、インディーズなんて言ってると。もうチャートとか見ても、オリコンに入ってるのだってほとんどがロック系だしね。今の時代だと、ホコ天とかライブハウスでやってるだけでインディーズになっちゃうんでしょう。

——だからバンドの力量ではぜんぜん測れなくなったし。その分、戦略的な手腕がモノを言うだろうし……。

U 難しいですよね。現にレコードは売れてるんだけど、みんなが分散しちゃってるから、けっこうデビューしてすぐから売れるのはバーッと売れちゃうし。だから今、中堅がすごい困ってるって言いますもんね。お客さんぜんぜん入んなくなっちゃって。よっぽど根強く人気のあるバンドか、デビューしてパッと人気の出たバンドか、どっちかしかお客さん来ないっていう。まあ、俺らなんていうのは、前から好きでやってるだけだから、あんまり考えてないですけどね(笑)。

——そういうバンド、しかも成功してるのは、あるようで意外と少ないでしょう。

U だからバンドマン(笑)て言うとアレですけど、やめたら何が残る、みたいな。やっぱりバンドやってるのが楽しいから。レコーディングで音入れたり聴いたりできるのも、演奏できるのも。確かに家でファミコンするのも楽しいのかも知れないけど、あ〜あって感じでしょう。比べちゃったら、それはぜんぜんつまんないことで。

——思い入れもあれば自信もあると。

U まあ……(笑)、それなりにはやってきたっていうか、だから自分でいろんなこと言えるんだと思うし。

——今、音楽産業の総売り上げ、史上最高だって言いますけどね。

U ええ、レコード会社の人もそう言ってましたけど。だから今のバンドっていうのは幸せなんだろうとは思いますよね。もう、バンドやってる方が主流っていうか、バンド形式でそこそこやってれば売れるみたいな。『え、バンドやってないの？』みたいな感じでしょう。俺らずっと『バンドなんかやってるの？ダッセー』とか言われてきて。でもきっと、今がピークでしょう。これからはまた、だんだん難しくなるような……。すごい厳しくなるんじゃないですかね、俺たちも含めて。

星野英彦

黙然たるメタモルフォーゼ

激しく揺れた一連の〝バクチク現象〟に前後して、もっとも大きな変貌を見せたのは、星野ではないだろうか。コンセプトに対する積極性、ソング・ライティングの比重、ステージでのアピールと、どれをとっても〝やる気になった〟彼の新境地がうかがえる。「いこいの場ですよ」などと控え目を決め込んでいた数年前にはほど遠い充実ぶりだ。理由は彼の足どりを追ってみることにより何となくおわかり戴けると思うが、言質の少なさや「PLEASURE　LAND」で聴ける旋律の優しさは、あい変わらずヒデそのもの。彼が彼のまま、更なる飛躍を期待するのに十分な音楽的変遷録。

だんぜん"ミーちゃん派"でした(笑)

――音楽を聴き始めたのは。

H 小学校の、まあ小さいうちから。聴くものは、やっぱり歌謡曲ですよね。テレビでやってるような、ピンクレディーとかキャンディーズとか、あの時代です。

――ピンクレディーはインパクトありましたか(笑)。

H ありました(笑)。ヒーローでした。やっぱりミーちゃんが…、断然ミーちゃん派でした(笑)。

――曲も良かったですよね。

H なんて言うのかなぁ、普通のそれまで聴いてきた歌謡曲とは違う感じでした。すごい派手だし、なんか近未来を想像させるようなものがあったし。そういうところで知らず知らずのうちに魅かれていったのかもしれないですね。わけわかんなくても、やっぱり耳の中に入ってたんだなって思う時ありますよ。

――時期的にはどの辺ですか。

H もう、デビューした頃から。あの…、確か小学校5年生だったと思うんですけど、初めて「ペッパー警部」のレコード買った。あ、ジューシーフルーツの「ジェニーは御機嫌ななめ」だったかな、それを。たぶん同時期だと思います。あと、郷ひろみとかは好きでレコードも買った憶えあります。いろいろ西城秀樹でしたっけ、「YMCA」とか流行ってたし(笑)。テレビの影響って後々すごいもんで、思い出してみると初めは殆んどテレビの歌番組で知ったものばかりですよね。

――最初に買ったのは、町のレコード屋さんで?

H ええ、そうです。

――家にレコードたくさんあったんですか。

H 兄貴がけっこう音楽は聴いてて、いろいろ持ってたみたいです。ロックというか、すごいビートルズ・ファンで。でも、そういうのに興味を持ったっていうのは中学に入ってからで、小学校はずっと歌謡曲。

――お兄さんはいくつ違うんですか。

H ちょうどアニイと同じで。4つ違いになるのかな。

――じゃ、家にステレオもあって、ビートルズがかかってるという情況ですね。

H ええ。

――それから色々買うようになったわけですか。

H そうです。でもお金なかったし(笑)、小学生がそんなに買えるもんじゃないですから。まだ受け身っていうか、そういう聴き方ですよね。

――陽水、拓郎とか、ニューミュージックっていうのもありましたけど。

H あ、フォークとか、そっちの方はぜんぜんダメだった。

――じゃ、自分から洋モノを聴くようになったのはビートルズですね。

H そうです、やっぱり兄貴の影響で。家にあったのもあるし、持ってなかった分を兄貴に買わされたり(笑)。買ったのは、たぶん後期のベストみたいなやつで。何年から何年というふうに別れてて、その後半の方だったと思います。洋楽のLP盤っていうのは、それが最初。

――誰のファンでした?

H いえ、あんまりそういうのは。別に誰がってことは意識してなかったんじゃないかな。音楽って感じで受けとめてました。

――メロディー指向の表われですか(笑)。

H ああ…、曲の印象って全部そうですね。英語わかんないし、メロディ・ラインが残るっていうのがいちばん…。

――バラードとか。

H やっぱり「イエスタデイ」とか、そっちの。すこし早い曲にも好きなのありましたけど、なんかドカドカうるさいっていうよりは、静かな曲の方が。

――いわゆるロックとの出会いってことになりますけど。

H でも、そんなに…、そういう意識はなくてバンドって感じでは聴いてませんでしたからね。歌謡曲の延長っていうか、一緒になっちゃってる部分があって。

――例えば、ジョージ・ハリソンのギター・サウンドに着眼してプレイ的なところを聴き込むようなことは。

H いや、中学じゃそこまでいってません。自分がやり始めたつい最近まで(笑)そういうこと考えなかったですね。

――この時点では、ガツンと衝撃を受けてロックを聴き狂うみたいな状況ではないと。

H ええ、どっちかっていうと。あとは兄貴がいろいろ持ってたのをテープに録ってもらって、そういうのを聴いて、知り始めたっていうか。キッスなんかも聴いたんですけど、それはあんまり…、入り込めなかったっていうか、ダメでしたね(笑)。クイーンだったらまだ聴けたんですけど、キッスになるとけっこうヘヴィだなあって感じで辛い部分がありましたね。あとは、イーグルスとかも聴いてたかな。キッスならイーグルスの方が…。

――あ、やっぱりメロディですね。もうイーグルスは末期ですけど。

H えっとですね、なんか黒いジャケットの。『ロング・ラン』でしたっけ、兄貴のだったから持ってはいなかったんですけど。

'50sのライフスタイルに憧れる

――日本のはどうですか。

H なんかYMOとか、そういうのすごい好きだったみたいで。

――テクノポップの出現(笑)。

H ええ。学校行ってもそういう話題がちらほら出てたんですね。やっぱ流行ってたのかな、だんだん興味持つようになって。兄貴とかいる人は自然にそういうことをね、影響受けてるんだと思います。周りにも多少いましたから。

――ギターとドラムとっていう、ロックの編成と違いますよね。その辺で新しさとか驚きを感じましたか。

H 当時としては、コンピューターでやってるところが違うなって思ったけど、バンドの仕組みっていうのかな、そういう構造がぜんぜんわかってないから。ヒカシュー、P モデルとかたくさん出てたっていうのは後から知ったぐらいで、当時は聴いてなくて。それよりは…あの、竹の子族とかありましたよね(笑)。『テクノポリス』で踊ってるという(笑)。どっちかといえば、そういうところから共通点が出てきたみたいで。そんな…、やっぱ流行ってたからって(笑)ソレばっかなんですけど。

――え、まさか竹の子族だったとか。

H いやいや(笑)。テレビとか、あと友達とかが情報源になってて。雑誌なんかでも取り上げられたでしょう、東京の原宿にそういうものがあるってことを。で、行ってきたのを自慢するやつとかもいて…、東京と群馬、そんなに遠いわけじゃないんで。あとはフィフティーズとか、いわゆるオールディーズが出てきて、けっこうそういうのを聴くようになったのが中学の後半ぐらい。

――ペパーミント、クリームソーダの世界ですねえ。

H そうですね(笑)、みんなすごい聴いてたんじゃないかな。何でしたっけ、いろいろオムニバス盤みたいので『グローイング・アップ』とか『アメリカン・グラフィティ』とかね、映画も軒並み公開されてそういう雰囲気があったんだと思うんですけど。憧れてたっていうのかなあ、プレスリー、チャック・ベリーなんかの一連の。バンド、アーティストで聴くっていうんじゃなくて、そういう生活とかですよね。全体的な。

――青春の感傷(笑)みたいなのがあるでしょう。音楽もそういうライフスタイルと一体になった時がいちばん印象的なのかな。

H だと思いますね。「ミスター・ロンリー」ですか、『グローイング・アップ』のラストシーンで流れるんですよね。見てるとハチャメチャで楽しいんだけど、最後は心にジーンとくるっていうか。やっぱり憧れですよね、す

ごい憧れてたんだと思います。別にロックンローラーだったわけじゃないですけど(笑)、日本だとキャロル、クールスも聴いてたし(笑)。

―クールスって、今でこそみんな笑いますけど、当時はもっと違いましたからね。

H あ、今でも聴いてますよ(笑)、ていうか、ギャグで留守電に「紫のハイウェイ」入れてるんですけど(笑)。

―シャネルズは?

H 買いましたね(笑)。2枚持ってた。良かったですよね。キャロルにしろ、メロディ自体はすごいしっかりしてて、曲がいいでしょう。そういうところでエーちゃんもボチボチ聴いてたし。『ア・デイ』『ゴールドラッシュ』とか、最後の方で『PM9』ぐらいまでは聴いてました。キャロルのベストとか、ダビングしてもらったのとか、けっこうあったんですけど、群馬に置いてきちゃったんですよ(笑)。

―中学は、まあそんな様子だったと。

H だから、今思うとぜんぶ周りからの影響みたいな感じなんですよ。兄貴が持ってるからとか、結局そういう理由だったから。

―他には、そういうこと以外では熱中してたことあったんですか。

H ええと……。

ルーツは タバコ屋です

―で、県立藤岡高校に行って(笑)。

H 自分の中で何か変わってきたというのは高校入ってからですよね。高一ぐらいで今井君と知り合ってから。

―いわゆるニューウェイヴが登場するわけですね。直接のきっかけになったのは、やはり今井君ですか。

H 家に行き始めて、本当、変わったっていうか。

―今井君は東京まで仕入れに行ってたと言われてますけど。

H そうですね。いろいろピストルズとか、パンクらしいものですね。一番インパクトあったのはスターリンかな(笑)。『ストップ・ジャップ』とか、あと、『虫』もう出てた頃で。けっこう、過激っていうんですか(笑)、聴いたこともなかったような。だから、ルーツはタバコ屋(笑)。それから、アニイのバンド見に行ったりして、そのバンドも過激だったし(笑)。群馬でもアマチュアバンドが増えてきて、BOØWYやモッズのコピーするっていうのがね。そういう時期で。なりゆきにしても、自分でやってみようかなって気になったわけですから。

―聴き方としては決定的な変化ですよね。

H ええ。まあ、今こういうふうにやってるからそう言うのかも知れないけど(笑)。そんなかっこいいもんだったかなって、よく思うんですよ。その時としては、やっぱし楽器なんか持ったこともないし、そういうのができるかっていったらぜんぜんできないと。すぐにできるもんでもないしっていう、正直なところ、もっといい加減な動機でした。

―でも簡単そうだったでしょ、ピストルズとか(笑)。

H 外国の中では、メロディがちゃんとしてて。楽器はうるさいんだけど、歌がしっかりしてるなって感じがしたんで、いちばん気を魅かれましたね。そんなにわかんないんですけど、でも何か違うっていう。音楽的なことだけじゃなく……。

―生活から何から変わってしまうような?

H ああ、何でしたっけ、あの…、リストバンド!(笑) あれをつけたり、ガーゼのシャツを着たりはしませんでしたけど(笑)。でも実際にパンクもどきっていうか、そういうカッコもするようになったし。今井君の家に来てた友達の中にはハードコア・パンク好きでモヒカンしてたやつとかもいて。まあ、そっちの方はあんまり聴き込んでなくて、ピストルズやクラッシュが気に入ってたんですけど…、それに自分でモヒカンにするとなると、ちょっと度胸が要りますから(笑)。

――高校生でそんなだったら、周囲からの風当たりも強かったんじゃないですか。

H 多少はそうですね。まあ、学校にそういうアタマで行くわけじゃないし(笑)、そんな凄くはなかったから。でも親とかは…。東京でバンドやりたいって言った時もそうなんですけど、やっぱ反対しますよね。専門学校に行くっていう口実でやっと出てきたぐらいで。

――今なら大いばりでしょう。

H レコード出したりテレビに出たりすると弱いみたいですよ(笑)。親ってそういうもんだなっていうか、それまで認めてなかったのに態度が変わりましたからね(笑)。

――ライヴ見に来てくれたりするんですか。

H 武道館の時は。ふだんはぜんぜん、演歌ぐらいしか聴かないんですけど。

――あと、お兄さんと妹さんでしたっけ。

H ええ、兄貴は楽器メーカーで地方に行ってるんで、あんまり会わないんですけど。でもレコード買ってるようなこと言ってたから聴いてると思います。妹も日本のバンドをいろいろ聴いてるとは言ってました。

――当然BUCK−TICKも。

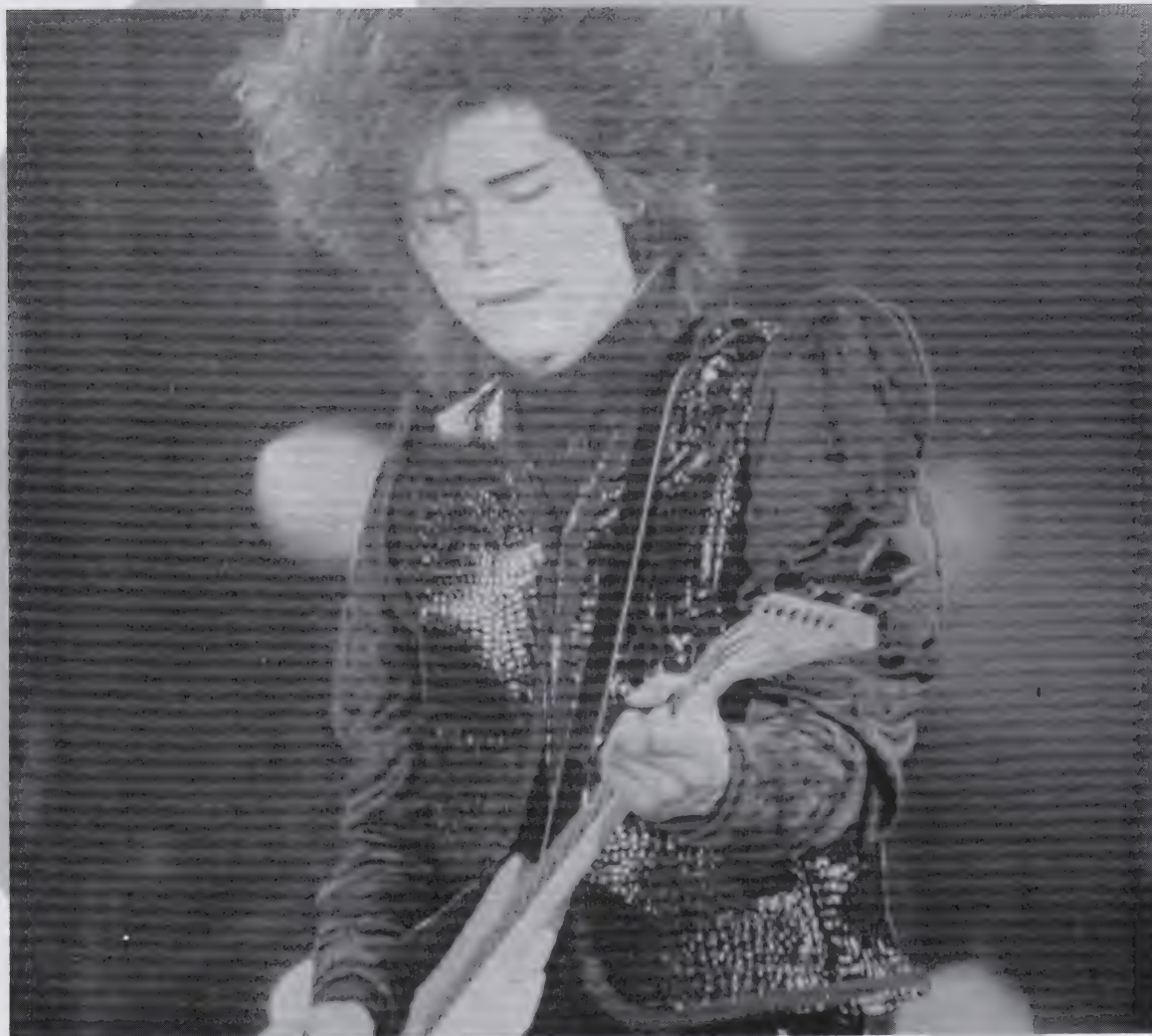
H ちょっとわかんないですけど(笑)。

――で、まあ話を戻すと、とりあえずパンク体験は刺激的だったと。

H 衝撃みたいな感じで、その頃の自分にとっては大きかったと思います。

――さっきBOØWYってちょっと出ましたけど、特別な思い入れがあったりしました?

H うーん、ありましたよね。初めユータがアニイに教えてもらって、確か家に持ってきたりしたのかな。で『モラル』とか『インスタント・ラブ』とかその辺を聴いて。これは群馬の人がやってるんだよっていうことを聞かされてたから、へぇ〜、そうなんだって。

――ユータ君なんかは、そういうのでやる気になった、と言ってましたけど。

H どうですかね…。僕はもっと、直接的な理由っていったら、なりゆきの方が大きいのかな(笑)。おもしろそうだっていう。例えば、ギタリストとして特別に気になる人とかもいなかったんで。なにしろ、ギターを初めて触ったのがバンド組んでからっていう(笑)、バンドやろうみたいな話になって、それからギター買ったぐらいで。

――じゃあ、ギターじゃなかったかも知れない?

H それは、でもなんか選んだっていうか。今井君ちにあって、弾いてるところ見たりして、それじゃオレも何かやろうかなって思った時に、やっぱギターがかっこいいなと。すごい単純なんですけど、じゃあいいや、ギターでみたいな(笑)。考えてみると不思議ですけど。だから、ニューウェイヴ系のギタリストに興味を持ったりしたのは自分が始めてからで、だんだん目標にする感じで聴くようになったんですよ。

――最初は耳コピーですか。

H いや、そんなことはとてもできなくて、教則本みたいな、スターリンの楽譜とか見ながら「ロマンチスト」はこういう押さえ方なのか!って(笑)。

――BUCK−TICK のギタリストで最初にやったのがスターリンていうのも(笑)。

H いちばん簡単だったんで(笑)。

――ヴォーカルやろうとかは全くなかったんですか。

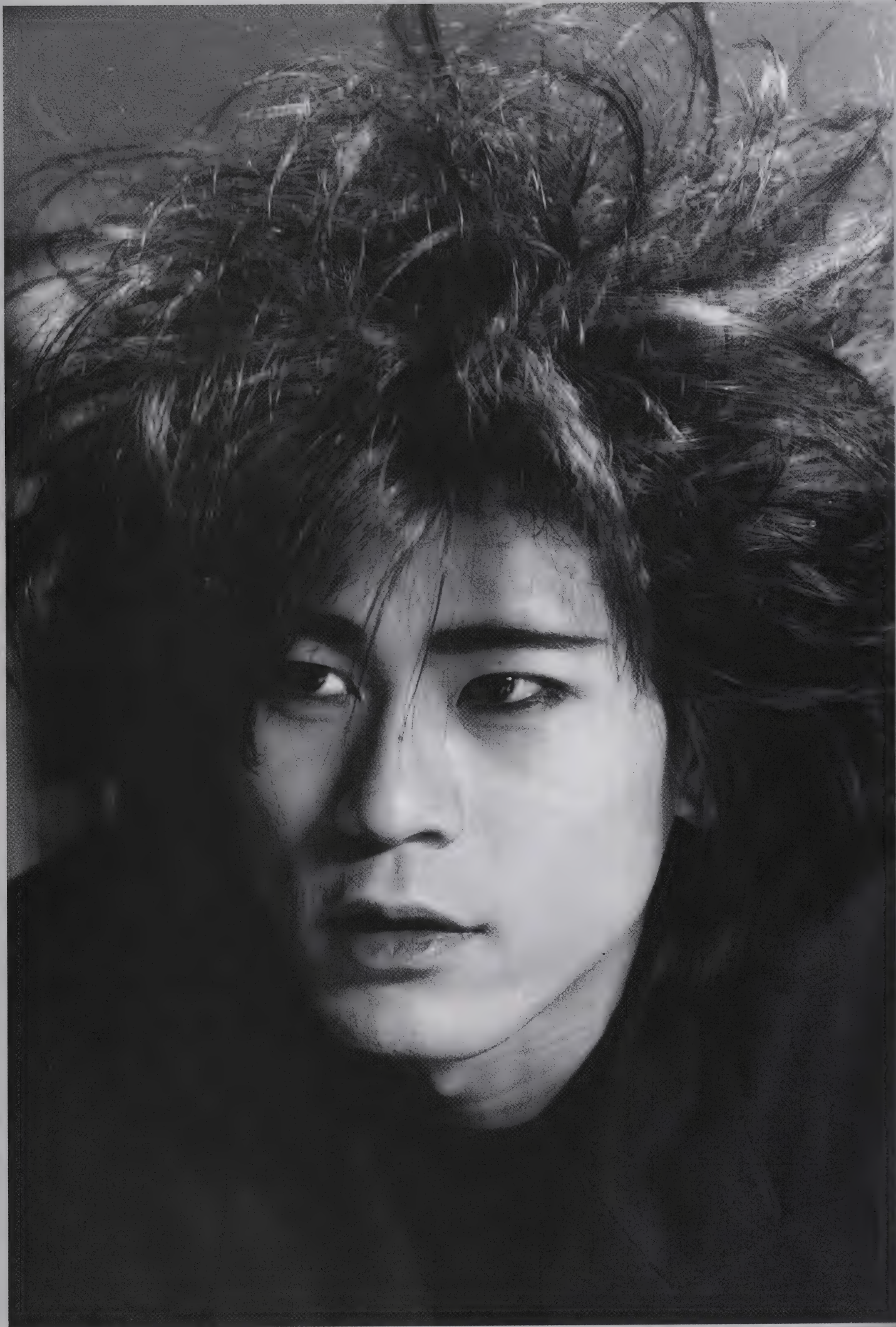
H とんでもないです(笑)。ぜんぜんうまくないし。

――オリジナル曲を最初に作ったのは星野君だってことを聞いたんですけど。

H ええ、昔ですけどね。もうなんか、ポジティブ・パンクみたいな、メロディも何もあったもんじゃないっていう(笑)。スコアもどっかいっちゃいました。

――ギターを始めたら、よくリード・ギターをガンガン決めたいとか思うじゃないですか。そういうのは。

H まず、弾けませんでしたからね(笑)。今はリードもやってこうかな、と思ったりして新しいアルバムでちょこっとやったりしてますけど、当時はあんまり…。

嗚呼、ニューウェイヴ

――バンドやってると、聴くものも変わってきますか。

H 本格的になったっていうか。やり始めて東京に来た頃から、それまでとはぜんぜん比べものにならないぐらい、ニューウェイヴとか聴くようになりましたね。

――バウハウスとか？

H ええ。もともと今井君とは違う方の、ライヴで知り合った友達が持ってて、それを聴いたんです。もう高三の頃ぐらいになってたんですけど、当時バウハウスって僕はまだマイナーって感じで受け止めてたんですよ。でも、けっこうおもしろくて。

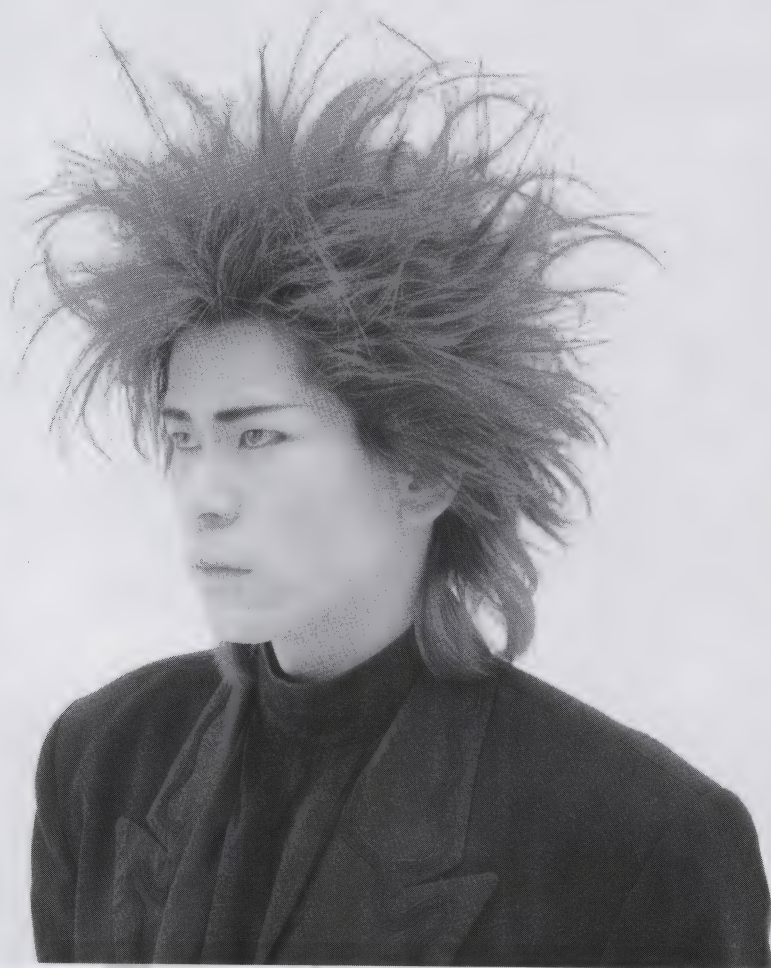
――どういうところを聴いてました？

H もう、ギターですね。ダニエル・アッシュがかっこよくて。で、その時期のやつすごい好きなんですけど、やっぱお金なくてそんなには買えなかったんで、また最近、収入得られるようになってからCD全部買ったりしたんですよ。

――どのバンドもギター・サウンドを意欲的に作ってましたよね。

H いま聴いても最近の新譜よりおもしろいっていうか。80年代前半のイギリスものは、ホントいろんなことやってますね。ただロックっていうんじゃなくて、いろんなものを含んでて、リズムにしてもただ8ビート刻んでるんじゃないし。そういうところで刺激を受けましたね。それで、ちゃんとポップでっていう、パターンとしてはやっぱりいちばん好きな……。

――キュアーは。

H 最初バウハウスで、その次に聴いたんですけど、そのうちキュアーっていうかロバート・スミスの方が好きになっちゃって(笑)。なんかドロドロって感じでとっつきにくかったんですけど、突然ふっ切れたみたいな『ヘッド・オン・ザ・ドア』っていうアルバムが好きで。『トップ』もいいですよね。でもあれよりいろいろな要素が入ってて、全体的に楽しめるなあっていう。

――バンシーズでも一時期弾いてましたね。

H その時のライヴとかいいですよね。持ってないのがけっこうあったんですけど、ここしばらくで大体そろったのかな。クリーチャーズの新譜も買いました(笑)。

――キリング・ジョーク。

H あ、炎がこうなってるジャケットのやつ。あのギターもすごい。

――バニーズは。

H 音色としては、ああいうクリアーな、アコースティックっぽいのも好きです。『エコー&バニーメン』ていうアルバムと「カッター」とか入ってる……。

――『ポーキュパイン』ですね。

H その辺がやっぱりいいかな。

――末期はひどかったけど(笑)。

H コケましたか(笑)。でもヴォーカルの人、最近ソロで出しましたよね、聴いてないんですけど。

――東京に来ると、ライヴハウスで対バンしたり、直にいろんなバンドと接する機会が増えたでしょう。これはという出会いとかありましたか。

H うーん……。

――なんかビートの時代と言われて

H よく、無理やりそういう括り方されましたけどね(笑)。

――インディーズ・シーン(笑)とか。

H まあ、刺激はありましたよね。情報の量がぜんぜん違うし、雑誌とかもいっぱいあったから。日本のそういうバンド、スターリンとオートモッドぐらいしかほとんど知らなかったんで。

――オートモッドとは、ちょっと意外な。

H そうですか(笑)、CDでも買っちゃいましたよ。

――えっ、何を？

H 『レクイエム』。つい昔の買っちゃうんですよ。洋楽も、新譜はひと通り聞こうとは思うんですけど、どうもハズ

レが多くて(笑)。それなら古いのでもれた部分を押さえていったほうがずっと実になるっていうか。やっぱり、勢いみたいなものが違いますね。

——あ、だから最初『SEXUAL〜』聴いた時は、イギリスから一連のバンドが続々出てきた、あのパワーが蘇ってきたような感じがしたんですよ。

H (笑)。

——姿勢的なところで共鳴できるところがありましたか。

H それはあったと思います。自分たちも最初からただのビートにはしたくないっていうか、そういういろんな要素をまじえてやっていきたいっていうのがあったから。学ぶことが多いですよね。今井君なんかも、原点はそういう部分からきてるんじゃないかな。

——対照的だけど、根は同じみたいな?(笑)

H ああ、趣味似てるし(笑)。

休止による収穫

——自分なりの打ち出しってことではどうですか。例えば「SILENT NIGHT」とか、ライヴで見せ場になるでしょう。

H アレはちょっと緊張するんですよ(笑)。ここでビシッと聴かせないとっていうのができてきちゃって。ああ、失敗しちゃマズイなと思うともうダメなんですよ。慣れてくるといんですけど、ツアーの初日だったりすると、やっぱりダメですねえ。

——ソロアルバムとか、おもしろいんじゃないですか。

H そうですか(笑)、とりあえず予定はぜんぜんないですけど。

——今や逆の立場で、BUCK-TICKに憧れて、思い入れをもって聴いてる人がたくさんいますよね。星野君がバウハウス聴いた時みたいに。

H ああ…、やっぱり嬉しいっていうか…。(BUCK-TICKの)コピーしてるとか聞いたりすると。そんな…恥ずかしいんですけど、でも嬉しいです。

——最近は、リスナーとして他人の作品聴くような時間ないでしょう。

H 移動の時とかは一応、聴いたりしてますけどね。あと、休んでる時はけっこうまとめて…ヒマだったんで(笑)。

——あの時期は、結果として有意義だった、みたいなことを以前言ってましたけど。

H そうですね、考えごとしたり、ゆっくりCD聴いたりできたんで。デビューしてから、こんなに時間とれることなんてなかったですからね。ヒマすぎるって言ったらナンですけど(笑)、今までぜんぜん聴かなかったような70年代のハードロックなんかも聴いたりできて、その点では収穫あったと。

——兄弟と、3人だけで小規模な練習したり、けっこうやってたそうで。

H なんか、そういうインディーズの頃みたいな雰囲気で(笑)楽しかったです。だから高崎のライヴは本当、気持ち良かったっていうか、バンドっていいなって、思っちゃいましたね。

本当に「やりたい」と思ったツアー

——『悪の華』は1枚目をほうふつとさせるような、スコーンと抜けたところがありましたね。

H 気持ち的にもそういうのがあって、今井君もその辺を出したいと思ってたみたいで。レコーディング入ってみたらみんな一緒でしたよね。

——ギターソロとか作詞とか、個人としては新しい試みが多かったようですけど。

H ええ、初めてやったことがいっぱいあって。多少歪んだ音、いわゆるディストーション・サウンドとか、詞のほうは、曲作った時になんとなくイメージがあって。頭の中に、こんな感じかなっていう。で、アッちゃん手いっぱいだったから、イメージあるから書くよって。まあ、今後ってことでは詞はあんまりどうかなって感じで(笑)。曲を書きたいという方が強いです。

——需要が高まってるようだし。

H そうですか(笑)。

——ヤガミさんとのコンビが多いですけど。

H いや、別にワケがあるとかじゃないです。書いたらだいたいアッちゃんに渡すんですけど、けっこうアニイが書きたいって言うんで(笑)。なんか勝手に(笑)。それで書いてるっていう。

——ライヴとレコーディングと作曲と…、どれがいちばん楽しいですか。

H ライヴですね。家でこう、ギター弾いたり曲作ったりしてもあんまり。

——みんなとやってる方が?

H ひとりとか…、そういう時間が欲しくなる時もあるんですけど、やっぱライヴの緊張感がいいですよね。体を動かして気持ちいいっていうか、あの最後の疲労感が(笑)。

——自分の性格ってどうだと思いますか

H なまけものですね(笑)。

——せっぱつまらないとやらない性格だって、アッチゃんも今井君も言ってましたけど。

H うーん、あんまりせっぱつまっちゃうのも嫌ですね。なんか気が向いたらって、そんな感じですけど。

——ライヴ、あと50何本ですね。

H そうですね。まだ3本ぐらいですよね(笑)

——ツアーの見どころなどあったら。

H 今回はすごいやりたくて、楽しみにしてましたからね。いろいろ仕掛けとかもあって凝ってるんで、最初のSEから最後のSEまでちゃんと見てほしいです。

——最近ステージ・アクションが大きいって評判ですけど(笑)あれは意識的に?

H 多少は(笑)。

——何か心境の変化があったとか?

H いやー、どうでしょうね(笑)。やっぱり、たまってたものがあるんじゃないですか。

ヤガミトール

流れる水のドラマ

「オレは素質も才能もない、今井たちに比べればまったく未熟だ」——。常に強気な姿勢で通してきたアニイからこの発言を聞いた時は、少なからず衝撃であった。ドラム歴、早や十数年。ここへきて、改めて楽器を演奏することの難しさをかみしめていたようでもある。自分のスタイルを持っていない、と語るのは容易なことではないだろう。例えば、水は器によって形が決まる。だがしかし、形状を持たないからこそ周りを洗い浄めるのだと言えば、視点はたちまち反転される。少々キザだが〝頭を垂れて相手を包む〟彼の音楽観は、くり返し実践してきた者だけが知り得る苦味と度量にあふれていた。

ビートルズの洗礼

——最初に音楽を聴いたのは？

T 洋楽ですね。記憶に残っているのでいちばん古いのはポール・アンカなんですよね。うちのオヤジか母かわかんないけどレコードがあって、それをステレオでかけてたんですよ。それがいつかかっていうと、まだユータが赤ん坊で、こういうカゴみたいのあるでしょう、あん中に入っている頃で(笑)。俺が4才ぐらいだと思うんだけど。

——フィフティーズみたいな曲ですか。

T そう。あの映画音楽になったやつ、『史上最大の作戦』でしたっけ、あれとか。

——テレビでやってるような日本の歌謡曲とかは。

T 小さい時は、あんまり歌番組を見た憶えないんですよね。

——洋楽は家の人が聴いてたものが中心？

T そうですね。兄貴とかアネゴの影響で。兄貴がビートルズとかあの辺をけっこう持ってて、だから全体的に聴いてましたよね。それが小学校の低学年で。あとは、日曜の昼間に洋楽ベスト10とかあったでしょう、ああいうのをラジオで聴いて。

——自分で買った最初のレコードは何ですか。

T そんなわけで、ビートルズだったんですよ。シングルで『レット・イット・ビー』ですね。小学校二年とかそのぐらい。

——早いですね。

T いや、でもそんなに違和感なかったですよ。それまでに聴かされてたわけだから。部屋も一緒でしたからね、兄貴と。机も並んでるっていうか、同じ所にステレオも置いてあって。俺が勉強してても兄貴はレコード聴いてるでしょ、『イェー』とか言いながら(笑)。そしたら自然に入ってくるという。

——あたりまえでした？　外人がエレキを持ってロックをやる感覚は。

T ああ、そうですね。もう、カタカナ英語で歌っちゃったりしてましたから(笑)。

——『レット・イット・ビー』はどこがよくて買ったんだと思いますか。

T アルバムとシングルでバージョン違うんですけど、けっこうおとなしめだったでしょう。で、曲調がきれいだったから、そういうとこで魅かれてたんじゃないかな。今だにそうだし。やっぱり、後期の曲をリアルタイムで聴いちゃったから、初期のロックンロール色の強いやつとかあんまりピンとこないですよ。確かにハーモニーとかすごくいいし、ヒットしてたから絶対耳にしてるんだけど、サウンド的には凝ってないし……。やっぱ、後期が好きですね。この間もドームにポール・マッカートニー見に行ったらシビレちゃいましたよ(笑)。

——ビートルズの曲もやってました？

T ええ、ていうか、ほとんど。15曲以上やったんじゃないですかね。初期の曲も「キャント・バイ・ミー・ラブ」とかやったから、40ぐらいのオッサンが前の方でノリまくってるんですよ。でもやっぱ、感慨深いっていうか、本物だなあってつくづく思いましたね。

——最初に聴いた時は現役時代だったんですね。

T たぶん、解散するかしないかって頃でしょう。なんか、基本的にみんな個性があったから、全員の名前もわかって覚えられたし。その後で憶えているのが各々ソロになったシングルがあるでしょう。ジョン・レノンだったら『マザー』とか、ポール・マッカートニーだったら『アナザー・デイ』ってやつがあったでしょう、あれとか。その後もしばらく、ビートルズの流れでジョージ・ハリソンのソロとか、ヒットチャートに入ってたやつなんかを聴いてましたね。あの当時だと何だろう、「マイ・スウィート・ロード」とか「美しき人生」っていうのが入ってるやつ、ああいうのとか。ウイングスになっちゃうと、もうあんまり聴いてないんですけど。

——小学校ではビートルズの話とか、当然ないですよね。

T やっぱ、そういうヤツいませんでしたからね。だから学校に行けば、そっちはそっちで子供の顔を持ってたっていうか。で、家に帰ればまた兄貴の影響で、みたいな。

ハードロックへ傾倒

——中学になると変わってくるんですか。

T ええ、もう、キッスとか好きになっちゃうんで(笑)。ファンクラブに入ってたりして(笑)。

——誰もが通る道ですね(笑)。

T でもね、けっこうルックスでは魅かれなかったんですよ(笑)。わりとポップだったでしょう、楽曲自体は。サウンドが好きになって、そのうちルックスも好きになっちゃったという。だから最初『ストラッター』つうのがあったでしょ、ファーストの。あのジャケットを見て、買うのやめましたね(笑)。あまりにもすごかったんで、ダメだこりゃっていうんで(笑)。

——エアロ、クイーンとかは。

T エアロスミスは「ウォーク・ディス・ウェイ」の来日記念シングル買ったぐらいで。クイーンは「ボヘミアン・ラプソディ」がベストテンで一位になってたから、よく聴きましたね。『オペラ座～』とか。

——ハードロックのブームですよね。

T そのちょっと前からディープ・パープルは好きで、ずっと聴いてたんですけど。やっぱイアン・ペイスのドラムを『こりゃいいや』とか思って、聴いてましたね。ツェッペリンは最近なんですよ。兄貴がアメリカン・ハードロックのタイプだったから、イギリスものはビートルズぐらいしかなくて、そんな知らなかったんですよ。ちらっと聴いたところではジョン・ボーナムの良さっていうのがわからなかったんですよ。ああいう後ノリっていうか、重たいリズムのドラムっていうのが。で、二年前ぐらいから集めるようになって、全部聴いてみてから、やっぱスゲエなぁって感じで。

——その頃、レコードではドラムを聴くようになってました？

T そうですね。中三ぐらいでやり始めてからは、もうドラムばっかで、けっこうギターとかにも耳が行く方だったんですけど、それはドラム始める前ですね。

ユーミンのポピュラリティとキャロルの説得力

——ほとんどハードロックばっかり聴いてたわけですか。

T それがそうでもなくて(笑)ユーミンとかも好きでしたから(笑)。あと、太田裕美とかも聴いてたし。

——なるほど。陽水・拓郎のフォークブームとかもありましたね。

T 陽水はメロディアスで好きでしたね。兄貴が『氷の世界』とか持ってたからああいうの聴いて、で『これ何百枚も売れてるんだよ』『へぇ～、すっげー』みたいな。拓郎はあんまりピンとこなかったけど。

——ユーミンはいつ頃の？

T ラジオで「あの日に帰りたい」がチャートに入ってるのを聴いて、それから。兄貴も買ってたから借りて聴いてたんだけど、ちょうどチャートインしてる時に出てたのが『コバルト・アワー』だったのかな。サードぐらいですよね。で、発売日を待って買ったのが『14番目の月』だったんですよ。

——あれは名盤でしょう(笑)。

T 今でも聴いてますね(笑)。

——どれがいちばん好きですか。

T やっぱセカンドかなあ。『ミスリム』が好きです。

——『流線形～』もいいですよね。

T ああ、あれもいい！(笑)

——『悲しいほどお天気』もまあいいと。

T あれもいいスね(笑)。

——で、『紅雀』もけっこういいと(笑)。

T　ああ(爆笑)……なんなんですかね、いったい(笑)。けっこう聴いてるじゃないスか(笑)。でもあれ、ちょっと暗かったでしょう、「ハルジョオン・ヒメジョオン」とか。

——そうですね。「晩夏」はどれに入ってましたっけ。

T　は、『14番目の月』のB面のラストですね。あれはNHKかなんかでドラマの主題歌になってるという(笑)。

——「雨のステイション」は青梅線の西立川っていう駅で作ったんですよね(笑)。

T　あ、そうなんですか！　じゃあアレですね、八王子の呉服屋だったから(笑)。

——と、まあ聴いてたと。

T　ええ、なんていうか、けっこうあれは新しい匂いがしたんですよ。ニューミュージックの中でも、やっぱりユーミンの世界だなっていう独特のものがありましたからね。泥くさいフォークの時代が続いてたけど、ああいうのってなかったでしょう。だからその頃は、ユーミンとキャロルを同時に聴いてたという(笑)。

——出ましたね、キャロルが。

T　ああ(笑)。やっぱ、すごいですよ。なんか2分とか3分でも説得力があるでしょう。あれって楽曲がすごいから成立しちゃうってとこがありますよね。

——クールスは？(笑)

T　聴きましたよ(笑)。

——まさか、銀蝿は持ってなかったですよね(笑)。

T　いや、でもやっぱり聴いたんですよ(笑)。アルバムは買わなかったんですけどね、武道館でやったでしょう。あの武道館でやるならすげえんだろうって、唯一ライヴを買ったんですよね(笑)。あとシングルは「つっぱりハイスクール」とかチョロチョロ持ってましたけど(笑)。

——キャロル解散後も、各々の動きは注目してました？

T　そうですね、流れを追うっつうか(笑)。エーちゃんのソロとかジョニー大倉のとか。矢沢永吉はずっと聴き続けてます(笑)。

——アルバムだとどれですか。

T　いちばん好きなのは『ア・デイ』とか『ドアを開けろ』とか、二枚目三枚目の辺りかな。で、『ゴールドラッシュ』の時が全盛だったけど、あれが第一のピークでしょう。あん時はみんなどこ行っても聴いてたから、そんなに……。

——その後ドゥービーとやりますよね、『PM9』で。

T　あの変化がありましたね(笑)。ドゥービーは兄貴が聴いてたから、なんかエーちゃんが変わってった時は〝やっぱり〟って感じだったんすよ。

——曲で好きなのは。

T　やっぱ「ア・デイ」とか、あと「真夜中のロックンロール」とか(笑)。

——「雨のハイウェイ」もいい(笑)。

T　捨てがたいですかね(笑)。

——で、『カバチ』はちょっと。

T　だからあれはね(笑)、アレじゃないスか、ユーミンの『紅雀』的存在(笑)。「ソー・ロング」入ってて。

——でもバックとか良かったですよね。ライヴ見たりしました？

T　行きましたよ、高校一年の時。武道館も18ぐらいの時、一回行ったんですよね。わざわざ見るために(笑)。それはもう後の方だったんですけど、髪下ろし始めた頃の。その時はアリーナだったんですけど、なんか「遠い」っていうイメージがありましたね(笑)。

——東京にはちょくちょく来てたんですか。

T　いや、そんなでもないかな。たまに遊びに行くってぐらいで。

——レコード買いに来るような人もいたみたいですけど。

T　今井ですか(笑)。俺はあんまりしなかったですね、そういうの。やっぱりね、「サカイ」っつうレコード屋があったんですよ、群馬の17号っぱたに(笑)。その店は唯一駐車場があるから、兄貴としょっちゅう買いに行くというそこでキッスとかいろいろ買ってたっていうのを、

中学ぐらいだといちばん憶えてますね。

——パンクはどうですか。

T 中三ぐらいでリアルタイムだったのかな、やっぱ影響受けましたよね。最初に買ったレコードがクラッシュの『白い暴動』で。だけど並行してグランドファンクとかCCRとかも聴いてたし、まあ、ごちゃごちゃですよね。限定してないっていうか。

ドラムは兄貴の形見だった

——ドラムを始めたのは。

T やっぱり兄貴が亡くなったから……。もともとドラムは兄貴がやってたから、その形見なんですよ。レコード200枚ぐらいとドラムセットが形見で。だから兄貴が亡くなってなかったらドラムはやってなかったでしょうね。もしバンドやってたとしても、違うパートだったと思うんですよ。ドラムなら兄貴がやってるからいいや、みたくなってたはずだから。ドラマーには向いてなかったのかもしれないし。

——違うパートだったかもしれない、ていうと。

T 従兄弟がいて、そこがやっぱり三人兄弟でバンド組んでたんですよ。各々持ってたから、三つのバンドがあって。ちょうど兄貴が亡くなった頃に始めたんだけど、そのいちばん上の人にギターとか遊びでいろいろ教えてもらってたんですよね。

——ギターやってたんですか。

T だから、遊びですって(笑)。バンドではやってないです。ただ単純に音楽聴く時はたいがいギターに耳が行くっていうタイプだったから、もともとは。数ある楽器の中からドラムを選んだってタイプの人間じゃないんですよ。だから結局は、自分の感性でドラムを選んだ人間に比べれば落ちるだろうって思うから。最初からドラム志向だった人なら、音楽聴くにもドラムに興味を持ってドラムばっかり耳についてたわけでしょう。俺はもう、素質はないって絶対思ってますね。

——そんなに自信を持って言わなくても(笑)。単に好きで始めた人よりも、ぜんぜんすごい動機じゃないですか。

T いや、兄貴の方が素質あったし、うまかったし。俺の場合、本当、恵まれてたのは環境的なことだけだから。自分の部屋で思いついたらいつでもタイコに向かえるっていう。あとはもう、練習あるのみっていうか。

——例の自宅で練習が行われたっていう有名な話がありますよね。

T けっこう12畳ぐらいあったかな。ドラムセットと、アンプなんかも買い足して、みんなでバカスカやってましたね。でかい家だったから、ぜんぜん問題なくできたんですよ。最初は周りから苦情がすごくて、パトカーが来てやめてくれって言われたりしましたけど、懲りずにやってたらあきらめてくれて(笑)。二年ぐらいかかりましたけどね、あきらめてもらうまでには(笑)。まあ、そういうご近所のおかげで今の俺があるんだろうし……、この場を借りて御礼申し上げる、つうことで(笑)。

——お母さんとか(笑)。

T え、ドームに来てた話スか? テンション下がるぜ、みたいな?(笑)。

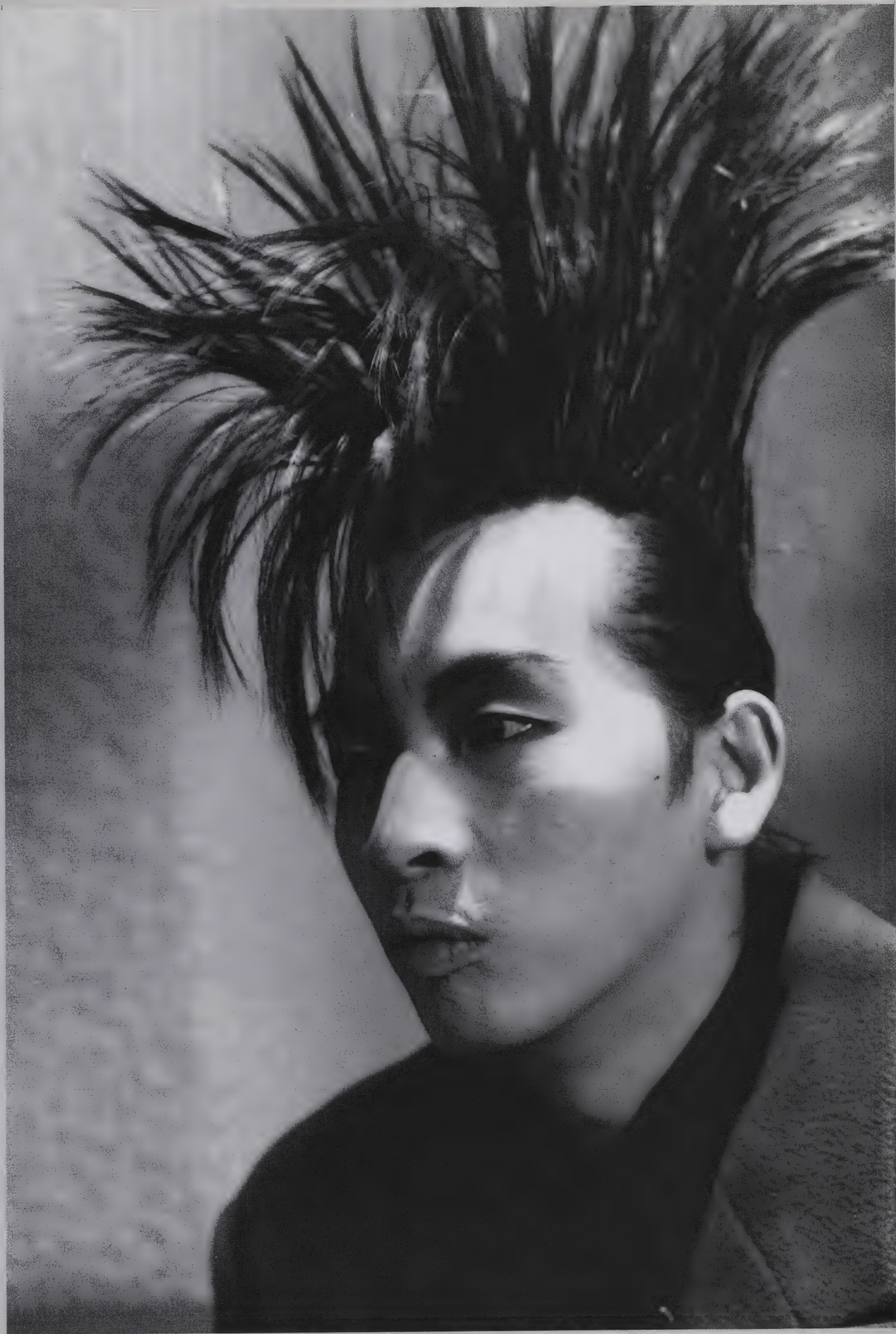
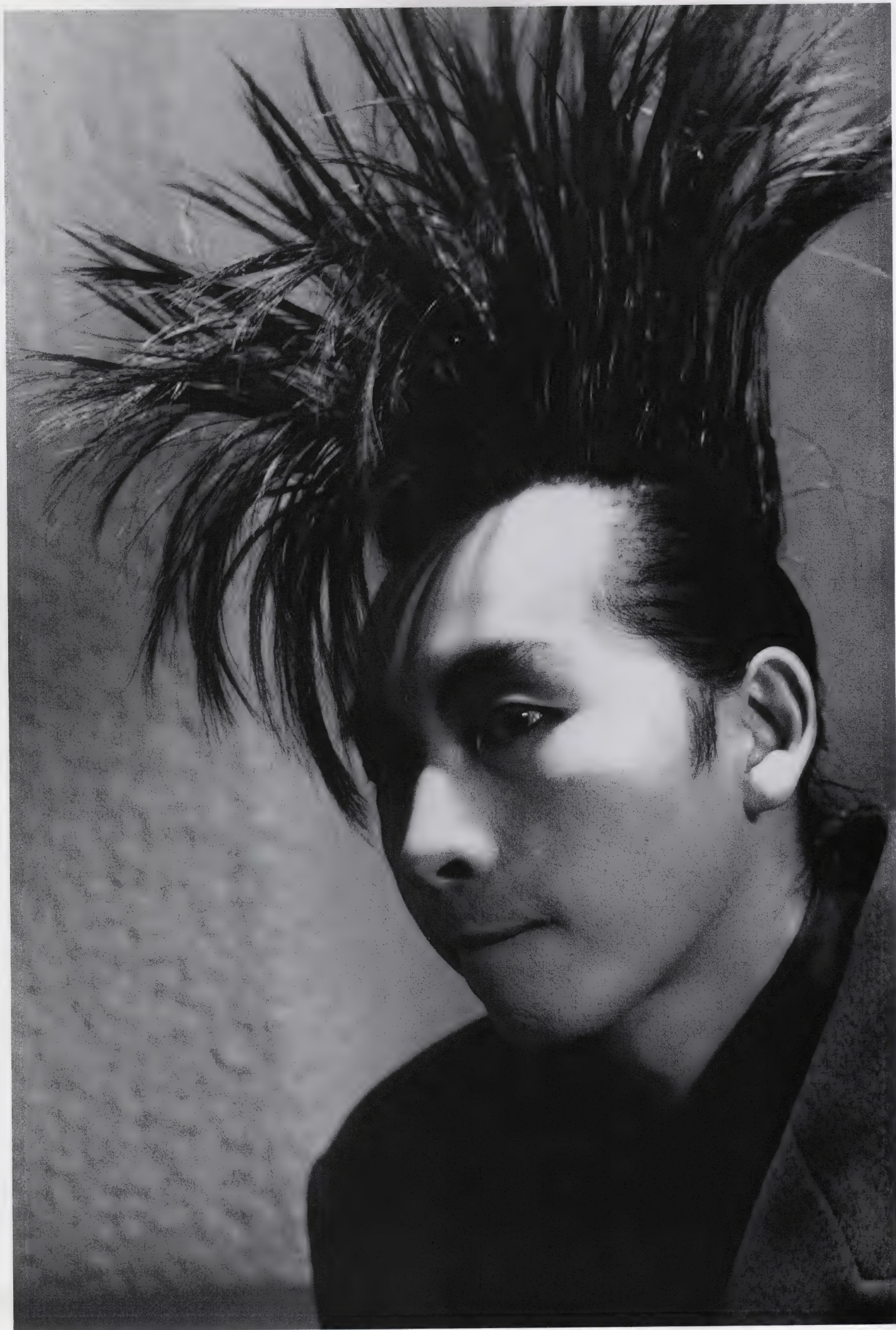
——今、どうしていらっしゃるんですか。

T スナックやってるんですよ。それでレコード買い占めてて、お勘定と一緒にレコードくっつけて売ってるという(笑)、とんでもないことやってますけどね。

いつも空白状態ですね

——始めた頃のバンドというのは。

T やっぱりキャロル、クールス、あとチェリーボーイズとか(笑)。むかしのフィフティーズとか、そういう感じでぐちゃぐちゃのロックンロールみたいなことやってたんですよね。

——じゃ、ロックというより〝ロックンロール〟ですね。

T　あ、完全にそうですね。だからタイコもそのまんま、もうワンバスでロカビリーの三点セットみたいな。で、ジャズとかそういう感じの細いスティック使ってみたり。

——なるほど、自主シングルなんかはその名残りがありますね。

T　どんどん変わってますけどね。ずっとロックンロール・バンドやってて、その後は一時期パンクみたいなことやってたり、このバンド入ってからもシングルの頃と今じゃぜんぜん違うし。だから、今までわりと自分を空白状態っていうか、ヘタッピ状態にしといて、バンドに影響受けたりしながら変わってきたっていうか。

——空白状態っていうのは……。

T　極端に言っちゃえば、自分のスタイルをあんまり持ってないんですよ。そのバンドのカラーに合せるっていうか、そういう感じなんですよね。いつでも、ひとつの形には決めちゃわないように。

——アーティストってエゴの強いもので、ふつうは自分の色を持つってことが美徳になってますよね。いかにそれをアピールするかという。そういうのとは逆の考え方ですか。

T　全面にそれを出しちゃうと、なんかワンパターンになっちゃうような気がするんですよね。自分だけの、好みの世界に。だから、いい意味でインスパイヤされるっていうか、例えば今井が作ってくる曲で、自分にできないリズムを練習するとかね。あいつはリズム体のバリエーションなんかもけっこう勉強してるから、まずそういう曲を元にして自分なりのものにする、みたいな。バンドのスタイルが先にきて、その中で自分のスタイルを考えるっていうやり方をずっとしてるから。

——ジャンルによって、みたいな?

T　そうですね、ロックンロールだったら別にパワーとか要らないから、シンプルなセットで細いスティックにしてみたり、ポジパン(笑)だったらめちゃくちゃな練習スティックみたいなのを使ってみたり。ドラム始めて長くやってれば、いろいろスティックの形状なんかもわかってくるでしょう、こういう場合はこの長さ、太さでとか。その都度いろんなことを試しながら。

これから

——今のスタイル、座が高くてパンパンに張ってノー・ミュートみたいなセッティングは、どういう経緯で?

T　あみ出すってほどじゃないですけど(笑)、単純になるべくステージで上半身が見えるようにセッティングしたかったんですよ。タムを薄くしたいっていうのは前から思ってて、ティンバレスを半分に切ったものを使ってたんです。一時期、『SEXUAL〜』の頃はロート・タムを使ってみたんだけど、やっぱりロート・タムはロート・タムの音しかしないんで、あんまりピンとこなくてやめちゃったり。まあ、それは買ったものじゃなくてレンタルだったけど(笑)。そんな感じでやってるうちにできてくるもんだから、自分のセットは気に入ってますよ。

——プレイ的にも色は出てると思いますけど、十分に。

T　基本のリズムベースっていうのは今井が作ってくれるから、自分ぽいオカズを入れるってぐらいですよね。そういうのは、けっこう今井に助けられてるっていうか。俺はそんな、ものを考え出すような能力には長けてないと思うから。自分で考えてやったドラミングで『オレもけっこうやるじゃん』て思えたのは「HYPER LOVE」ぐらいで、あれ以来『コレは俺があみだした!』みたいなのっていまいちないんですよ(笑)。そこへいくと、うちの今井は天才ですから。やっぱかなわないですよ、素質のある人間と無い人間じゃ、こんなに差がありますからね。

——以前『俺は10年音楽をやってきて今の自分がある、二〜三年でここまできた彼等がうらやましくもあり、誇らしくもある』みたいなことを言ってたでしょう。いちばんキャリアが長いのに謙虚であり続けるっていうのは

できることじゃない、やっぱりこいつはスゴイって(笑)
思ったんですよ。

T 謙虚じゃないスよ(笑)。執念深いし(笑)。ただ、20代後半になってくるとね、やっぱり若いやつの方がいい感性してるだろうし、飲み込みも早いし。昔はできないフレーズがあると、同じとこばっかり六時間ぐらい集中して、なんとか形にしようとしてたんですよ。田舎にいた頃は環境的にも幸せで、四六時中タイコ叩けたしね。今、スケジュール的にもそんなムチャな練習する余裕ないし、いろいろ難しい部分も出てくるでしょう。だけど、最近はまた音楽のことに集中できる情況ができたりして、けっこう条件が戻ったようなところありますからね(笑)。

だから、これからうまくなるような…。なんか自分でもそういう気がすごいするんですよ。

今井寿

永遠の子供心とメロディーの戯れ

例えば、玩具を与えられた子供がそれを手にしたままじっと見つめていたり、時には口に含んでみたりしながら、自分の中の不思議と一心不乱に戯れている世界…大人になってしまった者にはもう思い出すこともできないような、そんな感覚をずっと持ち続けたまま大きくなれる人間が、ごく稀にいる。BUCK-TICKの美しさ、トゲ、ポップさ、暗さ、そうした様々な要素を含んだメロディーの大半を生みだすこの男、今井寿もそんなひとりかもしれない。そうした人々の中から過去何人もの「天才」が生まれた。だが、今井は首をかしげながら、「オレ普通ですよ」と言う。人を驚かせようという突飛ないたずらっぽさと、妙な純真さの混ざり合った不思議な魅力を持った彼が、真剣に取り組んだ玩具、それが〝音楽〟だった。

HSINT.

音楽に出会う前は本当にただのガキでした

――あれま、どうして髪を切っちゃったの!?

ーもう面倒臭くなって。でも、切るヒマがなかったから初日(大宮)だけは、前の頭で(笑)。

――びっくりしちゃいましたよ。

ーハハハ。

――長いのもよかったのに。大宮の時のバンダナも〝いい雰囲気だなぁ〟って気がしたし。

ーなんか、うっとうしくなっちゃって。

――色も決めてた?

ー緑かオレンジ、どっちかにしようかなって。

――じゃあ、ツアー中はずっとその色で?

ーええ、でもツアーの後半になると、かなり汚ったない色になってくると思います(笑)。

――こういう髪の毛にしてもそうだけど、常に人を驚かすというか、予想通りには行かない突飛な人ですねぇ(笑)。

ーええ、ええ。それでなんか心の中ではニヤニヤしてるって言う、そういう感じ。

――それじゃ、まず音楽的なバックグラウンドを解剖していきたいんですけど…よろしくお願いします。

ーはい。

――まず、いちばん最初に買ったレコードというと?

ーいちばん最初に自分で買ったのは…小学校の時に…4曲入りシングルで、えーと、沢田研二を(笑)。

――それはいつ頃の?

ー小学校の…5年か6年くらい…。「憎みきれないろくでなし」っていう、あの曲が好きで。他にどんな曲が入ってたかは忘れちゃったけど。

――一応それが音楽を真剣に好きになった始まりみたいな感じ?

ーうーん、それはお年玉かなんかで、家にステレオもあるし、その曲が好きだったから買ったっていう…。で、その頃はそれっきりで、あとはレコードはぜんぜん買わなかった。

――じゃあ、やはりYMOが?

ーええ、中学3年の時にYMOの「テクノポリス」のシングルを買って、その後すぐ『ソリッド・ステイト・サバイバー』買って、で、テクノ・ポップ・ブームみたいなのがあって、クラフトワークとか、ディーボとか、ウルトラヴォックスとか、そっちの方を聴くようになって、高校に入ってからはニューウェイヴ。それからパンクが凄く好きになってと…、だから、元は邦楽からなんです。

――それ以前に趣味は何かあったんですか、音楽を聴き始める前の。

ーあ、中学一年の頃とかですか?

――うん、YMOに出会う前の…。

ーいやぁ…音楽はぜんぜん聴かなかったし…本当にガキだったっていうか(笑)…。

――遊びまくりみたいな?

ーそう、そう(笑)

――絵を習ってたと聞いたんですけど。

ーああ、絵は、えーと、小学校の時に好きで絵の塾に通ってたけど、でもそれもロクに一年も続かなくて、で、あとは家で…落書きというか、漫画の絵とか、そういうのをマネして描いてたり…その程度かな。でも今でも絵は好きですよ。見たりするのも。

――どの辺の絵が好き?

ー画家とかそういうのはアレだけど、画集とかあるとけっこう真剣に見たりしますね。でも、それもその時の気分によってで、なんか、何も見たくないってこともあるけど。

――でもやはり抽象画の方でしょう。

ーええ、やっぱりその、ワケの解んない方のが(笑)。小学校の頃かな、美術館に遠足に行ったんですけど、ちょうどそこにピカソの絵があって、やっぱぜんぜん意味解らないんですよ。〝何でこういう絵が評価されるんだろう〟って思って。で、家に帰ってから親に『アレはどういう意味なんだろう』って訊いたりして(笑)、親が困っちゃってた(笑)。

――…じゃあまた音楽の話に戻りますが。では、ウルトラヴォックスなんかを聴いた後でパンクを知ったんですね?

ーそうです。だからセックス・ピストルズなんて、最初は名前しか知らなくって…。

――ウルトラヴォックスはまだミッジ・ユーロが入る前の、ジョン・フォックス時代?

ーええ。あとはDAFとか…。

――ああ、DAFねぇ。でも、作る曲を聴くとメロディーがいいというか、かなり曲重視ですよね。DAFみたいなビートものじゃなくて。

ー最初はそういう歌モノが聴けなかったんです。それはだんだん聴いてくうちに変わってきたんだけど…。最初はほんとに歌の入ってるのがイヤで、聴いて詞が解っちゃうっていうのが…。でも、ニューウェイヴを聴きだして、初めて一風堂を聴いて、バンド・サウンドとそういうニューウェイヴを合わせたような、それでいてちゃんとメッセージっぽい詞があって、メロディーもしっかりしていてっていうのを知って、『あっ、こういうのもカッコいいな』って。

――パンクはニューウェイヴよりもさらに衝撃的だった?

ー衝撃を受けたのはニューウェイヴの方ですね。でもバウハウスとかキュアーを知ったのはピストルズのさらに後なんです。

――その辺はコピーしたんですか?

ーいや、しなかったです。コピーをやったのはスターリンだけ、バンド作って三ケ月かそのくらい経った頃には、もうオリジナルやってましたから(笑)。

――バンドをやる気になったのは?

ー本当にバンドをやりたいって思ったのは高校2年頃で、ギターを弾き始めたのが18歳からです。最初のキッカケは、RCをカセットで聴いて『カッコいいなぁ』って思って、それからですね。辞めた前のヴォーカルと二人で、よく「バンドやりたい」って言ってて。

――最初からギターって決めてた?

ーええ。その高3の夏頃に通信販売でギターを買って、だからけっこう遅いんですよ、楽器をやり始めたのは。

――最初に買ったギターのメーカーって憶えてます?

ー…フレッシャーって言うの。フェンダーに似てるロゴで(笑)、ストラト・タイプの…確か29800円でした(笑)。

――音は良かった? な、ワケないか(笑)。

ーいや、まだ音質とかぜんぜん解んなかったから…。

――アンプとセットで買ったとか(笑)。

ーアンプは友達から安く(笑)。エフェクターなんかは、バンド組んでからディストーションを。

――ギターを選んだ理由と言うと?

ーバンドの華みたいな…。

――ヴォーカル取ろうとか、そんな野心は?

ーいや、それはもう全く考えてなかったです。

――でもバンドの華っていえば、ヴォーカルっていうイメージがあるじゃないですか。

ー何か大変そうだなって(笑)。で、そんな大変そうなところは誰かに任せて(笑)と。

――でも、曲作りなんかも、いざ始めてみると大変でしょう。

ーええ。昔…曲作りを始めた頃はそう思いました。さすがに最近は慣れてきたけれど(笑)、最初はまるっきり解らなかったから、メロディーの3度とか4度とか。で、どんどんやっていくうちに〝ああ、この音とこの音は、合う音なんだ〟みたいに、作りながらそういうハモリの音が解った時は、なんかこうカラクリが解けたような感じがして。

──まったくの独学？
─コードを覚える時だけは教則本を見て、で、その後すぐスターリンを初めて弾いて…。
──それが最初のグループ「非難GO-GO」ですね。で、それから後はもう実地だ(笑)。
─ええ。それで、すぐにコンテストにも出て。
──最初から左利き用のギターを買ったんですよね？
─初めは悩んだんですけど(笑)、家にフォーク・ギターみたいなのが置いてあって、で、ギターに右とか左があるって知らなくて、それを持つマネすると自然に持っちゃうのが左だったから。それは逆だって言われたんだけど、右で持つとなんかシックリこなくて。
──おハシは？
─右です。
──エンピツも？
─も、右。カード切ったりするのが左なんです。
──野球は？
─野球も右です。でも、どうせ両手使うんだから同じことだなって、まぁ左を(笑)。

居ただけの高校ラグビー部

──で、バンドを始めて、スターリンのコピーを経て、BUCK-TICKですぐにオリジナルに入って行くんですよね。
─ええ、そうです。オリジナルを作ろうってところで、もうバンド名も変えちゃう。
──最初に作ったオリジナルは、確か「PLASTIC SYNDOROME TYPE Ⅱ」でしたよね。
─そうです。今はぜんぜん演ってないです、もう何年も。
──どんな感じの曲？
─速い曲です、スターリンみたいな(笑)。もうメロディーの作り方ってぜんぜん解らなかったから、最初にコード進行があって、メロディーはもうヴォーカルに任せるという(笑)。
──初期の「TO-SEARCH」みたいなタイプ？
─まぁ、そんな感じです。
──それがBUCK-TICKのレパートリーに復活する可能性は…、まず、無いでしょうかねぇ…。
─もう自分で気に入ってないんですよ。作った時には"あー、カッコいい"と思ったけど(笑)、今はぜんぜん思い出したくもない…みたいな。
──そういう初期の曲で、陽の目を見てない作品はかなりあるんですか？
─うーん、4、5曲くらいかなぁ…。
──『HURRY UP MODE』では、そうゆうパンクぽい曲よりも、もうアルバム全体的に"泣かせ"のメロディーになってますよね。
─ええ、あの頃はフレーズというか、メロディーから作ってましたから。最初っから最後までメロディーを通しで作って、メロディーだけ弾けるようになって、後からコードを付けてたんだけど、だんだん慣れてきてからはコードから作ってみたり…。
──オリジナルを始める前に、"BUCK-TICKをこんなバンドにしたい"みたいなイメージはあった？
─いや、特にハッキリしたそういうバンド・スタイルっていうのはなかったんだけど、まぁメロディアスなメロディーがあるとか…。この頃には完全にメロディー志向になってたから。
──では、ひとまずここまでを振り返って、最も自分のバック・ボーンになっている音楽は何だったと思いますか？
─やっぱりあの80年頃の、テクノとかニューウェイヴがバーッと出てきた頃…凄いショックだったし。
──パンクでは？
─ダムドとか…かな。
──でもね、なんか不思議なのは、そういうバックグラウンドだけでは説明できない要素みたいなものがBUCK-TICKの中にあると思うんですよ。例えば、『HURRY UP MODE』を初めて聴いた時に感じたのが、構成の不思議さって言うのかな、ここで当然サビかと思うとBメロがもう一回出てきたり、Aメロに戻る流れなのに突如サビがポンと出てきたり、これは今までにない凄い不思議な作りだなって感じがしたんですよ。
─あ、それは昔からすごく意識してて、ハマっちゃうメロディーっていうのはイヤなんですよね。普通につながってクサイ流れになってしまうとツマラないというか、メロディアスだけど、どっかこうヒネクレてるところが面白いなと思って。
──性格もそういう感じなんですか？
─(笑)でも…実はそうだったりして(笑)。人からはよくそう言われることがあります。酒を飲むと素直になるとも言われますが(笑)…。
──でも不思議な人だなぁと思いますよ、なんか(笑)。
─そうですかぁ(笑)。
──うん。何を考えてるんだろう、みたいなね(笑)。見た目は取っ付きにくそうで、で、作る曲はロマンチックだったり退廃的だったりでしょ、その上ヒネクレてるし(笑)。それに『HURRY UP～』のアルバムの歌詞なんかの、英語と日本語をバランスさせる言語感覚とかね、不思議な感性だなぁって。で、今度はちょっとその辺の性格的な部分を掘り下げてみたいんですけど、自分ではどういう性格だと思いますか？
─うーん…目立ちたがり屋だけど、気が弱いというか…ええ。だから常に中心から二番目というか、そういうポジションに居たいみたいな…。
──フロントマンには向いてない(笑)？
─ええ、そうです、そうです。
──物事を理論的に追求するタイプですか？
─気になり出すとそうですね。仕組みが解んないと何かモヤモヤして。
──神経質？
─いや、そうでもないです。生活とかそういうことに関しては…。部屋なんかもいちばん汚いですから(笑)。
──兄弟は？
─弟と妹がいます。
──似てますか、感性とか？
─いや、うーん、ぜんぜん違うだろうな。
──例えば、小さい頃は外で遊ぶのが苦手なタイプだったとか、友達が少なかったとか(笑)。
─いや、外で遊ぶのは好きでした。友達もいっぱいいました、小学校の頃から(笑)。ひとりで部屋に居ることも時々はあったりしたけど、でも、小ちゃい時は本当にごく普通の…すっ飛び回って遊んでるような…普通の子供でしたね。「ウルトラセブン」とか「仮面ライダー」の好きな(笑)。
──好きだったマンガなどは？
─家が雑貨屋みたいなのやってて、マンガ雑誌はいっぱいあったからけっこう読みました。
──あ、そうか。全誌読めたんだ。
─好きだったのは…、単行本を買ってまで読んだのは、「サイボーグ009」とか「サスケ」とか「あしたのジョー」、その辺ですね。
──その小さい頃からの自分の性格って、変わってないと思いますか
─ええ、多分変わってないです。
──でもほら、友達と遊んでても、自分は何か違うみたいな違和感から、こういうアート方面に自分を見いだして行くって事あるじゃない。そういうのも無かった？
─いや、あんまりそんな…でもロック関係のを聴くようになってから、やっぱりちょっとは変わったのかなぁ。
──高校時代なんかはどうだったんですか、アッちゃんなんかはワルだったらしいけど、今井君は？
─俺は、真面目じゃ無かったけど、そう…、アッちゃんなんかとはちょっと違って…。ツルんで遊ぶ仲間が違うっていうか。勉強はあまりしなかったけど、そんな

に悪い事もしなかったですね。酒なんかも高校時代は殆ど飲まなかったし…ほんとにタイプが違うって感じ。

——なんと、ラグビー部にいたんですってね。

—ええ(笑)、一年間だけいた…、いただけです(笑)。

——でもラグビーって、イメージがねぇ、ぜんぜん違いますよね(笑)。

—はい(笑)。入学したてで、高校生活っていうのがまだ全く解らない時に、授業が終わって帰ろうとしたら、ラグビー部の先輩に〝見学だけでもいいから〟とか言われて。で、知らないうちに入れられてた(笑)。

——ああ、それってパターンなんだよね。それで実際にけっこうやったんですか?

—ええ、最初のうちは。練習に行かないとブッ飛ばされちゃうんで(笑)。

——練習もキツイでしょ、タイヤに体当りしたり(笑)。

—そう。痛いのがもうイヤでイヤで。しかも部員が15人ピッタリくらいしかいなくて、仕方なく試合にも出て…。

——えーっ、試合も。ポジションは?

—ウイングやってました。

——足が速かった?

—いや、そうでもなかったです。普通だった。その頃はまだチビだったし、本当にチビで…。

——意外ですよね。でもそういう体育系のクラブは、辞めるのも大変だったでしょ。

—『一年間だけはいろ』って言われて、それでようやく何とか…。その間に色々ゴタゴタあったりしたけど、でも辞める時は割とスンナリと。

——例えば軽音楽部みたいなのには参加してないんですか、高校時代に。

—ええ、まったく。フォーク・ソングみたいなのはぜんぜん聴かなかったですから。

——じゃあ、ビートルズや、昔のものを聴いたりとかもしてない?

—当時はしていなかったと思います。小学校の時に凄いビートルズ・ファンの奴がいて、『これがいいんだ』って、無理矢理に聴かされたんだけど、でもぜんぜん興味が湧かなくて…。

追い詰められると ヤル気が出るんです

——じゃあ今度は現在のことで、映画などは好きですか?

—ビデオなんかは、ホントたまぁーにしか借りて観ませんね。

——本は?

—ええ、本の方がまだ。小説はあまり最近読まなくなっちゃったけど、ショート・ショートみたいのや、ヒトラー関係のもの、あと暗っぽいマンガかな…つげ義春とか。

——えっ、あーゆうの好きなんですか！ ちょっと意外な面が出ましたね(笑)。

—ええ、何考えてんだろうって言うような(笑)。

——そういうプライベートの自分と、バンドやってる自分を、完全に切り離してる方ですか?

—いや、切り離してない…と思いますね。もう生活が殆どバンド中心です。ひとりでいるのもあまり好きじゃないから。

——でも、その暗っぽいマンガなんかは、ひとりで読む世界のものでしょ?

—もちろん、そういうの読む時はひとりですけど(笑)、でもやっぱりみんなでワーッとやってる方が楽しいし、ラクだし…。

——でもまぁ、BUCK-TICKって、5人でバンドやってる時がいちばん楽しそうだって、ハタから見てても解りますからね。じゃあまた、音楽的なことに話を戻して、まず『HURRY UP MODE』なんですが、全体的にニューウェイヴぽくしようというのは意識的にあったんですか。

—ええ、それはありました。でも、どっかで必ず変なものを取り入れていたいというのもあって…。

——ああ、スカ風とかジャズ風とかありますものね。誰か個人的に好きな作曲家っていますか?

—んー、別にいないです。

——曲はどんな時にイメージが湧くんですか?

—えー、レコーディングが近づいてきて、そろそろ始めないとっていう時(笑)。追い詰められてくると、こう…けっこうヤル気が出てくるから。

——逆境に強いタイプ(笑)?

—そうなんですかねぇ…、もうヒマがありすぎると作らない、みたいな…。

——メロディーがパッと浮かぶの?

—そういう時もあるんですけど、でも殆ど、こう…煮詰まりながらっていうか、ギターをテレテレと弾きながらやってくパターンが多いです。家でギターいじってて、〝あっ、これイイな〟って思うと、それを忘れないようにしようとか。

——例えば、道を歩いててフッとフレーズが浮かぶとか?

—そういうのはもうメジャーになってからは無いです。アマチュアの頃は、歩いててもそんなことばっかり考えていたんだけど、最近はそういうの無くなっちゃった(笑)。あ、あと、寝入りばなっていうか、作曲期間があって、一ケ月くらいそのことばかり考えてると、寝てる時にパッと〝ああ、いいメロディーだ〟って浮かぶ時がある。

——そういう時はガバッと起きて…。

—ええ、でもそれで曲を作ったというのは一回だけなんです[註：その曲は「MEMORIES」](笑)、殆どはもう眠さに負けちゃって〝ま、いいや〟って(笑)。

——譜面で書くことは?

—いや、そーゆうのぜんぜん解んないから…。

——『HURRY UP～』にはピアノが入ってますよね「ONE NIGHT BALLET」とか、あれは今井君?

—いや、とある知人(笑)。まったく弾けないんです、ギター以外は。

——じゃあ他にやってみたい楽器などは?

—特に無いです。やはりギターを制覇してからじゃないと(笑)。

——まだ制覇してない?

—してないですよ(笑)。

——でも早弾きがムチャクチャうまくなりたいとか、そういう制覇とは違うでしょ。

—ええ、でも、そうなりたいってのはありますよ。出来ればいいにこしたことはないし。だからそういうロックン・ロール調のギターってぜんぜん解んないというか、自分では弾けないというのがあったから…そういうモロにロックン・ロールっていうのはイヤだなって、今まで自分でもずっと避けてた部分があって。で、今回のアルバムの「NATIONAL MEDIA BOYS」のリードで、初めてソレっぽいやつをやってみようかなと。やっぱりある程度テクニックがあって、個性的なギターがいいなぁって思いますね。

——好きなギタリストというと?

—ダニエル・アッシュ。スティーヴン・スティーヴンスも好きなんだけど、ちょっと弾けないなぁ(笑)っていうのがあって。

——あとね、当時この『HURRY UP～』聴いて思ったのは、バクチクというグループ名にしてもそうなんだけど、歌詞に散りばめられた英語とかカタカナ文字の感覚が面白いなぁって感じたんだけど、ああいうのも意識的に?

—うん、それもあるし、あとどうしても日本語だとノレないっていうのがあったから。

——学生時代、英語は好きでした?

—いや、好きじゃないです(笑)。でも最近は英語を出来るだけ入れないように、なるべく英語を少なくしようかなって思ってるんです。抽象的な詞でも、日本語でダイ

レクトに入ってきた方がいいんじゃないかなって。今回のアルバムの「NATIONAL MEDIA BOYS」の詞でも、詞は詞で考えようというのがあって、それでもやっぱりノリが悪いというか、〝ここが日本語だったらいいな〟って所があります。

――でも、最近はあまり詞を書かなくなりましたよね。その辺は何かあるんですか？

ーうーん、やっぱり歌う人が、ヴォーカルが詞を歌うわけだから、自分の言葉で歌った方が、その方がいいのかなと思って。昔はぜんぜん考え方が違っていて、この『HURRY UP～』の頃は、もうメロディーを崩したくないっていうのが強くて、五七五じゃないけれど、字が足らなかったり余ったりするのは本当に嫌だったんです。だったら曲を作った人が書いてた方がいいっていう、そういう考え方です。でも、その頃のライヴなんかで、俺の詞をアッちゃんが歌っているのを横で見てて、〝なんか変だな〟って…ええ。それで『SEVENTH HEAVEN』の頃から、やっぱりアッちゃんに書かせた方がいいなと。

――アッちゃんの詞はどうです？

ー「悪の華」とか、ああいう感情的な詞は俺には多分書けないと思うし、詞が出来上がってきて、〝あ、これヘンだな〟っていうのは無いですね。

思った通りのことを詞に書くのが怖くて…

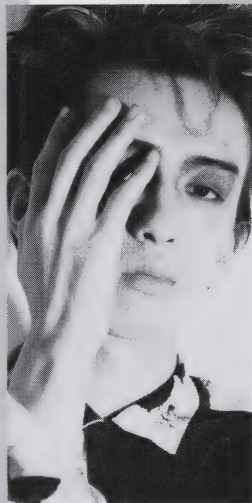
――そして『SEXUAL～』から『ROMANESUQUE』と、ここまでは『HURRY UP～』からの延長線上を順調に成長してきた気がするんですが、次の『SEVENTH～』が、申し訳ないんですけど、作品としては何か個人的にいちばん印象が薄いんです。でも、それはイケない聴き方なんでしょうかね(笑)。

ーいや(笑)。コレ作ったのはいちばん忙しい時で、一日に一曲仕上げていっても、それでも間に合わないくらいだったんです。しかもリハもぜんぜん無かったから…。もう、レコーディングに入ってその場でみんなで合わせるって感じで、これでレコーディングが大嫌いになっちゃったんです(笑)。

――〝色々実験してるのかな、試してるのかな〟っていう感じもしたんですけど。

ーうん。これって、多少〝ダークな面を出して行く〟という、そういうのもあって。後はメロディーをとことんまで追及っていうか、出したかったたっていう。

――そして次の『TABOO』ですが、あれがひとつの転機というか、〝これでBUCK-TICKの形が決まってきたなぁ〟みたいな気がしたんですが、あれは一種マニアックですよね。そういうのは意識的に？

ーええそうです。『SEVENTH～』の時に、そういうダークな面を出したいと思ってたんですが、それが意外な方向に行っちゃって、〝あれ、なんかオカシイなぁ〟っていうのが自分でもあったから、『TABOO』の時は、もう余計なことは考えずにダークそれ一色で、変な枝葉はもう伸ばさないようにしようって思ったんです。でも、元々そういう『ハードな感じで行こう』ってアイデアを出してきたのはアッちゃんで、それで皆んなも「一回そういうのやってみよう」っていうことになって。だからあれは、そういう雰囲気から絶対ソレないようにって凄く意識して気をつけながらやったから、アレはアレでドロドロしてるなって思います。時間もあまり無かったんですけど、あれは自分でも曲作ってて楽しかったですね。

――そういうトータルな雰囲気っていうのは、けっこう綿密にバンドで話し合ったりするんですか？

ーいや、そう真面目には(笑)。酒飲んでる時にチョロチョロって、話の合い間に言う程度(笑)。

――この頃にはもうだいぶ桜井君が詞を書くようになってますよね。

ーええ。

――曲の方を先に渡すんですか？

ーそうです。自分で詞を書く時も曲が先です。

――曲を渡す時に、歌詞のイメージを伝えたり？

ーそれは殆ど無いです。もうたいていの場合アッちゃんにお任せですね。

――では、この辺りから今井・桜井の感性は殆ど一致したという感じ(笑)。

ーええ、そう…この頃から。で、イメージがあって、どうしても詞を付けたい曲は、自分で書くようにして…。

――歌詞を書く時も、追いつめられて〝明日までに書かないとマズイ〟みたいな状況で書くんですか？

ーええ、そうです(笑)。ダメです、そうじゃないと。ナマケ者というか(笑)…。

――本などを読んで、ふと浮かんだ言葉をメモしたり、そういうことは？

ーええ、そういうこともやってたりはしてるんだけど、でも実際に使ったことは殆どないですね。

――昔のラヴ・ソング的な詞から、最近はかなり抽象的なものに詞の題材が移ってきてますよね。その辺は？

ーそれは…、段々と正直っていうか、思ってることをそのまま書くようになってきた。

――ああ、前のインタビューで〝詞には逆のことを書いてしまう〟って言ってましたもんね。

ーそうなんです。俺、詞とか書いてて、思った通りのことを書くのが怖くなるんですよ。なんか本当のことを書きたくないって気がしてきちゃうんです。何かゴマかしたくなってきちゃうような。だから例えば〝生きることってツライ〟ってのがあるとすると、〝ツラクない〟って言っちゃう、〝ぜんぜん平気だよ〟って。なんか「こういう考え方なんだな」と見られたくないっていうか…、だから本当のことを口に出したくなかったんです、詞を書いてる時は特に。

――じゃあ、今井君の詞を読む時は、その裏側を読んだ方がいいんだ(笑)。

ーええ(笑)。

――それは、自分の思ってることがハッキリと伝わるのがイヤだから？

ーうん、それもあると思うし、自分でそれを認めたくないっていうか。

――『悪の華』の「NATIONAL MEDIA BOYS」の詞みたいな、イメージや情景を扱った詞も、あれも裏側を使って？

ーあれはホントに、最初はもっとストレートにドギツク書こうかなと思ったんだけど、〝書けないなぁ〟って、どっか押さえちゃって、バーッとこう…浮かんだイメージを抽象的に書いちゃった。

――じゃあ、あの詞の場合、ヒトラーの時代のその怖さと、自分がストレートに伝わってしまうことの怖さの、その両方がある？

ーええ、その両方ありますね。

――もしかしたら、こういうインタビューなんかでも、実は逆のこと言ってたり(笑)？

ーいや(笑)、なるべく本当のことを言おうとしてます(笑)。

――インタビューされるのはキライな方ですか？

ーま、雑誌にもよりますけど、言葉でちゃんと説明できるんだったらいいなと思います。

――こういう事を話そうとか、事前に考えたりは？

ーうーん、最近はないですね。デビューしたての頃はインタビューなんてぜんぜん慣れてなかったから、よくそういうのを考えたんだけど、でも結局は考えてたこと全部忘れちゃったり(笑)。だから今はもう、その場で思っ

たことを言えばいいやって。

——活字になった自分の発言を見っててどうですか?

―恥ずかしくなったりとか(笑)…あまりにカッコ良すぎること言ってたりすると。

——あんまりカッコ良すぎるのはイヤ?

―ええ(笑)、その時は盛り上がってるんだろうけど。あとは、やっぱり同じことずーっと思ってるわけじゃなく、だんだん考えも変わってくるから、"前と言ってることが矛盾しちゃってるなぁ"と自分でも思ったり、そういうのはけっこうあります。

アルバムを出すごとに人を驚かせたい

——そして『TABOO』の後、例の休みの期間に入るんですが。あの期間っていうのは?

―最初、出てきてすぐは(笑)、毎日、スタッフとかが面倒見るような形で泊まりに来てくれて、買い物なんかに行ってくれたりしてたんだけど、最初のうちはやっぱり落ち着かなかった。いつも以上に人目が気になっちゃったりして。で、曲作りを始めて、その山を越したらけっこう普通に戻ったかな。あの期間中から"もう終わったことはイイや"って、ずっと自分でも思うようにしてて、メンバーもしょっちゅう家に酒飲みに来たり、後は他の友達関係が毎晩来てくれてたりしてたから。なんか、ヒマはヒマなんだけど、外に出ると落ち着かないというか……。

——その時はずっと東京に?

―ええ、実家の方にはぜんぜん。だから電話がしょっちゅうかかってきてました。

——話は変わりますが、これだけ売れると、買物なんかで外歩くのにけっこう大変だったりするんですか?

―ええ、東京にいるとそうですね。なんか遠くから見られてコソコソ言われてたり。

——それ、けっこうイヤでしょ?

―あ、でも、その時の気分によりますね。なんか気持ち良い時もあるし(笑)。

——普通の人に戻ってみたい欲求などは?

―それは別にない。でもフライデーとかああいうことになっちゃうと(笑)、それは頭にも来るけど。

——それでね、思うんですけど、あそこで一度仕切り直しみたいなのがあったことが、これはあくまでもバンド・サウンドとしての音楽的なことに関しての話なんですが、結果的には悪くなかったって気がするんだけど、その辺はどう?

―あ、うん。でも休めたっていうのは…俺が言うのも何ですけれど(笑)…休めたっていうのは良かったですね、はい(笑)。

——これは仮定の話なんですが、もしあのまま休まず行ってたら『TABOO』の世界を残しつつも尖った先鋭的なポップさを持った『悪の華』みたいなアルバムじゃなく、『TABOO』をもっと突き詰めたような、よりマニアックな世界の作品が出来ちゃってた気がするんですけど。

―そうかも知れないですね。もう『悪の華』は自由にやらせて貰った感じで、『TABOO』よりも、もうちょっとメロディアスな部分を付け足そうと思ってやりましたから。スピード感とか、ポップな面を多少増やして行こうって。

——完全にひとつの世界を作ったって感じですね?

―いやー(笑)。まだまだ、これから…。

——でも、短期間でここまでダーッと来て、なおかつバンド・スタイルまでも確立してきてるというのは、それってけっこう大変なことだと感じるでしょ?

―うーん、でも、アルバムを出すごとに、次はどうやって皆んなを驚かせようかなって考えて、そういうのでワクワクしてきてたから、だからあまり守りに回りたくないっていうか…何かそれで、うん、そういうトゲの部分を削っちゃダメだというのはあります。

——あぁ、BUCK-TICKの根本には、人を驚かそうってのがまずあるね。

―ええ、それはありますね。

——桜井君は、この『悪の華』でレトロな感じを出したかったとも言っているんですけど。

―ええ、俺もちょっと日本の昔っぽいものとか、日本的っていうのは考えていて、一曲目はもうぜんぜん違う世界ですけれども、「MISTY BULE」なんかはそういう感じですね、特に。

——昭和初期みたいなね。あと、なんか『HURRY UP MODE』のテンションをグーッと高くした作品って気もしたんだけど。

―ああね、なんか俺もその頃に戻ったかなって思った、『HURRY UP MODE』とか『SEXUAL~』の頃に。

——でも、あの頃に比べると、作る曲がボーカリストにかなり難しいことを要求してますよね、アルバム全体で。

―ええ(笑)。

——特に「幻の都」なんて、歌う人のこと考えてないんじゃないかって(笑)。

―ハハハ、そうですね、サビとか殆ど息継ぎ出来ないような曲ですね。

——ああいうオリエンタル風とか、アラビア風のメロディーって今井君の曲の中には多いですけど、行ってみたいと思いますか、ああいう国に?

―ええ、行きたいですけど、それも何かメンド臭いという(笑)。

——基本的にメンド臭がり屋?

―そうですね。

——アッちゃんもそうだって言ってたけど、何かタイプの違うメンド臭がり屋でしょ、ふたりは。

―ハハハ、そうかも知れませんね。でも俺、一度気になり始めると、そのメンド臭いって気がぜんぜん無くなっちゃうんですけどね。

——これまでのアルバムで一番気に入っているのと言うと、やはり『悪の華』?

―んー、そうなりますね。

——では、これまで作った曲の中では?

―うーん…「IN HEAVEN」とか…いっぱいあるんですけど。

——何か個人的に執着とか愛着のある曲でもいいんですが。

―えーと…「VICTIMS~」、あと「TABOO」とか「ANGELIC CONVERSATION」とか…。

——じゃあけっこう暗めというか、今の雰囲気やステージに通じる曲が好みなんですね。

―ええ。

——歌詞では?

―やっぱり「ANGELIC CONVERSATION」とか…「PHYSICAL NEUROSE」なんかも気に入ってますね。

普段は臆病ですけど、実は自信家なんです

——作曲と作詞とライヴとレコーディングと、自分ではどれが一番好き?

―えーと、やはりライヴが自分ではラクですね。レコーディングは今までずーっと嫌いだったんだけど、『悪の華』の時は"レコーディングってこんなに楽しいものだったのか"っていうくらい、本当にワクワクしながらやれた。時間もあったし、一曲一曲がこうなるって5人全員がよく解ってて、それに迷いも少なかったから。

——BUCK-TICKって、作曲クレジットに3人とか共作が無いですね。

―ええ、そうですね、そういう作り方はしないですね。個人個人で持ってくる。

——アレンジもパート別に考えるんですか?

―ええ、デビュー当時からそういう感じになってます。デモテープの段階ではギター一本に打ち込みを入れて、

後で皆んなで合わせながら、ゴチャゴチャ言い合いながら固めていくというか、基から全員でやってたんです。でも、デモテープ作っていちばん最初にメンバーに聴かせるのがけっこう楽しみだったりするんです。そこで皆んなにイヤな顔されることもありますけど(笑)。

――テープを持っていった最初の雰囲気で、これはOKだとかボツだなと解るものですか。

―はい。それに最終的には『これやりたくない』ってハッキリ言われます

――ひとりでもやりたくないと言うとボツ?

―ええ、そうです。そうしたらやらないです。2対3に分れるような時は基本的には多数決なんですけど、でもやっぱりひとりでも『やりたくない』と言われると、それはやっても気持ちが良くないというか…。

――ボツになった曲は二度と復活しないんでしょ?

―しないです。

――じゃあ、バンド内に強力なイニシアチブを持つ個人はいない?

―はい。もうホントに民主主義(笑)。

――メンバーの音の趣味はかなり似てるんですか?

―それがけっこうバラバラなんです。共通してるのはメロディー志向というか、そういう所でしょうね。

――でもまぁ、よくあれだけメロディーが出てきますね(笑)。最近は野沢直子の曲まで(笑)。

―ハハハ。

――曲を作る前にはこんな感じにしようというイメージがあるんですか?

―ええ、大体そうですね。何かひとつのものからアイデアを膨らましたり…。

――歌詞もボツになったりするんですか?

―それはないですね。詞は殆ど任せるというか、やっぱりアッちゃんの書くものとか、ヴォーカルだとそれを歌いたいという気持ちが凄くあると思うんですよ。だから、俺だったら抵抗があって書けないような詞でも、やはりヴォーカリストは感情を出すものだからというのがだんだんと解ってきて、だから詞がボツになるのは殆どないです

――BUCK-TICKの歌詞には「しろ」とか「やれ」とか、命令形の歌詞ってあんまり無いでしょ。

―ええ、そうですよね。今まで「お前」とか、そういう誰かに直接的にというのは殆ど無かったですね。最初はそういうことに気づかなかったんです。で、誰かに言われて、〝あ、そういえばそうだな〟って思ったんですけど、今後はまた変わってくると思いますよ。

――その辺、今井君がヒトラーとか、ファシズムに興味を持ってる割には、あまりファシズムっぽくないですね?

―ハハハ(笑)。

――そういうファシズムや、1920年代に興味があるというのは?

―興味があるというか、「悪の華」のジャケット写真のコンセプトに、たまたま20年代っていう案が出て、偶然ハマッたからこれはイイかなって言う感じで。それに、ヒトラーとかが出てきた時代で、何かの雑誌で読んだんだけど、「20年代というのは天才が最も生まれてきた時代だ」みたいに書かれていたりして、そういうのもナゼなんだろうかなって思ってたから…。

――ジャケットなども作る前に全員でコンセプトを出すんですか?

―ええ、必ずミーティングして。

――今の時代も20年代と共通する所があって、一歩間違えばファシズムに陥る可能性もあると思うんですが、もしファシズムが出てきたら、当然それに反対する側に立つ?

―ええ、そりゃ当たり前ですよ(笑)。

――詞ももっと書いて欲しいんですけど、今後あまり増えませんかね?

―いや、解んないです。その時に書きたいテーマが出てきたらっていうのもあるし…。

――表現の衝動として、例えば詩とか文章とか、もっと言葉を扱いたいとは思いませんか?

―今は特別ないですね。でも小学校の時には詩はけっこう好きで、国語の教科書に必ず詩が載っているでしょ、それは楽しみにしてたんですよ。書いた本人しか解んないというか、その意味の解んなさが面白いなぁって思って

――書く詞には、伝えたい何かみたいなものは常にあるんですか?

―それは、最初の頃には殆ど無くて、昔はラブ・ソングと言うか、男と女の恋愛みたいな詞が多かったんですけど、だんだんとそういう何かを聞く側に伝えたい欲求みたいなのは出てきましたね。

――そういうことを聞き手に感じ取ってもらって、ある方向に変化していって欲しいとか、そこまで考えてます?

―そこまでは無いです。もう殆ど勝手に楽しんでもらえればいいから。でも詞の面に関して言えば、アブナイ歌詞とか書いてて、それがファンレターなんかに〝可愛い詞〟だとか〝どーのこーの〟と書いてあると、〝何も解ってねぇなぁ〟みたいな(笑)、そういうのはありますけど。

――そういう受け手側とのギャップは感じますか?

―最近はもう無い。無いっていうか、あんまり考えてない。もう楽しんでもらえればいい…ええ。前は色々と〝こんなに誤解されるものなのか〟と思ってたけど、今回とその前のアルバムを出して、自分たちの本当にやりたいことが、ステージにしろレコードにしろ、それがハッキリ解ってきて、もう〝こっちはそれをヤルしかないなぁ〟って。あとは勝手に楽しんで下さいっていう感じなんです。

――音楽的にこういうバンドになりたいという理想みたいなのは?

―いや、音楽的にはないです。例えばキュアーとかラブ・ロケとか、独特の雰囲気のあるバンドの、そういう雰囲気みたいなのは凄く参考にしてるというか、そうなりたいっていうのならありますけど…。ウチは、BUCK-TICKは、ほんと勝手にやらせてもらっているという感じですから。

――音を取り入れるというよりも、雰囲気とか存在感を感じるような聴き方をしてる?

―そうですね、もちろん音も好きで聴いてるんだけど、やっぱ最初にヴィジュアルっていうか、まず絶対そういうバンドの雰囲気というのが先に来ちゃうから。

――自分はミュージシャンに向いてると思いますか?

―うーん…ハイ。

――やっぱり(笑)。では、もしミュージシャンにならなかったら、何になってたと思う?

―…や、ぜんぜん考えられない。

――自分に才能はあると思いますか?

―でも…誰でも、やってれば出来ると思いますよ(笑)。

――でも誰もがあんな曲を書ける訳じゃないし、それはやはり才能でしょ。

―だから、周りからそういうふうに言われたりすると、〝そーかな〟とも思っちゃうけど(笑)、でも家で曲作ってる時とか、ホントに頭コンガラガッちゃうくらいになってるから(笑)。

――でもこれだけ売れて、「JUST ONE MORE KISS」なんかカラオケまでになってて、さすがに自信は出てくるでしょう?

―ええ、そうですね。実は自信だけはあったんです(笑)。

――けっこう怖がりのクセに自信家ではあったんだ(笑)。でもどんなに売れてきても、BUCK-TICKは常に物腰が柔らかで、その辺がイイと言うのか、変わっていると言うのか、何というか(笑)…。

―他のバンドとか、やっぱ態度が変わったりするんですか?

——そういうのもあるけど、BUCK-TICK に関しては、もっともっと自信みたいなものを態度に出した方がいいんじゃないかと思うけど。

I　ええ。でも…あんまりエバってみてもしょうがないし、そうしたくないというか…。

——エバるというより、自信を持った態度ってことなんだけど(笑)。じゃあ将来の自分なんて想像つきますか?

I　やぁ…つかないです。でも、やっぱバンドやっていたい…同じメンバーで。

——世界制覇とか、そういう希望は?

I　あぁ、そういうのは無いですね。ただ、このままずっと売れて、ずっと続けていきたいというのが目漂というか…夢かなぁ。

——売れなくなっても続けていたい?

I　うーん、いや…でもやはり売れていたいですね(笑)。

死ぬことだけは怖いんです

——顔にB-Tって描くようになったのは、もう最初からでしたっけ?

I　ええ、アマチュアの時から。

——始めたキッカケは?

I　あ、その前はいつも顔にこう…線とか描いてたんだけど、バクチクだから〝B-T〟って描くのいいなぁと。

——でもあれ、だんだん小っちゃくなっていきましたよね。

I　ええ、ナンカみっともねぇなって(爆笑)。もうちょっとオシャレな感じにしようということで(笑)…。

——あれ自分で描くんですか?

I　ええ、自分で。

——メイクも?

I　自分です。

——ちょっとアレな質問なんですが、使う化粧品なんて決めてるんですか(笑)。

I　いえ、特に。何でもいいみたいな(笑)。

——ファンデーションなんかを自分で買ったりするとか?

I　(笑)んー、人に頼んでます。

——ステージ衣装などは?

I　ひとりひとりがこういう感じにしてくれって言って、皆んなで考えたりはしないですね。

——でも全員が自然とトータライズされた雰囲気になりますよね、ステージでは。

I　うん、そーですよね。私服のセンスとかもみんな似てるし…。

——好きなブランドとかありますか…なんか下らない質問で(笑)、どーもすいませんが。

I　好きなブランドですかぁ、うーんと、ゴルチエですね、やっぱり。レコードまで出しちゃうし(笑)、ホントに才能があるんだなって。

——ああ、あれハウスなんですよ。そうそう、あれも20年代がテーマで、その頃のSP盤をモチーフにしてるんです。ハウスなどは聴きますか?

I　ぜんぜん。一応試しに買ってみたんだけど、半分くらい聴いてソレっきりというか。でも、聴くのはイヤでも、やるとけっこう面白いのかなっていう気もするけど。

——速い曲とバラードみたいなのではどちらが好き?

I　昔は速い曲が特に好きでした。だから、バラードといっても、どっかでノリが出てくる曲が好きです。でも最初にロックを好きになった時は、ノロノロしてるともうその曲は聴きたくなくなっちゃうっていうか(笑)…だからレコード買うとまず曲の時間を見て、2分30秒とかあると〝あ、この曲は良さそうだ〟って(笑)。

——じゃあ、プログレの組曲みたいな長いもの、例えばクリムゾンなんかは聴かない?

I　ええ、ぜんぜん。

——乗り物の早いのって好きですか、車とかジェット・コースターとか(笑)。

I　うーん、でも俺、免許持ってないからそりゃ何とも言えないけど、ジェット・コースターとか飛行機は嫌いです(笑)。

——メロディーでは長調より短調の方が好みでしょ?

I　自分では短調の方が作りやすいから、だから自然とそう作っちゃいますね。

——新しいバンドがどんどん出てくる、今の日本のシーンの状況についてはどうですか?

I　もっともっと色々バンドとか出てきて欲しいっていう気持ちです。

——特に注目しているバンドはいますか?

I　いや、特に無いです。

——次作の構想はもう既にあるんでしょうか?

I　いや、まだ…それはこのツアーが終わってから。

——次もあの世界でしょうか、レトロで近未来で、何か破滅的な…。

I　うーん、でも多少の暗さは残しておくでしょうね、あいうダークな面は。

——曲を書く時に気をつけてることは何かありますか?

I　えー、別に気をつけるというか…妥協はしないようにするとか…納得のいくものを。

——ステージの自分と普段の自分は同じだと思いますか?

I　それは違うと思います。普段は臆病ですから(笑)。ステージに立つと、とにかくそうヤラなくちゃというのがあるから…。

——それは自然に入っていくの、それとも作って入っていく?

I　それは両方あると思うんですけど、あんまり臆病すぎちゃうと、どこでそれを曝け出すかっていうのもあるし、でも自分では本当にステージが一番ラクなんです。

——カリスマに対する憧れなんてありますか?

I　それはなれたらなれたで…それはそれでイイと思うんだけど(笑)、でも、カリスマとかになると、何か人間扱いしてもらえないんじゃないかなぁとか…。元々は、こう…群馬県のタバコ屋のセガレな訳だし(笑)。

——ええっ、でもヒトラーだって、その昔は…。

I　なんかアーティストくずれみたいなね…。

——そう。画家で挫折した人だからね。うーん、じゃあ、カリスマを否定はしないけど、ヒトラーとか、まぁデヴィッド・ボウイとか、ああいう存在にはなりたくないと?

I　そう、ジョン・レノンみたいに殺されちゃうかも知れないし(笑)。

——死ぬのは怖い?

I　ええ。怖いです。

——アーティストでも、死に憧れる人ってよくいるじゃない、そういう感じではない?

I　ええ、イヤです、死ぬことだけは。血のイメージなんかも好きじゃないですし…。

——好きな色は?

I　色は…赤、白、黒。

——赤って、やはり血とか危険のイメージじゃないですか?

I　うーん、なにか迫力があるって言うか、存在感みたいなものを連想しますね。

——白では?

I　…連想するもの…〝無〟ですかね。

——じゃあ黒は?

I　黒は「落ち着き」を感じますね。どっしりとしてて、重々しさと、恐怖みたいなものを感じますね。怖さみたいなのもあるけど…。

——うーん。なんか本当に不思議な人ですね(笑)。バンドの中でも、こう、いちばん難しいんじゃないですか(笑)、やっぱり今井君が。

I　いや、難しくない(笑)です、俺は。

THE SEX PISTOLS

NEVER MIND THE BOLLOCKS

勝手にしやがれ
セックス・ピストルズ

それまであった音楽や社会の概念を引っ繰り返して、登場したイギリス発祥のムーヴメント「パンク」。その影響は精神的であったり形態であったり、テクニックが無くてもバンド組めるぞ…であったり様々だが、今あるバンドは多かれ少なかれ影響下にあるだろう。そのパンクの代名詞ともなっているのが「セックス・ピストルズ」である。74年に結成されたスワンカーズを母体に、75年ジョニー・ロットン(Vo)スティーヴ・ジョーンズ(G)、グレン・マトロック(B)、ポール・クック(Dr)のメンバーによりスタート、セント・マーチン美術学校でデビュー・ギグを行った。クラブをメチャメチャにして出演禁止になったり、EMIからのデビュー・シングル「アナーキー・イン・ザ・UK」の歌詞が過激な為、放送禁止は勿論の事、レコードを置く事を拒否する店が続出したり、テレビ番組で「FUCK!」を連発したり…と色々な社会問題をひき起こしたあげく、77年EMIとの契約を破棄。その後、ベースがグレンからシド・ヴィシャスに代わり、A&Mレコードと契約するが一週間後に破棄。唯一のオリジナル・アルバム「勝手にしやがれ」であるデビュー・アルバムは発売一週間にしてナショナル・チャートの1位となる。78年の全米ツアー中ジョニーの「解散声明」により終結。79年、恋人を刺殺した疑いの中、ヘロイン事故(自殺?)でシド死亡(21才)。「シド・シングス」というアルバムが出ている。スティーヴはポールと共に、大列車強盗をヴォーカルにリオでレコーディングしたり、プロフェッショナルズを結成したり、様々なセッションを繰り返し、現在2枚のソロ・アルバムが出ている(マイアミ・ヴァイスII等も手が出ている)。ジョニーはジョン・ライドンと名を改め、パブリック・イメージ・リミテッド(P-I-L)を結成。現在ライヴ盤を含め8枚のアルバムをリリース(ゴールデン・パロミノスにも参加した)し、昨年"筋少"をオープニング・アクトに4度目の公演を行ったのは記憶に新しい。

尚、ジョン・ライドンの代わりにスティーヴ・ニュー(リッチ・キッズの人ですかぁ?)—をヴォーカルに、オリジナル・メンバーでピストルズ再結成という話もある。

SIOUXSIE AND THE BANSHEES

ピープ・ショウ
スージー&ザ・バンシーズ

76年、パンク・ムーヴメントの嵐が吹き荒れる中、セックス・ピストルズの親衛隊の一員だったスージー・スー(Vo)とシド・ヴィシャス(Dr)、それにスティーヴ・セヴェリン(B)、マルコ・ピローニ(G)の4人で結成。しかし間もなくシドとピローニが脱退し、78年ケニー・モーリス(Dr)、ジョン・マッケイ(G)を加えたメンバーによるアルバム「ザ・スクリーム」でデビュー(日本盤は「香港庭園」というタイトルで1曲プラスされている)。元マガジンのジョン・マクガフ(G)と元スリッツのバッジー(Dr)へとメンバー・チェンジの後も、ギタリストがロバート・スミス(キュアー)→ジョン・キャロッサーズと変わり続け、その中で87年まで「ノクターン(ライブ)」「ティンダーボックス」、全曲カヴァーの「スルー・ザ・ルッキング・グラス」という傑作を含めたLP8枚をリリース。88年になってギターがジョン・クレインになり、マーティン・マックリック(Key)が加わって、「ピープ・ショウ」を発表。これはバンシーズの最高傑作ではないかと思う。スージーが後続のアーティスト(特に女性)に与えた影響は大きく、多くのフォロワーを生んだ。バンシーズの持つ、オリエンタリズムやエスノ的要素をサイケデリック感覚で包んだ音の切れ端は、「幻の都」あたりのナンバーに息づいていそうだ。尚、キュアーの所でもふれている「グローヴ」の他にセヴェリンは映画音楽を手がけている。そしてスージーとバッジーによるプロジェクト「クリーチャーズ」が、アルバム「フィースト」と、6年ぶりの新作「ブーメラン」を去年発表しているので要チェックだ。

THE CLASH

ロンドン・コーリング
クラッシュ

ピストルズ同様、サウンド的にはバクチクに影響は見られないが、バンドを組むというエネルギー源にはなったであろう。クラッシュは、伝説ともいえるロンドンSSのメンバーであったミック・ジョーンズ(G)、ポール・シムノン(B)の2人と、キース・レヴィン、テリー・チェイムズ(Dr)によって76年にスタートした。間もなくジョー・ストラマー(Vo・G)が加入するが、キースが脱退(その後PILに参加するが脱退→ソロ活動を経て89年LAでバンド結成)した。この面子で77年にデビュー・シングル「ホワイト・ライオット」を、アルバム「白い暴動」を発表。この間テリーが抜け、トッパー・ヒードンが加入する。子供じみた反抗ではなく明確な政治意識を伴い、スピードとパワーに溢れたスリー・コード・ナンバーは、退屈していたロンドンの若者を熱狂させた。78年にリリースされたセカンド・アルバム「動乱(獣を野に放て)」は全英でゴールド・ディスクを獲得した。79年、パンク・バンドとして初めてレゲエの要素を導入しはじめ、3枚目のアルバム「ロンドン・コーリング」を発表。聴いた事の無い人は、これから入るといいだろう。82年に来日した後、トッパーがクビになる。翌年ピーター・ハワードが加入。そしてミックが脱退(!)。84年に新メンバー2人が加入し、6枚目のアルバム「カット・ザ・クラップ」発表。だが、新メンバーが3人揃って脱退し、クラッシュは自然消滅してしまった。86年、トッパーがソロ・アルバムをリリースし、ミックの新バンド"ビッグ・オーディオ・ダイナマイト"(BAD)もアルバムを発表。89年にBADは4枚目のアルバムをリリース。ポールは「HAVANA 3AM」を結成、ジョーも映画のサントラや映画出演を経て、初のソロ・アルバムをリリースしている。

ここではメンバーがインタビュー中にバックボーンとしてあげたバンドの中から、国外のニューウェイヴ・バンドをチョイスして、彼らへの影響等も混じえながら紹介していく。最近のBUCK-TICKの楽屋では「ミニストリー」等のエレクトリック・ジャンク系もガンガンにかかっていると聞いたので、このページを叩き台に、新しいバンドを発掘するのも面白いでしょう。

インタビュー本文中に登場する栄光のニューウェイヴ・アーティスト

N.W.LECTURE

text by Yumi Ishikawa

BAUHAUS

バウハウス'79-'83
バウハウス

PETER MURPHY

ディープ
ピーター・マーフィー

LOVE AND ROCKETS

エクスプレス
ラヴ&ロケッツ

最近バンド関係者の間で、一種ブームにもなっているバウハウス。後にポジティヴ・パンク（サイケデリック・パンクともいう）と称された数々のバンドに、多大な影響を与えた先駆的バンドである。デヴィッド・J（B）、ケヴィン・ハスキンス（Dr）兄弟とダニエル・アッシュ（G）によるバンド「ザ・クレイズ」に、ピーター・マーフィー（Vo）の加入を経て79年に結成、5年に渡る活動の末4枚のオリジナル・アルバム（「暗闇の天使」「マスク」「ザ・スカイズ・ゴーン・アウト」「バーニング・フロム・ジ・インサイド」）とライヴ・アルバム「プレス・ジ・インジェクト・アンド・ギヴ・ミー・ザ・テープ」を残して83年に解散。解散直前に一度来日を果たしているが、その時のキャッチ・コピーが「大英帝国に咲いた猛毒の華」という中々笑えるものだった。重たく鋭利なビートが生み出す暗闇を、ノイジーかつサイケデリックなギターが切り裂き、稀代のカリスマ・ピーター・マーフィーのシアトリカルなパフォーマンスが炸裂する、他の追随を許さない唯一無二のロック・バンドだった。「マーフィーとアッシュはセットじゃなくちゃ嫌」というファンが続出するほど恰好良い2人のステージングは、桜井・今井コンビの原点かも。他、「ハイパー・ラヴ」における桜井のハンド・ライトを持った演出等にもマーフィーの影がちらつく。「サバト」「悪の華」が好きな人は、バウハウスを聴いてみるといいだろう。シングル中心の選曲でファン・クラブでしか入手できなかった曲も収められているベスト・アルバム「バウハウス79-83」が、はじめて聴く人にはおススメできる。

さて、解散後ピーター・マーフィーはミック・カーン（元ジャパンのベーシスト）とのプロジェクト「ダリズ・カー」を結成。アルバム「ウェイキング・アワー」を発表するが、試行錯誤の段階で留まり、85年からレコーディングとツアーの為のバック・バンドを編成するようになる。そして86年、ファースト・ソロ・アルバム「凍てついた世界へ」を発表。88年にセカンド「ラヴ・ヒステリア」、89年に「ディープ」を発表し、ロック・ミュージックにとらわれない独自の世界を追求している。ソロとして3度来日し、3度ともバウハウスの曲を演っている。

一方、アッシュ・J・ハスキンによって結成されたのが「ラヴ・アンド・ロケッツ」である。85年の「夢飛行」でデビューを飾り、以後「エクスプレス」「アース・サン・ムーン」を発表。そして89年にリリースされた4枚目のアルバム「ラヴ・アンド・ロケッツ」がアメリカでブレイク、ゴールド・ディスクを獲得した。シングル・カットされた「ソー・アライブ」も全米3位となり、スタジアム・クラスの全米ツアーも行っている。その勢いで今年2月来日の噂が流れたが結局実現しなかった。現代版60年代サイケデリック・ポップ的なセカンド「エクスプレス」が推薦盤。尚、「バブルメン」という覆面バンドで12インチを一枚リリースしている。その他、バウハウスに興味を持った方は、デヴィッド・Jの2枚のソロ・アルバムや（じきに3枚目が出るらしい）、彼の参加した「ジャズ・ブッチャー」なるバンドの音を聴いてみるのも良いだろうし、ラヴ・ロケの母体ともいえる(?)バウハウス時代からのアッシュのソロ・プロジェクト「トーンズ・オン・テイル」のシングル「クリスチャン・セイズ」などは「ミスティ・ブルー」に通じるものがあると思うので、一聴してみるのも面白いだろう。

THE DAMNED

チズウィック・シングル・コレクション
ダムド

インタビュー等で音楽的背景を聞いた時、どのバンドでも必ずと言っていいほど名前があがるのがダムドである。クラッシュ、ピストルズと共にオリジナル・パンクの3大バンドの一つであるダムドの結成は、76年6月。オリジナル・メンバーはブライアン・ジェイムズ（G／本名ブライアン・ロビンソン、後にローズ・オヴ・ニュー・チャーチ結成）、キャプテン・センシブル（B／本名レイ・バーンズ）、ラット・スキャビーズ（Dr／本名クリス・ミラー）というサブタレーニアンズのメンバーに、デイヴ・ヴァニアン（Vo／本名デイヴ・レッツ）を加えた4人。ラモーンズばりに芸名をつけたり、ベイ・シティ・ローラーズの真似をしたりと、他のパンク・バンドがやらない事をやるという、ふざけたやり方が実にかっこいいバンドだった。パンク・バンドとして初めてのシングルにもなる「ニュー・ローズ」でデビュー。他、アルバム・デビューもテレビ出演も契約破棄も、全て一番先にやってしまったパンク・バンドである。解散も一早く78年にしたが、79年に再結成。ブライアンが抜け、キャプテンがギターに変わり、アルジー・ワード（B）を加えたメンバーだった。その後ベースがポール・グレイにチェンジし、84年キャプテンが脱退（ソロ・アルバムが出ている）。解散説が流れる中、デイヴ中心に再スタート。86年と87年に来日している。89年、オリジナル・メンバーによるファイナルツアーを行い、現ダムドの方はデイヴ脱退により解散。しかし今年になって短いツアーのために再結成したという話も聞く。オリジナル・アルバムは全7作。初めて聴く人にはシングルを集めた「チズウィック・シングル・コレクション」が良いと思う。他に〃ナズ・ノーマッド&ザ・ナイトメアーズ〃という変名バンドによるアルバムも有。パンク・ナンバーからプログレ(?)ナンバーに至るまで、音楽的にも「自由」だった事が、様々なバンドに影響を与えている。

KILLING JOKE

暴虐の夜
キリング・ジョーク

ピストルズ亡き後パンク勢力が衰退して行く中、バウハウスと共にポジティヴ・パンクの先駆けとなり、圧倒的なパワーを見せつけたバンド、それがキリング・ジョークである。78年、ジャズ・コールマン（Vo）とポール・ファーガソン（Dr）の結成したマット・スタッガーに、ジョーディー（G）と当時シド・ヴィシャスに似ていたためクローン・シドと呼ばれたマーチン・ユース・グローバー（B）を加え結成。80年にシングル「ナーヴァス・システム」でデビュー。同年の暮れにファースト・アルバム「黒色革命」を発表。81年にはセカンドをリリース。ヘヴィ・メタルよりもヘヴィでメタリックで攻撃的で、かつソリッドなサウンドは今聴いても昂揚する。82年コニー・プランクをプロデューサーに迎えたサード・アルバムを発表後、クロウリーの思想に傾倒し、ステージでも黒魔術の儀式じみた事をやっていたジャズがアイスランドに失踪。その後をジョーディーとポールが追い、ユースは脱退（後にブリリアントに加入）した。新ベースとしてポール・レイヴンを迎え、ライヴ・ミニ・アルバムと4枚目のアルバムを発表。徐々に荒々しさが消え、メロディアスな部分が露呈しはじめた。85年、5作目「暴虐の夜」をリリースし、来日公演を行っている。ヘヴィ・かつメロディアスな、このアルバムは是非聴いてほしい。86年には「漆黒の果て」を、88年に「アウトサイド・ザ・ゲート」（ジャズはネオ・ロマンティシズムと呼べるアルバムだと言っている）をリリース。その後レイヴンとポールが脱退、レイヴンは新バンド〃ザ・ヘルファイア・クラブ〃を結成した。バクチクへの影響はギターのエフェクト処理なんかに表れてるのかもね。

XTC

コンパクトXTC
XTC

73年頃に結成されたスカイスクレイパー（→ヘリウム・キッズとなる）のメンバー、アンディ・パートリッジ（Vo・G）コリン・ムールディング（B・Vo）、テリー・チェンバーズ（Dr）の3人に、バリー・アンドリュース（Key）を加え、77年にXTCと改名し12インチ・シングル「3D EP」でデビュー。パンク／ニュー・ウェイヴのレコードとしては、初めてシンセサイザーを使用したと言われている。78年にテクノ・パンクと称されたファースト「気楽にいこうぜ」発表後（一度来日もしている）89年の「オレンジズ&レモンズ」発表まで通算9枚のオリジナル・アルバムをリリースしている。表面的には変わって来ているが、根底に流れる独特な屈折したメロディ・ラインはXTCならではのもの。「ひねくれたポップ」という部分がメンバーも気に入ってるのかもしれない。80年にリリースされた「ブラック・シー」が個人的には好きだが、78年から85年までのシングルをコレクションした「ザ・コンパクトXTC」がお得である。86年のトッド・ラングレン（レピッシュのプロデュース等で話題をまきましたね）のプロデュースによる「スカイラーキング」も聴きやすいでしょう。79年にアンドリュースが脱退（ソロ活動の後〃シュリークバック〃結成）、デイヴ・グレゴリー（G）加入。83年にはチェンバースが脱退し、その後ドラムスはパーマネントなメンバーを持たない。尚、アンディのソロやXTCの変名バンド「デュークス・オヴ・ストラスフィア」「ザ・スリー・ワイズ・メン」等のレコードも出ている（特にデュークスのファーストが良い）ので聴いてみては。

THE CURE

スタンディング・オン・ア・ビーチ
キュアー

「プレジャー・ランド」タイプの曲が好きな方に一聴を薦めたいのが、ロバート・スミス率いるキュアーである。イージー・キュアーという名で活動していた彼らだが、78年にロバート・スミス（G・Vo）、ローレンス・トルハースト（Dr）、マイケル・デンプシー（B・Vo）の3人で「キュアー」としてスタート。79年にデビュー・アルバム「スリー・イマジナリー・ボーイズ」（日本盤は内容を少し変えた「ボーイズ・ドント・クライ」）をリリース。ポップともアバンギャルドともつかない抽象的であるが硬質なキュアー・サウンドはここから始まった。ロバートとトルハースト以外のメンバー・チェンジが激しく、作品毎に色合が違ったものになっている。にもかかわらずロバート・スミスの声とダークな歌詞、どこか突き放したようなムードが、キュアーという強烈な個性を生みだしている。4枚目のアルバム「ポルノグラフィー」リリース後一時活動を休止し、ロバートはバンシーズにギタリストとして参加（82年のバンシーズ来日時のギタリストは彼である）、スティーヴ・セヴェリン（バンシーズ）とのプロジェクト「グローヴ」でアルバムを一枚リリース。84年「ザ・トップ」で復活し、初来日も果たしている。そして87年のアルバム「キス・ミー、キス・ミー、キス・ミー」でビッグ・ネームとしての地位を確立し、89年「ディスイングレイション」を発表。トルハーストの脱退により「解散」とかいいつつ、これを書いている最中にニュー・シングルが出てしまった。初めて聴く方は「スタンディング・オン・ア・ビーチ」というベスト・アルバムから入るといいでしょう。

KRAFTWORK

人間解体
クラフトワーク

表面的な部分ではバクチクへの影響は余り感じられないが、今井の「人を驚かせたい」といった部分での、時代に与える衝撃度的観点から類似性を発見できるかもしれないクラフトワーク。とにかく先端を行っていたのだ。68年（皆さん、生まれてましたか?）ドイツの音楽院で出会ったラルフ・フュッタとフローリアン・シュナイダーの2人が電子音楽に興味を持ちバンドを結成。1枚レコードを出した後、70年にクラウス・ディンガー（後に今や伝説となってしまったバンド「ノイ」を結成）と、アンドレアス・ホーマンを加えクラフトワークと名乗るようになる。ファースト・アルバム「クラフトワーク」は「西独製同時代音楽の興味ある代表者」という評価を受け、成功を収めた。その後オリジナルの2人プラス、クラウス、ローダー（G）とパーカッションのヴォルフガング・フルールの4人にメンバーが変わり、テクノの原点ともいえる「アウトバーン」を74年にリリース。アメリカでもヒットを飛ばし「アメリカで最も売れたドイツのロック・バンド」と形容された。次のアルバム製作前にローダーが抜け、カール・バルトスが参加、2枚アルバムを発表した後、78年にテクノ・ブームの到来を告げるアルバム「人間解体」をリリース。ロボットをテーマにしたこのアルバムは、ジャケットの斬新さと相まって注目を集めた。個人的にはこれが推薦盤（曲も短いし）。次に出たアルバムの中の「コンピューター・ラヴ」という曲は全英チャートNO・1になっている。来日公演も行い、83年にシングルをリリースするが沈黙。86年暮れにようやく「エレクトリック・カフェ」を発表。時代の方が彼らに追いついてしまった事を、ちょっと実感してしまった。

ECHO AND THE BUNNYMEN

ポーキュパイン
エコー&ザ・バニーメン

某誌でポジティヴ・パンクとは、キュアー、スミス、バウハウス、そしてこのバニーズの事だと書かれていたのには笑わせてもらったが（ダムドのニュー・ローズがポジパン・ナンバーだってのには気絶しちゃいました）、そんなオトボケ記事はとっとと忘れてもらってから、バニーズの話に入ります。クルーシャル・スリー、ティアドロップ・エクスプローズ等を経たイアン・マッカロク（Vo／通称マック）が、ウィル・サージェント（G）、レス・パティンソン（B）それにドラム・マシーンの「エコー」と共に78年に結成したのが、ネオ・サイケデリアと称されたバニーメンの始まりだ。79年にピート・デ・フレイタス（Dr）を加え、80年にファースト・アルバム「クロコダイルズ」を発表。夜をイメージさせる美しいジャケットと、ドアーズから受け継いだ叙情性を激しいビートに乗せた音の衝撃は、今も忘れられない。81年にセカンド・アルバムをリリース。83年には2枚のヒット・シングルを含むアルバム「ポーキュパイン」（名作!）で、全英2位の快挙をとげた。4枚目のアルバムを発表した84年には2度来日し、ファンを熱狂させた。そしてしばらくバンド活動を休止した後、86年にはシングルを集めたアルバムを、87年にはアルバム「エコー&ザ・バニーメン」を発表。88年に3度目の来日を果たした後、マックが脱退（!）89年6月にピートが自動車事故のため他界するというショッキングな事件がおこり、現在はウィルとレスが他に2人のメンバーを迎えバニーメンを継続している。一方マックはソロ・アルバム「キャンドルランド」を引っさげ今年来日。来日記念盤「9トラックス」が発売されている。バクチクとはエモーショナルな点で通じるものがあるかもしれない。

STEVE STEVENS

スティーヴ・スティーヴンス・アトミック・プレイボーイズ
SAME

オリジナル・パンクバンドのひとつであったジェネレーションX解散後、ニューヨークへ渡ったビリー・アイドル（ピストルズの親衛隊→76年チェルシー結成→ジェネレーションX）が見出したギタリストが、彼スティーヴ・スティーヴンスである。82年～86年にリリースされたビリーの3枚のソロ・アルバムで、良きパートナーとしてソング・ライトも手がけている。ビリーの『反逆のアイドル』のヒットにより、その妖艶なルックスと派手なアクションとテクニカルなプレイが、ニュー・ギター・ヒーローとして一躍脚光を浴びた。ビリーがプロモーション来日をした時も同行している。アンディ・テイラー脱退後のデュラン・デュランに加入するとか、デイヴ・リー・ロス・バンドのベーシストとジョイントするとか、色々な噂の飛びかう中、自らのバンド「スティーヴ・スティーヴンス・アトミック・プレイボーイズ」を結成。カシム・サルトン（トッド・ラングレンのバンド、ユートピアのベーシスト）やアントン・フィア（ゴールデン・パロミノス）の協力を得て、昨年バンド名と同名のアルバムをリリース。暮れには「NECスペシャル／ファイナル・カウント・ダウン89」というイベントで来日公演を行う予定だったが、直前になって解散した為キャンセルされた。

THE PSYCHEDELIC FURS

ミラー・ムーヴス
サイケデリック・ファーズ

ノイジーなサイケデリック・ギター・サウンドと、ヨーロッパ的デカダンを感じさせるけだるい雰囲気、懐疑的な歌詞。当時デヴィッド・ボウイー・ファンが、一気に流れたのが（私のまわりだけかもしれないけど）サイケデリック・ファーズだった。結成は77年。リチャード・バトラー（Vo）とティム・バトラー（B）兄弟によってである。数々のセッション活動の末、ロジャー・モリス（G）、ジョン・アシュトーン（G）、ダンガン・ギルバーン（Sax）、ヴィンス・エリィ（Dr）を加えた6人編成で、79年「ウィ・ラヴ・ユー」でシングル・デビュー。80年にファースト・アルバム「サイケデリック・ファーズ」を発表。セカンド発表後、ロジャーとダンガンが脱退し、NYに拠点を移し、トッド・ラングレンをプロデューサーに迎えサード・アルバムを発表。シングル・ヒットによりアメリカ進出も成功を収める。その後ヴィンスが抜け3人編成となったファーズは、84年「ミラー・ムーヴス」によってポップ・グループとしての新生面を打ち出し、数多くのヒットを生む（ドラムはプロデューサーであるキース・フォーシーが担当）。バクチクの「エンジェリック・カンヴァセーション」には、この辺のムードがあると思うので、聴いてみて下さい。86年、映画「プリティ・イン・ピンク」の主題歌を大ヒットさせ、これを含む5枚目のアルバムを翌年リリース（プリティ～のオリジナル・ヴァージョンは2作目に収録されている）。昨年、ヴィンスが再加入し、「ブック・オヴ・ディズ」が発売されたが、これは初期のイノジーなギターと中期のポップ・センスがミックスされた傑作である。来日公演も1度行っている（2度目はキャンセルされた）。「ジス&ナッシング」というベスト・アルバムがオイシイ。

D.A.F. (DEUTSCH/AMERIKANISCH/FREUNDSCHAFT)

愛と黄金
D.A.F

日本ではソフト・バレエあたりが提唱している「エレクトニック・ボディ・ミュージック」の大元祖、79年以降ドイツを吹き荒れたノイエ・ドイッチェ・ヴェレ（パンク・ムーヴメントの影響と反ポップ・ミュージック的色彩を持った、ジャーマン・ニューウェイブ）の立役者、それがDAFである。フルネームはドイッチェ・アメリカーニッシェ・フロイントシャフト（独米友交同盟）。73年頃からデュッセルドルフでセッション活動を始め（その中にはホルガー・ヒラー等もいた）、79年にファースト・アルバムを発表。これはジャケットが黄色かった事から「ダス・ゲルベ（黄色いやつ）」と呼ばれていた。メンバーはローベルト・ゲアル（Dr）、クルト・ダールケ（Syn／後にピロレーターの名でデア・プランに参加）、ヴォルフガング・シュペルマンス（G）とミヒャエル・ケムナー（B／この2人は後にマウ・マウを結成）。そしてイギリスに渡り、80年にコニー・プランクをプロデューサーに、ガビ・デルガド・ロペスをヴォーカルに迎えたセカンドを発表。が、メンバーの脱退で、ローベルトとガビのデュオとなり、ヴァージンと契約。短く刈り上げた髪とレザー・ファッションに身を包み、ナチ的ムードを漂わせた2人は、ハードなエレクトリック・ビートを打ち出し、「愛と黄金」でインターナショナルな成功を収めた。82年に5枚目のアルバムをリリースし、来日前に解散してしまった。その後2人はそれぞれソロ・アルバムを出すが、85年に再結成。アルバムを一枚リリースしたが、単なるダンス・ミュージックと化していた。88年にヴァージン時代のベスト盤「D・A・F」が発売されている。バクチクでは「アイコノクラズム」あたりが近いラインだ。

ULTRAVOX

ヴィエナ
ウルトラヴォックス

バクチクの音から考えると意外な、英国最強のテクノ～ニュー・ロマンティック・バンド、ウルトラヴォックス。大きく3期に分ける事ができる。まず、ジョン・フォックスを中心とする、ロキシー・ミュージック系ヨーロッパ耽美テクノ時代。これは74年から活動していた「タイガー・リリィ」なるバンドが前身である。今や大御所のスティーヴ・リリーホワイトやコニー・プランクのプロデュース等で3枚のアルバムを残し、79年に解散。「システム・オヴ・ロマンス」は名盤である。その後ソロとなったジョン・フォックスは4枚のアルバムを発表しているが、85年以降は実業家になったらしい、という事ぐらいしか情報がなく、本当に静かになってしまったクワイエット・マン（笑）とも言われている。80年6月、シングル「スリープ・ウォーク」を引っさげて、ミッジ・ユーロ（元リッチ・キッズ）をリーダーとした新生ウルトラヴォックスが再デビュー。ドラマティックなエレクトロ・ビートで全英トップ・バンドにのし上がった。4枚のアルバムをリリースし（83年には来日公演を行っている）、一時活動を停止。その間ミッジは初のソロ・アルバム「ザ・ギフト」発表。86年UVOXとして復活したが、余り成果をおさめられずその後のアルバム・リリースは無い。やはり後期の名作は「ヴィエナ」でしょう。「ニュー・ヨーロピアンズ」という曲のギター・カッティングが、今のバクチクに生きてるかも…。尚ミッジは88年にケイト・ブッシュ等の参加を得たソロ・アルバム「アンサーズ・トゥ・ナッシング」を発表。昨年ビリー・カーリー（Syn）とロビン・サイモン（G）により再結成されたらしい。

インディーズ時代から「悪の華」ツアーまで、常に華麗な変貌を遂げてきたBUCK-TICKのステージ衣装の数々。スタイリストの渡辺さゆりさんが保管している総てを誌上初公開！

BUCK-TICK 歴代衣装大公開

構成 岩本美紀 保存、取材協力 渡辺さゆり[BUCK-TICKスタイリスト] 撮影 辻砂織
organized by Miki Iwamoto & Asada Yuki, preserved and cooperated by Sayuri Watanabe: BUCK-TICK's stylist, photographs by Saori Tsuji

TL ヤガミトール
Ut 樋口ユータ
hd 星野英彦
Hs 今井寿
Ats 桜井敦司

WARDROBE FLASH BACK

インディーズ時代

1.（Ats）

デヴュー以前の87年の頃に「HURRY UP MODE TOUR」で回った時の衣装。本人がデザインし、知り合いの人に作って貰ったものらしい。ウエストに太めのベルトがポイント。

2.（Ats）

インディーズ時代で1.と殆ど同時期に作られたもの。渡辺さんが渋谷LIVE INNで初めて彼に会った時に着ていた衣装で、第一印象は「とても衝撃的だったことを覚えています」という。『ロマネスク』のビデオにも使用されている。

3.（Ats）

デヴューが決まって一番最初のフォト・セッションの時に着用したもの。

1987年12月日本青年館

4.（Ats）

この時から渡辺さんがメンバーの衣装を担当。彼女自身がパーツを買ってきて服に縫い付けた。鋲の様なカラー・スパンコールを埋め込む機械が買えずに、全て彼女が爪でパチパチと折って仕上げたもの。その後2ケ月位は親指の爪が生えてこなかったという涙ぐましいエピソードも。

FRONT

BACK

1988年3月15日～東北ロックサーキット

5.（Ats）

時間が無かったため、"こんな感じがいい"ということだけを聞き、東京にいる間に急いでつくったもの。「東北へは付き添わなかったのでどんな風に着たかは解らないんです」とのこと。

6.（TL）

とにかく時間がなく、全員の分はつくれず原宿で買った既製品。

7.（hd）

本当は取りはずしの可能な襟とベルトが付いていたが粉失してしまった。これも本人の希望のデザイン。

渡辺談

この頃の衣装は皆んなピラピラ、ピラピラしてますよね。それでこの日の(PIT)MCでは「チャラチャラしています」って言っていました。

1988年4月1日東京PIT

8.（Ats）

この衣装は、マイク・スタンドなどあちこちで引っ掛かることが多く、本番中にコソコソとハサミを持って切っていたら、作った人におこられてしまったという。

9.（hd）

この頃の動きは縦に飛ぶことが多く、その時の揺れを考えて作られた服。

10.（Hs）

素材は合皮。黒いものを着用。ズボンはスカーフも付いていた。

INT. 渡辺さゆりさん BUCK-TICKスタイリスト

本番前の慌ただしさの中、取材に応じてくれた渡辺さん。大阪にて

——BUCK-TICKのスタイリングをやり始めたのはいつ頃からですか。

W 「SEXUAL～」のジャケットとプロモーション・ビデオをやってからずっとです。『SEXUAL～』のLPジャケットと『DREAM OR TRUTH』を撮ったのがヒル・トップっていう製作会社だったんです。そこでスタイリストをやっていた関係で…。

——それ以前は全部自分達でやってたんですか？

W はい。デビュー前は自分達でやっていましたね。

——具体的な仕事の内容というと？

W そうですねぇ。スタイリストとしての殆どの仕事と、メンバー・ケアの全般、それに身のまわりとか(笑)。あとはアニイの髪の毛を立てる時や(笑)、届かない部分をちょっとだけ手伝います。

——メイクは？

W メイクは自分達でやっています。私が手伝うのはユータ君の眉書きくらい(笑)。化粧はみんな私なんかよりぜんぜん上手いんじゃないんですか(笑)。

——渡辺さんが服を作っちゃうわけですか？

W 作るまでは出来ないんですけど、デザイン画までは、メンバーと一緒に書くから凄い汚いんですけど、鉛筆の取り合いをして「ここがこうだよ」とか言って。あとはデザイナーと一緒に考えます。あと、ビーズを付けたりする細かい作業は自分でしています。

——メンバーは気に入ってくれていますか？

W ほぼ(笑)。文句を言う人は……そんなにいないですね。その都度手直ししますから。

——じゃあ、もっとこうしてくれとか、注文はあるわけですか。

1988年夏のイベント用

11. イベント用につくったもの。野外は暑いということでシャツに。

12. 損傷することが大変多い衣装で、撮影の度に直さなくてはならなかった覚えがあるという苦労もの。

13. クリーニングのし過ぎで縮んでしまったため、すごく小さく見える。渡辺さんが着ても小さい位らしい。

14. 彼の服をコピーするファンの子が一番多いというが、その中でも特にこの服はコピーされていたという。全く同じに着ているのを見て驚いてしまったこともあるらしい。シーディアンのCMで車内用の中吊り広告の撮影の時にも使用。

この5着をつくった時も時間が無くて、埼玉の方で「PHYSICAL NEUROSE」などのビデオを撮っていた時だったんですけど、作る人にそこまで来て貰って衣装の打ち合わせをした憶えがあります。

渡辺談

15. イベントの時に作ったもの。赤が好きなので赤い衣装が多い。

16. まだサンプルの時点で買った既製品の衣装。一般に出回るのを防ぐため無理矢理に頼んで、サンプル止まりにして貰ったというもの。

17.

18.

1988年7月10日鶴岡市民文化会館

19. この服を見た人は誰もいないと思われる。何故なら、リハーサルまで着たが「やっぱりいやだ」ということで着なかったから。大へん暑いものだったらしい。

この頃からツアーに同行するようになったので7月10日という日は私にとって記念の日なんです。

渡辺談

W そういうのはありますにとか。小物関係とかをもっと派手にとか。

――誰ですか？　それ。

W 誰かなぁ…。でも一番衣装に気を使うのは今井君じゃないですかね。

――今井君の衣装はなんか凄くコロコロ変わりますよね。

W 今井君は以前にもスカートをはいたりしていましたけど、やっていてもね、何んでもアリみたいで一番面白いです。

日本青年館の時、今井君の衣装が黒と赤だったんですよ。それまでは金髪だったんですけれど、衣装が赤と聞いた途端に彼は赤い毛染めを買ってきて、真赤な髪でステージに登場してくれて、とても嬉しかったということがありました。彼は自分の主張がハッキリしているから、衣装が出来上がってから髪型を変えたりもしますね。衣装にしろ、髪型にしろ、一番コピーされるのも今井君ですね。

――今回の「悪の華」ツアーで緑色の髪にしたというのは、あれも衣装とのかねあいで？

W あれは全く意味がないみたいです(笑)。もう長すぎてどうしようもないから、「切んなよ」って言ってたんですけど、突然、本当に『緑の毛染めを買ってきて』と言われて、そしたら次の日パーンと緑になってきて、でも今回に関しては、衣装の事は何も考えてくれてませんでしたけど(笑)。

――衣装は年間にどの位作るんですか？

W ワン・ツアーで3パターン位は作ります。

――ワン・ツアーで3パターンとして、年間2回ツアーを演ったら、メンバー5人分で大変な数ですよね。

W 年間、何着位作るかな…うーん30着位かなぁ…。

――1回演ったら、もう着ない？

W ワン・ツアー終ったらもう着ないですね。全部うちの押入れで眠っています。

20. Ats

21. Ats

撮影で一度着たが、動けないということでステージでは一度も着ていない。ただ、パンツだけはツアー中もはいていた 実はこれが本番中にやぶけたパンツ。裏地が無かったらと思うと…。

22. Ats

21.の"ジャンプ・スーツ"からの着換えでこのコートだけになったりした。この頃からエナメル好き、コート好きになる シーディアンのCMにも着用

23. TL

アニイは基本的にパンクぽいものが好きだということ アダム・アントをイメージした服が多い。

24. TL

帯は腰のところでぐるぐると巻くようになっている。手首のところができるだけ詰まるように、全部がマジックテープで調整できるように工夫されている。

25. hd

深い赤と黒の生地で袖、襟、ポケット、身衣が全て対称でデザインされている。

26. Hs

この頃までの靴は市販のものだが、武道館の時からオーダーとなる

27. hd

28. Hs

29. Ut

パーツ等はどうしても取れてしまうらしく、いつもツアーには予備を持って行くようにしているという。一度取れると、チクチクと付け直す大へんな作業が待っている。

でも、それぞれ思い出があるから捨てられませんね、

——思い出して着ることはしない？

W (笑)しないです。

——この仕事をやっていて一番苦労する事は何ですか

W 苦労することですか？ 苦労することは本番前のドタバタ… いつも皆んながリハーサルの時に、ツアーの衣装ケースを開けて、これにしようと出すんですけど、それにパーツを付けたり… あとホテルに帰ってからの苦労話もありますね クリーニングが出来ないんですよ ビーズとかがいっぱい付いているから断わられちゃうんです 時間的にも出せなかったり そういうのはバスタブにお湯を張って、アクロンとかを入れて手でもんで洗うんですけど、そのうち疲れちゃって足を突っ込んでダーと洗って干すんです(笑) だから今でもツアー中はホテルに戻ってからが一番シンドイかなぁ 疲れているけど『あー洗たくしなくちゃ』って汗とかで汚れているし、ボタンも取れちゃっているしって

——どうしてもクリーニングに関しては難がある？

W そうですね で、クリーニングが出来るよう、全部取りはずしが可能なマジック・テープを使用して、ワッペンみたいにしたんです それでもツアー中のクリーニングは、いやがられますね

——衣装についてのエピソードとかは

W エピソードですか…最近一番困っているのは、今井君の先の尖ってる靴がありますよね で、その先に白いパールの玉を付けたんですけど、今井君は、こういう右足を上げる動きをしますよね それでスタンドとかに当たったりすると、そのまま客席へスコーンって飛んでったりしちゃって(笑)、そうすると舞台監督がスッ飛んで拾って来るんですけど あと、ビデオの撮影中に

31. HS

ショーか何かに使うと言って彼自身が買ってきたという衣装。

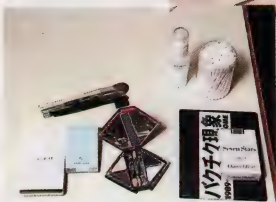
「SEVENTH HEAVEN」ツアーの衣装っていうのはみな思い入れが強いです　このツアーの時から全部自分が担当するのが解っていたので一人じゃ着られない服や面倒くさいものばかり作りました。衣装は2パターンづつあります。

渡辺談

30. Ut

32. Ut

33. HS

この服も自分で買ってきたもの　夏のイベントの時にも着ている。

いつもCDに文庫本 今日の1冊は太宰治でした

早じたくNo.1のユータらしくシンプルなセット

“己を知る”個性派イマイくん　クロウト目にも理にかなった並びなんだって

ハードな動きを想定したアニイの品ぞろえ

化粧水に注目。“ほしの”の文字とメンソールがフンイキです

ヒデのはいていたエナメルのパンツが破けちゃったりとか

——どこがですか？

W 股のところが(笑)で、ガム・テープで応急処置をしたんですけど　あと…何んだっけな、昔、『SEVENTH HEAVEN』ツアーで、「EMPTY GIRL」を唄っている時に、桜井君がバーンって足を拡げてジャンプをしたとたんに、エナメルのパンツの股のところが思っきりパーンって切れて(笑)裏地が付いていたから良かったんですけど…

——アクションが大きいですから、普通の服よりも丈夫に作らないと駄目ですね

W そうですよね、一応、縫い目は二重にしたりしているんですけど

——撮影で使う衣装などはリースですか

W ええ　メーカーさんから

——地方での撮影にも時も全部ついて回っている感じですか

W そうですね　鶴岡に行った時点からスケジュールはずっと一緒です

——日本はだいたい行きますね

W 行っていないのが…うん、ないかなぁ　今回で沖縄も行くから

——それじゃあ、普段なかなか見られないようなメンバーの素顔というか、正体も見てるわけですよね

W 誌面に載せないっていう事でだったらいっぱいあるんですけど、載せるとなるとね…(笑)　ステージから口を押えにきちゃうかも知れません

——昔に比べて、当然、服のサイズも変わってきているんですか？

W そう、だから年に1回位ですけど、身体測定みたいに『はい、全部脱いで、脱いで』って測るんです(笑)、そうすると凄く変わってきたのが解ります

——体重測定も

W そこまではやらないですけど(笑)、一番変わったのが胸囲ですね　年齢のせいも

1989年1月19，20日日本武道館

34.
Ats
19日着用

上着だけは着たが、この組み合わせではステージに立っていないという秘蔵品。渡辺さんが「やっぱり似合わないから、やめよう」ということでオクラ入りになったもの。メンバーがいやだということで着ないことは基本的には少ない

35.
Ats
20日着用

お揃いのパンツはまだ衣装ケースの中ということ。この頃からエナメルのパンツをはくようになる。それまでは普通の生地で汗を吸っていたが、この時は結構暑くて気の毒だったという。

36.
TL
19日着用

37.
TL
20日着用

輪のような付属品の素材はホースのようなもので、かなりの重さがあるという。あまりに重いので「それで疲れてしまっては元もこもないので（衣装を）換えますか」と渡辺さんが聞くと「俺はヤガミだ」の返事、思わず「はい」と納得。その時にこれがプロかと尊敬してしまったというエピソードがある。

38.
Ut
19日着用

39.
Ut
20日着用

40.
hd
19日着用

41.
hd
20日着用

42.
Hs
19日着用

余りにもハマリすぎていた衣装。本人が王朝風がいいということでつくったもの。首の飾りは何度も作り直し、このカタチにするまで大へん苦労したという

あるのかも知れないんですけど、昔とは全然違いますけど、自分の子供じゃないけれど、〝何か、たくましくなってきたなぁ〟みたいに（笑）測りながら思うんですよ。初めて会った頃なんて、本当に病気みたいでしたもんね。痩せちゃってて。今は着々と太ってきています（笑）

──ダイエットしてる人はいないんですか？

W あっ、でもしていますよ

──メンバーみんな？

W うん、皆んな、かな。アニイは全然考えていないみたいですけど。今井君がいちばんがんばってます。リンゴとかを持って撮影にくるんですよ

──髪の手入れなんかどうしてるんですか？

W いや、全然してないですね

──カットは？

W カットはたいてい自分でしていますね。でもカットといっても今井君は自分で適当に切ってますし、桜井君は伸びたまんまで、時々自分で切ってます。ユータ君だけはカットしてもらいに行ってるみたいですね。アニイは髪の毛を立ててから、やはり適当に切ってます

──じゃあ、お肌の手入れは

W ぜんぜんしていないです（笑）。化粧品は私が買いに行くんですけど、使い慣れているものがあるので『あのファンデーションを買ってきて』とか、そういう感じです

──普段着はどうしているんですか

W もうみんな好きなものを着ていますよ

──そういえば、ステージ衣装で、あまりみんな半袖を着ませんね

W 半袖は着ませんね（笑）、頑なまでに。どんなに暑くてもユータ君とか脱がないですね

──それには何か理由が？

W うーん、ただのカッコツケかなあ（笑）。桜井君は今の（「悪の華」ツアー）で珍しく腕を出したんですけど、

1989年3月22日 TABOOツアー

44. TL

45. Ut

46. Hs

47. Ut

48. hd

49. As
これは一回しか着なかった衣装。

43. Hs
20日着用
この頃から、ステージでクルクルとターンするようになり、フレアーだと可愛いいだろうな、ということでデザインしたという衣装。

50. As
「タブー・ツアー」の時は床が網で、その下にライトがあり、羽が落ちて燃えることのないようにと強力接着剤で一枚一枚付けたという、大へん手間の掛かった衣装。

51. TL
後ろがすごく長い

52. hd
ステージではこの上にジャケットが羽織られていた。アルバム「悪の華」のジャケット用写真にも着用している。

53. Hs

反響が良くないんです〝敦司さんは格好いいんだから、そんなラフな格好はしないで下さい〟みたいな(笑)肩を出さないでくれって

——今回の本誌で帽子をかぶっているのも珍しいですよね

W あれは、初の帽子じゃないですか　髪の毛を全部アップしたのも初めてだし、今井君のは〝時計仕掛のオレンジ〟を意識してみたんですけど

——渡辺さんの目から見たメンバーは一言でどんな人達ですか　まずは桜井さんから

W 一言で言うと…凄く気を使うんですね　とにかく人に気を使います　うーん、でも繊細な人ですよね　特にツアー中は何んていうのかなぁ、ストイックになって言うか　ツアー中は喉の事を気使って、乾杯のビールすら全く飲まないんで…　普段は飲む人だから、可哀想ですね

——今井君は？

W 今井君は…(笑)お酒を飲むと大変です

——大変というと

W どう大変かと言いますと(笑)…寝ちゃうんです　おぶって帰んなきゃって言うほかにもいっぱいあるんですけど、言ったら怒られるかなあって…

——星野君は？

W 星野君は皆んなのオアシスっていうか、何んていうのかなぁ…　〝心の泉〟みたいな　でもいいお兄さんって感じがしますけどね　最近、自分でこういうのが着たいとかが出てきましたね　前は、おまかせって感じでしたけど

——ヤガミさんは？

W スタイリストとしてじゃないんですけど、とにかく前向きの人ですね　よく音楽性の話とか、他のバンドの話とかしますけど、凄いしっかりしていて勉強になります

——ユータ君は？

W ユータ君は…(笑)何かなあ　あの人も人に気を使っ

1989年12月29日東京ドーム

54.

ドームの時の衣装は全部葛籠の衣装ケースの中で11tの機材車とともに移動中ということだが、これは延びない素材でライヴには着用できないため戻ってきたもの。

55.

1990年3月2日悪の華ツアー

56.

現在のツアー用の衣装。つかの間のオフに洗たくをするため持ち帰り、たまたま戻ってきていた。

スタッフ・ジャンパー

57.

Tシャツの半そで、長そで。スタッフ・ジャンパーはツアーの度に作られる。「悪の華」ツアーのはまだできていなかった。

58.「TABOO」ツアー

59.「TABOO」ツアー

ケースの中にはツアーを通じて使われる衣装や小物がギッシリ

て大変ですね。

――何かバンドをやっていなくても、社会に出て通用する唯一の……(笑)

W (笑)確かに。社交的ですからね、サービス精神が大盛っていうか……

――本当に、取材をしていても、皆さん無口だから彼がいつも助け船を出してくれて

W でも、皆んな普段はうるさいくらい喋りますけどね喋り出すと止まんないです極端なんですよ、静かな時と"うるさーい"って思うくらいの時と。

メンバー同志のケンカみたいなことってあるんですか?

W 絶対無いです。メンバー間のトラブルは見たことがありません 本当に、全体に言えることは、とても礼儀正しくて凄く気を使う人達ということですね。今年で4年目なんですけど、4年間やってこれたのは、やっぱりメンバーみんなの人柄のおかげだなぁと思います

あとね、皆んな驚く程に前向き だから、引っ張られてる感じもあります。ステージなんかを観ていると、負けちゃいられないなと思うんです、いつも だから絶対いい衣装を作らなくちゃって頑張れるんです

――最後に渡辺さんにとってのBUCK-TICKというバンドを一言で言うと何でしょうか?

W そうですね…… 私、高校の時にマネージャーになりたいと思っていたんですよ、ロックバンドの…… それは、バンドのメンバーがステージの上に立った時、格好良くなれるっていう、ロックの魔法みたいなものに憧れたからなんですけど、それが、知り合いの方とかに沢山お世話になって、何故か流れでスタイリストという立場からそういう事が出来るような感じに成れて……

だから、そうですね……、私の夢を叶えてくれる人達なんですよ、BUCK-TICKさんは……

全曲解説

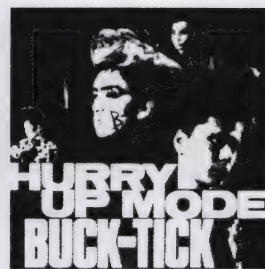
発表されたすべての楽曲に対しメンバー自身がくまなくコメントを加えたB－Tナンバー完全保存ファイル

過去BUCK－TICKがリリースした作品には、5枚のオリジナル・アルバムと1枚のミニ・アルバム、2枚のシングル、そして1巻のビデオがある。ヴァージョン違いを1曲と数えなくとも、その総曲数は足かけ4年で58曲に及ぶ。どれもこれも、フレーズのひとつひとつ、詞の一語一語にまで彼らの思いが込もった"分身"の数々だ。大きなふし目といえる時期、メンバー自身が全作品を解説したこの項は、今号中でも出色の重量級企画。楽曲の意外な側面や今だから語れる録音時のエピソードを満載、また、あるロック・バンドがこれまでに成し得た業績を辿る上でも非常に興味深い資料となった。ぜひとも制作者の肉声を読みとった上で、いま一度BUCK－TICKのサウンドに触れてみてほしい。より立体的な音楽の実像に近づけるはずだ。

ALL "ANGELIC" SONGS FROM PLEASURE LAND

インディーズ・ファースト・アルバム

HURRY UP MODE

[1987.4.1. release][1990.2.7. remixed release]

Ats このレコーディングってすごい超人的で、一日に三曲くらい歌ったりして……なにかもう、歌い始めて本当にまだ間もない……半年くらいの頃だったでしょ、それでこうレコード作って……なんか小学生が歌ってるようでしたね

TL シングルと同じで、神奈川の方(横浜・日吉スタジオ)で録ったから、行くだけでも車で3時間ぐらいかかっちゃって、睡眠時間とか3～4時間で毎日やってたみたいな感じで、で、10日で仕上げるはずが、12日位かかったんですよね、確か

SIDE A

PROLOGUE

作詞今井寿 作曲桜井敦司

Ats これはなにか……のサビをただああいう風にアルバムのイントロに何かあって……、それに外人の人を呼んでもらって(笑)、た方がいいかなという感じで(笑)、鼻歌で作ったやつを入れたんです(笑)

TL 「PLASTIC～」のコード進行で、ただのアドリブみたいなのをその場で即興で作ったんです

Hs これはアッちゃんの作った「PLASTIC～」

PLASTIC SYNDROME TYPE II

作詞、作曲今井寿

Ut シングルとはバージョン違い

TL シングルと大差ないっていうか(笑) 単純にアルバムの方が時間あったから、多少は音が良いかなっていうくらいですね

TELEPHONE MURDER

作詞、作曲今井寿

Ats これは珍しく単純なロックンロールっぽい感じがするんですけど、なんかこういうのって無いですよね。これは好きで、今の「悪の華」ツアーでも演ってるんですが、今また演ってみると凄く新鮮な感じですね。

Hs 忘れてきちゃったなあ、この頃の事……。メロディーは〝泣かせ〟っていう感じですね。

hd リズム隊が好きですね、ハハハ。

Ut ライヴでは結構よく演った曲です。

TL これのレコーディングの事はあんまり印象に残ってないなあ。

FLY HIGH

作詞、作曲今井寿

Ats 〝HURRY UP MODE TOUR〟の時は、この曲やると何か元気が出るみたいな感じで、そうですねえ……ラストの合唱も、なんかも結構自然と掛け合いぽくなってきたんですよね。

Hs この頃ってヘンなメロディー・ラインにしたいって、それぱっかり考えてたから、歌う人のことを考えて無くって。息つぎとかそういうのを(笑)……。そう、なんか、掛け合いの曲を作りたかったんです。

hd 青年館を思い出す曲ですね。

Ut インディーズ、メジャーを通じてメインの曲でしたね。

TL (録音前に)ライヴでもずっと演ってた曲なんで、だから本当にもうこの辺は一発録りっぽいです。

ONE NIGHT BALLET

作詞、作曲今井寿

Ats 曲が出来た時には、〝モータウンだとかナントカ〟っていう話も出たんだけど……。この詞なんかも……この辺って凄いポップですよね。

Hs これはなんか……可愛い感じがしちゃって、今は出来ないなあ。

hd モータウンで泣かせます。

Ut 一番モータウンっぽい曲ですよね。

TL これはピアノ弾ける知り合い関係に頼んで、ピアノ入れたんですよね。でも実は、これ言っちゃって、いいかどうか解らないけど、最初は元筋少の三柴君に頼んだんですよ。本当はあのイントロ部分って、彼のあいうピアノ入れてキーボードをフィーチャーしようとしたんです。でも彼が『生ピアノじゃなきゃ』とか言って、結局折り合いがつかなくて中止になったんです。それで、ユータとサワキさんは三柴君に一回会ってるんですよ、〝どんなもんでしょうか?〟みたいな感じでコンタクト取って。でも結局は知り合いの、本当に素人の人がやってくれたんです。このアルバムはコーラスなんかもインディーズ系の人に頼んだりしてるんですよ。

SIDE B

HURRY UP MODE

作詞、作曲今井寿

Ats これは結構難しい歌で、「キイが高いかなぁ」と思ったんですけど、最近やっと歌い慣れてきた感じがして(笑) でも、この曲は結構歌ってますね 今までで一番歌ってるんじゃないかなぁ やっぱりBUCK-TICKの代表曲という感じがしますね

Hs なんか荒々しいアフロ・ビートみたいな感じをやりたいなぁというのがあって…… あの(オリエンタル風の)ギター・フレーズは練習で何気なくデタラメをやってたら出てきて(笑)、「あ、コレいいな」って

hd やっぱりタイトル曲だけあって気に入ってる曲 ステージでも昔からずーっと演ってきてる曲ですね

Ut インディーズ最後っていうイメージ

TL ドラムに関しては、これはティンバレスを重ねて録ってるんですよね 当時のミキサーの人に『思いっ切り叩かないと良い音が出ないから、思いっ切り叩いてくれ』とか言われて、スティック折れるくらいの勢いで叩いたんだけど、そういう感じがあんまり出ないで、結構ショボイ音で録れてる(笑) なんか情けなかったなぁという思い出が……

MOON LIGHT

作詞桜井敦司 作曲今井寿

Ats この曲いいなぁと思って、なにかこう……少年少女が喜びそうな(笑)メルヘンチックなロマンスみたいなものを書きたくなって、初めて作詞した曲です

HS これはすごいポップな感じで作って、初めてメロディーで成功した曲だなって、自分では思ってます

hd これも、青年館みたいな感じ…

UT 昔からよくアンコールの一曲にやってた曲

TL 普段は22インチのバス・ドラ使ってるんですけど、確かこの曲だけだと思うけど、この時だけ24インチを使ったんですよ それでもあまり効果が出なかったって感じで(笑) これは一番最初に録って、でもノリが悪いというか、何か落ち着き過ぎちゃってて、緊張感みたいな、スリリングな感じがしないっていうので、最初に録ったやつをボツにして、結局アルバムの一番最後に録ったテイクだったと思うんですよね だから、最初にこの曲を録って、全部終わってから、最後にまたこれを録ったというか…何しろこれは二回録って、後の方のテイクを使ったんです

ROMANESQUE

作詞、作曲 今井寿

Ats これもBUCK-TICKの代表ぽい曲で、ブレイクのところとか、「変だ、変だ」とよく言われますけど、他のバンドには絶対無いような曲ですね

HS この曲はまだアッちゃんがドラム叩いてる頃、スタジオ借りて全員で練習やってて、みんなで「うーん」って色んな風に考えてたらこうゆう展開になったという曲です 詞は意味があるようで無いようで、何か解らない(笑)

hd 名曲と言ってもいいんでしょうかね 変則的なリズムと演歌調のメロディーと…オジさんに好まれるらしいんです(笑) ビクターの上の方の人とかに評判いいらしいんですよね(笑)

UT 初めてやった時には〝変だなぁ〟という印象があったのを憶えてます

TL イントロには効果音を入れようとか言ってたんだけど、でもそんなデカいスタジオじゃないから、大した効果音が無くって、結局シンバルの逆回転の音をアタマに入れたっていう(笑)思い出があります

制作エピソード

●シングル「TO-SEARCH」の録音の際には、シングルのA・B面のほか、バンドの代表曲だった「ONE NIGHT BALLET」「SECRET REACTION」の計4曲がレコーディングされている。また、「HURRY UP MODE」の録音時にはアナログ盤に収録された11曲以外に、「VACUUM DREAM」「NO NO BOY」を加えた計13曲が録音されている。この2曲は太陽レゴードから発売されていたCDのみにボーナス・トラックとして収録されているが、この「NO NO BOY」は今井君が作った2曲目のオリジナル曲(ちなみに、初めて作ったのは「PLASTIC SYNDROME TYPE I」)である。その曲解説も、作曲者今井君に特別サービスでやってもらった。

HS まぁ、マイナーから始まる(笑)、カッティング主体の、割とテンポの早いエイト・ビートでした。

●コメントにもあるように、このレコーディングは時間的にも相当にシビアで、2週間・約100時間の間で13曲を録るというハードなものだった。この期間の間はメンバー全員がアッちゃんの家に泊まり込み、殆ど合宿状態で録音されたのである。

●先ごろ再発された『HURRY UP MODE』は、このインディー時代のマスターをリミックスしたもので、最初は数曲を新録で録り直すという案もあったが、〝昔は昔なんだから、その当時の雰囲気を大事にして〟というメンバーの考えで、差し替えも全く無し、主に低音域のレベルを上げるというリミックスのみでリリースされた。この時期にこれがリリースされた理由としては、ファンの強い要望はもちろんだが、

UT 復活というこの時期に、もう一度初心に帰って再スタートという部分もあって、ヘタっぴでクオリティも低いかも知れないけど、この時期の俺らも知っていて欲しい

というメンバーの気持ちが強かったことがある。だがその裏には、このレコードにあまりにも高いプレミアムがつき過ぎ、それを利用した犯罪行為に近い事件が多発するという、全くマズイ状況にメンバーが胸を痛めていたということも大きな要因として挙げられる。

FOR DANGEROUS KIDS

作詞、作曲 今井寿

Ats 初めてのなんか…スカっぽい曲 メロディーも凄くいいですよね なにか本当にAメロ～Bメロ～サビっていう感じがしますよね

HS この歌詞は、これはいわゆるオタク的な題材で、スカ調の曲を作りたいなっていうところから出来た曲

hd スカのリズムで、裏のカッティングとか好きです

UT 初めてスカみたいなことを試みた曲ですね

TL この曲にはスタッフ関係とかが全員、男のコーラスで入ってます 某ローディーの小嶋とか(笑)、ああいう類のがコーラスしてます この曲はスカっぽいんですけど、ああいうのは結構シビアにスネアのはじっこを叩かないと、あの〝スカーン〟って音が出ないんですよ だからこれをよく聴くと一発一発に結構ムラがあるんですよね(笑)

SECRET REACTION

作詞、作曲 今井寿

Ats 何かバラードぽいっていうか、ミディアムで、これは歌ってても〝難しかったなぁ〟って憶えがある

HS これはちょっとテンポの遅い曲がやりたくて、でもまだバラードとかそういうのが出来る感じじゃ無かったから、こういう風になっちゃったんです

hd この曲を聴くと前橋のラタンってライヴハウスを思い出しますね

UT この歌は、抜けた前のヴォーカリストが、その最後のライヴでラスト・ナンバーに歌ったんです

TL この頃はギターにディレイ使ってるでしょ でもクリックを使ってないから、ディレイ・タイムなんか全然もういい加減なんです(笑)

STAY GOLD

作詞、作曲 今井寿

Ats このアルバムの曲って大体は自分でドラム叩いてたから、これも歌のリズムの取り方とか結構うまくいったかなとは思いますけど、あの頃はやっぱり勢いだけでやってたから、あんまり記憶が無い(笑)ですね

HS メロディーから作っていって、それでカッティングの荒々しさとか、そういう感じを出したくて…

hd これはロフトのイメージかなぁ(笑)

UT 屋根裏っていうイメージ

TL (録音時のことは)あまり印象に残ってないけど…、まぁ、すぐに出来ちゃった曲です

インディーズ・ファースト・シングル TO SEARCH

[1986.10.21. release]

SIDE A TO-SEARCH

作詞、作曲 今井寿

Ats この曲はドラムやってた頃からの曲で、その頃は叩くのに必死だったから「凄く格好イイなぁ」と思ってたくらいで、そうは感じなかったけど、いざ歌ってみると自分の声質に結構悩みましたね 今聴くと蚊の泣くようなへんな声で(笑) その当時はもうガムシャラで一日で声潰したりとかしてましたね

HS これは4連の…ロカビリーっていうか、そういう曲を作りたくって それであのサイレンみたいなのを、家でディレイで遊んでるうちに、〝これ使えたらいいな〟みたいなところから出来ちゃった曲です

hd 初期って言うか、一番最初にレコーディングした曲で、何か〝赤〟ってイメージかな…

UT ベース・ライン付けるのに悩みましたね それまではパンクっぽいのばかりだったけど、シャッフル調で 連想することは…太陽レコードかな

TL ライヴハウスでチャンス狙ってた頃の曲ですね これ、一日で4曲録ったんですよね で、本当にテイクつむくらいで一発録りみたいな…テクニック抜きだからそのぶん生々しいですね

SIDE B PLASTIC SYNDROME TYPE II

作詞、作曲 今井寿

Ats これは俺が鼻歌でサビのところ考えたんです (「じゃあ、共同作曲者のクレジットしないといけないじゃないですか」の問いに)ハハハ、別にそれはね、いいんですけどね 後を今井が作って… ともかくこのシングルは、自分たちで初めてテープに録った4曲の中の2曲で、最初は自分たちでレコード出そうと思って録音だけしておいたんですけど、なんとか太陽レコードに拾ってもらえて、で、自分たちで出すよりは枚数も作れるしと…

HS これはアッちゃんが最初メロディーを口というか、鼻歌みたいなのでやっていて、それを、「おっ、じゃあオレそれを曲にしよう」ってことになって、Aメロをオレが書いて、という…曲です

hd 群馬のライヴハウスを思い出すような曲

UT 初期のメインの曲ですね

TL イントロの最初のフィルは、あれはドラムから入るんですけど、あれはカウント入れるのがイヤで、録音の時に急きょドラムから始めるようにしたって思い出がありますね

メジャー・ファースト・アルバム

SEXUAL XXXXX!

[1987.11.21. release]

As ラヴ・ソングの詞を正直に追求したというか、この頃は楽しみたいというのが強くて 同世代の子にもちょっと年上の人にも、一番関心のある恋愛を「あ、解る」みたいな感じに、新鮮に受け取ってもらいたいみたいな 破れた初恋を思い出してジーンとしちゃうみたいなウブな心から、行き過ぎて伏せ字になってしまった「SEXUAL ~」まで(笑)、幅広く レコーディング中は声が潰れてしまって、歌入れが長引いて苦労しました

hd 生ギターや、アコースティック・ギターに挑戦したんですが、それがけっこう苦労したって言うか…

Ut セックスから純愛までですね

TL これってワザとアナログで録って、なるべく音を何かワイルドっていうか、わざと雑な感じに音を作ってるんですよ まぁ、後はこのレコーディングで初めてドンカマを使ったもんで帳尻合わせるのに苦労しましたね

SIDE A

EMPTY GIRL
作詞/作曲今井寿

As 凄い勢い

Hs これは凄く簡単にできちゃった曲で、なんかメチャクチャな、ガラクタっていうか、変な曲を作りたいなと思って 皮肉な詞でおちょくりもあるし、笑えちゃう曲

hd ライヴの一曲目って感じ

Ut イヴェントの一曲目

TL イントロのピアノの"タラララ〜ン"みたいなのは、機械に打ち込んでやった憶えがあるんですよ

FUTURE FOR FUTURE
作詞/作曲今井寿

As このアルバムが初めての大規模なレコーディングだったら、色んな事できたっていう感じ ライヴではノリの良かった曲

Hs これは割と普通ぽいっていうか、速くて8ビートで、で、メロディーがあって、んー…明るい感じの曲

hd 何か…"銀"って言う感じ…

Ut すごい昔からあった曲だけど、あえてこっちのアルバムに入れました

TL これも結構ノリ一発で録ったような気がするんですよね 録りとか、一瞬にして出来ちゃったみたいなね

DO THE "I LOVE YOU"
作詞/作曲今井寿

As これもやっぱりカッコいいなぁ 4連っていうか、そんな感じで 詞はアダムとイヴをテーマにしたエッチな詞

Hs ロカビリーっぽい曲っていうか、割と普っぽいって言うか…

hd なんだろうなぁ…歌詞が好きです

Ut 初期の雰囲気ですよね 最近演ってないですけど

TL 確か、このアルバムの中で唯一クリックを使ってない曲だと思うんですよね、確か…

ILLUSION
作詞桜井敦司 作曲今井寿

As バラード物は自分で書いた方がいいかなと思って詞を付けたんです やっぱり感情の入れ方なんかも、バラードは自分で書いた方がドラマチックかなぁと思って これは実体験とフィクションの混ぜこぜ

Hs これは、んー、スローなバラード

hd 真白ってイメージ… イントロが気に入ってます

Ut 名曲!

TL けっこうスンナリ録れちゃった曲だから、なんか印象に無いんです

HYPER LOVE
作詞/作曲今井寿

MIS-CAST
作詞/作曲今井寿

As 泣かせですね(笑)

Hs これは、マイナーから始まって、本当に日本的な…日本人のメロディーって感じ

hd 悲しい感じのする曲

Ut 思い出すのは…ライヴ・インかな

SIDE B

SEXUAL XXXXX!
作詞桜井敦司 作曲今井寿

As この辺りから何か妖しいって言うか、そのぉ…SEXをね(笑)、題材にしたやつが…自分には合うかなぁとか思って(笑) 妖しさというか、そういうのを出そうとした曲ですね

Hs 8ビートの…下から行くような感じ 速い曲が作りたいと思って

hd これまでずっと演ってきた曲で、ライヴでもやりやすいという…

Ut 一生歌っていく曲なんじゃないですかね(笑)

TL これはミックスの時に、失礼な話なんですけど、俺がミキサーの人に文句つうか、『俺の思ってるタイコの音はこーゆーんじゃない』みたいな感じのこと言っちゃって、で、ミックスに関しては一日使って落としたんだけど、結局それが気に入らなくて、後日またミックス仕直して、TDをやり直したという曲です

DREAM OR TRUTH
作詞/作曲今井寿

As この辺になってくると変拍子とか、3/4拍子とか、今井が使うようになって、だんだんと覚えてきたかなって感じですね でも歌いにくかったんですよね 最初に聴かされた時は"何コレ?"って(笑) でもやっぱりサビとかは"凄いなぁ"なんて 感心しててどうするんだって(笑)

Hs 途中で3拍子が入ってくるんですけど、初めて変拍子を使った曲

hd Bメロが凄い好きですね カッティングをスタジオで色々考えて苦労しました

Ut 指で弾こうとしたけど、ノリが出なくてピックにしたんです 結構不思議な、ビートルズっぽい曲ですよね

TL 最初にスネアのロールがあるんですけど、あれ確か三つくらい重ねたんですよ マーチみたいな感じにするというので、ひとつじゃ寂しいんで、ダビングして三回くらい重ねた憶えがあるんですけど、でも聴いてあんまり解んないんですけどね(笑)

SISSY BOY
作詞/作曲今井寿

As この曲は、同じメロディーのボーカルを二本入れてるんですけど、これなんかもディレクターの人が付いて、カッチリとレコーディングできたと思う

Hs 自分でもワケ解んないくらい錯乱した少年の切ない歌 口笛入りだし… でもこの曲も今は出来ないような…本当に可愛いいような(笑)、一番可愛いい曲

hd 歌詞とか、凄い女の子ウケするような感じで、いいと思います

Ut 今はライヴでは全然演ってないですね

TL 今は演らない曲ですね 可愛らしい曲って、今はみんなパスしてるから

At いまだに演ってますからね これも皆んながすごく気に入ってる曲 中近東というか、何かもう、ライヴでもすごく演りやすくて、見せる要素には持ってこいって言う曲

Hs これは最初作った時は8ビートだったんだけど、途中でちょっと変えてみようかなって ちょっとこう…サイケっていうか、アフロ・ビートというか、エスニックというか…そんな感じに

hd 下からのライトがまぶしいですね(笑)、ライヴではいつも

Ut メンバー全員の思い出が強い曲ですね 今でも演ってますから

TL アタマとケツの効果音が何か…実はこれ、レコーディング前にけっこう練習したんですよ

TL 「SISSY ～」とかこの曲はあんまり印象ないんで、レコーディングなんかもけっこうスンナリ録れたんだと思うんですよね

MY EYES & YOUR EYES

作詞・作曲 今井寿

At BUCK-TICKって、どこか二面性みたいなのがあると思うんですよ 妖しい雰囲気と、この曲みたいにポップで凄い泣かせのメロディーみたいなのと 最近は演んないんですけど、その泣かせの方の初期の代表曲、かな

Hs 最近やんないですね

hd ライヴなんかでは泣いてる子とかもいましたね

Ut 思い出すの青年館かな

TL これは最後のフィルのところがちゃんと叩けなくて、リムを叩いてスカスカな変な音になってる(笑) そう、レコーディングは失敗したんだけど、そのまま行っちゃたなっていう曲でした でもアルバムって何ていうか、全体的にノリ重視というか、なるべくノリのいいテイクっていうのを重視して録ったという感じでしたね

MINIアルバム ROMANESQUE

[1988.3.21. release]

At 前のアルバムまでは、アレンジなんかも第三者の手を借りてることがあったから、これは自分達のバンドの音だけでみっちり4曲作ってみた 歌もリキまず自然体で、サウンド的には互いに意見を出し合って刺激し合いながら形を作っていった感じ 時間的にちょっとキツかったというのはあるけど…

Hs A面とB面を二曲づつ、明るい感じと沈んだ感じの思いっきり両極端に分けてみた作品 これまではレコーディングなんかも緊張してたんだけど、もっとラフな大きなノリのあるギターを意識したんです

hd 「SEXUAL ～」でアコースティック・ギターに挑戦して、ここではナイロン弦のガット・ギターに挑みました でも指がハレちゃって、ネックの太さに悩みましたね

Ut 変なリズムが多いけど、それが恋愛してるときの心臓の鼓動に似てるんじゃないかと…当時は エンジニアの人との駆け引きというか、音にもこだわりが出てきた作品ですね

TL 生音の段階では、スネアの力強さに一番こだわった

SIDE A

MISTY ZONE

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

At これは、俺、好きなんです 自分では"いい詞"が曲にハマったなぁ"って思って(笑)

Hs 最初にギターのカッティングのリフができて、で、そこからメロディーを…何ていうのかな、"地をはうような"っていうか、下から行くようなメロディー

hd プロモーション・ビデオで、どっかの工場みたいな所に行った…何かそんなことを連想しますね

Ut 思い出すのは忙しさ! この頃すっごく忙しかったんですよ

TL イントロのタイコの部分、あれはもうアドリブでやりました

ROMANESQUE

作詞・作曲 今井寿

At メンバーもホントに気に入ってたし、評判も良かったんで、ビクターの方からミニ・アルバムって話が出た時に、"うーん、じゃあ「ロマネスク」をもう一回やってみたい"ってことでディレクターと俺達の意見が合ったんで、もっとこう大々的に…アレンジもミックスも大胆に変わってると思います

Hs 以外と評判が良かったっていうのがあったんで…、ほんとだったらどうでもいいやって感じだけど、どうせ出すなら多少アレンジも変えようかなと思ってスタジオで遊びでやってたら出来たんだけど、間奏が二部構成でカッティングも変えたし、けっこうスリリングな感じが出せて、当時はかなり驚かせたんじゃないかと

hd 想像の中でのフラメンコに成り切ったというか…でも弾いちゃったら後はミキサーの人にお任せって言う感じですけど…

Ut 途中のアレンジをみんなで悩んだ憶えがありますね

SIDE B

AUTOMATIC-BLUE

作詞・作曲 今井寿

At これはけっこう古い曲なんですけどね、「HURRY UP MODE」とか、あの位の頃の、それが陽の目を見たっていう感じかな

Hs メロディアスで8ビートの速い曲って感じ

hd 何か夏のイヴェントを…どこでしたっけね 小田急…あ、小田急じゃなくて、何でしたっけ? あそこ…(と、数分間マジに熟考した後)…あっ、富士急!(笑) 小田急じゃないや、富士急でした(笑) そのイヴェントを思い出します

Ut 新宿JAMのイメージ

TL これも結構ライヴで演ってた曲だったんで、全然もうライヴのノリというか、何か一瞬にして録音出来ちゃったという曲ですね

HEARTS

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

At 今思うと、この曲は何か珍しいという感じがしますね メロディーは凄い好きなんですけど、この頃BUCK-TICKが少女マンガに出たんですよね それが「HEARTS」っていう題で、まぁ"曲がこんな感じだから、詞もそういうので書いてみようかなぁ"と思って(笑) 最初はこういう"パッと見"的な題材に危機感も少しあったんですけど、まぁそれはそれで別にいいかなと

Hs これはいつだったかな…正月にみんなが実家に帰った時に、オレひとりで東京に残ってて、で、その前の日にジンマシンが出ちゃってナンカ大変な思いをしながら作った曲(笑) 後にも先にもそれが初めてなんですよ 「ああ、これがジンマシンなんだ」とか思ってたらもうトンでもなかった(笑) で、作ってて、「あ、ダメだ」って(笑)、だからもう、そこで一度止めて、次の日に二日かけてようやく作った曲です

hd ああ、この曲もロフトとかを思い出しますね

Ut 中でも一番ポップ性の強い曲かなぁ

TL これは、俺なんかをネタにした少女マンガがありまして、それのタイトルなんです それに引っ掛けたというか、それ描いてたマンガ家の人も結構喜んでたみたいですね ちなみに、個人的に俺は好きなんですよ、この曲 ライヴでも演りたいんですけど、もうこういう優しいっぽいイメージじゃないらしくて、今のライヴの路線って何か違うから だから、シークレットかなんかにでる時とかに、ヤリたいですねぇ

ROMANESQUE

(CDのみ)

別ヴァージョン 編曲 BUCK-TICK

At まぁ、遊びなんですけど、ウチのメンバーはそういう面にもすごくこだわるから(笑)

TL このタブみたいのはメンバーみんなでミックスしたんですよね "メンバー自らがミックス"とか言って(笑) 自分のパートのところのフェーダーを持って、もぉー適当に(笑)卓の前で遊ばせてもらったという曲でした

制作エピソード

●メンバー内でも霊感が強いと言われるヒデは、このレコーディング中に恐怖体験をしている 「3階でリハーサルしてたら、"ウォー"って声がして、そこには俺しかいなかったから、涙出そうになっちゃった(笑)」 このスタジオ(ビクター青山スタジオ)は、もともと青山墓地のあった所を削って作ったらしく、かなりのミュージシャンがこうした恐怖体験を経験しているといわれる

●この時ヒデはオリジナル曲を持って行っているが、アルバム・カラーと違うということでボツになったらしい また彼は「HYPER LOVE」のコードを演奏中によく忘れてしまうことがあったというエピソードも伝えられている

●「DREAM OR ～」は、ビートルズの『マジカル・ミステリー・ツアー』を聴いていた今井君が、そのBラスの曲で、「アレ、何かおかしいな」と感じて、拍子を数えたところ「あっ、三拍子も入ってるんだ」という発見をしたことから生まれた 以後の変拍子を多用したBUCK-TICKの不思議なリズムのルーツとなった曲といえる

●(このレコードを作り終えた当時のアニイはインタヴューで)「良いレコードを作ったから、よいライヴをして、日本一のバンドになりたいです(フールズメイト87年10月号)」と言っているが、ほんとにそうなった さすが有言実行の人、アニイならではのコメント

メジャー・セカンド・アルバム

SEVENTH HEAVEN

[1988.6.21. release]

At とにかく忙しかった。曲が出来て少しリハーサルして、ハイ、レコーディングという感じで、スタジオの中で今井と手分けして詞を書いて…。でも、思えばあそこで、一度真白な状態でアルバム作ったのが、新しいBUCK-TICKにつながって行ったような気もします。声を楽器みたいにしていて、曲によって色んな声だしたり、そういう意味ではギラっとドギツく、派手でロマンティック。ヴォーカルとしては面白いレコーディングでした。このアルバムから詞を今井と半々くらいで書き出した。けど、俺のストレートな表現と今井の抽象的な世界と、ふたつの世界が出来たような気がします。

Hs 中近東とか近未来とか愛とかそういうのがテーマとしてあって、ギターのアレンジなんかでも今まで知らなかったことが解ってきた作品だけど、アレンジに時間かけられなかったのが残念でした

hd イメージはドロドロしてるというか…。この後にロック・サーキットに出て、また、単独ツアーの予定も入ってたので、その前に作るということだったから、時間がしょうがなかったというか、キツかったけど精一杯やった作品。

Ut バンドの色んな面をじっくり聴かせたかったアルバム

TL ホント大変な過密スケジュールの中でよくやったと思う。もう時間がなくて、リハーサル時間が本当にこれ3時間位だけだったから、曲も知らないのに録音してたのもあったり、もう拍手モン。しかもライヴで演ってたのは「…IN HEAVEN」と「SEVENTH HEAVEN」くらいで、あとは今井が作ってきた新曲のデモ・テープをスタジオの中で聴いて、こんな感じだとかを本当に話し合いながら録って、だからレコーディングっていうのが、かぶせながらやる作業だから完成できたっていうかね。けど、あの状況でこれだけのものを作れたことが後々の自信にはなった。ただ時間がない割にはドラムは凝ってますよ。スネア4個使ったり、曲によって叩き方変えたりとか、かなり慎重にやったんですよね。で、ドラムについて言うと、このアルバムに関してはロートタムをつかってるんです。

SIDE A

FRAGILE ARTICLE

作曲今井寿

At インストで、まぁワルツというか、遊園地みたいな感じで、何かプロローグになればなぁという感じ。

Hs これは「SEVENTH～」の三拍子ヴァージョン

hd そうだなぁ…かわいい感じ…

TL 三拍子で、東京ディズニーランドのエレクトリカル・パレードみたいな、ああいう感じで作りたいってことで、森岡賢って、今はソフトバレーにいる彼をキーボードで起用して、彼と話し合いながら作った曲です

CAPSULE TEARS―PLASTIC SYNDROME III

作詞、作曲今井寿

At これは何だろう…バグパイプの感じ…「SEVENTH HEAVEN ツアー」のオープニングでやってましたね

Hs これは、夜中にひとりで曲を作ってて、それでだんだん頭の中がゴチャゴチャしてきちゃって、「あー、出来ねぇやぁ」って(笑)、こう…デタラメに弾いてて出て来たのがイントロの最初のフレーズ、「あれ、こういう感じの方がいいかな」って、だんだん自分でワクワクしてきちゃって「あ、コリャいいや」って

hd そうだなぁー、プロモーション・ビデオを武道館で撮った…

Ut 「SEVENTH HEAVEN ツアー」のオープニング曲

TL これはレコーディングの時にユータにうるさく『ちゃんとスネアを叩け』とか何とか言われた憶えがある(笑) これはロールっぽくスティックを弾ませる叩き方をしてたんですよ、俺が。そうしたら『それじゃダメだ メリハリつけて、こういう風に叩け』みたいな感じで(笑)、『じゃあ、しょうがねぇ』と(笑)

CASTLE IN THE AIR

作詞、作曲今井寿

At このアルバムの中では何かマニアックな感じがするんですけど、ヴォーカルなんかもエフェクトを凄い使ってて。このアルバム自体エフェクトを多用してるんですが、あとで聴くともう何か、うん、飽きちゃうっていう(笑)、そういう感じ

Hs アフロ・ビートみたいな、カッティング主体の曲です

Ut 激しいカッティング(笑)

TL これは俺、展開とかけっこう間違ってるんですよね(笑) スネアでアクセント入れる部分があるんですけど、よく聴くとそれが入ってないところがあるんですよ 雑誌なんかでもよく言ってるんですけど、とにかく時間がなかった録音でしたから…

…IN HEAVEN…

作詞桜井敦司 作曲今井寿

At やっぱりこれも頭からマイナーな感じで突っ走る、凄いBUCK-TICKらしい曲だなぁって気がしてるんですけど、詞も自分では結構いいなぁって思ってます

Hs これは凄い気に入ってる曲で、メロディーは小気味よいというか、ノリに合ってるなっていう感じ

hd コーラスとか結構高い声で…

Ut マイナーでノリがいい曲、ライヴでもいちばん演ってますね

TL これはライヴで演ってた曲だから、そのノリで録っちゃった

ORIENTAL LOVE STORY

作詞、作詞桜井敦司 作曲今井寿

At バラード風ですね、大陸的なイメージがしたんで、こういう詞をつけたんです

Hs これは最初にイントロのコード進行から作っていって、で、詞と曲がすごく合ってるなと思った。タイトルといい、なんかこうオリエンタルというか東洋っぽいっていうか、好きなノリです

hd なにか神秘的な感じがしますね

Ut フレットレス・ベース!

TL これに関しては、”なるべくリズムが無いようなノリがいい“とか誰かが言ったんです ”そういう浮遊感が欲しいから、リズミカルじゃなくて、お囃子みたいな感じで“って言ったんだっけなぁ…、で、それで”あの最初の部分や、サビ以外の部分は流したい“って言うんで、だから実はコレ、サビ以外の部分は打ち込みなんですよ。コレ 俺が叩いてて、打ち込みを半分以上導入したっていうのは、これが唯一初めてでしたね

SIDE B

PHYSICAL NEUROSE

作詞、作曲今井寿

At 何か一個ヌケがいいみたいな…、ライヴでは凄い盛り上がったなぁという記憶があります

Hs この曲はニューウェイヴの影響がよく出てるなって、でも気に入ってる曲です

hd ステージの特効を思い出す

Ut ライヴの”煙玉“っていう印象がありますね

TL これこそ本当に展開を知らないで録音したっていうか、歌メロ知らないで叩いてたから凄い 確かこれは一番最後の録りだったと思うんですよ 俺、一番最後ってけっこうハマるんですよね、いつも。全部録り終わって、何か最後だと緊張感みたいなのがキレちゃうみたいで、それでこれは何回も何回もやり直しで録ったっていう憶えがあるんです

DESPERATE GIRL

作詞 桜井敦司 作曲 星野英彦

AtS これはヒデが初めて曲を書いたんですね。アマチュアの頃には書いてたんですが、やっぱりこの辺でヒデも何かバンドの中の役割というか、そういうのがだんだんと解ってきたんですね。

HS 初めてヒデの作った曲で、聴いた時は「あ、ヒデっぽいなぁ」って気がしました。メロディーが何か……哀愁を帯びているような(笑)。

hd これは"泣き"というか、そんな感じで……何となく気が向いたっていうか、そんな感じで作りました

Ut 初めてのヒデの曲

TL これは割と単純で、レコーディングもすぐ出来たような気がするんですよね。BUCK-TICK パターンっていうような、そういう感じの曲だったから

SEVENTH HEAVEN

作詞、作曲 今井寿

AtS これはもうインディーズの頃からやってた曲なんですよね。アレンジや歌詞も変えてやったんですけど。

HS 見かけはラブ・ソングだけど、題材は核戦争で……でも、これもなんか可愛いい感じですね。

hd このアルバムは時間が無くて苦労しましたね。アレンジなんかもその場でブースに入って考える、みたいな感じで、カッティングは"のんきなギター"って言われてましたね。"ファンキー"じゃなくて、"ノンキー"だって(笑)。

Ut 賛否両論かな。

TL これはもう、インディーズの頃からずっと演ってる曲で、それを今井が詞とタイトルを変えてこれになったんだけど、この元歌の「CHATTY BUNNY にささやいて」というのが、この「SEVENTH～」とは別の曲だと思ってる人がいるみたいなんで、ここでハッキリ言っておきましょう。それからちなみに、このアルバムの中でクリックを使ってないのはこの曲だけです。

MEMORIES…

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

AtS 「VICTIMS～」から一転して、ポップで何か清々しい感じですね。今聴くと恥ずかしくなるくらいで(笑)……

HS これは、夢の中でこう……「あー、いい曲だな」って思ってパッと目が覚めて、たまたまギターが近くにあったから"コード進行だけでも"と、"こんな感じだな"ってところを憶えておこうと思って、そうやって出来た曲なんです

hd 何かバラの花が散っている感じで……

Ut 「SEVENTH HEAVEN ツアー」最後の曲

TL この時は、ほんとにスタジオの中でやりながら録ってた感じだったから、この曲も"練習がてらやってみようか"みたいに、まず一回はクリック無しで録って、結局は後で録ったクリック入りのテイクが本チャンになったんだけど、俺はいまだにクリック無しのラフ・ミックスみたいな方が好きなんですよ(笑)。マスターは消しちゃったかも知れないけど、テープで持ってますよ、そのテイクも。そっちの方がオカズとかバンバン入ってるんですよね。で、この頃はまだクリックとか完全に把握してない時期だったから、逆にクリックに操られちゃってるという、そういう感じでフィルなんかもあんまり入ってないんですよ

VICTIMS OF LOVE

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

AtS 初めて何かジメっとした感じが出てきた曲ですね。"あっ、コレ何かいいな自分にピッタリ来るなぁ"と思って、で、詞もエッチっぽい感じに(笑)、あれは「SEXUAL～」の詞をより深く突き詰めるというのもあったんです。

HS これは日本的なデカダンスみたいな、そういう感じを出したくて、最初はもっと速くてノリのいい曲だったんだけど、みんなで"あーじゃない、こーじゃない"とやってるうちにこういう感じになったという曲。ギターのカッティングなんかが完全に何かメロディーを邪魔してるような、アヴァンギャルドな感じもあるかな……

hd エッチっぽい歌詞が好きです。ライヴでも欠かせない曲になってきましたね

Ut 喘ぎ声。

TL これ、最初のドラムのイントロ部分は全然決めなくて、なんか即興みたいに、アドリブで録っちゃったっていうか、そん時にフレーズで気に入ったのを使っちゃうみたいな感じでした

制作エピソード

●とにかく慌ただしいレコーディングだったのだが、レコーディング最中だけでなくその直前の期間も忙しく、アッちゃんはひとりでキャンペーンのために全国を周り、その間に今井君が作っておいた曲に、東京に戻ってから詞をつけるという、ともかく超人的なスケジュールの中から生まれたアルバムだった。しかも、アレンジと歌詞をガラリと変えた「SEVENTH～」と、「…IN HEAVEN」以外は全部新曲というだいそれた作品なのであった

●アニイのコメントにもあるように、アレンジと歌詞の変わった「SEVENTH～」のモト歌は「CHATTY BUNNY にささやいて」いうタイトルで、豊島公会堂などの過去のライヴでも演奏されていた曲である

●「FRAGILE～」には、最初今井君の書いた英語の歌詞が付いていたが、仮り歌の時にアッちゃんが"ラララ～"で歌うのを聴いた今井君が、「あ、そっちの方がいいんじゃない」と、その場であっけなく"ラララ～"のハミングのままに決まった

●ヒデが作曲者として初めてクレジットされた「DESPERATE GIRL」は、詞が付く前の仮タイトルを「ジルバで踊ろう」と言われていた。また、このアルバムのためにアニイは一曲詞を書いたらしいが、「書いては見たけど、これがダサイんだ。歌って恥ずかしい思いをするのはアッちゃんだしな」というアニイの謙虚な発言もあり、このアルバムでの採用は見送られたという

●このアルバムは、ジャケット撮影にも延々と時間がかかり、終了したのは朝の4時頃メンバーは2時間位の仮眠の後、目を充血させながら翌日の取材に向かったのであった

●ヒデは、『SEXUAL～』のアコースティック・ギター、「ROMANESQUE」のガット・ギターに続き、ここでは12弦ギターにトライするつもりでいたが、時間が無かったためディレクターについ言いそびれてしまい、気がついたらレコーディングが終わっていた(笑)という。当時のヒデのコメント「次回があることだし、ま、いいかなと」またヒデは、Bラスのエンディングにもうひとひねり加えたいと思っていたが、やはり時間がなくて言いそびれてしまい、TDの時に今井君から「今頃になって言い出すのはよした方がいい」とタシナメられ、やはりそのままになった

RELEASED BUCK-TICK VIDEO[1]

BUCK-TICK現象(LIVE)at渋谷LIVE INN

[1987.9.21.release]

「BUCK—TICK 現象Ⅱ」と題して渋谷のライヴ・インで行なわれたライヴの模様を収めたもの この日にアッちゃんがMCで「オレたち今度メジャーのレコード会社と契約しました ビクターです ますますガンバッテいくつもりなんで、これからもヨロシク」というメジャー宣言が発表されたライヴでもある 実質的にこれがメジャー・デヴュー作品となった

OPENING
PROLOGUE
TO-SEARCH
HURRY UP MODE
MOONLIGHT
ENDING/THEME OF B-T

MORE SEXUAL !!!!!

[1988.2.21.release]

メジャー・デビュー・アルバム『SEXUAL～』の中からの6曲に映像をつけたもの ロケあり、イメージあり、コケティッシュ風あり、演奏シーンありと、様々なヴィジュアルの魅力満載

SEXUAL XXXXX!
DREAM OR TRUTH
HYPER LOVE
EMPTY GIRL
ILLUSION

SABBAT I

[1989.4.21.release]

ICONOCLASM
TOKYO
PHYSICAL NEUROSE
MISTY ZONE
ROMANESQUE
CASTLE IN THE AIR
EMBRYO
HYPER LOVE
VICTIMS OF LOVE

SABBAT II

[1989.4.21.release]

89年1月の武道館2 DAYSのうち、1 20のライヴの模様を2本に分けてリリースしたもの 単なるライヴではなく、イメージ・シーンやエフェクトを織り混ぜた完成度の高いヴィデオ

SEXUAL XXXXX!
SILENT NIGHT
ANGELIC CONVERSATION
TABOO
JUST ONE MORE KISS
HURRY UP MODE
TO-SEARCH
SEVENTH HEAVEN
….IN HEAVEN….

サード・アルバム

TABOO

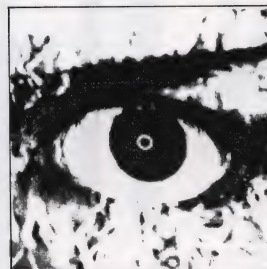
[1989.1.18.release]

Ats 曲によって歌い方を変えたり、ヴァリエーションを実験したり、やりたいと思ったことがいい方向に行って、BUCK-TICKのバンドらしさが出せたアルバム。

Hs 日本を離れたというのもいい経験だったと思うし、ダークで、デカダンスもあって、ダンサブルもある、新しい部分が引き出せた作品。

hd 新しいBUCK-TICKを打ち出せた。

Ut 一曲一曲に味があって、自分達のやりたいことを出せたアルバム。

TL プロデューサーがズレをゆるさない人だったから、リズム・キープに徹したというか、日本よりもOKを出す基準が高かったので、クオリティも高いものになったと思う。

SIDE A

ICONOCLASM

作詞、作曲 今井寿

Ats もう、今井の世界ですね

Hs んーと、これは…リフの最初から最後までベースがずーっと同じことやってる曲を作りたくて、で、こういうワン・コードのハンマー・ビートっぽいのを

hd アッちゃんのローボイスが聞き所で、けっこういいと思いますね

Ut インパクト!

TL このアルバムにはオーエン・ポールっていう、向こう(イギリス)のプロデューサーを付けたんですけど、この時もやはりスケジュールが凄くキツくて、本当は日本でたっぷりリハーサルを積んでから行くハズだったのが結局出来てなくて、で、イギリス行ってまず怒られて(笑)、『お前ら、ちゃんとリハーサル積んでから来るって言ったろ!』みたいな感じで で、謝ってからレコーディングが始まったんですけど、この曲だけは唯一テイク・ワンでOKが出たんですよ 向こうの人って表現が大袈裟だから、もう〝GREAT!〟とかいって抱きしめられちゃった(笑)

TOKYO

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

Ats これはロンドンで書いたから、ロンドンから見た東京をひとつのフィクションとして思い浮かべて書いたんです

Hs この曲はすぐ出来た曲で、コード進行から作っていって、何となくこんな感じかなって、鼻歌でメロディーを付けました(笑)

hd 武道館とか…思い出しますね

Ut 『TABOO』の時に初めてデモ・テープを聴いて〝ノリがいい曲だな〟と思いました

TL このアルバムの録音に関しては、タム類とかタイコの音を全体的にクリアーというか、良い音で録りたいということで、シンバルとタイコ類を別に録ってるんですよね だからタイコ類をまず録って、その後にシンバルをかぶせてるんですよ それでこの曲なんかも、実際は手が三本ないと出来ないことを(笑)、例えば〝タカタン〟ってフロアの上にシンバル鳴らしちゃってたりとか、絶対三本の手がなきゃ出来ないようなことになってるんです

SEX FOR YOU

作詞 桜井敦司　作曲 今井寿

Ats この辺まではですね、"エッチ"な部分をやっぱ露骨に出していこうって(笑) 今井もこの辺は、何ていうのかなぁ、音をそんなに厚くしないでスカスカに弾くという、チープなレトロさみたいな感じというのを、色々考えてきたかなって感じましたね

Hs 変な話ですけど、こういう(と、テーブルを指でなぞりながら)木目の感じのメロディーをやりたいなって思って、ちょっと解りづらいかも知れないんですけど(笑) このアルバムは全体的にアッちゃんがヴォーカルにエフェクトかけるのを嫌がったから、何か特にこの曲は生々しいですね

hd エッチっぽい(「エッチっぽい世界は好きですか」の問いに)好きなことは好きですけど……あんまり度が過ぎるのも(笑)、好きですけどね、この曲は

Ut エッチです

TL この曲ではパーカッションの小さいやつ、コンガかな、あれをプロデューサーのオーエン・ポールが叩いてるんですよ(笑) 最初俺が叩いてたら、『良い音じゃないからダメだ、オレに貸せ』とか言ってやってくれた憶えがありますね でも後で手をハラしてたみたいですけど(笑)

EMBRYO

作詞 桜井敦司　作曲 今井寿

Ats メロディー聴いた時に、この曲がアルバムの中で一番いいなぁって思って、ギターの音なんかも凄いトンガってるし、で、どんな詞を乗せようかなって思った時に、この"エンブリオ"っていうイメージは前々から頭の中にあったんで、じゃあこの曲にその詞を乗せてみようと

Hs これはまず最初のベースのところから考えていって、で、コード進行を考えて、後からメロディーをかぶせた曲です この頃から、そういうベース・ラインとか全体的なアレンジも多少考えるようになってきましたね

hd リズム隊が変わってて、ベースから始まるし……

Ut 心臓の音をもっとデカクしとけばよかったといまだに思ってます

TL この曲はそんなに悩まないで録れたような気がしますね

FEAST OF DEMORALIZATION

作詞 ヤガミトール　作曲 星野英彦

Ats ヒデの曲で、アニイが初めて詞を書いた曲ですね アニイが『書きたい』って言ったんです だんだんと歌い慣れてきて自分でも詞を書くようになってから、人が作った詞の場合にどこにアクセント置いたらいいか解らないというのが出てきたんです "コレ、解んないなぁ"というのが それまでは、今井の詞でもなんでも、何も考えないで歌ってたから、ま、これもホント、勢い一発でやってますね

Hs 黄金コンビ

hd これは、ロンドンに行く前に"また一曲作ろうかな"って気で作って(笑)、で、持っていって、Aメロはギターはずしちゃって、効果音を使って、そういうのばっかりにしようと……

Ut タイトルをつけるのにすごい時間がかかってましたね アニイが困ってました(笑)

TL ここで初めて詞を書いたんですけど、これも本当にギチギチの予定でイギリス行ったから、詞なんかも向こうでレコーディングしながら書くっていう状況で、だからアッちゃんや今井の負担を少しでも軽くしようという気持で書いたんです で、これは別に打ち合わせした訳じゃないんだけど、何かニュアンス的には「J」とけっこうイメージがダブったというか、丁度この頃に"切り裂きジャック"の当時の現場写真が何百年ぶりかで公開された 今井もやっぱり「J」はそこからインスパイアーされたみたいで、俺もなんかそういう雰囲気になっちゃっっていうニュースがあって、俺はそれを日本の本を売ってる店で買った写真雑誌の類か何かで見たんだけど、それでこれを書いたという…… 曲の方は、最初はかなりシンプルな8ビートの本編だけだったんですけど、パーカッションから始まるアレンジなんかを向こうに行って、スタジオの中で考えたって感じでしたね

SIDE B

ANGELIC CONVERSATION

作詞、作曲 今井寿

Ats 部分部分でやっぱりかなり難しいメロディーもあるんですけど、凄くいい曲だなぁと思います

Hs これもコードから作ったんです 最初の方はシンプルなコード進行で、サビになったら思いっ切りメロディアスにしようかなと思って で、コード進行を考えてたら"あ、これはナンカ、いい曲になるなぁ"って(笑)自分で思った でも、デレク・ジャーマンの映画のことは人から聞くまで知らなかったんです 聞いて"あ、そうなのか"って この言葉は、何かの雑誌で、天使が向こう側にワーッといて、それで塔のこっち側に羽根がコウモリみたいになってる悪魔の子供みたいなのがいて、それが寂しそうに、そっちの天使の方を見てるという、そういう絵があったんですよ で、そこに"エンジェリック・カンバセーション"っていうタイトルが付いたんです "あー、これは書かなくちゃだめだ"(笑)って気がして……

hd ロンドンって感じ……

Ut これはもっとテンポが速かったんだけど、壮大な感じにしようということで、ああなりました

TL この曲はプロデューサーに『これは凄い!』みたいな感じで絶賛されて、『これならオレも歌いたい』なんてこと言い出しちゃって(笑) だからこれは楽曲的に凄くプロデューサーに誉められた曲 俺も、録ってる時にはそんなにピンと来なかったんだけど、出来上がってから納得しましたね リズム隊は最初は割と普通の8ビートでやってたんだけど、やっぱ向こうにいる間に、何か同じような感じでずーっとやって行くみたいな、あのリズムを考えたんです

"J"

作詞、作曲 今井寿

Ats これはなにか珍しくジャズっぽいですね、これをジャズと言ったらジャズに怒られるかも知れないけど(笑)…… 俺、あんまり具体的に音楽のこと解らないから雰囲気で言っちゃうんです(笑) でもBメロとか、Bメロからサビの所とか、凄くいい、ライヴではやってないんですけどね

Hs 何となくジャズっぽい、そういう雰囲気を出してみたかった曲

hd カッティングとか、けっこう苦労しましたね カッティングを二本重ねたんですよ だから、まるっきり同じことを二回やってる……苦労しましたね、これは

Ut レコーディングがすごい難しかったという憶えがありますね

TL これも完全に重ねてるから、"ライヴじゃ出来そうもねぇや"っていう(笑) ジャズ風の"ツーツツ、ツーツツ"ってリズムをキープしておきながら、そこにダビングでワイア・ブラシのスネアを被せてるからライヴじゃ出来ないんで、これはとうとうライヴで演らなかったですね

SILENT NIGHT

作詞 桜井敦司　作曲 今井寿

Ats これは、"リズム隊なしで、アコースティックで一曲作ってくれ"って今井に頼んだら、今井がバッチリのを仕上げてきてくれて…… で、その世界で詞を考えたから……そしたら何かもう、ちょっと怖い世界になっちゃった(笑)、これはエンジニアとプロデューサーが初めて向こう(イギリス)の人だったから、エフェクトを使わないというのはその趣味もあるんだけど、今まではエフェクトに頼った部分が凄くあったんで、自分としては色々と勉強になりましたね

Hs こういうギターだけの曲をやりたいってアッちゃんが言って、で、このコード進行も自分では"これは、我ながら素晴らしいんじゃないかな"って(笑)思ってます

hd これもけっこう苦労しましたね、レコーディングとかでは、回転数をちょっとづつ変えて、ギターを4本くらい重ねるという、そういう事をやったんです ほんの少しづつなんですけど、速さ変えて重ねてるんです

Ut 初めてレコーディングに参加しなかった曲(笑)

TL 初めてドラムレス・ベースレスでやったんです 俺とかドラマーだから、最初はけっこう抵抗があって、『そりゃあ、ロック・バンドじゃないんじゃねぇーのかぁ』みたいに(笑)今井に言ったんだけど、『いや、やりたいんです』つぅーから、『じゃあ、解った、しょうがねぇーな』と納得したっていうか、ま、こういう曲も一曲くらいあってもいいかなと思って でもおかげ様で、ライヴだと丁度いい休み時間が取れるんでイイヤって(笑)、うまい具合に休憩時間になるんで(笑)

TABOO

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

Ats 無国籍というか、どこかレトロっぽいと思うんですけど。昔の社交ダンスみたいな…そういうのをイメージして…。でも、この曲で終わってれば何かひとつの世界が出来たんだと思うんですけどね。

Hs これはほとんどアレンジから作った曲。で、家で仮り歌でデモ・テープを作ってる時にデタラメ英語で歌ってたら、この「TA-BOO」って言葉が何となく出てきて、それでそういう「TABOO」っていうタイトルで詞を書いてくれってアッちゃんに頼んだら、アッちゃんが考えてた以上のもの書いてくれて。間奏のギターで弾いてる「タブー」のメロディーも、たまたまこの曲のコード進行にピッタリ合って。そういう偶然が重なってる曲ですね。

hd なにかブルーのイメージです。

Ut ミックスがキレイですね。

TL レコーディングの時に、最初のイントロ部分のキメが仲々合わなくて、みんなでそこを一生懸命やってた憶えがあります。

JUST ONE MORE KISS

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

Ats でも、ドーッと落ち込んでる『TABOO』の中で、この曲はせめてもの救いかなぁと思います

hd 最後にこれを入れたのはやっぱり正解だったと思います

TL 日本で録ったのと丸っきり同じヴァージョンなんですよ。「TABOO」で終わると何かちょっと悲し過ぎるから、一応ハッピーエンドっぽくしようかなっていうんで、これを最後に入れた感じですね

制作エピソード

●このアルバムは「JUST ONE MORE～」を除いた全曲がロンドン(マスター・ロック・スタジオ)でレコーディングされている これは前作の制作中から冗談ぽくあがっていた話だったのだが、メンバーの音楽的バックボーンに近いロンドンで、他のことに煩わされずに集中的にレコーディングさせたいというビクターの田中ディレクター(実はご本人が一番ロンドンに行きたがっていたという話もある)などの意見で実現したという また、これはBUCK-TICKが初めてプロデューサー(オーエン・ポール:元マイティー・ワーのメンバーで、ソロとしても全英チャート3位に入る作品がある)を付けたアルバムでもあった

●ロンドン行きが決まり各人のパスポートが必要になった段階で、メンバーははじめて住民票を群馬から東京に移し、ここに晴れて(?)東京都民となったのである

●前夜の深酒のためか(?)、アッちゃんは出発の日の朝に寝坊し、離陸の10分前に空港に到着するというきわどいタイミングの大遅刻をやらかし、はらはらして待ったメンバー、スタッフから相当なひんしゅくを買ったということだ

●本来はロンドン行きまでにリハーサルを積むはずだったのだが、夏のイヴェントや取材などで例によって時間が取れず、ヤガミくんのコメントにもあるように、まずプロデューサーに怒られてからレコーディングが始まった 当然作詞もまだで、殆どがロンドンで書かれている だがそのおかげで、「J」「TOKYO」「FEAST OF～」など、日本で書いたら絶対生まれなかったような詞が生まれた メンバーが一ケ月暮らした2軒のフラットはロンドン北西のベイカー街にあったのだが、ここはかのシャーロック・ホームズの事務所が(小説の中で)置かれていた街でもある

●アルバム用の曲だけは、イヴェントなどの忙しい日程の合間を縫い、睡眠時間を削りながらも今井君が根性で日本で作っていったのだが、「SILENT NIGHT」だけは、あらかじめ作っておいたデモ・テープをイギリスに持って行き忘れてしまったため、向こうへ着いてから急きょ作り直したもの そのため、最初に作ったものとはほんのちょっとメロディーが違っている だが今井君は、〝あ、こっちの方がいいかな〟と思い、ロンドン・ヴァージョンの方がアルバムに採用された また、今井君はあまり人前で感情を表さないタイプなため、表現の大きい外国人には、テイクにOKを出した後にも今井君がそれに満足しているのかどうかが解らず、プロデューサーは必ず「ヒサシはOKなのか?」と訊いていたという

●アッちゃんは、ロンドンに〝暗い〟〝退廃的〟など、自分なりの好ましいイメージを抱いていたのが、いざ着いて見ると毎日快晴でカラッとしており、ちょっとガッカリしたそうだ

●レコーディング中(9/2～10/1)は10時起床、11時にスタジオ入り、8時頃の夕食を挟んで夜の12時くらいまで録音という規則正しい生活が続き、オフは一日しかなかった そのオフには全員でキングスロードにショッピングに行ったが、前日のレコーディングが遅くまでかかったこともあり、昼下がりの3時頃に行動を開始したメンバーは、向こうの店が6時頃にはシャッターを下ろし始めることを知り愕然、あまり大した成果は上げられなかったようだ

●『TABOO』のトータライズされた雰囲気は、それを象徴するような単語を30個くらい今井君のノートに書き出し、それに外れないように気をつけながらレコーディングを続けて生み出されたもの

●メンバーは21日にグレイ・ハウンドというロンドンのライヴハウスに出演した 彼らはレコーディングでタマっていたものを吐き出すかのように、日本でやる以上に激しい動きのあるステージで約10曲を演奏、観客にも非常に好評だった またこの期間に「HYPER LOVE」がBBCでオンエアもされたという

●トラック・ダウンまではイギリスで、曲の並び順は日本に帰ってから決められた ラストにシングル・ヒットした「JUST ONE MORE～」を入れるかどうかは、かなり悩んだ末のことだったという

●渡英前は「15時間も飛行機に乗りたくない、行くならレジャーで行きたかった」などと発言していたアニイだが、ドラムの音決めに丸二日、日本の5倍くらい叩かされる徹底さや、一曲のミックスに丸一日かけたり、レンガ造りのスタジオでの残響の録り方やマイクの立て方など、本場の仕事ぶりに一番得るものがあったのも実は彼のようだ またプロデューサー、エンジニアともに卓球が趣味だったため、アッちゃんやアニイは卓球をしながら現地スタッフとコミュニケーションを深めていったという なおこのロンドンでアッちゃんと卓球の試合をやったアニイは見事な勝利を収めている だが、真剣にやり過ぎ、その翌日一日だけダウンしてしまったという また、彼がこのテープを帰国後にZIGGYの大山君に聞かせたところ、一言「洋楽じゃーん」と言われたというエピソードもある

●このレコーディングの後、メンバーは「SEVENTH HEAVEN ツアー」に出たのだが、一ケ月集中して『TABOO』を作っていたため、『SEVENTH～』の歌を忘れてしまっており、そのカンを取り戻すのにかなり苦労したという

●このアルバムの「EMBRYO」の歌詞には、アッちゃんがロンドンで読んでいた夢野久作の「ドグラマグラ」の〝胎児の夢〟というコンセプトに、多少インスパイアされた部分があるが、この頃ちょうど映画化された「ドグラマグラ」を帰国後に観に行った彼は、帰りの出口でたまたま同じ日の同じ回を観にきていた今井君とバッタリ出合い、お互いビックリしたという ただし今井君の感想は、ただでさえ解んない映画なのに、凄く眠くて、途中で寝てしまってますます解らなかった、というものであった

メジャー・ファースト・シングル

JUST ONE MORE KISS

[1988.10.26.release]

SIDE A JUST ONE MORE KISS

作詞 桜井敦司 作曲 今井寿

Ats シングルという意識はなかったですね。今井もコレ作った時〝もっとシングルっぽいのを作ろうと思ったんだけど…〟とか何とか言ってたくらいなんですけど、でも歌詞が乗っかったらガラッと変わって、〝これシングルにしたら面白いだろうなぁ〟って感じになったんです。歌詞に関してはシングルということをちょっと意識して、憶えやすい言葉やキャッチーな言葉を使いました。退廃的なラヴ・ソング…ですかね

Hs シングルということで変に悩まず、サラッと一日で書き上げました。ほんとはもっと違った感じの曲を用意して、その中から選ぼうかとも思ったんですけど、結局その頃のBUCK-TICKらしさを、何かひとつにまとめたいっていうのがあったから。メロディーがあって、展開がコロコロ変わる…カラオケでも歌いにくいみたいですね(笑) サビは自分でもすごく気に入っています

hd これは色々と色んな要素が入っていて、まぁ、BUCK-TICKのいい所を集めたような…

Ut カラオケでもよく聴きますね。展開が多いんでベースラインはいつも以上に考えました

TL これはリハーサル時間が割とあったんだけど、この時に新しいタイコに変えたばっかりで、バスドラがあまり鳴らないんですよね、やっぱ新しいから。それでエンジニアの人がチューニングにけっこう悩んだんだけど、仕方無く、そのまま録っちゃった。ま、初めてのシングルで、聴く層もLPより広くなるワケだけど、でもシングルだからという特別な意識はなかったですね。

SIDE B TO-SEARCH

作詞、作曲 今井寿

Ats やっぱり初めて歌ったデヴュー・シングルよりはパワフルになってるかなこの頃に、やっと思うように歌えるようになってきた曲

Hs ライヴでいつも演ってるんだから、その曲をやっぱりレコードで出したいというのがあって。シンプルなだけによく間違えるんです。悩んだけど、このシングルのアレンジが決まってやっとシックリきました

hd 個人的には昔からあまり変わってない気がしたんですけど、やっぱり音とか数倍良くなってますね

Ut ライヴ・ヴァージョンで録ってみました

TL ワイルドな感じで作ろうと、ノークリックで録ったんですけど、このA・B面にBUCK-TICKの対照的な両面がある、みたいな感じですね

最新4thアルバム

悪の華

[1990.2.1.release]

As 悪の裏側の哀愁みたいな、悲愴感を持った主人公のイメージを設定して、それを包み込めるタイトルだなと、ボードレールの詩集から取ったんです 音の方もワルっぽい音でしょ

Hs 『TABOO』の時のほど雰囲気の統一ということを考えずに、技葉が拡ってもいいからバラエティというか、メロディを重視して、後はスピード感とか疾走感とか、全体的にそういうことを意識して作りました

hd 『TABOO』の世界に深入りするよりも、ヴァラエティに富むということを意識しました

Ut 前作で片寄り過ぎたところを多少修正して、ひとつの面だけじゃなく、色んな全部の面が見れるような感じにしたかった

TL ライヴ感を出したいっていうのがまずありましたね

SIDE A

NATIONAL MEDIA BOYS 作詞、作曲今井寿

As このアルバムの中で今井が一番最初に作ってきた曲で、本当は俺が詞を書くはずだったんだけど、〝この曲にどういう詞を付けたらいいんだか〟って悩んでたら、今井が書くってことになったんです とにかく凄い難しいメロディーと変則リズムで〝よくこういう曲が書けるなぁ〟と思いましたね(笑) ギターのリードなんかも遊んでますよね、珍しく、こう…ロックンロールっぽいっていう感じかな、同じAメロでもブレスのところを変えなくちゃいけないとか、大変な歌なんで体で覚えました 歌入れもいちばん最後にやったんです でも全部サビのようなアルバムの一曲目には持ってこいの曲ですね

Hs この曲はCDが高速で回転する、ああいうスピード感のあるイメージ… なんて言うのかなぁ、デジタルって言うか、未来的な曲を作りたいっていうのがあって、で、変拍子とキメをいっぱい入れて、でも、自分でデモ・テープで歌ってる時に〝あー、これ歌いづらいなぁ〟って(笑)思いましたね 〝後はアッちゃんに任せよう〟って(笑)

hd 変拍子で凄く凝ってますよね カッティングも最初はとても難しかったけど、慣れるとそうでもないです でも、凄い頭を使った曲かなと思うんですけど

Ut 事件後に初めて今井さんが作ってきた曲で、デモ・テープ聴いた時に〝こんな曲よく作ったなぁ〟ってタマゲました

TL これ三拍子とか色々と混じってるんで、なにかレコーディングも大変だった憶えがありますね こういうの今井がけっこう好きなんで(笑) でも基本的には数えてれば平気だし、そんな難しいという訳ではないです でも、今日の(3/9)のリハーサルでは間違ってたけど、ハハハ、先に終わってるって言う(笑) あとハミ出したりとかね(笑) これも練習でやったけど、けっこう大変だったなという感じでした

PLEASURE LAND 作詞、作曲星野英彦

As ヒデの趣味というか、まぁ、アルバムの中では中休みというか(笑) 落ち着いた曲ですよね

Hs ヒデが家にテープ持ってきて、〝曲作ったんだけど、聴いて〟って。で、最初はビックリしました

hd 曲が先に出来たんです ドロッとしたものも好きなんですが、なにかスローで幻想的な曲を作りたくて… 歌詞は作ってる時にイメージが多少あって、これはラヴ・ソングにはしたくなかったんで、〝書きたいな、自分で詞を作りたくなったなぁ〟って テーマは壮大さを感じさせるような、楽園です

Ut これはミックスの時に苦労しました

TL チューニングしてたら、丁度、隣のスタジオでやってたポンタさんが突然スタジオに現われて、チューニングしてくれたんですよ(笑) この誌面を借りて御礼を申し上げたいと思います(笑) ポンタさんとは同じパールのモニターって言うので、飲み会とか結構一緒させてもらったり、札幌の真駒内かどこかのイヴェントで、ルーザーでいらっしゃってた時に会ったのが最初で、その時以来けっこう仲良くしてもらってるんです

幻の都 作詞桜井敦司 作曲今井寿

As 今井に言わせると、これはアラビア音階だとか何とかって(笑) だけど、もう歌う方としたらコブシをコロコロ回さなきゃダメで(笑) なんか凄いですよ、ブレスもキツいし、メロディーも上がって下がって上がってみたいな感じで(笑) でもやっぱりこういう中近東ぽいイメージっていうのは、「HURRY UP MODE」や「HYPER LOVE」とか昔からあるから、この曲にもBUCK-TICKらしさっていうのが凄くあると思うんです 詞もそういう蜃気楼のような、神秘的な都での優雅なダンスという、荒々しさの上に乗る滑るような優雅さみたいな、そんなイメージで書きました

Hs 東洋風のメロディーでそれもなにか、あんまり暗っぽくない軽いイメージを出したくて

hd 何か東洋って言うか…異国の匂いがしますね

Ut やってて楽しいけど、ベースは淡々としてて難しいです

TL これは、このアルバムで唯一クリックを使ってないんですよね ここでクリック使う使わないでユータと口論になって(笑) 『こういうのって、アフロ・ビートみたいな、土人がやる音楽なんだから、クリックなんかあったらナチュラルじゃねぇーよ』とか言って(笑)俺が押し切ったんです 『土人がクリック聞いて叩くかよ』みたいな(笑) でも、これだけツー・バスだったんで、最後に(リズム録り)しようってことにしたんですけど、そこでできなくて余分にもう一日やって、リズム録りに二日かかって、かなり疲れました でもこれは、ヒューマンなノリって言うのを意識して正解だったですね

LOVE ME 作詞桜井敦司 作曲今井寿

As すごく単純でヌケのいいメロディーだったんで、逆にあの詞と歌で固めて、バックの音とのギャップを楽しんでみました

Hs 最初に作った時は「SILENT NIGHT」みたいな、ああいう優しい感じにしようかなと思ったんだけど、そういうシンプルなメロディーに速いビートを入れたら違ったスピード感が出るかなと思って

hd アコースティックですね

Ut アッちゃんの歌い方にタマゲた

TL 俺、こういうパンク・ビートみたいな2ビートもんって苦手なんです、あんまりやらないから、だからこのレコーディングの時も、クリックと合わせてやるのに何かてこずったような憶えがありますね

MISTY BLUE 作詞桜井敦司 作曲今井寿

As 俺、これは凄い好きなんですけどね、レトロなイメージで、昭和初期とか、ああいうのをイメージしてラヴ・ストーリーなんですけど、でも何かレトロっぽい感覚で近未来を見ているというか… その辺りが好きな映画とか小説などにダブッていった曲です 歌はファルセットが多くて、歪んだギターと対照的にフワッとした包み込むような感じが出ていて、自分で聴いてても飽きない曲です(笑)

Hs これは気に入ってます 実はこれ、最初はもっとノリのいい速い曲だったんだけれど、何となく〝リフ・パターンを延々繰り返して、そこに歪ませたギターを入れたら面白いな〟ってヒラメイて リズムはたいてい最初に思った通りで作っちゃうんですけど、この曲だけは珍しくヒラメキで変えました

hd 何かこう…映画のワンシーンのような…そんな感じ

Ut 同じスケールのリフがずっと続く珍しい曲

TL これはけっこう練習したような憶えがあるんですよね スネアとか2、4じゃなくて、抜いてるんです ちょっと普通の8ビートぽくないんで、それで何か練習した憶えがあるんですけど…

SIDE B

DIZZY MOON

作詞ヤガミトール 作曲星野英彦

Ats これも黄金コンビの曲（笑）。ヒデは、何ていうのかな…凄いシンプルな8ビートの曲がやっぱり好きみたい。

Hs 最初デモ・テープで聴いて、カッコイイと思いました。

hd 結構スカっぽいというか、そういうのをイメージして、ライヴ感とかスピード感を出したかったから、イントロも一発ノリで。（「アニイの詞はイメージ通りでしたか」の間に）、ええ、でも結構アニイの詞って難しくて、自分でもちょっと解んない所あるんです（笑）。

Ut スカっぽいスネアの音がする珍しい曲。

TL これは『HURRY UP～』の頃の「FOR DANGEROUS KIDS」みたいな感じでスカっぽいっていうか、そういうのをやってみたいってことで、これは普通のスネアとハイ・ピッチのスネアを置いて叩き分けてるみたいな感じ。

SABBAT

作詞桜井敦司 作曲星野英彦

Ats 地獄とか神話とか、異様な世界にしたかったんです、これは。

Hs ヒデが最初にテープ持ってきて聴かせてくれた時に、リズムなども凝ってて、今までにない曲だなと思いました。

hd これは自分でもけっこう入り込んで作った曲で、ギターとリズムマシーンとベースで平行して作りました。エンジニアの人に色々お願いして、左右に音を振って、回ってるような感じをアレンジで出したんです

Ut ギター・フレーズを弾いてるみたいなややこしいベース・ライン。

TL これは、〃カッ、カッ、カッ〃ってリム・ショットで始まるんですけど、最初の段階ではギターだけのイントロで、あれはスタジオで考えてつけたんですけど、リハーサルしてるときにはかなりモメて、どういうリズムがいいかとかけっこう悩んだ曲ですね。

THE WORLD IS YOURS

作詞桜井敦司 作曲今井寿

Ats 最初これをアルバム・タイトルにしようかなぁと思ったんです 歌詞でも、自分の書きたかったものが一番出せた曲ですね

Hs 最初はサビのメロディーから作って、で、半音づつ上がってくるところ、あそこだけはコードで作ったんです で、自分でやりながら〃ああ、これはカッコイイなって〃（笑） これもノイジーなギターとメロディアスなメロディーです ギター同志の絡みはリハの時にできました

hd これは…すごく機械的なイメージで、でも幻想的な…恐ろしいって言うか、そういう世界…

Ut 「タイム・スリー」で犯人が捕まった時によくかかる曲（笑） ほんとに、本当なんですよ

TL これは今井が『タンゴ調のリズムがいい』とか言ったんで、こういう感じに…

KISS ME GOOD-BYE

作詞桜井敦司 作曲今井寿

Ats 今井からこれ聴かせられた時、珍しく覚えやすくて（笑）、仲々泣かせるなぁと思って、で、どうせ泣かせるんだったら、歌詞も思いっ切り泣かそうと思って…しんみりと終わる、そんな感じにしたかったんです

Hs このイントロのマリンバのフレーズは一年くらい前からあって、なにかに使えたらなって思ってたんです

hd これもカッティングが好きです

Ut 感情を込めるのが難しい曲ですね

TL これはやってる時から〃いい曲だなぁ、けっこうシブイなぁ〃って思いながらやってました

悪の華

作詞桜井敦司 作曲今井寿

Ats この詞は半日くらいで書けたのかな、本当は「悪の華」というタイトルの曲は入れないハズだったんだけど、これはバンドを代表する曲にしたかったし、このメロディーやビートがやっぱりBUCK-TICKらしいという、そういう感じだったんで、これをタイトル曲にしようと思ったんです

Hs これはギターのリフから作りました 最初にそのリフが出来た時から〃これはこういう感じの曲になる〃というのが何となく見えていた部分があったから、後回しにして、結局（アルバム中でも）一番最後に一晩くらいで仕上げた曲です アルバムの中でもスピード感が一番出てる曲だと思います

hd これはリフのカッティングに尽きますね

Ut 全員がリズムと同じくらいのリフを激しく刻んでる初めての曲

TL これもクオリティーよりもノリをとった曲 で、このアルバムのテイクにはキーボードが入ってます

制作エピソード

●アッちゃんのコメントにもあるように、「NATIONAL～」は最初アッちゃんの作詞担当で、今井君は「LOVE ME」の方に詞を書く予定だったのだが、アッちゃんがこの作詞を最後まで残し、「んー」と考えていたため、〃やっぱり、オレが「NATIONAL～」の方を書きたいな〃と思った今井君の提案で、作詞の担当を交換することになったもの

●このアルバム用にメンバーが作ってきた曲は、8月から曲を書き始めた今井君の18曲を筆頭に約30曲近くあり、その中から選択して11曲が選ばれた その後シングルのB面に違う曲を入れるということで、最終的にこの10曲がアルバムに収められた この頃から意欲的な積極さを出すようになってきたヒデは、この作曲期間中にマルチの8チャンを入手し(初めの頃にマニュアルとニラメッコしながら作ったのが「PLESURE LAND」)過去最高の5曲を書き上げ、そのうち3曲が採用という高打率を残した またユータも3曲ほど書いたが、残念ながら今回での採用は見送られている

●歌詞が揃い、ダビングの際に、メンバーから出された幾つかのアイデアを検討して、ほんとに最後の最後という局面で、この『悪の華』というタイトルは決定された 他のメンバーからの案はすべて英語のタイトルだったらしいが、アッちゃんは『TABOO』の頃からよく読んでいたというこのボードレールの詩集のタイトルを押し、最終的にこれに決定したという

●あのまま「TABOO」ツアーが順調に行われていれば、新作は8月頃からレコーディングの予定であったから、実質上は予定と2ケ月の誤差しかないことになる しかし、普段より時間的にも余裕があり、『SEXUAL～』以来初めてデモ録り、リハーサルが積めた作品となった

●御存知のようにこの『悪の華』にはヴィデオ版もあるが、その企画ミーティングの際に、「詞は頭に浮かんだ映像を言葉にしていく」というアッちゃんは、廃虚の地上と地下の歓楽街というブレードランナーばりのアイデアを出したが、予算が50億ばかりかかると言われボツになっている また「NATIONAL MEDIA～」では早朝6時から工場でのロケ、〃吹けよ風、呼べよ嵐〃状態の雷雨の中で撮影された「SABBAT」、テイク18まで撮った「悪の華」、静止状態とは言え中腰のままじっとしているのが拷問に近かったという「KISS ME GOOD-BYE」など、どれも苦労のエピソードの絶えない撮影となった

シングル「悪の華」

［1990.1.24.release］

SIDE A 悪の華

作詞桜井敦司 作曲今井寿

TL これはキーボード抜きで、バンド・サウンドだけでやったというテイクですね。

SIDE B UNDER THE MOONLIGHT

作詞樋口豊 作曲今井寿

Ats 最初はアルバムに入る予定だったんだけど、ちょっとカラーが違うんで…、これはシングルのB面ってことになったんです

Hs 簡単でインパクトがあってメロディアスな曲を作ろうと思って アルバムの雰囲気とはちょっと違ったシンプルな印象の曲

Ut もう、詞は二度とやらない（笑） 何かすごい難しかった 自分が歌うんだったらいいけど、歌うのはアッちゃんだし、それにアッちゃんは詞も自分の世界を作りたがってるというか、一本のものに絞ろうとしてるし、これもアッちゃんに手伝ってもらったんだけど、ちょっとね（笑）

TL ほんとは「SABBAT」と入れ替わりでアルバムに入る予定だったんだけど、並べてみたらこれだけカラーが明るい感じだったんで、これをシングルの2曲目にするって言うことになって急きょ、TDが済んだ後だったと思うけど、つなぎの時に差し替えたって言う これもかなり変なリズムで、結構練習させられましたね（笑） 修行しっ放しですよ、BUCK-TICKにいると（笑）

RELEASED BUCK-TICK VIDEO［2］

「悪の華」［1990.4.1.release］

アルバム 悪の華 の全曲に映像をつけたヴィデオ版 このリリースによって、シングル、アルバム、ヴィデオと続いた〃悪の華三部作〃が完結する

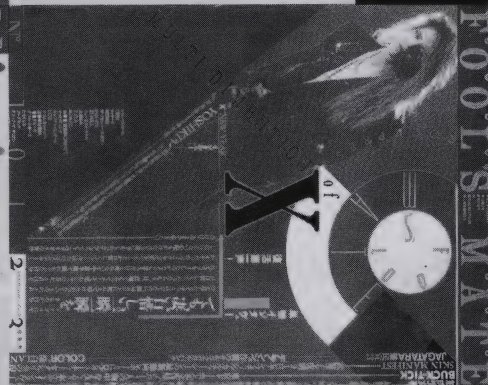
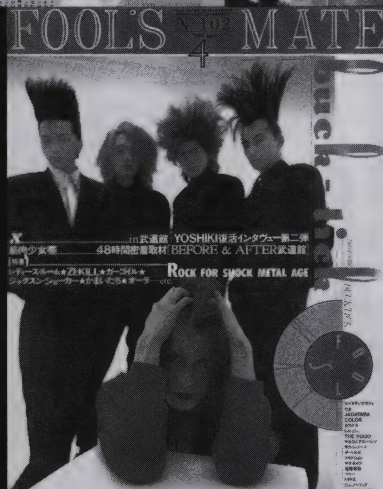
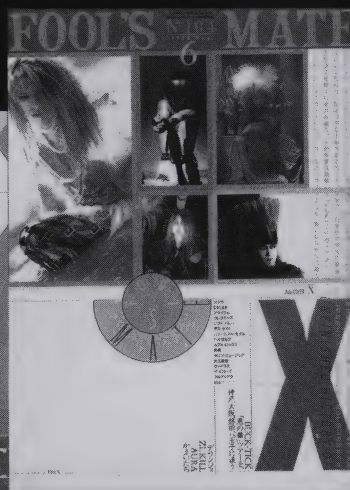
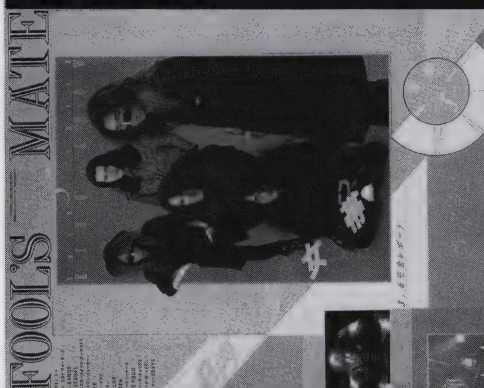
NATIONAL MEDIA BOYS
幻の都
LOVE ME
PLEASURE LAND
MISTY BLUE
DIZZY MOON
SABBAT
THE WORLD IS YOURS
悪の華
KISS ME GOOD-BYE

FOOL'S MATE

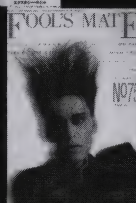
ROCK PRESS

毎月29日発売

精鋭アーティスト満載！

BUCK-TICK
X
D'ERLANGER
ZI:KILL
かまいたち
SOFT BALLET
筋肉少女帯
LADIES ROOM
L.O.X
赤痢
ASYLUM
COBRA
BY SEXUAL
COLOR .....etc.

**ファン必読！
BUCK-TICK
掲載号**

"BUCK" NUMBER

No.69（87年6月号）
4・1 "バクチク現象"のグラビア・レポート
No.73（87年10月号）
デビュー直前インタビュー
No.75（87年12月号）
表紙＋『SEXUAL ×××××！』発売直前レポート
No.83（88年8月号）
『セブンス・ヘヴン』の今井＆桜井インタビュー、カラーグラビア
No.87（88年12月号）
『タブー』レコーディング・レポート
No.89（89年2月号）
表紙
No.99（89年12月号）
『悪の華』『ハリー・アップ・モード』のリリース情報
No.102（90年4月号）
表紙＋東京ドーム復活大特集オールカラー
No.103（90年5月号）
"悪の華ツアー"大特集オールカラー
No.104（90年6月号）
"悪の華ツアー"レポート＆インタビューによるオールカラー大特集

音 ZAN

文 川上玄一郎
written by Gen-ichiro Kawakami

世にはびこるビート・パンクやヘビメタ・バンドとは一味も二味も異なるBUCK-TICKのサウンド。彼らの音の最大の特長はギターをギターと思わぬサウンド・メイキング、と言ったら語弊があるだろうか。発想を根本から変えた音作りにどこまで迫る事ができるか。フールズメイト本誌に連載中の〝音を斬る〟の出張拡大版　ハウ・トゥ・メイキング・ギター・サウンド講座。

まずバクチクのサウンド・メイキングで一番印象に残るのは、ギターに深くかけられたモジュレーション系のエフェクター・サウンドだろう　モジュレーションとは直訳すると音色を変調するという意味だが、モジュレーション系のエフェクターというと一般的には音を揺らせるような効果を与えるエフェクターのことだ　その揺らせ方も様々な方法があり、まず音程を揺らすのがコーラスやピッチ・シフターと呼ばれるもので、これを通すと1本の楽器が2本同時に鳴っているように聴こえる効果が得られる　ちょっと高価なディレイ（エコー）にも同様の効果が得られる機能がついており、バクチクのギター・サウンドにはほとんどこれが用いられていると思われる　その他、音色を連続的に変化させる事により同じような効果を作りだすエフェクターがある　フェイズ・シフターやフランジャーというもので構造的には両者は異なるが効果は似たものがある　試しに雑誌なり下敷きなりを顔の前で近づけたり遠ざけたりしながら口で〝シー〟と言ってみたまえ　ジェット機の離着陸の時のような音がするだろう　これは〝ドップラー効果〟というものの初歩的な現象で、これを機械的に作りだすのがフェザーやフランジャーである　これらモジュレーション系のエフェクターの効果としては音に広がりを持たせたりギターのトゲトゲしくなりがちなアタックを押さえマイルドな感じにするなどがある　これがバクチクのギター・サウンドが他のバンドと一線を画す点だと思うのだが、つまりギターにキーボード的なコードの広がりや包みこむような感じの役割をあたえているのである　今井、星野の両氏も、このモジュレーション系のエフェクターに一番、気を使っているようで数多く用意されているエフェクターの中でモジュレーション系の物が非常に多い　同じ効果のエフェクターでもメーカーによってニュアンスが異なるので、それを曲によって切り替えたりするために数が多くなるのだが、機材の総額合わせるとウン百万円になってしまうのでアマチュアが彼らと同じ物をそろえようというのは無理な話しだ　とりあえずコーラスとフランジャーがあれば近い感じは出せる　両者を一台にドッキングさせた物や、更にエコーやリバーブなど他の機能も搭載した〝デジタル・マルチ・エフェクター〟という物もあるが少し高価で操作も複雑である

エコーやリバーブ等の残響系のエフェクターもバクチクのギター・サウンドで重要な役割を果たしている　エコーとは日本語の訳通り山びこ効果を出すもので曲のテンポに合わせて音を繰り返させたり、効果音的に音を飛ばしたりと様々な用い方がなされている　この繰り返しを1回だけにし、時間を非常に短くセットすると〝ダブリング〟という効果になる　これをエコー成分だけにモ

ジュレーションをかけ音程を揺らすと前述のコーラスと同じ効果になるのだが"ダブリング"の場合は音程の揺れがない分不安定に聴こえないという特長がある また、うまく戻り時間を調節すると戻りの音が"カツン"とアタッキーになり、リズム・ギターなどにかけると効果がある またエコーのおもしろい使い方としてはフィード・バックという操り返しの回数を調節するツマミを急激に上げると操り返し音が増えて飽和状態になり"ギュイーン"という感じの連続した音になるというものがある 今井氏はこれを得意技としているようで、数多くあるデジタル・エコーのうちの一台をこの効果専用にセッティングしているそうだ 『TABOO』の1曲目「ICONOCLASM」のエンディングの音などがそれだ 一方、リバーブは日本語に訳すと残響という意味で、トンネルや地下室などで音が響く感じを機械的に作り出すものだ カラオケのマイクやギター・アンプにも同じ様な効果を出すための機能がついていたりするが、プロがレコーディングやステージで使うのはデジタル・リバーブというエフェクターである これはたくさんのデジタル・エコーを一台に組み合わせ、様々な時間の繰り返し音を一度に出す事によって複雑な残響音を得る機械である 最新のデジタル・リバーブは、様々な部屋や有名なホール(例えばカーネギー・ホールなど)の残響を再現し、それらを瞬時に切り賛える事が出来るものがある これらの残響系のエフェクターは機能的に充実した物を買おうとするとまだまだ高価であるし、また特に初心者に於てはこれらのエフェクターをつなぐと自分のギターが気持ち良く聴こえギターのうでまえが上ったように錯覚する事が想像されるので、ある程度上達してから購入することをおすすめする バクチクのように他人にも気持ち良く聴かせるには年季と修練が必要なのだ

もうひとつ参考までに高価だが効果的なエフェクターを紹介しよう ハーモナイザーという、やはりデジタルを用いたエフェクターで、これは先程のコーラスやデジタル・エコーの音程を揺らす機能だけを飛躍的に拡大したもので音程を変化させ原音にその名の通りハーモニーをつけることができるものだ 今井氏もこのエフェクターを好んで使うが、ハーモニーをつける使い方よりも原音の1オクターブ上にセットし音にキラメキとシャープさを与える使用方がほとんどのようだ 数多くの曲でその音色が聴けるが『SEVENTH HEAVEN』の一曲目「FRGILE ARTICLE」の単音のリード・ギターの音が代表的 これもやはり高価だが前に述べた"デジタル・マルチ・エフェクター"にその機能がついたものもある また、ハーモナイザーは1オクターブ上から下まで自由自在に音程変化の巾を変えられるが、1オクターブまた

斬

は2オクターブ下の音程だけならつけることができるエフェクターもある その名もオクターバーというもので、シンセサイザー的な太い音を出す事ができ、今井氏も時々使用し、単音のフレーズに重量感を与えている 和音を弾く事ができないというデメリットはあるが、比較的安価なので"どうしても変な音が出したい"という人にはお勧めかも

そして、バクチクの曲を実際に演奏するには必要不可欠なディストーション系のエフェクターについて ディストーションは訳すと歪みという意味で、テープレコーダーに録音する時に入力レベルの調整を間違えて上げ過ぎてしまうと音が割れてしまって訳がわからなくなるというアレだ 歪みというと普通は不快な場合が多いが、エレキ・ギターに限ってはそれが美しいとされる ディストーションがかかる事によって音がのびやかになり、また生音よりも倍音が増えハデな感じになるためだ 元々は音量の小さいギター・アンプから大きな音を出そうとしてボリュームを上げ過ぎて原音とはかけ離れた音が出てしまったのだがそれが多くのギタリストに気に入られ今日に至っているものだ それを機械的に作り出すのがディストーション系のエフェクターだ 今ではロックのギターの音というとディストーション・サウンドのことをさす程だが、最初にこのエフェクターをレコーディングに使ったギタリストはエンジニアから「音が歪んでる」と文句を言われたそうだ ディストーション系のエフェクターは大まかに言ってオーバー・ドライブ、ディストーション、ファズの3種類に分けられるが、順番にかかり具合の深さが強くなっていくと考えてもらえればよい オーバー・ドライブは比較的生音に近いリズム・カッティングに適した音色、ディストーションはより強く歪んだリード向けの音、ファズは前の2種とはちょっとニュアンスが異なる、もう機械的な歪みまくった音、といったところか それぞれ一台づつでもかかり具合の深さが調節できるので幅広い歪み方が得られるから、どれか一台でも事足りるような気がするが、バクチクのギター・サウンドをステージで再現するには複数のエフェクターが必要となるだろう 今井氏の場合は数台用意して曲や展開によって音色を切り替えているようだが、普通はオーバー・ドライブとディストーションをそれぞれ切り替えるか、オーバー・ドライブを2台用意してソロの時には2台ともオンにする等の使い方で充分だろう また、オーバー・ドライブ・サウンドはギター・アンプ自体のみの歪みの方がナチュラルで良いとされるが、ステージではクリアーな生音も要求されるため、やはりディストーション・エフェクターが必要不可欠となってくる

その他、バクチクのギター・サウンド・メイキングを担っているエフェクターとしてはBBEやグラフィック・イコライザーがある BBEはエキサイターという種類のエフェクターのブランド名で、効果としてはぼやけた音やこもった音を固く引き締めるものだ グラフィック・イコライザーは最近ではミニ・コンボなどにも搭載されている機種があるくらいだから皆さん御存じだろう 周波数の高低に対応したグラフ状に並んだスライド・ツマミを調整することによって音色の固い、柔かいを変化させるものだ 両方とも効果としては比較的地味なものだし値段も安い物ではないので必要不可決なものとは言い難い ギター・アンプに付いているトーン・コントロールを知りつくし、その上で物足りなさを感じる人が購入すべきだろう

以上、バクチクのギター・サウンドに的を絞って述べてきたが、これからバンドを組んでバクチクのギターにチャレンジしてみようという人の参考になれば幸いである そうでない人にも、今井・星野両氏の音作りに対する情熱と努力の一端が理解していただけたのではないだろうか なお、フールズ・メイト一〇一号で連載コラム"音を斬る"第一回としてバクチクの『悪の華』を取り上げているので、彼らのサウンド分析に興味のある方はそちらもよろしく

第一幕 悪の華分析

ボオドレエル序説 “LES FLEURS DU MAL”

詩人シャルル・ボオドレエルとその時代

最新アルバムで見せた妖しくも官能美あふれる世界観を、詩的背景とサウンド・メイキングの両面より徹底解剖

文／みげる阿沙婆
written by Migeru Asaba

桜井の命名により、幻想的で狂おしいほどの色香を放つアルバムは、更にその憂愁と神秘性を強烈に印象づけた。『悪の華』──。このタイトルが十九世紀フランスの象徴派詩人、シャルル・ボオドレエルの著した唯一の詩集と名を同じくすることは、よく御存知である通り。のみならず、そこに美しく綴られた絢爛たる魔性の世界は、アルバム全体のイメージを彩る重要な詩的背景となってもいる。そして両者を対照するうちに、我々は時空を超えた符号の数々を見出す。一八〇〇年代のパリに在った詩人が「爆竹のような」表題を創作の拠り所とした事実ひとつをとっても、互いの関連性が年代の後・先だけでは説明できない星まわりをなす裏づけとなろう。出会うべくして出会った、運命的な引き合わせと言わねばなるまい。ここで、『悪の華』の紡がれた世情および心情に迫ってみることとする。このことは即ち、含蓄に富んだB−Tの最新作を解釈するための、不可欠な道標となるはずだ。

プロローグ　タイトルは爆竹のように

「書物のタイトルは」と、シャルル・ボオドレエルは常々友人に語っていた。「神秘主義的でなければならぬ。そして爆竹のようでなければならぬ」と。そして、彼の生涯の詩業を集大成したたった一冊の詩集は「悪の華」と命名された。「憂鬱と理想」「巴里風景」「酒」「悪の華」「叛逆」「死」の六章で構成されたこの詩集には、目次だけ見てもわかるように、地獄、悪魔、吸血鬼、妖魔、毒薬、死者、錬金術、頭骸骨、老婆、死の舞踏、殺人、レスボス島、憂鬱、仮面といった言葉がそこここに黒くうごめいている。そう。この書物は、ボオドレエルがそのタイトルに込めた願いそのままに、サタンが座す神秘界を背後に据えて、偽りの平和と悪しき健全がはびこり、退屈と虚栄が支配する十九世紀フランスのブルジョワ社会のただなかで炸裂すべく投ぜられた豪華な爆竹のブームであった。

十九世紀のパリは、商工業と都市が急激な発展を遂げる進歩の時代のなか、富を誇る成金どもが、サロンのお行儀のよいみせかけの文化的ムードに自己満足する傍ら、農村の荒廃により都市へ流入し続ける貧民の群れが、過激な暴動を繰り広げたダイナミックな歴史の転換期であった。慣れ合いのギョーカイ人たちが、カフェバー近辺で虚飾を競いつつ、うすっぺらなセンスを交換しあい、既製のブランドを追って見苦しく右往左往する一方、外国人労働者が大量に流入し来たり、世界が大きく胎動し始めたこの十年の日本と似ていなくもない時代。そんな時代への呪咀に言葉の術を駆使してみせた最初の詩人として、シャルル・ボオドレエルの名は世界文学史上に輝いている。では、『悪の華』を咲かせた彼の人生とはいかなるものであったのだろうか。

第一部　ピモダン館のドラッグ・ダンディ

サン・ルイ島といえばセーヌ川に浮かぶパリ市内でも屈指の最高級住宅街である。ノートルダム寺院のあるシテ島に隣接し、十七世紀以来の古い家なみが並ぶこの区域は、観光客の絶好の散策コースとしてどの旅行ガイドにも載っている。そしてそこにはきっと、ベテューヌ河岸二二番地所在の高級アパルトマン「ローザンヌ館」もしくは「ピモダン館」についてのコメントも載っているだろう。一八四二年六月、二一歳のボオドレエルは、ここに部屋を借りた。この年、成人した未来の詩人は、彼が六歳のときに逝った父親の遺産、七万五千フラン（約一億二千万円）を自由に費うことが可能となったのだ。遺産は十万フラン以上はあったのだが、シャルルは成年までにすでに数万フランの借金を抱えていた。寄宿制高校をドロップアウトし、バカロレア（大学入学資格試験）に合格、法科大学に入学する十八歳から十九歳にかけて覚えた放蕩が原因だった。度はずれた遊びぶりに、頭を痛めた義父オーピックは、息子をインド洋のモーリシャス群島への旅に放った。そこでシャルルは、植民地で優雅に暮らす貴婦人や熱帯の風物、褐色の女たちを知ったが、義父が期待したように放蕩癖は収まらなかった。帰国し遺産を継いだシャルルは、ピモダン館の一階の天井の高い彼の部屋を拠点に、ダンディの粋を極める放蕩に精進する。人生を規則づくめで固める軍人の義父。校則だらけの学校。せせこましく小金を貯え内心は出費におびえながらパーティやサロンで見栄をはる新興ブルジョワたち。シャルルの自らの趣味のためだけの無意味な浪費は、彼ら当時のフランス社会の支配者たちへの嘲笑であり罵

LES FLEURS DU MAL

おゝ汝、天使の中に博識と美と並びなく、運命に裏切られ、はた讃歌を奪はれし神、おゝ悪魔、わが打續く慘狀を憐みたまへ。
蒙塵の王者なる汝、挫かれて敗れたりとも、常にまた捲土重來、いや猛く起ち上る汝、おゝ悪魔、わが打續く慘狀を憐みたまへ。

倒に他ならなかった。

ダンディの基本は、まず人の意表を突くまでに奇をてらったファッションをキメて、俗人のどぎもを抜くことに始まる。一九世紀の役者や詩人がいかにダンディぶりを競ったかは、マルセル・カルネ監督の名画『天井桟敷の人々』を一見されたい。若きボオドレエルも彼らに劣らぬダンディを夢見た。ゆったりとした時にはだぶだぶの燕尾服。彼自身のデザインによる高価な黒のカシミヤのチョッキ。優雅な渦巻きラシャのズボン。デテールまでシャルルが注文をつけて裁縫師に仕立てさせたスリーピースに、冬は玻璃玉飾りの靴、漆黒の靴下。夏は運動靴と白い靴下。首には黒のスカーフ、帽子はシルクハット。それも広いつば、口広で上へゆくほど細い流線形のライン。パリ中を探して気にいらなければ即デザインを決めてオーダーメイド。

ソロボンヌ大学や学生街カルチェ・ラタンにもほど近いピモダン館には、多くの若い詩人や芸術家が訪れるようになる。狂気の幻想作家ジェラール・ド・ネルヴァルや世界最初の芸術写真家で軽気球乗りパフォーマーでもあったナダールもその中にいた。それぞれにダンディぶりを競いあう彼らの美学は、韜晦と人工美をその鍵としていた。韜晦は人の意表に出ることを突発的にやらかすパフォーマー性や思ってもいないことを真顔でしゃべりまくって人を煙に巻く生き方でダンディズムの精神的側面である。人工美は、自然美を嫌い凝った装飾の部屋で人工光線に照らされて生活し、鉄とガラスが張りめぐらされた当時最新のハイテク空間に魂を解放させた。こうした自然な感性を人工的に歪める美学は、ついにはボオドレエルに麻薬による人工的夢への没入まで試みさせた。この十年後、ボオドレエルは、阿片やハシシュを用いて到達する幻覚の世界の魅惑と禁断症状と恐怖を『人工楽園』というエッセイにまとめている。

第二部　エロスと神秘と革命と

シャルルが放蕩に身を投じたパリは、十九世紀西欧文化の首都であるとともに、常に娼婦らが袖を引く快楽と退廃の都でもあった。むろん、彼もその快楽に浸る日々を送り、ついに梅毒に感染する。当時、この病気をもつことは、浪費と快楽に生きる芸術青年の勲章でもあった。シャルルが接したのは病気持ちのいかがわしい娼婦だけではない。劇場の無名の女優であり、夜のように黒い髪、黒い星のような瞳、茶褐色の膚を持ったカリブ生まれの黒人との混血女、セクシーな肢体とあどけない顔で詩人に官能と恍惚をもたらしたジャンヌ・デュヴァルとの出会いもこの頃である。移り気で嘘つきで見栄張りで無教養、身持ちの悪いこの美女との腐れ縁は、この後紆余曲折しながら二〇年も続いた。『悪の華』中二〇篇以上の名作が彼女を狂おしくうたっている。

だが、莫大な財産を湯水のように蕩尽する日々は永遠には続かなかった。シャルルの放蕩ぶりを恐れた義父と母が裁判所に申請してシャルルを禁治産者に指定したのである。こうして、シャルルは財産管理能力無しとされ父の遺産は財産管理人の許可なくしては一文も手をつけられないこととされてしまった。しかも既に数千フランを超えていた借金の方は、清算されずに残された。まさしくブルジョワ道徳からの手痛い報復だった。

以後、シャルル・ボオドレエルは、社会的無能力者宣告に等しい禁治産宣告のコンプレックスに悩みながら、莫大な借金の返済に追いまくられて、次から次へとエッセイや翻訳や美術評論を雑誌に発表して日銭を稼ぐ底無し地獄にはまってゆく。もはやコンプレックス克服の途は詩人として名声を勝ち取ることしかなかった。学生時代から書き始めていた詩の独創的新しさは、すでに『レ・ミゼラブル』の作家、ヴィクトル・ユゴーや『ミイラ物語』などで知られる大詩人、テオフィル・ゴーチェらによって認められていた。こうして、世界最初の原稿料と印税のために書く近代的詩人が誕生した。そして、彼がうたう感性もまた、それまでの国王や貴族のパトロンの保護で生活する詩人とは異なる、近代の都市の憂鬱とならねばならなかったのである。

一八四八年、パリを、そして全ヨーロッパを、突如革命の嵐が襲った。発達した資本主義と工業技術の下で、自由と民主々義を求めるブルジョワジーと労働者たちが、大富豪と地主と貴族の提携に支えられた各国の王政に対して各地で暴動を起こしたのである。殊に革命の都パリでは、全市にバリケードが築かれ、労働者と国民軍は、ルイ・フィリップ王の軍隊を撃退、臨時共和政府を樹立した。この二月革命の市街戦では、詩人シャルル・ボオドレエルも銃をとり、バリケードにこもりオービック将軍をぶっ殺せ！と義父の名を叫んで闘った。革命政府がブルジョワと労働者の連立政権として樹立された後、ボオドレエルは社会主義派の新聞を編集・発行して労働者のために筆をとろうとした。

憂愁と神秘の詩人ボオドレエルと革命の市街戦はどうもそぐわない印象を受ける。だが当時の革命思想を思えば、これはそう不思議なことではない。この時代にもっとも影響力のあった革命思想家フーリエは、宇宙の真の調和の実現を革命と考え、それが実現するとき、性欲を中心とする人類のあらゆる欲望が解放され、全ての労働が遊びとなり、人類は超感覚器官である尾をそなえた新しい生物に進化し、地球自体も意識を持ち宇宙に向かって射精するという狂気と幻想に満ちた「社会主義」のビジョンを唱えていた。また二月革命に先駆して武装蜂起を企て、以後四〇年を牢獄で過ごした革命家ブランキは、いつも黒服をまとったダンディで、その革命秘密結社では党員は季節や曜日の暗号名で呼ばれ、神秘的な入社儀礼が設けられていた。彼も奇怪な宇宙哲学を持ち、無限にして永遠なる宇宙ではあらゆる現象は幾度も繰り返されることを信じていたという。女たちやさまざまな動物や自然、都市の風景や群集を、宇宙の真理を覗かせる象徴と考え、視覚と聴覚と臭覚が混然一体となって、すべてが調和する「万物照応」に詩の究極を幻視したボオドレエルは、ブランキの結社にも一時参加し、フーリエらの神秘的革命思想を、詩の世界で実現しようと試みたのだった。

だが、革命は六月の労働者の暴動が敗北して以来、急激に熱を冷ましてゆく。労働者を切り捨てたブルジョワ政府は指導力を失い、ただナポレオンの甥であるというだけの人気で大統領に選ばれたルイ・ナポレオンによって打倒され帝政が復活した。六月暴動に加わったボオドレエルは革命と社会主義に失望、以後、債権者に追われながら、繁栄と退廃の都パリの芸術家として生きるしかなかった。銀行家の妾で芸術家のグラマラスなパトロンだったサバチエ夫人へのプラトニックな恋、妖精のような人気女優マリー・ドーブランへの失恋、再びよりを戻したジャンヌとの同棲。この時期のボオドレエルの恋は、青春時代のように官能に酔うよりも、永遠の美と理想への憧憬に近い。その背景には、幼い頃、母の義父との再婚により味わった疎外感が深く影を落としていると言われている。サバチエ夫人の誘惑に際してシャルルは不能だった。詩作以外ではボオドレエル最大の功績とされているアメリカの天才詩人で作家、エドガー・アラン・ポオの発見とその怪奇小説『世にも不思議な物語』や海洋幻想SF『ゴードン・ピムの冒険』の翻訳や数々の美術評論をものにしながら、続けられた詩作はしだいに『悪の華』一巻へと集大成されてゆく。

産業の発達により大量生産される商品。紋切り型の言葉で情報を大量にばらまくマスコミ。そんな都市では人々は個性を喪失した大量生産された群集として生きるしかない。古代以来の美、中世以来のキリスト教の神はもはやどこにも見いだせない。そんな現実に対して、聖なる永遠の言葉を投げ付けようとしたボオドレエルが、拠った哲学は「万物照応」とサタン崇拝だった。ベルゼブブ・ルシフェルと呼ばれる偉大な堕天使。神が見失われた以上、聖なる超越へと至る回路は神に永遠の呪咀を投げ続けるサタンにしかない。

エピローグ　詩人死すべし

かくして、世に放たれた『悪の華』を、ブルジョワ社会は、スキャンダルとして眉をひそめた。そして公共道徳紊乱罪適用による押収と裁判。私信では絶賛したユゴーもフローベールも沈黙する中、裁判は有罪。ボオドレエルは詩六篇削除を命じられた上、罰金刑。詩人としての名誉を得る機会を喪失したボオドレエルは、最後の韜晦パフォーマンスとして芸術院会員への立候補を宣言するも、返ってきたのは嘲笑と黙殺のみ。一八六四年、四六歳のボオドレエルは、スキャンダルと債権者の追究にパリを追われ、失意のうちにベルギーのブリュッセルへ向かう。だが、パリの文化に憧れるスノッブ相手の講演会は見事に失敗。文化なき新興国を呪う日々が続く。

そして一八六六年。ベルギーの数少ない優れた芸術家、象徴派画家のロップスとサン・ルー教会を訪れたシャルル・ボオドレエルは、突然石畳の上にすてんと昏倒した。青春時代に彼に取りついていた梅毒が脳にまわったのである。フランスに戻されたボオドレエルは、もはや脳障害で半身付随、言語機能も悪化していた。絢爛たる悪の言葉を美しく紡いだ十九世紀最大の詩人が、いまや「畜生め！」ひとことしか発音できなくなっていた。詩人の死は翌年の八月三一日。最愛の母の手に抱かれ、眠るように逝ったという。彼の死後、西欧芸術は世紀末を迎える。ボオドレエルの大きな影響の下、ヴェルレーヌがランボオがデカダンスのパリをうたった。ルイ・ナポレオン帝政が倒れ、世界最初の労働者政権パリコミューンが生まれ弾圧されて、第三共和制が成立する歴史の激動のなか、ボオドレエルが撒いた悪の華の種子は芽吹き咲き乱れてもはや枯れることはなかったのである。

参考文献

『悪の華』鈴木信太郎訳　岩波文庫
『パリの憂愁』福永武彦訳　岩波文庫
『悪の華』堀口大学訳　角川文庫
『人工楽園』渡辺一夫訳　角川文庫
『ボードレールの生涯』ボルシェ　二見書房
『ボードレール』ベンヤミン　晶文社
『ボードレールの世界』福永武彦　講談社文芸文庫
『シャルル・ボードレール』渡辺広士　小沢書店
『悪魔のいる文学史』澁澤龍彦　中公文庫
『天井桟敷の人々』プレヴェール　新書館
『幻視者たち』巌谷国士　河出書房
『機械仕掛けの夢』笠井潔　筑摩書房

サウンド・エンジニアリング編

WILL GOSLING ウィル・ゴズリング

「悪の華」エンジニア インタビュー

LES FLEURS DU MAL

インタビュー 小野島大 訳 池田真実
interviewed by Dai Onojima translated by Mami Ikeda

アルバム解剖、続く"ハードウェア編"は『悪の華』を手がけた敏腕エンジニア、ウィル・ゴズリングの来日会見録をお届けしよう。BUCK-TICKとウィルの出会いは88年9月、『TABOO』レコーディングのため渡英した折り。以来、メンバーのウィルに対する信望は厚く「バンドの音をうまく引き出してくれる人です(桜井)」「シンプルにまとめてくれるところがいい(今井)」等と各々語っている。ウィルの発言にもある通り、ある種マニュアルなBUCK-TICKのサウンドと、機械的な正確さを好まず、音楽は感情表現であり起伏があって然るべきとするエンジニア・サイドの意向は見事に合致する。この理想的な連係により、デリケートにしてエモーショナルな最新のB-Tサウンドは産み出された。当代屈指のスタジオ・ワーカーが明かすレコーディング秘話、日英音楽事情などなど、現場最前線よりのリアル・ヴォイス——。

——バクチクを手掛けられて今回で2作目となりますけど、前回と比べてどうですか。

W まず演奏が上達したんじゃないかな。ヒデが以前より弾けてきてるよ。前回はアルバム全てのレコーディングを担当したワケじゃないから、トールやユタ(樋口)のプレイも見てないし、前と比べてどうこう言えるほどじゃないけど。でもヒデはかなり腕を上げたね。

——今回のアルバムであなたが狙っているポイントとはどういうものですか。

W 色をつける為に多少オーバー・ダブをしているけど、基本的にはライヴ・サウンドを出そうと思ってる。実はまだ彼らのライヴって観た事無いんだけど(笑)。でも上手くライヴ・サウンドが出てると思うよ。

——バクチクの魅力は、あなたにとってはどんな部分ですか。

W 金をガッポガッポくれる所(爆笑)。ウソウソ、タンマ、タンマ!

——オフレコですか、これ(笑)。

W ヒサシのアレンジの仕方は凄いと思う。上手いんだよね、凄く賢い。例えばレコーディングしてて、「なんでこんな所にギターを入れるんだ?」と思う事があるんだけど、ミックスの段階で「なるほど!」と思うんだよね。録ってる時はよく解らないんだけど、ミックスしてみると全てつじつまが合ってくるっていうかね。彼のあの才能には頭が下がるよ。

——例えばバクチクがイギリスでアルバムを出したとしたらどういう受け止め方をされると思いますか。成功すると思いますか。

W サウンドはバッチリだと思うけどね。シングル・カットされる「悪の華」なんかマジで可能性は充分あると思うし。でもやっぱり産業側からの見方をすれば、5年前のイギリスだったらイケるだろうという感じじゃないかな。バクチクの音楽がどうっていうんじゃなくて、イギリスがそれとは違う方向に行っちゃってるからね。まぁ実際やってみないと解らないものだし……だからバクチクも今の音、プラス英語の歌詞だったら成功する可能性は増すと思うよ。

——日本の他のバンドについては何か知っていますか。

W 以前ちょっとだけ土屋昌巳と仕事した事があるけどそれぐらいのもんで、あとはバクチクしか知らない。

——日本のバンドに限らず、今イギリスで成功するには何が必要だと思いますか。

W どういう成功の仕方がしたいのかというのにもよるけどね。

——例えばポップ・チャートで成功するには?

W まず個人的に、今のポップ・チャートは丸っきりクズばかりのゴミタメだと思うんだ(笑)。音楽史上最悪の状態だよ。だからポップ・チャートで成功するには音楽がよっぽどのクズであるか、顔がカワイくないとダメだね(笑)。ただここ1、2年、レコード会社が生の音を出すアーティスト達と契約し始めていて、今までは機械の音が主流だったけど、ここへきて又生楽器の音に戻りつつあるからライヴの上手いバンドならかなりイケるんじゃないかな。

——あなた自身、打ち込みは好きじゃないんですか。

W 機械を上手く使いこなしている音であれば好きだけど、今は殆んどがそうじゃないからね。別に機械が嫌いだって言ってるワケじゃないけど、それらの多くが余りにも正確すぎて音楽性が失なわれてしまっていると思うんだ。各音譜がビシッビシッと正確な時に正確なボリュームでプレイされているのって、僕には音楽に聴こえないんだ。気持ち(フィーリング)の込もった音楽が好きなんだよね。前にあるポップ・バンドと一緒にやったんだけど、とにかくそのバンドのキーボードっていうのがもの凄く上手くてね。ピアノ・ソロを弾かせると素晴らしいんだ。その彼がレコーディングで打ち込みをやって数学的には申し分のない正確さだったんだけど、やはりライヴで実際彼が弾いてやったのと比べると何か違うんだよね。だから基本的に打ち込みというのは僕にとっては余り気持ちというか感情の無いものなんだ。そういう意味では、本当の楽器で良い音を出せるミュージシャンと仕事するのが好きだ。

——例えば誰が機械を上手く使いこなしていると思いますか。

W 最近ではティアーズ・フォー・フィアーズなんかが上手いと思うよ。本当の楽器を使うミュージシャンと一緒に使ってるし。僕が嫌いなのは、例えばドラム・マシーンで本物のドラムの音を出そうとしている音。たとえばドラム・マシーンが正確にビートを刻めても、本物のドラムをドラマーがたたいた方が数倍良いサウンドが出ると思うんだ。例えばスネアの音が一つ一つ違うというのは凄く良い事だよ。それでドラマーの気持ちが表現されていくワケだからね。でも、ドラム・マシーンでそれをやるとなるとかなり難しいものがあるんだ。前に仕事したイギリスのポップ・バンドなんてドラム・アレンジに1週間半もかかってた。本物のドラムを使えば良いドラマーならその日の午後にはレコーディングに入れるものだよ。

——イギリスではいわゆるハウスものが盛り上がって

いるようですが、現在のシーンをどう思いますか。
W SAWがチャートを支配してた頃より、少しはマシになってきたけど。
――そうですね。
W何だ、君もSAWが嫌いか、やっぱり（笑）。ハウスものにしてもあるものは上手く機械の音を使って一定のリズムに頼ってる分には全くかまわないんだけど、それが本物のドラムの音を追求し始めると嫌になってくるんだ。
――これまでのあなたのキャリアを簡単に説明して頂けますか。
Wまずロンドンのラック(RAK)スタジオでアシスタント・エンジニアとして働き始めて、その後エンジニアとなり、しばらくそこのチーフ・エンジニアとして働いてたんだ。
――それはいくつぐらいの時ですか。
Wスタジオで働き始めたのは18才になってすぐ。学校を辞めてそこに入ったんだよ。
――それ以前は？
Wバンドでドラムやってたけどね。で、RAKで結構長い間仕事してたんだけど、やっぱりスタジオの専属だと仕事が選べないっていうのがあるじゃない。好きでも嫌いでも来た仕事はやらなきゃならないっていう。それに他のスタジオでも仕事をしてみたかったから、フリーになったんだ。それ以来フリーでやってて、イギリスを中心にパリやスウェーデン、アイルランド等でも仕事をしてるよ。アメリカではまだやった事が無いんだ、来年オーストラリアで仕事をするかもしれないけど。とにかく今回の日本が今の所一番の遠出だね（笑）。
――今まで手掛けてきたアーティストの中で印象に残ったアーティストは？
W沢山いるけど中でも一番印象に残ってるのはビッグ・カントリーだな。フリーになっての初仕事だしね。彼らとは3枚のアルバムで一緒に仕事してるんだけど、凄く良いバンドだよ。個人的には1枚目にやったのが一番好きで、あの頃の彼らの音が一番良かったと思う。
――自分が手掛けたもの以外でエンジニアとしてこれは素晴らしいと思ったアルバムはどれですか。
Wう〜ん、何百とあるよ（笑）。スティーヴ・ウィンウッドの作品はエンジニアの目から見て良い音出してると思う。ロバート・パーマーなんかも凄くいいし、それから…キリがないよ、これ（笑）。
――明日の朝までかかりそうですね（笑）。
Wそんな事したらバクチクとビクターの人に怒られちゃうよ（笑）。あと、今言ったのとは別の意味で好きなアルバムも結構あってね。例えばシンプルだという事でトレイシー・チャップマンなんかも好きなんだ。シンプルな楽器をシンプルなミュージシャンがもの凄く上手くプレイしている所が実に良い。何よりも他の巨大なプロダクションによって作られたものとは全く違うサウンドを持っているところがいいね。
――好きなエンジニアは誰ですか。
W………。
――何百もいますか（笑）。
Wうーん、ちょっと考えてしまうなぁ。1人のエンジニアでもアルバムによって良い仕事をしているのと悪い仕事をしてるのとがあるから、僕はエンジニアよりも作品別で好き嫌いを選ぶ方なんだ。
――一緒に仕事をしてみたいアーティストは？
Wそうだなぁ…、マイケル・ジャクソンとか。
――マイケル・ジャクソン!?
Wそう。82年頃かな…、彼はロンドンの僕が仕事をしてたスタジオへ来て「ガール・イズ・マイン」のデモ・テープを録ってったんだ。スタジオに入ったのは1日だけで、それもたったのワン・テイク歌っただけなんだけど、それがまた素晴らしいの一語。一度やってみたいと思うよ。あとバンドでも結構いるね。ヤング・リトル・フィートは昔から好きだよ。良いミュージシャンが勢ぞろいしてるし。あとプリファブ・スプラウトとか。『スティーヴ・マックイーン』は凄く良いアルバムだ。あとは、ワシントンのハウスものにも凄く興味あるし、ダンス・ミュージックなんかもやってみたいね。そうそう、プリンス。彼とも一度やってみたい。彼の発言や行動の影響力ってもの凄いじゃない。ある時は人の考え方を一八〇度変えちゃう事だってある型破りで大胆なアーティストだろう？ 彼のあの斬新さも魅力的だよ。

――あなたはプロデュースの仕事もやっているそうですけど、自分がエンジニアをやって、プロデューサーが別に立っている場合もあるワケですよね。そういう時にプロデューサーとのコンビネーションという部分で特に気を付ける事はありますか。
W要はプロデューサーが決定権を握ってるっていう事なんだよね。例えばプロデューサーとエンジニアがお互いを良く知っている場合はプロデューサーがエンジニアを信用して、まずエンジニアの好きな様にやらせるんだ。で、仕上がりを聴いてOKなりNGなりを出すという具合なんだよね。初めて一緒に仕事する場合はさすがにそうはいかないけど、とにかくプロデューサーの嫌うものを作らない様に気を付けるだけ。例えばこのプロデューサーはギターのパートをこうやっちゃうと嫌がるとか。これはもう一緒にやってく上で、自分でそのプロデューサーの性格を分析して上手くやってける様に努めるしかない。一種の駆け引きみたいなものさ。これがエンジニアとして上手くやっていく秘訣だよ。その駆け引きの仕方は毎回違ったりするんだけどね。
――では、一緒にやってみたいプロデューサーは誰ですか。またまた難しい質問で申しわけないですけど（笑）。
Wふーむ（笑）。ナイル・ロジャースとか…、それからトレヴァー・ホーンだな。彼は技術的に最も優れたレコードを作ってると思う。それもコンスタントに良いレコードを出している素晴らしいプロデューサーだ。あと、スティーヴ・リリーホワイトとも又やってみたい。以前一緒に仕事した事があるんだけど彼は凄く面白いプロデューサーなんだ。彼はアーティストの技術的な面よりもパフォーマンスを重視するタイプで、実に興味深い。でもやっぱりトレヴァー・ホーンと一番やりたいな。
――例えば録音は凄く良いけど音楽が良くないレコードと、録音は最悪だけど音楽は良いレコードとがありますよね？
Wもちろん音楽の良い方が好きだよ。僕の好きなレコードにも録音の悪いやつがいくつもあるし。古いレコード…、モータウンのとかってそういうのが多いじゃない。たとえ録音が悪くても、やっぱり曲やミュージシャンが余りにも良いからっていう。それが一番大事な事なんだよね、要するに。
――今回は実際日本に来てバクチクと仕事をしているワケですけど、日本とイギリスでレコーディングの仕方はどういう点が違いますか。
Wまず日本はキッチリとスケジュールが組まれている事。日本に来る前、あらかじめ僕の所にレコーディング・スケジュールが送られて来たんだけど、全てがビジネスの様に仕切られているんだよね。僕がやってきた限りではイギリスの場合、まずドラムやベースをやって、それからギターでもヴォーカルでもミュージシャンに応じて準備がととのったものから録っていくことが多いよ。スタジオ・ブッキングの仕方もイギリスでは大体週に6日間を1ケ月分とっておいて、あとは自由に使うっていう感じだから、日本よりもリラックスした雰囲気があるんだ。それと比べると日本のは、はるかにオーガナイズされてるよ。例えば、今回のミックス・ダウンは今日中に仕上げなきゃいけないんだよね（笑）。いつもならキリの良い所まで仕上げて、明日またスタジオに入ってチェックする時間があるんだけど、今回の場合、12曲のミックス・ダウンを10日間でやらなきゃならない。僕にとっては今迄で一番きついスケジュールなんだ。だからその日までに良いレコードが完成すれば全て良しっていうイギリスとは逆に、日本は各作業をキチンと組まれた時間内に終らせなければならない、時間にもの凄くキビシイ国だと思ったよ（笑）。かつて無いプレッシャーがあって面白かったけど。でも、さすがに疲れるね。オフが欲しくなるよ（笑）。
――では今後の目標を教えて下さい。
W目標ねえ…やっぱり自分が誇れる良いレコードを作りたいって事に尽きるよ。『悪の華』のような（笑）。

VITAL STATISTICS

過去、公表されたすべてのデータを集計。本誌独自の構成による各メンバー詳細プロフィール！

星野英彦

1966年6月16日生まれ　双子座
本名：同じ
血液型：A型
身長・体重：179cm 60kg（デヴュー時は178cm 59kgだった）
足のサイズ：27cm
視力：左・右ともに1.5

【好きな物】
色：
一番好きなのは黒、
あとは白、茶、グレーなど
煙草：今も昔もサムタイム・ライト
季節：春と秋
時間：夜
飲み物：
ウーロン茶、ファンタ・グレープ。
お酒はビール、バーボン、ウイスキー、カクテルなど、
吐くまで飲める。
酔うと陽気になる。
食べ物：焼肉、野菜、スシ、プリンなど
映画：「俺たちに明日はない」。
あとは「13日の金曜日」などのホラー物やコメディー、
純愛・ドラマ物
作家：
あまり読まないけど、恋愛小説みたいなもの。
題名だけで適当に選んでよく失敗する。
ビデオ：THE CUREのビデオ
愛読書：ぼのぼの
ブランド：特にない
アーティスト：
ロバート・スミス、
布袋寅泰、
香川誠、
ジョン・レノン、
ポール・マッカートニー
ギタリスト：
ダニエル・アッシュ、
デヴィット・バーン、
尊敬するギタリストは特になし
街：藤岡、高崎、
外国ではスイス、イギリスなど色々
行為：疲れてフトンの中に入る瞬間
俳優・歌手・タレント：今は特になし。
昔は、小泉今日子、田中美佐子、
柴田恭兵、ビートたけし、
五十嵐淳子などの名前をあげていた。
スポーツ：学生時代にやってたのはサッカー
（ゴールキーパーで小中学校時代は県代表にも選ばれた）。
障害走、やってみたいのはゴルフ
【嫌いな物】
食べ物：ない
飲み物：ショウコウ酒
人間：思いやりのない奴

資格：調理師免許。だが料理は苦手かも知れない。
自動車の免許
得意だった学科：（得意ではなく、好きだったのは）体育・数学
不得意だった学科：国語・社会など
服の趣味：ラフな服装
くつろぎの場：自分の部屋
オフの過ごし方：ボーっとしてるか
買物か音楽を聴いてる
一番欲しいもの：時間
もらって嬉しい物：手紙、タバコ、服
習慣・クセ：寝る前にトイレに行く、すぐ臭いを嗅ぐ、
朝起きて3分はボーッとしてる、眠くなったら寝る
メイク所用時間：90分
髪の手入れ：年に一回くらい床屋へ行く
入浴時間：20〜30分
食事時間：30分〜1時間
自分の必需品：風呂、布団、こたつ、
クーラー、ギター、ウォークマン

憧れた職業：サッカー選手か歌手
ヒーロー：仮面ライダー、ウルトラマン
初恋の思い出：一緒に映画を見に行った
ファーストキッス：自宅で
ラブレター：書いたことない
ナンパ：何回か
告白の言葉：多分「好きです」
女性の何処を最初に見る：目か顔
好きなタイプ：気取らない人・飾らない人
嫌いなタイプ：気取ってる人
結婚観：明るく楽しく、広い庭に豪邸
酔いが回ると：陽気になる
ギャンブル：嫌い
メンバーについて：
桜井　書く詞なんかはエロチックというか
今井　人と違ったことをしたいみたいな
自由なギターを弾く。
自分とは全く違った解釈で曲に取り組む。
自分の性格：自分でもよく解りません。
BUCK-TICKを一言で：自分が自然でいられる所

初めて買ったレコード：ピンクレディー「ペッパー警部」
最初にインパクトを受けたレコード：兄の影響でビートルズ、バンドを始める頃にはピストルズなどのパンク
よく聴くレコード：THE CURE、XTC、ポール・マッカートニー
ギター・キャリア：知らないうちになっていた。弾き始めたのは高校の終り頃で、殆どすぐステージに立っていた。
バンド組むのも最初は冗談かと思って、とりあえず練習とか行ってるうちに、何となく本格的になって…みたいな。でも、そういう運命だったような…。
ギタリストとしての信条：エフェクターとかよりも、クリアなキレイな音が好きなんて、その辺を追求できるギタリスト。曲を自分の中で映像のイメージにしてアレンジする。
リズム隊に忠実にヘタでもなんでも色んな楽器にも挑戦したい。
最初に買ったギター：グレコのストラトキャスター

使用機材：フェルナンデス・ヒデ・モデル、メサ・ブギー・ギターアンプ、セイモア・ダンカン・ギターアンプ、ロックトロン・モデル311コンプレッサー/エキスパンダー、プロコR2DUディストーション、ヤマハSPX-90Ⅱマルチ・エフェクター、コルグA3マルチ・エフェクター、ベスタクスDIG412Bデジタル・ディレイ、ロックトロン・プロ・コーラス、BBE♯401ユニマックス・エキサイター、ロックトロン/ボブ・ブラッドショウ・エフェクター・プログラマー、ボスGE-7グラフィックイコライザー、ボスDD-3デジタル・ディレイ、コルグODV-1オーバー・ドライブ

VITAL STATISTICS

ヤガミトール

【好きな物】
色:緑、赤、白、黒だが、気分で違う
季節:春
時間:夜明け
煙草:今も昔もマイルドセブン・ライト
飲み物:スポーツ・ドリンク、レモン・ティー、酒は体調次第で何でも飲む(ビール、バーボン、ズブロッカ、コロナ・ビールなど)
食べ物:プリン、その他沢山
映画:「バック・トゥ・ザ・フューチャー」「ファイナル・カウントダウン」など
愛読書:コミック・モーニング、少年ジャンプ、ビックコミック・スピリッツ
アーティスト:矢沢永吉、ビートルズ、キッス、ボンタさん、高橋まこと氏
好きなドラマー:ドン・ブリュワー(グランド・ファンク・レイルロード)キース・ムーン(ザ・フー)など
俳優・歌手・タレント:マリリン・モンロー、杉本彩、植木等(クレイジー・キャッツ)、ドリフターズ
ブランド:ラ・ケンジントン
スポーツ:見るのではボクシング、中三の時野球(外野)、あとは卓球

【嫌いな物】
食べ物:レバー
飲み物:コーラ
人間:弱い者イジメ、人殺し

1962年8月19日生まれ　獅子座
本名:教えてない。トールは交通事故の後遺症で死んでしまった兄「享」の名、ヤガミは単にゴロがいいから。ひとりだけ芸名を使っているのは、髪立ててメイクした仕事の自分と、髪おろしてメイク取ったプライベートの自分を区別したかったから「俺達は"自分"を売ってるんじゃなく"音楽"を売ってる」
血液型:A型
身長・体重:170cm 48kg
足のサイズ:25cm
視力:左右とも1.5

昔のアダ名:カラス
資格:普通自動車免許
得意だった学科:高校は3ケ月で辞めた。その後編入した高校も三日しか行かなかった。
職歴:鉄筋工、上京後は様々なバイトをした
服の趣味:黒が好きだが似合えば何でもいい、カッコいいかどうか
くつろぎの場:群馬の自分の部屋、住んでる部屋
オフの過ごし方:ゴロゴロ、本を読む、音楽を聴く、ビデオを見る
一番欲しい物:幸福
もらって嬉しい物:タバコ、プリンなど生活に必要なもの
夢:年取ったら豪邸建てて印税生活しながらハーレム作って遊んで暮らす。
ギャンブル:あまり好きじゃない
信条:ムダ使いはしない
デヴューして一番嬉しかったこと:親父が音楽することを認めてくれたこと
習慣:起きぬけのタバコ、寝る前のトイレ
使用化粧品:決めてない
メイク所用時間:2時間
髪の手入れ:年に一度くらい自分もしくは床屋で切る
入浴時間:30〜40分
食事時間:10分以内

自分の必需品:ウォークマン
憧れた職業:プロゴルファー
ヒーロー:長嶋茂雄
弱点:アガリ症
初恋の思い出:忘れた
ファーストキッス:震えた
ラブレター:ある
ナンパ:ある
女性のまず何処を見る:顔
好きなタイプ:モデルさんタイプ
嫌いなタイプ:男の心を玩ぶタイプ
結婚観:今は考えてないが(一般的には)30前にするものかな
理想の家庭:円満な家庭で、ビルみたいな家
どんな親になる:子供を一流のミュージシャンにする
初めての飲酒:忘れた
酔うとどうなる:クドく説教する
メンバーの印象:桜井はボーカリストというより、練習しても得られないカッコ良さを持ったパフォーマー。今井は凄い曲を書く。最初は子供だと思ったら、ひとりひとり天才だった。
自分の性格:解らないけど、自分勝手でワガママなんじゃないか。売られたケンカは買う方だけどモノグサ。

初めて買ったレコード:ビートルズ「レット・イット・ビー」
初めて音楽的インパクトを受けたアーティスト:ローリング・ストーンズ「サティスファクション」、パンクではクラッシュ、とどめにピストルズ
よく聴くレコード:XTC、ボズ・スキャッグス、ビートルズ、ユーミンなど
ドラム・キャリア:中学3年から。死んだ兄の形見のドラムを引き取って始めたんで、運命みたいなもんだと思ってる。
ドラマーとしての信条:音を聞いただけでヤガミだと判る型破りなドラマー ミュートは嫌い。モタるよりハシる。モタった時にはドラムを止める。
初めてのステージ:中学の学祭。クラスメイトで作ったバンドでキャロルの「憎いあの娘」を演奏した

使用機材:パール製ドラム・セット〔22"バスドラ(深さ18"木胴)×2/フロアタム(右18"、左16"、深さ16"木胴)/タム(12"と14"、ファイバーグラス製)/14"スネア(深さ6 1/2"、スティール胴)〕、セイビアン・シンバル〔18"、16"ミディアム・クラッシュ、18"チャイナ・シルバル、18"チャイニーズ・フラット、21"ヘビー・ライド、14"フラット・ハイハット〕、エレクトリック・ドラム・パッド(パール、ボス)、オーディオ/ミディトリガーME35T、アカイS-1000サンプリング音源、アカイAR900デジタル・リバーブ、パール製スティック(ヤガミ・モデル、ヒッコリー材)

VITAL STATISTICS

今井寿

【好きな物】
色:赤・白・黒
時間:真夜中
煙草:セイラム(昔はサムタイム)
食べ物:
味噌汁、なめたけ、スシ、ライム、漬物、
タバスコ、スイカ、塩辛など
飲み物:トマトジュース
ハートランド・ビール、コロナ・ビール、
ワイルド・ターキー、フォア・ローゼス
映画:
「ストレンジャー・ザン・パラダイス」
「13日の金曜日」
「フリークス」など
作家:
村上龍みたいな現実離れしたような作品
愛読書:「限りなく透明に近いブルー」
「コインロッカー・ベイビーズ」
少年ジャンプ(JOJOの奇妙な冒険)
ブランド:
ゴルチエ、
(昔はロボット、ロンドンドリーミングなどだったが、
本当は何でもいいらしい)
街:人気の無い静かな所
言葉:自由
アーティスト:
バウハウス、
ラヴ・アンド・ロケッツ、
ロバート・スミス、ジョン・ライドン、
ボーイ・ジョージ、YMO、
布袋寅泰、クラフトワーク、
ウルトラヴォックス、
香川誠、クラウス・ノミ
俳優・歌手・タレント:
特にはいないが過去のインタヴューでは、
荻野目洋子、桃井かおり、
ビートたけしなどの名前を挙げていた
スポーツ:興味なし
高校時代はラグビーを無理矢理やらされた
バンドでは:LIVEがいちばんラク

【嫌いな物】
食べ物:特にないが、ウインナーとハンバーグ
飲み物:マリンクラブ
物:核ミサイル、溜息
人間:嘘つき

1965年10月21日生まれ　天秤座
本名:同じ
血液型:O型
身長・体重:174cm 60kg(デヴュー時は58kgだった)
足のサイズ:26cm
視力:左・右とも1.2

メンバーの印象:
桜井　目つきのスルドイ奴。見かけはハードだけど、
書く詞なんかはロマンチックで甘く切ないところがある。
冷たいイメージやあまり使われない言葉に
わざと置き換えるところが違いかな…。
コピーが一番簡単な曲:「エンプティ・ガール」
資格:なし
得意だった学科:なし
不得意だった学科:全部
アルバイト歴:小僧寿司
服の趣味:
スーツ、ネクタイ、スカート、ブーツ、皮ジャン、
パステルカラーのものは嫌い
くつろぎの場:自分の部屋、寺
オフの過ごし方:買い物、レコード聴くかギターを弾く
もらって嬉しい物:洋服、タバコ、手紙、化粧品など
ギャンブル:のめり込みそうな気がするのでキライ、
強いて言えば花札
行ってみたい国:
色々あるが行くことを考えると面倒臭い。
とりあえずはエジプトかな。
苦手:早起き

使用化粧品:決めてない
メイク所用時間:90分
髪の手入れ:自分で切る
入浴時間:5〜10分
食事時間:20〜30分
自分の必需品:タバコ、味噌汁、音楽、ウォークマン
憧れた職業:歌手、探検家、野球選手
初恋の思い出:二人乗り
ラブレター:書いたことない
女性のまず何処を見る:目
好きな娘のタイプ:真面目そうな人
嫌いな娘のタイプ:変な子
理想の家庭:考えたこともないが、広い家がいい
どんな親になる:考えたこともない
初めての飲酒:16〜7の時
酔うとどうなる:はしゃぐ、眠ってしまう
自分の性格:
気に入らないと雰囲気で表す。
行動などでも極端なところがある。
ひとつのことに凝るとそればかりやってたり、
積極的に動くこともあれば
ずーっと家にこもってしまうこともある。
どちらかというと三枚目に近いかな。人間臭さは出したくない。
弱点:ノド、心臓

初めて買ったレコード:沢田研二「憎みきれないろくでなし」の4曲入りシングル
最初にインパクトを受けたアーティスト:強いてあげればYMO、スターリン、ピストルズなどのバンドもの
よく聴くレコード:THE CURE、YMO、4 AD(コクトー・ツインズ等)、ケイト・ブッシュなど
ギター・キャリア:18才から
最初に買ったギター:フレッシャーの左利き用(通信販売)のストラトキャスター
理想のギタリスト:独特の雰囲気を持っていて、見かけでカッコ悪い事しててもそれが似合ってしまうようなギタリスト
好きなギタリスト:仲井戸麗市、布袋寅泰、ロバート・スミス、ダニエル・アッシュ、スティーヴン・スティーヴンス
初めての作曲:小学校の時タテ笛の宿題で小曲を作った。みんなの前で吹いて、先生にまとまりがあるとホメられた。
作曲法:自分の家で“作ろう”と気合いを入れないとダメ。最初の頃は人を驚かせることや、人を楽しませることをイメージして作った。

使用機材:フェルナンデス・今井モデル・ギター(ギター・シンセ用PU付)、P−プロジェクト・今井モデル・ギター、メサ・ブギー・ギターアンプX2、ロックトロン・モデル311・コンプレッサー/エキスパンダー、マクソンEPP400・エフェクター・プログラマー、ヤマハGQ1031BⅡグラフィック・イコライザー、マクソンHD1000ハーモニック・ディレイ、ベスタックスDIG−412Bデジタルディレイ、マクソンDAD2000デジタル・ディレイ、BBE＃401ユニマックス・エキサイター、レーンSM26スプリッター・ミキサー、レキシコンPCM70デジタル・エフェクッ・プロセッサー、ヤマハSPX900マルチ・エフェクター、ヤマハSPX1000マルチ・エフェクター、ロックトロン/ブラッドショウ・エフェクター・プログラマー、ローランドSPV355ギター・シンセサイザー、ボスDD−3デジタル・ディレイ、エレクトロ・ハーモニクス・ビッグ・マフ、プロコ・ラット・ディストーション、ボスGE−クィコライザーX2、プロコ・ターボ・ラット、ロックトロンEXHエキサイター/ハッシュ、デジテック・ピッチライダー7000マークⅡギター/MIDIインターフェイス、コルグM1Rシンセサイザー・モジュール

VITAL STATISTICS

【好きな物】
色：黒
季節：春
煙草：今も昔もセブンスター
飲み物：ウーロン茶
酒なら日本酒以外なんでも
意識がなくなるまでとことん飲む
食べ物：野菜、スシなど一杯ある
映画：「ブレードランナー」など
作家：これから探す
愛読書：少年ジャンプ
街：京都
言葉：努力

樋口豊

アーティスト：一杯
女優・歌手・タレント：浅野温子、酒井法子、シド・ヴィシャス、岡本信人、ビートたけし、のっぽさん
歴史上の人物：坂本龍馬
スポーツ：観るなら野球、中学までは野球少年
バンドでは：LIVE

【嫌いなもの】
食べもの：シイタケ
飲みもの：維力
人間：ナンパな男

1967年1月24日生まれ　水瓶座
本名：同じ
血液型：A型
身長・体重：167cm 48kg
足のサイズ：24.5cm
視力：右0.9　左1.2

資格：なし
得意だった学科：社会
不得意だった学科：数学
服の趣味：黒っぽいもの。でも良いものなら何でも可。
くつろぎの場：家
オフの過ごし方：音楽聴くか、ボーッとする
一番欲しいもの：色々(スタジオとか)
もらって嬉しいもの：身につけるもの、
でも心がこもっていれば何でも
夢：世界中でライヴをする
習慣・クセ：朝起きるとタバコを吸う。
朝御飯は食べない。寝る前に水を飲む。
左向きに寝る。ピックを噛む。
使用化粧品：こだわらない
メイク所用時間：30分　ヘアーは45分
髪の手入れ：一ケ月に一回くらい床屋に行く
入浴時間：40分以内
食事時間：30分くらい
自分の必需品：タバコ、ハブラシ、TV、ステレオ
憧れた職業：教師、野球選手
ヒーロー：ウルトラセブン(モロボシ・ダン)

メンバーについて：
ヤガミ　血がつながってるから、
言葉にしなくても解っちゃうところがある。
バンド経験が長いからいろんなこと聞けるし話ができる
初恋の思い出：三輪車に乗ってる頃、近くの学校までデート
ファーストキッス：思い出はない
ラブレター：書いたことない
ナンパ：したことあるけどヘタみたい
告白の言葉：ストレートに「好きです」
好きな娘のタイプ：優しいんだけどそれを表に出さない子、
憎めない子
嫌いな娘のタイプ：お高くとまってる子
結婚観：考えたことない
理想の家庭：離婚のない家庭。広い家。
どんな親になる：過保護
初めての飲酒：中学の頃コークハイで吐いた
自分の性格：神経質かな。自然と人の世話をやいてしまう。
腰が低い奴とよく言われますけど…
バンドの中の役割を自然と果たしてるだけなんですけどね。
弱点：泣くこと
BUCK-TICKを一言で：
メロディー重視だから、それは音楽の原点というか、
流行に左右されないし、一体どうなるか誰にも読めないバンド

最初にインパクトを受けたアーティスト：セックス・ピストルズ。でも兄たちの影響で、キッスやエアロスミスやＴレックスなど色んな音楽が常に耳に入って来てたから、
特定のバンドとかにあまり思い入れなくバンドを始められた。
よく聴くレコード：XTC、コステロ
ベース・キャリア：高校２年の秋から
初めて買ったベース：トーカイのジャズ・ベース
ベーシストとしての信条：堅実でズシッとくるベース。地味でも必要不可欠なベーシスト。前の３人が存分に暴れられるように、アニイとしっかりリズムをキープするのが役目
影響を受けたベーシスト：スティング、松井恒松

使用機材：グレコPXBユータ・モデル、スペクターNS-2×2、トレイス・エリオットAH500アンプヘッド、トレイス・エリオット1518スピーカー×2、トレイス・エリオット1048スピーカー×2

VITAL STATISTICS

【好きな物】
色:黒・赤・白
季節:冬
煙草:ラッキーストライク(昔はキャスター)
食べ物:
スシ(トロ、エビ)、シチュー
飲み物:
バーボン(I.W.・ハーパー、ワイルド・ターキーをロックで)なら、
かなり飲める
映画:
「太陽がいっぱい」
「俺たちに明日はない」
「狂い咲きサンダーロード」、
あとはヨーロッパのアン・ハッピーエンドの芸術映画
作家:ボードレール、太宰治
最近読んだ本:
太宰治「斜陽」、
オスカー・ワイルド「ドリアン・グレイの肖像」
愛読書:特にナシ
街:京都
時間:
もの想いにふけっている時、
ゆっくりと流れていく時間
ブランド:
かっこ良ければ何でもいいが、
よく着るのはアーストン・ボラージュとか
ルナマティーノ
アーティスト:
バウハウス、ラヴ・アンド・ロケッツ、
デヴィッド・ボウイなど、
暗いカゲを引きずっているアーティスト
俳優・歌手・タレント:アラン・ドロン
歴史上の人物:いない
スポーツ:
サッカー、バスケット、バレーボール
自分の中では:目、声
バンドでは:ステージ

【嫌いな物】
食べ物:貝類、らっきょう、シイタケ、
タケノコ、レバー、なす
人間:
エバって人を見下す奴、
コソコソした卑怯な奴、ズルイ奴

桜井敦司

1966年3月7日生まれ　魚座
本名:同じ
血液型:O型
身長・体重:177cm 60kg(デヴュー時は57kgだった)
足のサイズ:26cm
視力:左右とも1.5

資格:普通自動車免許
得意だった学科:体育
苦手だった学科:ほとんど
服の趣味:ラフな服装、似合えば何でもいい
くつろぎの場:ベッドの中
オフの過ごし方:家にこもって空想してることが多い。
たまに飲みに行ったり買い物に行く。
一番ほしい物:時間
もらってうれしい物:気持ちがこもっていれば何でも嬉しい
行ってみたい所:エジプト、ビルマ、シンガポール、
イスタンブールなど色んな所に行きたい
習慣・クセ:起きてからと寝る前にタバコを吸う
使用化粧品:なんでもいいが、資生堂が多い
メイク所用時間:30分
髪の手入れ:自分で切る
入浴時間:20分くらい
食事時間:10分くらい
自分の必需品:夢
ギャンブル:好きじゃない
憧れた職業:ない
初恋の思い出:ない
ラブレター:中学校の頃に書いた
ナンパ:したことはある
女性に会って最初に見るところ:目
好きなタイプ:控えめで女らしく可愛らしい人。
小悪魔的で一見冷淡に見えても優しい純粋さのある人
嫌いなタイプ:ずうずうしい、男好き、遊び好き、嘘つき
告白の言葉:言葉じゃないと思う

セックス観:
うーん、空しいって言うか、最中はいいけど(笑)、
終わった後のなんて言うか、まあ、覚えたての頃ですけどね、それは。
だから終わった後には何もないって言うか、
そういうのを「VICTIMS OF LOVE」では表したかった。
その最中のことも、ま、表現してるんだけども、
その後のことを、すごく…、なんていうか、出したかったというのがあって。
(フールズメイト88年8月号　「SEVENTH HEAVEN」リリース直後のインタヴューより)
結婚観:一度してみたいと思うが、似合わないと思う
理想の家庭:海の見えるお城
初めての飲酒:小学校の時、オヤジにビールを飲まされた
酔うと:陽気になって、涙モロくなる。
メンバーの印象:
ユータ　職人かたぎ
今井　高校一年の時に同じクラスだったけど、
その時は一言も話さなかったから、印象というほどのものは…。
ドラムやってる頃は、ひとりで黙々とやってた感じだけど、
ヴォーカル取ってからは
今井がとても頼りになるヤツだと思ったというか、
好き勝手にやりながらカッコいいギター弾くし、
抽象的な性格だけど(笑)、ほんと頼りになるカワイイ奴。
自分の性格:わがままというか自分勝手で、
好きなことにはのめり込むけどイヤなことはとことんイヤになる。
目立ちたがり屋かな、誰かに注目されていたいと思ってたから。
しかも優柔不断。小さい頃は内向的なTVっ子だった。
気持ちがすぐ顔に出るところは短気だと思う。要は不器用なんです。
プライベートでは普通の町の兄ちゃんみたいなもん。
弱点:教えない

初めて買ったレコード:原田真二『FEEL HAPPY』
よく聴くレコード:バロック音楽などのクラシック、バウハウス系、ボウイの『ジギー・スターダスト』、ブライアン・フェリー『ボーイズ・アンド・ガールズ』など
ヴォーカル・キャリア:85年12月から歌い始め(初めて歌ったのは「TO-SERCH」)その月にはもうステージに立っていた。
初期で印象的なステージは初めての新宿のJAMとロフト。初めてのレコーディングは86年6月。
理想のヴォーカリスト:バンドの中でも一番見せるというか、見られるということを意識した絵になるカッコいいヴォーカリストが理想。
強いて挙げるならデヴィッド・ボウイ、ピーター・マーフィー、イギー・ポップなど、男の目から見てもカッコいいヴォーカリストになって一生カッコつけて生きたい。
自分の声:細くて壊れそうな声。大事なもの
ドラム歴:一年くらい。叩きながら後ろからステージを見て、俺ならもっとカッコ良いヴォーカルできると思った。
あのままドラムを続けてたら今の俺はなかっただろうし、バンドもやってなかったと思う。

HYPER VISUAL ARTIST MAGAZINE

No.2 HYP NUMBER 2

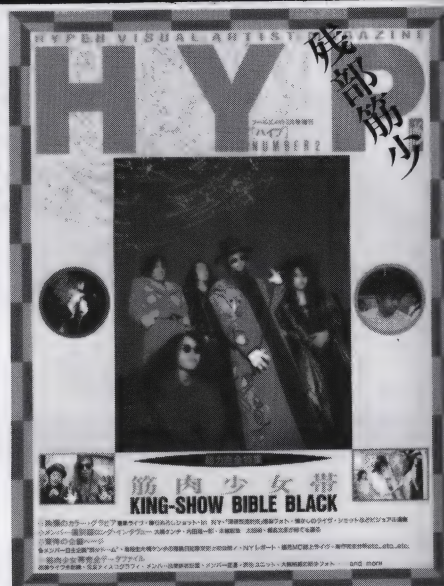
キョーレツ企画と秘蔵の一級資料でお贈りするHYP2号は KING－SHOW全面強力による必携保存版。かつてないメンバーの激白満載、渾身の力を込めた大特集！

発売中

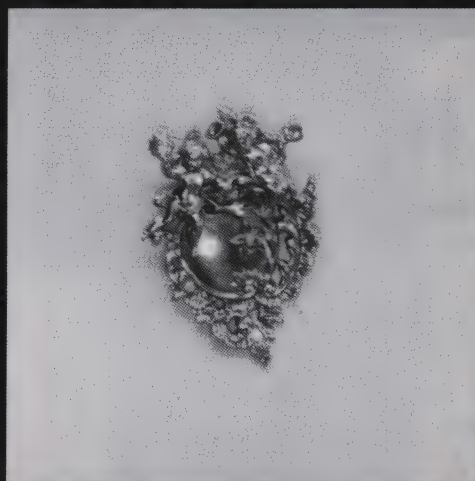
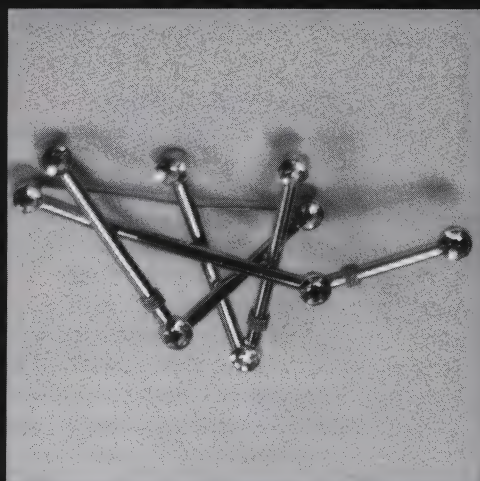
定価880円

筋肉少女帯

カラーグラビア■最新ライヴ、キメキメ撮り下ろしはもちろんTV爆発ショット、NY特写、忘れじの愛蔵スナップなど超広角に一挙放出。
個別徹底インタビュー■大槻・内田・橘高・本城・太田……、調書さながらの人格分析からオタクなほどにつっこむパーソナル夜話まで、載せるのもハバかられる戦慄の発言を含むハイグレードな筋少発掘。フルヴォリュームの36頁！
詳解・最新作の全貌■様々な暗示を秘めた大問題作「サーカス団パノラマ島へ帰る」を鋭く深く論説。乱歩も驚く大槻ケンヂの内面性究明、およびテクニカルなサウンド・メイキング実践と、両サイドから攻めまくり。作品が10倍おもしろくなるパノラマ・ガイド。
メンバー考案自主企画■こだわる5人がハイプ・ジャック！　とっておきの各分野で大いにウンチクした解放区。橘高のハードロック講座、太田の飲み歩きマップ、本城流ファッション・アドバイス、内田の音楽評論“逆評論”ほか、軒を並べるツウな企画の数々。
大槻の暗黒日記■まさに禁断。モテないクラい絶望の高校生活に、少年大槻はナニを考えていたのか!?　綿々と綴られた肉筆を本人の決断により独占原文掲載！
オフィシャル・データファイル■結成メンバー所有の未公開写真、ライヴ全記録を根幹とし、ディスコグラフィ、多数の証言、関連ユニットから社会情勢をも交えたバンド・ヒストリー。武道館までの活動をほぼ完全に網羅した13頁に及ぶ資料編。
他にも**「深夜改造計画」ハイライト■NY珍紀行■ライヴMC解剖■ファン代表座談会**…などなど全110頁筋少だらけ、怒濤のハイプ第2弾。

今や筋少ファンのあたりまえ。再び「パノラマ島へ帰る」彼らの概念は、ここに集約されている。ラスト・チャンスだ！

売り切れ店続出のため手に入らないときはお近くの書店にて「フールズメイト３月号増刊ハイプ２号」と指定の上、ガンガン注文して下さい。
直接小社まで お申込みの場合は、以下の方法で
定価880円に送料200円を添えて①現金書留で送る②郵便為替で送る③郵便振替口座（東京5-97179）へ HYP2号希望と銘記して振込む。

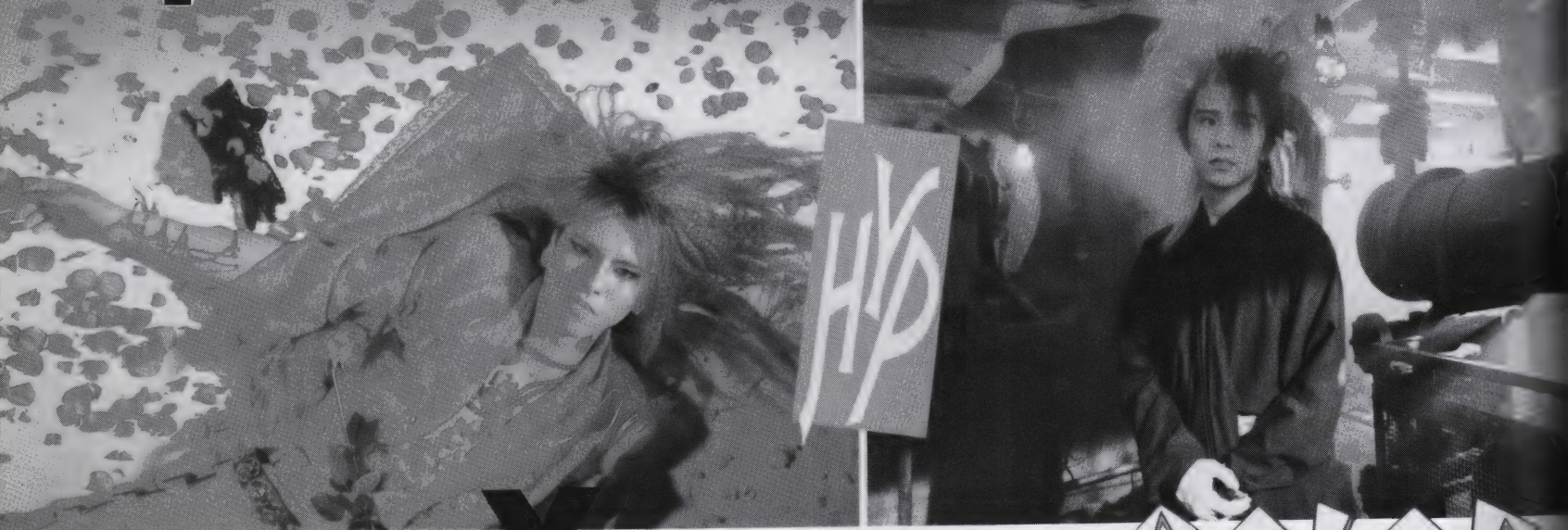
フールズメイト
〒151 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1305

PRESENTS

[送り先]〒150 東京都渋谷区本町1-7-16初台ハイツ1305 フールズメイト編集部(例)**「B-Tプレゼント④」係**

[応募方法]HYP3号のプレゼントは、B-Tにより厳選された一点豪華主義でお贈りします。
ハガキに希望の品を明記の上、下記の住所までお送りください。本誌へのご意見、ご感想等もお忘れなく。
〆切は7月末日、③〜⑥の当選者はフールズメイト9月号(8月29日発売)誌上で発表いたします。

HYPER VISUAL ARTIST MAGAZINE

[X & COLOR の二大特集]

X

COLOR

〈ハイプ〉は全く新しい特集Onlyの音楽誌
どこを開いても二大特集

HYP(ハイプ)1号

HYP は特集 ONLY の"新雑誌"。創刊号はどのページも X と COLOR 関連の記事&グラビア&インタヴュー&対談 etc……

※全国の書店で発売中。書店で品切れの場合は店頭で「フールズメイト10月増刊・ハイプ1号」として御注文下さい。

A4変型版・定価880円(税込み)全国書店・有名楽器店・一部レコード店で好評発売中!!

(オリコン・ウィーク
'89 10.30日号)

●単行本とも写真集とも違う特集onlyの音楽誌

普通"音楽誌"というと、1号につき数十のアーティスト記事で構成されているもの。その既成概念を大きく打ち破る新感覚の雑誌が登場した。その名も"HYP(ハイプ)"(フールズメイト増刊・880円)。毎号2~3アーティストを徹底的に追求したインタビューや写真で構成。特集本と言うと、どうしても情報性、速報性に欠けるものだが、"HYP"は特集本でありながらも諸問題をクリアしているという貴重な新雑誌。取りあげるアーティストも洋・邦や音楽のジャンルを問わず、フレキシブルにセレクトしていくというから楽しみだ。

創刊第一号は、いま話題の二大バンド、XとCOLORの大特集。ディスコグラフィー、バンド・ヒストリーはもちろん、インタビューや写真もバッチリ、ファンなら思わず大満足の1冊なのだ。12月発売予定の第2号は、これまた話題の筋肉少女帯を大特集! お見逃しなく。

各誌注目!!

(ロック・ファイル様 Vol. 8)

Xのことを知りたい人にこの一冊をおすすめしよう

「Xについてのことなら何でも知りたい!」というあなたのために作られたのがフールズメイト89年10月号増刊の『HYP』だ。Xとカラーの2大特集。

内容は、というとライヴを中心としたカラー写真がバッチリの他メンバー5人のパーソナル・インタビュー、8月に大阪アム・ホールで行なわれた「大魔神5人組」というXのイベント取材ページ、結成から現在までの全ライヴ記録、ディスコ・グラフィーまでを網羅している。また、大作「ローズ・オブ・ペイン」のモチーフとなったエリザベート・バートリー(16世紀のハンガリー伯爵夫人)についてのヨシキのコメントが興味深い。Xとカラーの全メンバーによる対談も笑える。

ロクf推選BOOKS

「HYP」
(フールズメイト ¥880)

ずばり、エックスとカラーの本。カラー・グラフ、個室面談、大魔神イヴェント、ヒストリー、ディスコグラフィーというエックス編と、カラー・グラフ、関係者の証言、トミー語録、全員インタヴューなどのカラー編が、もちろん中心なのだが、エクスタシーとフリーフィルという、彼らが設立したレーベルのアーティスト紹介記事も収録されている。巻末には、酒とスシをはさんでの両バンドのフリー・トークが……。あな、恐ろしや!

(ロッキン f 様 '89年 11月号)

購入を希望される方は,①書店を通じて注文する(その際は,フールズメイト10月号増刊HYP 1号として注文して下さい) ②現金書留か無記名為替で当社に直接送金する(この場合は代金880円の他に送料が1冊につき200円加算されます)

〔申込み先〕
〒151 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1305
フールズメイトまで

読者アンケート

HYP3号BUCK-TICK特集をお買い上げ戴きましてありがとうございます。今後の誌面充実のため、アンケートにご協力ください。
ご回答戴いた中より抽選で20名の方にHYPで使用されたカラー写真を特製パネルにしてお贈りいたします。
何ページのどの写真希望かを明記の上、ふるってお寄せください。〆切は7月末日。

[送り先]〒151 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1305 フールズメイト編集部「HYPアンケート」係

cut here

氏名	住所[〒]	年齢 歳	職業(学年)

❶今までに「HYP」を買ったことは?
●ある [1号・2号] ●ない

❷「HYP」を何で知りましたか?
●フールズメイトで
●それ以外

❸「HYP3号」はどのように入手しましたか?
●書店で ●通信販売で
●その他

❹「フールズメイト」を読んでいますか?
●毎号買っている ●B-Tが載ったら買う ●ぜんぜん知らない

❺「HYP3号」で良かった記事は?
その理由

❻「HYP3号」で良かった写真は?
その理由

❼「HYP3号」で悪かった記事は?
その理由

❽今後の「HYP」にどんな記事・企画を希望しますか?

❾今後「HYP」で特集を希望するアーティストは?

❿「HYP」以外の形で、どんな本が出版されたら良いと思いますか?

⓫あなたはふだん、どんな音楽をよく聴きますか?

⓬あなたが音楽以外にいちばん興味のあることは?

⓭あなたは音楽雑誌を買う時、どういう点を選ぶ基準にしていますか?

⓮「HYP3号」は全体として満足のいく内容でしたか?
●期待を上まわる大満足 ●それなりに合格点
●もっと〜してほしかった

⓯その他、何でもかまいません。本誌へのご意見・ご希望、感想等を。

ご協力ありがとうございました。

完全保存版
BUCK-TICK全記録
CHRONICLE

メンバー5人の強い結束、誰に対しても決して変わることのない柔らかな物腰、そして常に向上心を失わない独特にして高度な音楽性、そして、彼ら自身の優しさ…。人を惹きつけずにはおかない彼らの魅力を列挙していけば限りはない。彼らのオフィシャルな歴史に踏み込む前に、その精神性の真のルーツを求めて、彼らの故郷である群馬を訪ねた。羽根を広げた鶴が優雅に舞う姿にも似た群馬県は、森と緑の豊かな地であり、古来から〝義理人情に厚い〟人々の国としても名高い。そしてその群馬で、取材中に出逢った方々の暖かさ・優しさに肌で触れた時、BUCK－TICKが今に至る確かな〝何か〟を見た思いがした。

ここでは、BUCK－TICK成立につながる貴重なエピソードや証言で構成したpre－BUCK－TICK HISTORY(バクチク以前史)を、駆け足で振り返ってみたい。また、お忙しい中、今回の取材にご協力いただいた家族の皆様に、この場を借りて心からお礼申し上げたいと思います。

chapter 1

pre-BUCK-TICK ZONE

いかなるビッグ・アーティストといえども彼らは最初からそうだったわけではない。人間に幼年期、思春期、壮年期、といった成熟のプロセスがあるようにバンドにも結成前からデヴュー、そして自分達の地位の確立といった流れがある

すでにBUCK-TICKに関しては多くのメディアによって彼らのルーツ部分が明らかにされてきた

そこでHYPは、彼らの生まれ育った地を訪ねメンバーそれぞれを最も身近かで見守ってきた方たちのお話を紹介することによって、今いちどBUCK-TICKというナンバー・ワン・バンドの持つ魅力の源泉を、貴重なエピソードをたどりながらよりリアルに振り返ってみようと思う

彼らの幼年期まで遡る〝Pre-BUCK-TICK Story〟やはりそれは、BOØWYを生み、ROGUEも誕生させた彼らの故郷、群馬の地を抜きには語れない

「下の子はね、きかなかったのよワンパク小僧ね」

と、開口一番にヤガミ・トール、樋口豊兄弟の母親は語る　ご承知の通り、ドラムのヤガミとベースの樋口は5歳違いの兄と弟で、群馬県高崎市に、姉を含む4人兄弟の下の2人として育った　ヤガミの〝トール〟というファースト・ネームがすでに故人である兄の名〝亨〟からとられていることもよく知られた話である

「ユータ(豊)は気がつく子でね、小さい頃から　お兄ちゃん(ヤガミ)の方は、わりとおっとりしていておとなしくてね、女の子みたいな性格だったわね　本当よ　…お兄ちゃんには何もさせなかったの　あの頃はおばあちゃんもお手伝さんもいたから　靴下履かせて、それこそランドセルだって肩にちゃんとしょわせてもらって、学校まで送ってもらって　だからね、小さい時に、咳をコンッてしただけでお医者さんってわけで、そのせいか、逆に身体が弱かったのね　兄弟関係は、お兄ちゃんは面倒見が良いしおとなしかったからね　気持ちが優しい子だった下の子はきかなかったけど(笑)」

ヤガミの意外な幼少期だが、現在BUCK-TICKでのバンド運営の要となっている2人のコンビネーションの源はこんな性格の違いからもうかがえそうだ

「お兄ちゃんは中学校の時に卓球部やっていたんですよ　1年生の時に球拾いばかりで練習できないからっていうんで、卓球台を買ってあげてね　15、16人来てたかしらね、毎日卓球部の人が…学校じゃできないからウチで練習してたの」

「ユータは中学校は大類中っていって、昔は第八中って言ってたんですよ　そこで野球部をやっていたんで遅くまで練習してましたね　ユータはね、ガキ大将でしたよ(笑)　ケンカ強かったしね　だけどね、弱い者の味方なんですよ　自分の子分がやられちゃうと仕返しするんです　小さい時なんかね、グループが集まってケンカになるでしょう、でもケガ人が出ると困るんで代表を出すわけ　するとユータが代表なわけですよ　むこうはとても大きい人なんだって　ユータは小さいから、みんな〝ユータン負ける〟って言うの(笑)　ユータンって昔言われてたのね〝絶対にユータンが負ける〟って　ユータはむこうの半分しか背がないんだって　そしたらね、ヨーイドンで走って行ったら、むこうの股にもぐっちゃってね、相手をひっくり返しちゃったんだって(笑)　それでね〝いじめた子に謝れ〟って　でも、ケガすることはしないけどね」

こうしていわば兄弟ゆえの理想的な表裏一体の性格関係がバンドという互いに共通する一点に集約されてゆく時、後にそれは劇的なまでの効果を発揮してゆく　ヤガミ・トールは中学時代から組んでいた〝SHOUT〟というバンドを解散し、プロ指向の新バンド〝S.P〟を'83年末にスタートさせている　高校も1年目でやめ、生活のすべてをバンド中心にしていた彼だったが、多くのコンテストに出場しプロへのチャンスをつかもうとしたS.Pは、群馬というローカル・エリアではナンバー・ワン・クラスに達していたものの、それより上へのステップには届くことなく、'85年10月の2度目のEAST WEST コンテストへの挑戦を最後に解散してしまう　当時をヤガミ・樋口兄弟の母親はこう振り返る

「お兄ちゃんはアマチュアバンドをやっていたんですよ　北関東で1位ぐらいのグループだったんだけど、それでもダメだということであきらめていたんですよ〝これだけ俺達のグループはうまいのに世に出られない〟って　ユータがやるって言った時にもね〝バカ言っちゃいけないよ〟って〝俺達だって世に出られないのに、お前達が出られるわけない〟って言ってね」

しかし運命の要となる兄弟関係はめまぐるしく回転し、より重要で大きな輪の中に収斂してゆく　まずはこの大きな運命の輪をみていこう

S.P解散に前後しての'85年8月4日、オリジナル・ラインアップのBUCK-TICKは新宿JAMで、東京デヴュー・ライヴを果たしていた　ヴォーカルにアラキ、ギターは今井寿と星野英彦、ベースに樋口豊、そしてドラムスは桜井敦司　アラキは今井の幼なじみであり、その今井と桜井は藤岡高校1年の時のクラスメート、樋口と星野は今井・桜井の1年後輩で2年の時以来のクラスメート、といった関係だった　この、正に現在のBUCK-TICK成立に

至るまでの運命的とも言える大きな輪の中枢にあったのは、今井・桜井・星野の地元である群馬県藤岡駅前にある今井の実家だった

「ウチへはね、友達が友達を呼んで狭い所にデッカイのが10人くらい入ってたみたいね」

今井の母親はもやはBUCK-TICKファンにはある種の伝説でもある〝BUCK-TICK生成現場〟について語った

「レコードを聞いたり煙草も吸っていたんじゃないかなぁ　外行って吸っちゃいけないよって言ってたから(笑)　私もね、ドーナッツとか揚げてよく持ってったけど、1キロ分の粉だって、あっという間になくなっちゃってね　みんなでペロペロって(笑)　寿は自分の知らない子が来ても全然気にならなかったみたいで、〝あの子は誰?〟って聞くとね〝誰々が連れてきたから誰々の友達じゃない〟って感じで、自分でもわかんなかったみたい(笑)　ホントにうんといたものね　それで表から入るとあの子達、靴を裏にまわしてね、表からだと寿の部屋まで遠回りになるから『人目もあるし裏から出ちゃダメだ』って言ってたんだけど、もう面倒くさくなって裏から出入りするようになっちゃったんですよね　アッちゃん(桜井)や星野君はわからなかったわね　色々な子と一緒に混じって来てたから」

駅前という地の利もあってか、電車を待つ登下校の前後にコミューンと化していた今井の自室　高崎から八高線で通学していた樋口も登校前には必ず顔を見せるひとりだった

「あの子(樋口)はね、朝が早いからウチに寄って寿を起こしてもらっていたんですよ　なかなか起きないから起こしてくれって(笑)　頼んであの子はキチンとしていたわね　寿は革靴のかかとを踏んずけて歩いていたけど、彼は本当に制服も靴もキチンとしていたわね」

弟と分けて使われていたという今井の部屋は、現在ではほとんど片づけられ、ベッドを残すのみだという

幼い頃の彼はどうだったのだろう

「小さい頃の寿はね、別に何にもないですよ　今と同じでおとなしい子でしたよ　普段からずうっとそうですよ　寿という名前はね、お父さんが一文字がほしくて、一字にしたんですよ」

同居する叔母も次のようにやはりおとなしい子だったと言う

「本当におとなしい子だったからね　静か…ただおとなしいっていうか、ひょうきんなおとなしい子だったわね　だからね、安心してよそへ連れて行けたんですよ　どこへ行くんでも連れて行ってたわね」

母親「お父さんのね、会社の運動会に連れて行ってね、〝ヨーイ〟って言ったら、寿だけしゃがんだんだって(笑)　洋服はね、小さい頃から好みがあって、買いに行って着てみて、本人が気に入ったのを買っていたんで、昔からおしゃれな子でしたよね　あと、動物とか虫とかが好きだったわね、小さい頃から　猫や犬をもらってきちゃうんですよ　それにね、家の者が猫とか叩くと寿が怒るんですよね　生き物が好きだよね」

叔母「生き物が好きなんですけどね、なついてくれないと自分でどうしたらいいのかわからないんですよ　もうかわいくてしょうがないんだけど、今の猫も彼が普段いないからなつかないんですよ」

母親「だってね、あんな頭で来られたら、猫の方だって逃げちゃうよね(笑)　そして、後ろからそう〜と猫がついていって見てるのよ(笑)」

何とも微笑ましい光景であるが、ここで話をPre-BUCK-TICKへの運命の大きな輪に戻そう　その中心である今井の音楽への端緒である、ギターへの接近はこう始まった

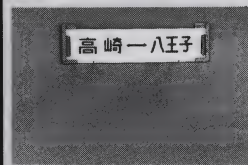
母親「ギターを買ってあげたらね、目の覚めている間中いじっていましたよ　〝あっ、またお兄ちゃんのが始まった〟って言ってねぇ　本当によくいじっていたわね(笑)　バンドをやることには反対しなかったの　オートバイに乗るんじゃないからね　本人はどう思っているか知れないけど、遊びでやっていると思っていましたからね(笑)」

ところがコミューンと化した自室で友達とレコードを聞き、YMOやRCサクセションに衝撃の洗礼を受けていた今井には、小学校5年以来の友人であるアラキとバンドを組む話が盛り上がっていた　この話はコミューンの一員であり、兄=ヤガミのバンドを身近にみていた樋口にもすぐに伝わっていった　樋口は同級生の星野をターゲットに、今井らにヴォーカリストとして星野を紹介しようと思った

星野英彦の両親は、小学・中学とサッカー少年だった息子がバンドに走ったことにまったく気づかなかったという　星野の母親はこう語ってくれた

「子供の頃は、あんまり意地悪とかしなかったし、される側でもなかったんですね　とにかく友達は多すぎるんじゃないかと思うくらい多かったんですね　わりと小さい子とかも好きで、面倒をみるって言うんでしょうかね、よく遊んでいましたよ　何か知らないけど、しゃべらないわりには好かれるっていうのか、そんな雰囲気があるんでしょうねぇ　親が言うのも変なんでしょうけど(笑)　優しいっていうのかしら　ファンの子も本人の性格に似ている子が多いみたいね　ユータ君とは高校が一緒だったんですよ　今井君と桜井君は1年上で　ユータ君は電車通学だったんで、電車の子は八高線ってあまり本数がなかったから、時間が余ると寄ったりして、それこそ毎日ウチに来てたんじゃないかしら　今井君の家とかにも寄ってたんだと思いますけど」

「バンドをやるとは夢にも思っていなかったですね、高校1年まで全然そんな気配がなくて　そういうバンドをしている事、知らなかったんですよ　学校から帰ってくるとス〜といなくなって、〝どこへ行くの〟って聞くと〝駅前の家だよ〟って言ってたんですよ　その頃は今井君のこと、知らなかったんです　一級上とか全然知らなくて、どこのウチに行っているのかなあって思っていたんです(笑)　後から考えるとその頃から集まってやってたらしいんですね(笑)　そんな程度でしたよ　別に特に凄く音楽が好きとかそういうのはなかったですから　ギターも家では全然いじっていなかったんです　先輩のお古を譲ってもらってたみたいで　家で弾いたこともなかったですよ、その当時はね」

ところがバンド初のオリジナル・ナンバーである「フリークス」を星野は作ることになる　当初はスターリンのコピー・バンドとしてスタートしたバンド、〝非難GO-GO〟こそまさにPre-BUCK-TICKの幕を

ぐんまふじおか
群馬藤岡
GUNMAFUJIOKA
群馬県藤岡市
きたふじおか KITAFUJIOKA
たんしょう TANSHŌ

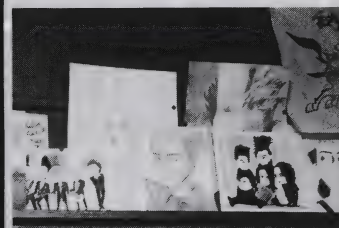
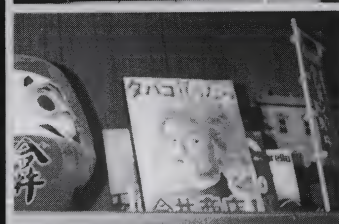
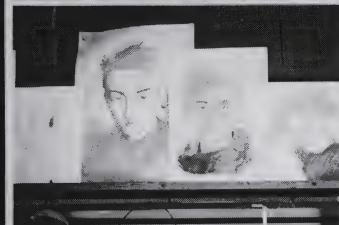
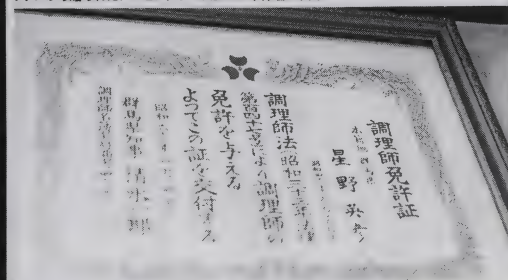
藤岡駅前

今井君の髪型を怖がるという今井家の"愛猫"(みけねこのミイちゃん)

左より、アッちゃん、樋口兄弟の従兄さんとお姉さんとお母さん、ユータ、今井君(3.23.群馬県民会館の楽屋にて)

HIDEのいた部屋

運命の糸を結びつけた藤岡高校

幼い日の今井君、小さい頃から動物好きだった

最初に切ったバンドだった　今井のコミューンに桜井敦司が新顔としてやってきた時、BUCK-TICKへの運命の大きな輪はまず第一歩を確実に踏み出していた　'84年3月、非難GO-GOはスタートした

この大きな第一歩にドラマーとして参加した桜井について、彼の1歳上である兄の語るエピソードは、後にヴォーカリストへの華麗な転身を遂げる桜井敦司を予感させるに充分なものだった

「俺なんかクルマとかね、そういう乗り物が好きだったけど、弟はその頃流行ったミクロマンっていうサイボーグ人形が好きでね　それが小学校3年くらいまでです　俺はミニカーとかでしょう、そういう感じでもう違っちゃってるんですけど、もうちょっと大きくなると今度はラジオで文化放送とかでベストテン番組ってありますよね　あれは必ず毎週日曜とか聞いてましたね　日曜日、あんまり遊びに行かないでね　テレビでも『ザ・ベストテン』ってあったでしょう、あれで統計とるでしょう　それで次の週は誰の何が何位だとかっていうんで、ノートに書き込んだりしてそんなことして遊んでるのが楽しかったみたいでね　あと『ドレミファドン』っていうのもありましたよね、あれは凄かったですよ(笑)　チャンピオン大会があったでしょう、それに出てる人達よりも全然早く答えてね　絶対負けたことなかった　出れば絶対優勝だと思った(笑)　チャンピオンのチャンピオン大会もあったでしょ、それでも互角くらいには勝負してましたね　それが小・中学校頃で、高校に入ると、あまり兄弟でも口をきかなくなりましたね」

高校時代の桜井はハミダシていた

「高校ではバイクを乗っちゃいけないんですよ、たとえ免許を持っていても　それなのにタバコを吸いながら校門の前を、まさか見つかるはずないと思って通ったんですよ　そしたら先生にみつかってしまって、無期停学になったんです　俺は工業の方へ進んだんですけど、弟は藤高で、ヒヤヒヤ・ドキドキで受験に受かって嬉しいって言っていたのに3年生もあとちょっとで無期停学になっちゃったんですよ　それでおふくろは神経的に参っちゃって　そんなんでヤツに説き伏せて、こんな状態じゃダメだからって言って、頭を坊主にして生徒指導室に連れて行ったんです　その坊主にする時も床屋で俺が"ゴリンにして下さい"って言ったんですけど、"ゴブにして下さい"ってすかさず言い直すんですよ　結構、細かいところで(笑)」

「性格はおっとりしてますね　何か、ラクダっていう感じですね　涙もろいところもあるし　小さい時はかわいくて、かわいくて、俺がね、弟をかじってばかりいたんですよ(笑)　本当にかわいくてね　今でも身体のどこかを探せば歯形があるかもしれませんね(笑)」

これで桜井ファンのあなたも何故彼に魅かれるのか、わかったでしょう　実の兄をも過激な行為に駆り立てる天性のルックスのルーツが!?

それはともかく今井の命名によってスタートした非難GO-GOは、地元で行われたアマチュア・バンドのショー・ケース的なイベントなどに出演し、当初はコピーだったが徐々にオリジナル曲中心へと音楽性を固めていった　ヴォーカルのアラキと今井は専門学校に通うために東京に移り、桜井は地元で就職、樋口と星野は高校生活最後の年を迎えていた　そして「プラスティック・シンドロームI」というナンバーを今井が初のラヴ・ソングとして書いたのを契機に、バンドは完全オリジナル指向となり、バンド名も変えられた

こうして'84年夏、BUCK-TICKが誕生した　運命の輪はその第一歩を大きくひと回りし、さらなる回転へと歩を進め始めた　バンドの誰もが本気になり、それぞれのプライベートな状況はバンドを何者にもはばまれぬためのもはや口実でしかなかった　次の回転は思わぬ速度ではずみをつけた

星野英彦と樋口豊の2人は'85年に高校を卒業し、それぞれ調理師、経営の専門学校に通うためやはり東京に住むことになる　同年、ヤガミ・トールは音楽の道をあきらめかけ、今井はバンドの現状からその方向性に煮詰まりを感じ、桜井はドラマーとしての力量に限界を感じヴォーカリスト志向を強めていくのだった

'85年11月8日、新宿JAMにてオリジナル・ラインアップによるBUCK-TICK最後のライヴが行われた　Pre-BUCK-TICK期の最終的な運命の輪、すなわちヤガミ・樋口兄弟の磁力が発揮される時が遂にやってくる　2人の母親はこう回想する

「結局、ユータはお兄ちゃんをだまして東京に連れてったんですよね(笑)　ユータはね、これだって思ったらやる子なんですよ、小さい時から　で、お兄ちゃんをうまくごまかして、着る服だけボストンバッグに詰めて、連れて行っちゃったんですよ　だけどね、お兄ちゃんはお金を一銭も持っていないの　ユータの方は専門学校に行ってたから、お金は仕送ってたから持ってるわけね　そしたら、今度お兄ちゃんが帰りたいって言ったら、お金やらないんだって(笑)　お兄ちゃんがもうダメだから群馬帰って働くよって　そしたら"じゃあ帰れば"って"お金は?"ってお兄ちゃんが聞くと、"金なんて無い無い"って言われて帰って来れなかったんだって　結果的には良かったんだけどね、こうなって」

この樋口による、強引だがどうしても兄を新しいドラマーに据えたいという駆け引きがなかったら、果たしてBUCK-TICKはどうなっていただろうか　歴史に"if"は禁物だが、同じ時期、長年の友人だったアラキに脱退の話をもちかけなければならなかった今井や彼らにバンドの方向性最重視の姿勢がなかったら　またドラムに見切りをつけた桜井にその情熱より重要なヴォーカリストとしての資質がなかったら　なにしろバンドの誰もが桜井の歌をそれまで聞いたことがなかったし、桜井も聞かせたことがなかったのだ

この、新生BUCK-TICKへ向けてのいくつもの賭はたった26日間で行われたのだった

そう、東京での拠点だった新宿JAMにて'85年12月4日、この記念すべき日にヴォーカリスト、桜井敦司がデヴューし、ヤガミ・トールが再び音楽の道に突入し、そしてPre-BUCK-TICK期に終止符を打って新生＝真性BUCK-TICKがその火ぶたを切ったのだった

桜井兄弟。左がアッちゃん右がお兄さん

一時間に一本しかなかった「八高線」が今井家を"溜まり場"にし、それがBUCK-TICK成立のきっかけになったのだ

アッちゃんを"噛んだ"お兄さん

アッちゃんの部屋

実家の壁に大切に掛けられているファンから贈られたプレゼントでいっぱいの今井君の実家

上京後、ただひとり専門学校をちゃんと卒業したHIDEの真面目な人柄を証明する調理師免状。

chapter 2

PERFECT B-T STORY 1962～1990

ひたすらカッコよく、ただ自分たちのやり方で、シーンの頂上めがけて突っ走った感のあるBUCK-TICK。その凝縮された道程を、「悪の華ツアー」の開幕を間近かに控えた某日、メンバー五人と彼らの日常を最も身近で目撃してきたマネージャーの樅岡さんに振り返ってもらった。更に、未発表写真、思い出のフォト、名CM集、ニュースコラ[illegible]など、BUCK-TICKの全資料を加えて構成したメンバーコメント付きクロニクル(年代順)による、BUCK-TICK完全史。

1962

8. 19.　ヤガミトール誕生

1965

10. 21.　今井寿誕生

1966

3. 7.　桜井敦司誕生

6. 16.　星野英彦誕生

1967

1. 24.　樋口豊誕生

1977

ヤガミ"SHOUT"結成

T｜キャロルのコピーバンドでした(笑)。

4　ヤガミ、前橋育英高校入学、夏休み前に辞める

U｜夏休み前に辞める！　中卒！(笑)

T｜中退ですね。3か月弱じゃないですか。行っても為になんないと思ったんですよ、もう生徒会長からしてツッパリでしたからねえ。

1981

4　桜井・今井、群馬県立藤岡高校入学

1982

4　樋口・星野、群馬県立藤岡高校入学

U｜出身はみんな一緒で、上毛カルタも覚えましたよ(笑)。学校で、半は強制的に買わされるんですよね。"鶴舞う形の群馬県""浅間のいたずら鬼押し出し""雷とから風、義理人情"(笑)。

A｜碓氷峠の関所跡…。

U｜犬も歩けば～なんてやったことないですよ。…何の話してるんだって(笑)。

1983

現在のメンバーが今井の部屋に集まり出す

U｜適当に集まって、音楽聞いたりタバコ喫ったり(笑)。そうするうちにバンド組んでみようか、みたいな雰囲気が出てきた時期ですよね。まだ話の段階なんですけど。

A｜自転車レースしながら行ったよね(笑)今井ん家まで。もともとは隣町に友だちがいて、そいつの所へ行く電車の待ち時間をつぶすために行ってたんですけど(笑)。

T｜行くとUCCコーヒーとジャンプが出てくるんですよ。

U｜だからジャンプは早く読める(笑)。有名だったんですよ、今井さんの家は。階段上がる途中に窓があって、ちょうどそこから部屋に入り込めるんですよ。いつもそうやって出入りしてたから、世間からはなんであの家は窓から入るんだって(笑)。ひどい時は10人ぐらいそっから入ってたもんね、今井さん。

I｜たまり場だったんです。

A｜窓から藤岡女子高校の生徒をからかったり。オネエチャ～ン、て(爆笑)。バッカみたいって行っちゃいましたけど(笑)。

1984

春　"非難GO-GO"結成。イベント「LITTLE ROCK」に出演

I｜(命名について)日本語を入れたかったんです。

U｜兄貴の部屋が練習場になっててね。

T｜最初、近所から苦情が凄かったんですけど、この頃にはもう慣れちゃって、あきらめてましたね(笑)。ちゃんと時間決めてやるんですよ、7時以降は音出さないとか。そうしてたら、勝ちました(笑)。

U｜"LITTLE ROCK"っていうのは一応最初のライヴで、高崎の新星堂でアマチュアバンドが集まるみたいな。ここで、コピーの曲やってましたね、さすがのスターリンとか(笑)。「解剖室」「天プラ」とかその辺りでしたね。周りにモッズとかBOØWYのコピーバンドが多かったんで、だったらスターリンの方が目立つだろうって。

I｜お客さん30人ぐらいいて。スーツ着てやりました。

▲非難GO-GOがデビューを飾った高崎新星堂

▲ここですべては始まった
今井の生家であるタバコ店には現在もUCCコーヒーが…

◀コメント中の"電車の待ち時間"に注目。およそ1時間に1本だ(笑)

▲進学・就職があいつぎ、群馬と東京をひんぱんに往復した

◀道の向こうに見えるのがモンダイの藤岡女子高校だっ

▲ポプコン高崎地区大会。これは貴重なワン・ショット

▲同じくポプコン。ヴォーカルは爆竹の導火線となったアラキ

桜井・今井高校卒業、桜井は地元の自動車関係会社に入社、今井は東京のデザイン専門学校に入学

U|そう、だから今井さんは通ってたんですよ。

I|いや入学しただけです(笑)。

U|東京に行っちゃったでしょ、前のヴォーカルも一緒に。だから他のメンバー3人は群馬で、毎週練習があったから今井さんはそのたびに戻って来てたっていう。まだこの頃は群馬が活動の場だったんですよね。

夏　バンド名を"BUCK—TICK"と改める

T|オリジナルをやることにしたから、それを転機に。

末　ヤマハ・ポプコン高崎地区大会に出場、特別賞受賞

A|「プラスチックⅡ」とかやったのかな。

U|BUCK—TICKになって初ライヴなんですけど、まあ、ぜんぜんヘタクソだったんで、特別賞っていうのは…

A|特別扱いだったんですよ。

T|5段階評価で、テクニックが1か2で、将来性が5だったんだっけ。その時の審査員の人にこの間、大阪で会ったんだよね。"どう、儲かってる"って(笑)。

U|儲かっちゃいねっスよ(笑)。だからこれで、やればできるっていうか、本当にやる気を出すようになって。いっぱいバンドがあったんですけど、どうしてもコピーから抜けきれないっていうのがあって。ここら辺でいい雰囲気になって"よし東京だ"みたいなことも考え始めて。

1985

春　樋口・星野、高校卒業、東京の専門学校へ

8.4.　新宿JAMにてライヴ・デビュー

U|ポプコンからここまで、群馬ではけっこうやってるんですけど、東京では結局JAMがいちばん早く認めてくれた形で。なんか日曜の昼間で、ストリート・スライダーズのコピーバンドとやったんです。真剣にオリジナルやってんの俺たちだけ(笑)。で、これを機に夜できるようになったんですよね。まだ前のヴォーカルだったんですけど。

T|屋根裏の昼とかもやってるだろ、この頃。テープ持って回っててさ、その時渡した相手がローグの香川さん。

U|当時、屋根裏のおかかえバンドだったんですよね、ローグは。

A|1回めはドラム借りてったんだよね。

T|アッちゃん、まだドラム持ってなかったんだ(笑)。けっこう素質はあったのにな(笑)。

U|うだつのあがらない状態が続いて。毎回、友達しか来ないの(笑)。群馬から3人ぐらい上京して来て打ち上げだけ出て帰るみたいな。何やってるんだろうと思うような時代ですね。

10　ヤガミのバンド"S.P"解散

T|スポッツっていって、やったんですけど、モヒカン、白塗りで

U|ちょっと間違えると人生の卓球かっていう(笑)。

T|ジュネのマネだよ！

U|ポプコンとかイーストウエストとか、そういうコンテストバンドだったんだよな。だから"イーストウエスト85"ってレコードに兄貴のバンドが入ってるという(笑)。

T|レピッシュも85でしたね。後で知ったんだけど。とにかく解散して、もうバンドやめようと思ってたから。プロ志向っていうか、ハイテンションなバンドには入りたくないっていう。それまで、音を間違えただけで殺気立ってるっていう世界だったから。

11.8.　初の自主企画ライブ"BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol.1"新宿JAMにて(前ヴォーカリスト最後のライヴ)

11　ヤガミ参加

U|既にJAMで5、6回ライヴやってるうちに、けっこう一生懸命やってるのが認められて。じゃあ君たちが企画して知り合いのバンドとか呼んでやってみないかってことでね。この時、音楽性の不和でヴォーカルがやめちゃったんですけど、始めた企画だからどうしても続けたいってことで。で、アッちゃんがすごいヴォーカルやりたいって言って、じゃあそうしよう、だけどドラムがいねーよっていうんで、アニイがちょうど解散してたから俺がちょっと群馬帰ってアニイを東京に呼び込んだんですよ。

A|ドラムやってる時は不完全燃焼っていうか、にえきれない性格だったから、完全燃焼に近い所で自分を試してみたかったんです。これは人生の転機と言ってもいいぐらいの決心でしたね。とにかくやりたいっていう、それで東京に。知り合いの家にころがり込んで。

12. 4.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 2”
新宿JAM(現メンバーでの初ライヴ)

T|アッちゃんの表情が違うんですよ。ドラム叩いている時はいきいきしてるところ見たこともなかったのに、ヴォーカルになってからは本当に水を得た魚のように(笑)。

U|なんかサイコロがうまい具合に回り始めちゃって。

12. 9.　前橋ガルシア

1986

1. 15.　群馬会館
1. 19.　都立家政KINDO
1. 28.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 3”
2. 6.　新宿ACB
2. 8.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 4”

U|持ち歌もけっこう増えて、10曲以上あったんじゃないかな。この頃、一緒にやってたのは…。

I|ベルズとか。

T|カステラも出してやったことあるよな(笑)。

3　雑誌DOLL誌上にて紹介される

3. 20.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 5”

U|動員なんかもどんどん伸びてきたよね。持ち歌も10曲以上あったし。要するに、人んちの客かっぱらえるっていうか(笑)、他のバンド目当てのお客を、あっ、こいつもらいって。

4. 12.　都立家政KINDO
4. 14.　渋谷屋根裏
4. 17.　新宿JAM
5. 3.　前橋ラタン
5. 10.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 6”
5. 18.　レコード自主制作のため日吉YAMAHAスタジオにて録音開始

T|結局サワキさんとコネクションできる前なんですけど、昔出てたポプコン関係のスタジオに頼み込んで格安にしてもらって、とりあえず自費で作っといたんですよ。で、いい曲だけ出す運びになるんですけど。

A|1日で4曲録った(笑)。

I|レコーディングのやり方もわかんないから、ただ間違えないようにって、それだけ(笑)。

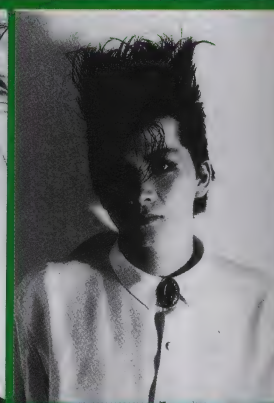
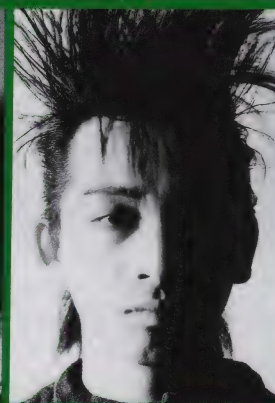
U|ドンカマ？　なにそれ、そんなの知りませんて(笑)。

T|気合い一発ですね。

5. 12.　新宿ACB
6. 8.　渋谷屋根裏
6. 13.　新宿JAM
5. 22.　高崎BIBI(ゲスト)
6. 28.　渋谷屋根裏

新宿JAMでのシリーズ・ギグは、▶
東京進出当時の重要な拠点となった

▼とりあえずロフトで200人近く動員。
第1の難関突破だ

▲ファーストEPに際して行われたフォト・セッションより

7　太陽レコードのサワキカズヲ氏と出会う

T|6／28の屋根裏あったでしょう、その時サワキさん見に来てたんだって。その後、7月になって電話でコンタクトとってきたんですよ、見て気に入ったから会いたいってことで。

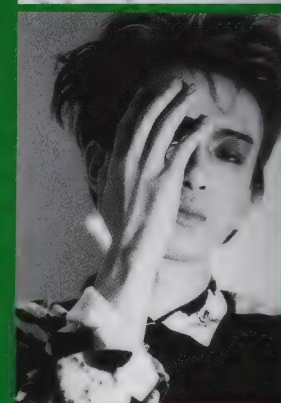
U|でも屋根裏に来たのはゴーゴーボーイズっていうバンドを見るためだったんですけどね(笑)。それから、新宿で会ったのかな。

T|そう、和風喫茶みたいな所で。『私、太陽レコードというチンケなインディーズ・レコード会社やってる者なんですけど』(笑)。

U|で、まあ音源あるから、それはいいっていうんでサワキさんとこから出すことになったんですよ。

7. 24.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 7”
7. 27.　高崎BIBI(ゲスト)
8. 1.　渋谷屋根裏
8. 22.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 8”
8. 25.　渋谷屋根裏
9. 10.　“太陽祭”新宿ロフト

U|この日、初めてロフトの床を踏むんですよね(笑)。長かったですね、ここまでがいちばん長かった気がします。

9. 26.　“BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol. 9”

▼注目を集めた"バクチク現象"は
フールズメイト本誌にもグラビア掲載される

2. 4.　レコーディング終了

U|作る時点で、インディーズはこれで最後にしようっていうのがあったんですよ。サワキさんには『俺らはインディーズでは終りたくない』ってことを明白に言ってあったんです。サワキさんもそれはわかる、インディーズでの移籍は困るけどメジャーは一向にかまわないって。

T|前後して、ステッカー貼りまくりとかありましたね。

A|メンバーは一応貼ってないことにしときましょう(笑)。

U|でも貼りましたけどね(笑)。

T|やっぱEP-4のマネだったのかな。

U|数では勝ってるんじゃないですか(笑)。みんな通勤とかで貼りながら行くという。

A|だからそれを追っていくと、誰かの家に行けちゃう(笑)。

U|あれはやっぱり効力ありましたね。今も原宿なんかはいろんなの貼ってありますよね。

2. 11.　新宿ロフト

2. 13.　新宿JAM 2DAYS
"BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol.13"

2. 14.　"BEAT FOR BEAT FOR BEAT Vol.14"

2. 15.　レコード・ジャケット撮影

U|サワキさん家で撮ったんですよね。

T|一応、黒い紙を張って、照明っていうかフラッシュみたいなのを横から当てて。

U|今ならジャケット白黒でいきましょう、とかカッコいいこと言えるけど、この頃なんてカラーでやるとか言うだけでビビッてましたもん。で、2色だったらいいって言うんだけど、だったら白黒の方がいいって話になったんですよね。

2. 15.　前橋市民文化会館

3. 27.　リハーサル

3. 30.　リハーサル

3. 31.　取材

4. 1.　"バクチク現象"豊島公会堂　LP『HURRY UP MODE』発売

U|今、思うとあれは賭けでしたね。前売りで400ぐらいだったのが当日で200以上来たっていう。普通は考えられないでしょう(笑)。

M|満パイっていっても前の方に集まっちゃうから、まあ、後ろから見ればスカスカですよね。

U|二階閉め切ってたし。だから一階が埋まれば満パンだって(笑)。

T|ああいうノリ、今じゃ考えられないですよね。ライヴハウスと同じですもん。

5. 1.
5. 2.　リハーサル

5. 13.　"HURRY UP MODE TOUR"前橋ラタン

5. 16.　新宿ロフト

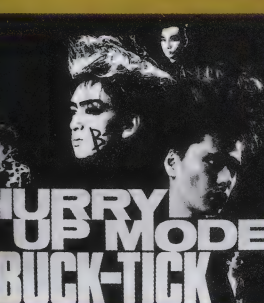
5. 19.　豊橋かごやホール

U|対バンがブルーハーツの女の子コピーバンドでした

5. 20.　静岡モッキンバード

U|車が止まっちゃったりして大変だったね。

T|対バンはBOØWYのコピーバンド。

『BUCK-TICK』
太陽 1st. INDIES SINGLE
1986.10.21. ON SALE

『HURRY UP MODE』
太陽 1st. INDIES ALBUM
1987.4.1. ON SALE

10. 19.　文京女子大学学園祭

U|呼ばれたんですよね、ヒデのいとこが文京にいて。

H|当時ミニコミとか作ってたんですよ。

U|東南西北っていうバンドがメインで呼ばれてたんですよ。これがプロのバンド(笑)と一緒にやった最初でしょうね。

T|東南西北は別にカネとってるのに、俺たちはディスコタイムのバンドだった！(笑)要するに、そういう扱い(笑)。

U|でもギャラもらったよ、交通費(笑)。1万か2万、じゃあガソリン代にしよう、つって(笑)。

T|レコード売らなかった？

U|あ、売ったんだ。けっこう売れたんですよ、手売りで30枚ぐらい。

A|それよりぜんぜん多く持ってたんですけどね(笑)。

10. 21.　太陽レコードより自主シングル発売

10. 22　シングル発売記念ライブ　新宿ロフト

U|これはけっこう入りましたね。160か180ぐらい入ったんじゃないかな。シングルがチャートで6位に入ってたりもしたから。

T|納品に行ったよな、五番街に。

U|お願いしますって。

I|俺は行かなかった(笑)。

T|今井は苦労知らずなんだよ(笑)。

11. 1.　埼玉大学学祭

11. 5.　高崎市民文化会館

T|ここはキャパあるんだよね。800ぐらいじゃない？

U|イベントのゲストみたいな形だったんですよ。

11. 15.　渋谷ラママ

T|ラママの初ライヴ。対バンがアサイラムとゲンドウ・ミサイル。すごい顔合わせ(笑)。

12. 10.　渋谷ラママ　オールナイト

12. 29.　渋谷テイオクオフ7

U|86年は、かなり活動が見えてきたかなっていう年でしたね。

1987

1. 12.　渋谷ラママ

A|ここでジョーさん(桝岡マネージャー)と初めて会うんですよね。

T|この時、ジョーさん何やったんですか。

桝岡(以下M)|イベント会社で。タレント相手のイベント組んだり、そういうことやってました。サワキさんとはもう10年ぐらいの古い友達で、いろいろ相談されたりしてたんですよ。こういうバンドがいるんだけど、何か力をかしてくれって。とりあえず4／1に初のホール・コンサートやるから、舞台とかどうしたらいいか、とかね。僕、そういうのやってたもので。

U|あの日はラママで雪が降ってて。当時、俺らはハッキリ言って全くのアマチュア・バンドだったから、ジョーさんみたいな人はすごい業界人て感じでインパクトありましたね。

1. 15.　前橋ラタン

1. 17.　FM群馬に出演、収録

U|これ何だっけ、確か俺は行かなかったんだ。

T|なんかインディーズの情報番組で、群馬の出身バンドってことで出たんですよ。メンバー紹介とかシングルの宣伝して。

A|DJが高校生だった(笑)。

1. 21.　アルバム『HURRY UP MODE』レコーディング開始　YAMAHA日吉センター・スタジオにて

5. 21.　名古屋ELL

T｜この日は対バンいたっけ。

U｜いたいた。けっこうマジメでうまいバンドだったよ。

T｜わりと推されてたよな。

5. 22.　大阪ライヴジョイントジュリー

T｜わけのわかんないブルース・バンドとやった(笑)。

U｜"俺の女はキャビン・マイルドを喫ってる"という歌を歌ってましたね(笑)。

5. 24.　大阪エッグプラント

U｜今でもいろんな所でやってるガーリック・ボイーズっていうバンドとやった。

T｜あれですよ、ニューエスト・モデルも遊びに来たんじゃないかな。

5. 25.　京都磔磔

5. 27.　本八幡ルート14

5. 28.　横浜セブンスアベニュー(最終日)

U｜このツアーは楽しかったですね。確か西は大阪までだったのかな。バクチク現象の後、けっこうメジャーの話も来てたしね。で、いろんなデマが流れたり。キャプテンから出るとか(笑)。

T｜いい加減な話が(笑)。

U｜だからアレですよ、この直前にデッド・エンドが契約のことですごいモメたでしょう。それがあるから、やっぱりひとり通さないとメチャメチャになっちゃうっていうんで。絶対サワキさんを通すってことでやってました。

6. 10.〜6. 15.　リハーサル

6. 16.　"バクチク現象Ⅱ"渋谷ライブイン

U｜アッちゃんの"俺たちビクター"発言がありますね。

M｜いろんな噂が出てきちゃって、どうだこうだってことになってしまったんで、まあ、ライヴ後半の方にひとことあったわけです。

6. 18.　ビクター音産と契約

A｜最初、豊島にビクターの人が見に来て、その後のロフトで話したんです。今思えば、わりとあっさり決まっちゃったような気がしますけど。

U｜けっこう条件出したから…

T｜話してみてのニュアンスですよね。俺なんかと相性がいいか悪いか、みたいな。

U｜契約金をいっぱい出すってとこはもっとあったんです。

M｜どうしてもメーカーさんがイメージを作っちゃうんですよね。ディレクターの感性で、ここはこうした方がいいとか、そういう概念が入り過ぎちゃうんですよ。彼らはそれをいちばん嫌がってたし、やっぱり自分たちのポリシー持ってましたから。ま、その辺を田中(淳一、バクチク・ディレクター)っていうのはよくわかってくれて。インディーズに関しては先生みたいなもんだし、よく知ってるから。

T｜結局、いちばん野放し状態にしてくれそうだったのがビクターだったんです。セルフ・プロデュースでやれて…、要するに自分たちで完全に音を仕切れてレコードを作れるっていう。

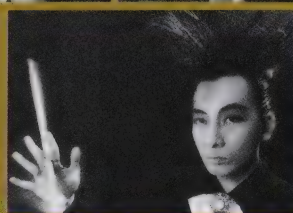
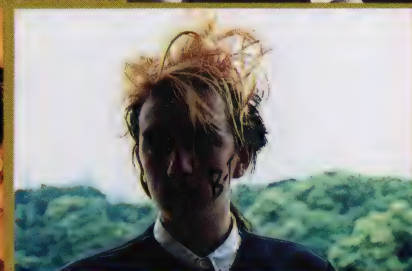
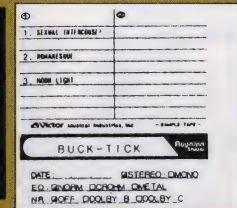
6. 22.〜7. 9.　リハーサル

U｜この時、確か俺すんげえワガママ言ったんだよ。年内にレコード出したいって。けっこう急いでたんで、年内デビューが条件だったんです。

7. 18.　『SEXUAL×××××！』デモテープ録音

T｜「SEXUAL〜」と「ロマネスク」と「ムーンライト」3曲ぐらい録ったんですよね。で、本チャンと同じエンジニアの人にやってもらったんだけど、音がぜんぜん違うんですよ。ほら『HURRY UP〜』からもやったでしょう。デモテープの段階でも自主盤とはあまりに違うんで、もうぶったまげちゃってね(笑)。

U｜出だしから、なんだこのスタジオは？って(笑)。ビクターの401っていういちばんでかいスタジオで。桑田さんが半年とか一年押さえてるような所だから、もう脅されたみたいなもんだよね(笑)。

I｜この頃、曲作るのが大変でした。1日1曲とか。

▲LPリリース前後

▲"HURRY UP MODEツアー"スタート直後の取材より。集合カットは太陽レコードにて撮影された

▲これが例のデモテープ。多少ラフな印象だが、パワー自体はレコード化されたテイクを上まわるほど

◀俺たちビクター！今はなきライブインにて、念願のプロデビュー宣言

1987.6.16.
渋谷LIVE INN
デビューライヴ

1.FUTURE SONG
2.EMPTY GIRL
MC
3.TO-SEARCH
4.AUTOMATIC BLUE
5.MIS-CAST
MC
6.CHATTY BUNNY
現在の「SEVENTH HEAVEN」
7.DO THE "I LOVE YOU"
8.SEXUAL INTERCOURSE
9.FLY HIGH
10.HURRY UP MODE
11.ROMANESQUE
MC
12.VACUUM DREAM
13.FOR DANGER KIDS
14.SECRET REACTION
MC
15.STAY GOLD
16.MOON LIGHT
EN
1.PLASTIC SYNDROME II
2.ONE NIGHT BALLET
3.TELEPHONE MURDER

『BUCK-TICK LIVE at LIVE INN』
VICTOR VD(5SONGS)
11987.9.21. ON SALE

▲プロの試練!? サイン会やファンの集いも増え始める。

▲ビデオ・デビューを飾り、いよいよ本格的なツアーへ突入。

▲8.22.川崎産文での[illegible]

▲8.26 "TO THE FLY HIGH"

7.21.～7.23. 取材

7.26.～8.18. 『SEXUAL×××××!』レコーディング

H|けっこう慣れてないっていうか。メジャーの世界に(笑)。ただでスタジオ使わせてくれたり(笑)。

U|そりゃそうだって(笑)。でも幸せだったよな。

T|ありがたいって(笑)。

H|いいのかなあ、とか(笑)。

U|あ、森進一、森進一! キョンキョンがカレー食ってるぜ!とか、そういう時代だったスよ。

A|スタジオ3つとか使ってたから、何したらいいんだかわからなくて、あっち行ったりこっち行ったり。歌う時もすごく緊張して、向こうでいろんな人が見てたりするんで、わけもわからず動いてた気がしますね。

8.19.～8.21. 取材

8.22. イベント"NEO BEAT ZONE"川崎産業文化会館

8.24. リハーサル

8.26. "TO THE FLY HIGH"渋谷ライブイン

8.27. 取材

8.31. スタイリスト打合わせ

9.3. リハーサル

9.5. リハーサル

9.7. 単行本取材、ビデオ打合わせ

M|ここでアッちゃんの大病事件があるんですよ。過労からきた風邪でブッ倒れちゃったんですよ。8日が空いてますでしょ、本当はこの日がビデオ録りだったんですけど、11日になったんです。

A|まあ、過労ですね。あの…、血尿が出て。俺、血尿って知らなかったから(笑)。

9.9. 取材

9.11. ビデオ撮影

M|そんなわけで、アッちゃんひどい顔してるんですよ。病み上がりで。

T|けっこうコケてますね。

A|3日間メシ食ってなくて、体重もガクッと落ちて。なんか目の焦点がうつろ…。

9.13. ファンの集い 高崎労使会館

9.14. RF"ミッドナイトクルージング"

9.16. 取材

U|取材が死ぬほどありました。1日4本とか平気でやってましたもんね。でも扱いはこんな小っちゃくて(笑)。

T|アタマも服も自分らで…、自前でした(笑)。

U|この日、デイリースポーツだったんだよね。それまで、ふつうテレコとか回すんだけど、そこの人ってメモに書いたりして、ホント記者的なんだよね。『それで君どう思う?』みたいな。『なんでそういうアタマにしてんの、自分では似合ってると思うかい?』とかね。最初はそういう、音楽とぜんぜん関係ないことばっかり聞かれましたね。

9.17. リハーサル、単行本撮影

9.18. 取材

9.19. サイン会 CSV 渋谷

U|東京での、そういうサイン会とか初めてだったんじゃないの。けっこう200か300来たから、まあ、大混乱ですよね。

M|フライデー仕込んであったけどダメだったし。

T|え、仕込んだの?

M|そう(笑)。

U|今じゃ仕込まれちゃってるって(爆笑)。

9.20. "BUCK—TICK 現象 TOUR"高崎 BIBI ホール

U|で、ツアーが始まるんですね、高崎から。これはしょっぱなからハードだった! ショッキングでしたよ(笑)。

T|救急車騒ぎがあって。お客さんもライヴハウスに慣れてないから、10人ぐらい倒れちゃってね。

9.21. ビデオ"バクチク 現象 at LIVE INN"ビクターより発売
仙台にてキャンペーン、TV 出演

U|で、高崎終った瞬間に車に乗り込んで、高速とばして朝方仙台に着いて…。そのままキャンペーンでテレビ出演したんですよね。

9.22. 仙台ヤマハホール

9.23. 郡山フリーウェイジャム

T|ここ PA システム無いという(笑)。ドラム生でやった(笑)。

9.24. 山形ミュージック昭和

9.26. 秋田田中屋

9.27. 青森スペース1/3

9.28. 岩手にてキャンペーン、TV 出演

U|これが地獄のツアーだったんですよ。東北シリーズぜんぜんお客さん入らなくて。仙台50人、郡山38人、山形30人、みたいな。秋田なんて10何人とかね。でもこれは東北での人気をハネ上がらせるきっかけになったんじゃないかな。

9. 29.　ジャケット打合わせ
9. 30.　単行本撮影
10. 1.〜10. 2.　単行本撮影
10. 3.　取材、打合わせ
10. 4.　筑波29 BAR

U|で、関東を回って下は九州まで行っちゃうのかな。関東はけっこう入ったよね。

10. 5.　取材
10. 6.　横浜セブンスアベニュー
10. 7.　取材
10. 8.　千葉ダンシングマザース

U|特にセブンスとダンシングマザースは入った。すごかったよね。

10. 9.　藤沢 BOW
10. 11.　取材
10. 12.　ステージ打合わせ
10. 13.〜10. 14.　ビデオ"キャピタゴン・スペシャル"撮影
10. 15.〜10. 16.　取材
10. 17.　豊橋かごやホール
10. 18.　名古屋 ELL

U|この日もよく入った。満パイ。

10. 19.　京都ビブレホール
10. 20.　大阪キャンペーン
10. 21.　大阪バナナホール
10. 22.　神戸チキンジョージ
10. 23　広島ウッディストリート
10. 24.　博多ビブレホール

U|広島100の福岡80ぐらいですか。もうこの頃には、小さい所だとそこそこ埋まるような…、えらくなってきましたね(笑)。

10. 25.　熊本放送出演
10. 27.　取材
10. 29.　大宮フリークス

U|これも満員で、店からストップがかかったんですよ。もう入れるのよしてくれって。

10. 31.　取材
11. 2.　NHK オーディション、取材

U|ここで「SEXUAL〜」やって、放送禁止になったのかな。受からせてはやるけど、この歌は放禁ですよって。根性を買ってくれたんかな、あんな本気でやったバンドなかったから。他はみんな、ナメきってるような普段着で適当にやってたでしょう。俺たちなんか、衣装着て頭立ててメイクして。"なんだこの人たちは！？"てぐらいやってましたからね(笑)。で、あの何ていったっけ、ほらスジャータのオヤジ。

T|ええと、藤山一郎さん(笑)。あの人が審査委員長で。

11. 3.　FM 群馬公録　前橋アクター

T|FM 後録りがあってまた大変だった。これも酸欠者が出たんですよね。人数的にはたいしたことなかったんだけど、場所がすごい所だったから(笑)。無理やり入れた感じでしたもんね。

U|いるだけで苦しくなったもんな。

T|初めてですよ、やってて腹筋が痛くなったの。あれ完全に酸欠状態ですよ。で、客席通らないとステージ行けないし、もうグチャグチャってやつですね。

11. 5.　取材
11. 6.　リハーサル
11. 7.　取材
11. 8.　リハーサル
11. 10.〜11. 11.　名古屋キャンペーン
11. 12.　取材
11. 13.〜11. 14.　札幌キャンペーン
11. 15.　水戸サントピア(ゲスト)
11. 16.　リハーサル、取材
11. 17.　LE"ファンファン TODAY"ライヴ

T|ファンファン TODAY！　やりましたよね(笑)。

M|番組の中で、銀座にスタジオがあるんですけど、あそこに限定でお客さん入れてやったんですよ。

U|これローグと一緒でしたよね。

11. 18.　LF、QR オーディション
11. 19.　福岡キャンペーン
11. 20.　熊本キャンペーン

U|この辺は、キャンペーンとかファンの集いとか、そういう。

M|放送局まわりとか、そういうやつですね。ゲストでトーク会みたいなのがあったり、ワッカくぐりやったり。ワッカ渡しとか。ポッキーをくわえて選ばれたファンの子に輪ゴムを渡すんですよ。

A|あ、また屈辱が蘇ってきた(笑)。

T|発狂！(笑)で、そんな話聞いてないのに向こうに行ってからやらされることになった。そういう段取りになってるから、もう断るに断れないんだろう。

A|もう輪ゴム見たくない。

11. 21.　アルバム『SEXUAL×××××！』発売
リハーサル、取材

U|オリコンで33位とか、そんなもんですよね。まあ、当時としてはいい方だったんじゃないですかね。

11. 23.　千葉 TV 出演
11. 25.　リハーサル、取材
11. 26.　リハーサル
11. 27.　高崎ファンの集い
11. 28.　川崎ファンの集い、取材
11. 29.　リハーサル
11. 30.　取材
12. 1.　リハーサル
12. 2.　TBS"ライヴタウン"
12. 3.　取材

▼デビュー当時のプロモ写真。キャッチ・コピーは「頭にチョップがくるゾ」

◀11.28.川崎ファンの集い。テレた表情がケナゲだ

『SEXUAL XXXXX!』
VICTOR DEBUT ALBUM
1987.11.21. ON SALE

1987.12.11.
日本青年館
"BUCK-TICK現象III"

1.EMPTY GIRL
2.FUTURE FOR FUTURE
MC
3.TO-SEARCH
4.TELEPHONE MURDER
5.HURRY UP MODE
6.VACUUM DREAM
7.SECRET REACTION
MC
8.HYPER LOVE
9.DO THE "I LOVE YOU"
10.MIS-CAST
11.MISTY ZONE
12.ONE NIGHT BALLET
MC
13.ILLUSION
14.ROMANESQUE
15.SEXUAL XXXXX!
16.MY EYES & YOUR EYES
EN
1.DREAM OR TRUTH
2.PLASTIC SYNDROME II
3.FLY HIGH
4.MOON LIGHT

「今日はブッちぎろうぜ！（お客さんの大歓声に向かって）お前ら少し地味すぎるぞ」
［1987. 12. 11 日本青年館］

▲本格派ぶりを見せつけた青年館での"現象III"。
B-T史上でも屈指の堂々たるステージでファンを酔わせた。

▲"バンド・スタンド"ではハウンド・ドッグや爆風と"対バン"。
楽屋で出待ちの表情はやや硬い、か？

12. 4.　ゲネプロ
12. 5.　名古屋中京テレビ
12. 6.　名古屋ELL　ファンの集い
12. 7.　大阪ミューズホール
12. 9.　取材

T｜この辺はテレビとか…、地方が多いんですよね。まだ全国ネットでは放送されてない。

12. 11.　"バクチク 現象III"日本青年館

U｜まあ、豊島やってるんだけど、本当の意味でワンマンのホール・コンサートって感じかな。
T｜初めて大掛かりなステージですね。
U｜セットっていうのがたまげましたもんね。嬉しかったなあ。この時初めて衣装も作ったんだよね。
A｜あれはすごい気に入ってて（P66参照）
U｜赤いやつね。今井さんもでしょ。今井さん、張り切ると赤くなっちゃうんだよね（笑）。張り切ってるなあって思うといつも赤で。
I｜調子づいてる時は（笑）。
T｜あの時、なんか下から出てくるステージだったよな。
U｜当時デビューしたバンドの中じゃいちばんいいステージ作ってもらったんじゃないかな。特効やったし。アニイなんか、表情違いましたもんね（笑）。
T｜さすがにライヴハウスと違って、通気性がぜんぜんいいもんな。やり易いと思いましたね。

12. 14.　取材
12. 15.／12. 16.　ビデオ編集
12. 17.　取材
12. 18.　札幌キャンペーン
12. 19.　札幌メッセホール

U｜この時はずっとライヴ。初めて札幌行ったのかな。真冬に札幌行くバカいないっスよね（笑）。雪で滑って転がりながら行きましたよ（笑）。スタッフ入れて8人ぐらいしかいないのに、50人乗りぐらいのバスが迎えに来てくれちゃって『北海道って何から何までデカイんだな』って思いましたね（笑）。

12. 22.　高崎市民文化会館
12. 23.　仙台CADホール
12. 24.　山形ミュージック昭和
12. 26.　秋田フォーラス・モーニングムーン・スタジオ
12. 27.　青森スペース1／3
12. 28.　岩手テレビ収録
12. 31.　"ロックンロール・バンド・スタンド"新潟産業文化会館

U｜大きいイベントはこれが最初。ハウンドドッグ、聖飢魔II、爆風スランプとか出たんじゃないかな。リハーサル、俺らの前がハウンドドッグだったんですよ。で、山ほどある機材を見てたら何も言えなかったっスね。ヘタな楽器屋より楽器があるって（笑）。で、BUCK—TICKお願いしまーす、とか言われて、ヤマハのアンプですよ（笑）。ぼっれー、こんなの持ってるやつ誰もいねー、みたいなやつ。これで自分たちは機材がないってことを嫌というほど知りました（笑）。
T｜本番はやっぱ緊張しましたよね。俺たちのファンだけじゃないっていうのが強力にありましたから。

1988

1. 5.　ミニアルバム『ROMANESQUE』レコーディング、取材

T｜今までも基本的にセルフ・プロデュースだったんだけど、ミックスまで自分らでやらせてもらったっていう。けっこう遊びましたね（笑）。

1. 6.　TVK"ライブトマト"収録、リハーサル

1.7.〜1.9. レコーディング
1.10. 取材
1.11.〜1.13. レコーディング
1.13. レコーディング、オールナイト・ニッポン“ロック JAM”
1.14.〜1.15. レコーディング
1.17. TBS“ライヴタウン”収録、目黒鹿鳴館にて

U|いわゆる公録ですか、鹿鳴館でやったんですよね。これはおもしろかったですよ、停電とかあって。なんか、照明も全部切れちゃうんですよ。で、テレビ録ってるから何回もやり直したり(笑)。

1.18. NHK“ヤングステージ”出演

A|マルタ！
U|そうそう、アッちゃんがマルタに『かっこいいと思ってるうちが花ですね』って言われたんだよね。その後、マルタの番組に出た時、俺とアッちゃんで『カッコいいと思ってるうちが花ですからねー』とか言ったんです(笑)。
A|ラッパ吹けるうちが花ですって(笑)。
T|そこまで言う！(笑)
A|で、『パクチクのみなさんです』って紹介された(笑)。
U|そうそう、パクチクじゃないの(笑)。
T|異端でしたね(笑)。
U|要するに、バンドっていうか、ロックがいい目で見られなかったんですね。アイドル連中と並ぶと、場違いな人たちみたいな(笑)。

1.19.〜1.20. レコーディング
1.23. NHK 浦和収録
1.24. 新宿ロフト　シークレット“BLUCK—TRICK”

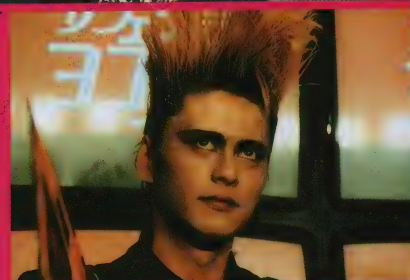
T|ユータの誕生日。
A|そう、ヒデの誕生日が“現象Ⅱ”で今井が大阪バナナかなんかだったでしょう。それでユータが寂しがったんだよ(笑)。
U|そんなことないよ。
T|サングラスしてやったんだ。
U|だからメニューは音のを6曲ぐらいやって、その後にゲストのB—Tが出てくるという、安易な発想(笑)。

1.25. 取材
1.26. 取材
1.27. 札幌ファンの集い
1.28.〜1.29. 仙台ファンの集い

T|この辺はアッちゃん単独？
A|俺とヒデが多かったんじゃないかな。札幌なんて『あれ、今井さんは？』って、『来ねーよ』『な〜んだ』とか(笑)。で、ヒデ帰ろうぜ！みたいな(笑)。仙台じゃポッキーに遭うし(笑)。
T|怨念の(笑)。

1.30. 横浜セブンスアベニュー、ファンの集い
1.31. リハーサル
2.1. 大阪ファンの集い、取材
2.2. 名古屋ファンの集い、リハーサル
2.3.〜2.4. リハーサル
2.5. 東京新星堂　ファンの集い
2.6.〜2.7. リハーサル
2.8.〜2.9. ビデオ撮影
2.10. リハーサル
2.11. 福岡ファンの集い、熊本ファンの集い

▲BLUCK-TRIC、サングラスで登場

▲『ロマネスク』内ジャケ

▲アルバムをひっさげ、
地方局やケーブルTVでもプロモーションを展開

2.12. 広島ファンの集い、リハーサル、取材

U|ずっと『SEVENTH HEAVEN』のリハーサルですね。
A|俺だけキャンペーン？　ひとりで熊本とか福岡行って、吊し上げみたいに(笑)。『今井さん彼女いるんですか、星野さん彼女いるんですか』って。いっぱいいるよ！(笑)
U|関東近辺だけは全員集まるんだよな(笑)。セブンスアベニューとかは全員でやったんですよ。

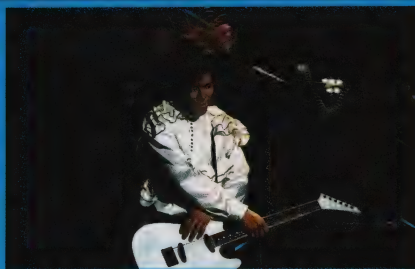
2.13.〜3.11. アルバム『SEVENTH HEAVEN』レコーディング

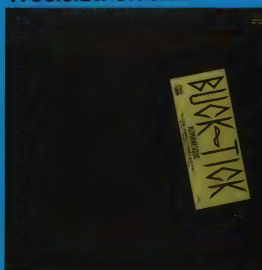
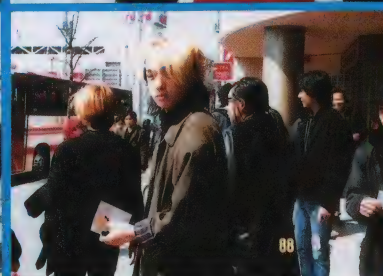
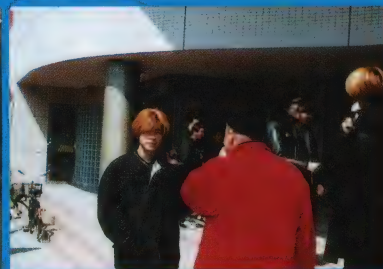
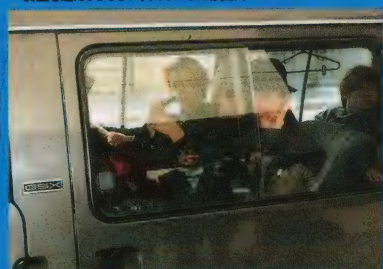
U|このレコーディングはいちばん辛かったですね。
T|ホント時間なくて。『ROMANESQUE』出した直後だったし、この頃のリリースペースって異常だったね。
U|スタジオ・セッションみたくやったんだ。もう、サザンのやり方を短い感じでやったっていうか。

2.16. ビクター・ヒット賞パーティー　帝国ホテル
2.18. ロック＆ワールドクラス・ミュージック・コンベンション　ホテル・ニューオータニ
2.19.〜2.20. 取材
2.21. ビデオ『MORE SEXUAL!!!!!』発売

『MORE SEXUAL!!!!!』
VICTOR VD(6SONGS)
1988.2.21. ON SALE

1988.4.1.
PIT

1.MISTY ZONE
2.FUTURE FOR FUTURE
MC
3.EMPTY GIRL
4.HURRY UP MODE
5.DO THE "I LOVE YOU"
6.ROMANESQUE
7.DREAM OR TRUTH
MC
8.····IN HEAVEN····
9.SEXUAL XXXXX！
10.HYPER LOVE
11.ILLUSION
MC
1.TO-SEARCH
2.AUTOMATIC BLUE
3. HEARTS

▲"バクチク現象"から1年、
大幅にグレード・アップしたビートにPITの床が大きく揺れた

『ROMANESQUE』
VICTOR MINI ALBUM
1988.3.21. ON SALE

▼東北遠征"ロックサーキット"移動中のスナップ。
終盤を迎えて心なしかリラックスした雰囲気

2. 22.
2. 23. 取材
2. 25. 福井放送、取材
2. 27. 取材
3. 3. アルバム・ジャケット撮影
3. 4. RF 打ち合わせ
3. 5. 取材、衣装打ち合わせ
3. 7. 取材
3. 8. 取材、RF 収録
3. 9.
3. 10. 取材
3. 12.
3. 14. リハーサル
3. 15. 東北ロックサーキット 平市民会館

U|で、取材が続いて、レコーディングが終わったかと思ったらすぐロックサーキットに突入するわけです。

3. 16. 山形県民会館
3. 17. 岩手県民会館
3. 19. 岩手テレビ出演
3. 20. 相馬市民会館
3. 21. ミニアルバム『ROMANESQUE』発売
3. 22. 宮城県民会館
3. 23. 石巻市民会館
3. 24. 郡山市民文化センター
3. 25. 取材
3. 26. 会津若松市民会館
3. 28.
3. 29. リハーサル
3. 30. ゲネプロ
4. 1. 汐留 PIT

U|豊島からちょうど1年なんですよね。そんな早いかなって、たまげましたけど。けっこう、武道館に初めて行った時より広いって感じしましたね。青年館は2階があるっていうのもあったんだろうけど、PIT ってまっ平でしょう。うわ～広いなあって。

A|でも、あれだけ広いとかえってバンドを引っぱっていかなきゃ、みたいな気持ちが出てきて。この頃から声も最後までもつようになったし、ずいぶん自信がついたライヴだったんじゃないかな。

4. 3. 秋田県民会館
4. 5. 弘前市文化会館
4. 6. 青森市文化会館
4. 7. 八戸公会堂(最終日)

U|東北は数がすごかったですね。でも、おもしろかったですよ。

T|一緒にやったバンドといろいろ交友関係も広がったし。

U|それまで友達いなかったから(笑)。なんて、いちばん良かったのは、みんなインディーズ上がりだったってことかな。インディーズ時代が長いバンドが多かったから、けっこう同じ穴のムジナっていうか(笑)。

4. 11.
4. 12. 取材
4. 13. "BUCK—TICK SHOCK TOUR" 沼津ロイヤルギャラリー
4. 14. 名古屋フレックスホール
4. 16. 京都ビブレホール
4. 17. 神戸チキンジョージ

I|この日は激しいノリで(笑)印象に残ってます。前の方にパンクスがいて、ダイビングしたり(笑)。煽りまくってけっこうアツくなりましたね。

4. 18. 大阪御堂会館、取材
4. 19. 大阪OBC収録
4. 21. 松山ラフォーレ原宿
4. 22. 高知県民文化ホール
4. 23. 高松オリーブホール
4. 25. 長崎NBCホール
4. 26. 熊本郵便貯金会館

4. 28.　福岡都久志会館

A|博多のホテルで、11階ぐらいの部屋だったんですけど、すごい夜景がきれいで。思わず電気消しちゃったりして、ひたってました(笑)。

4. 29.　広島ウッディーストリート
5. 1.　名古屋ロックウェーブ
5. 4.　取材
5. 5.　TVK"パチパチトマト"収録　渋谷公会堂
5. 6.　宇都宮文化会館
5. 7.　取材
5. 9.　石川県教育会館(追加)
5. 10.　石川県教育会館
5. 12.　新潟音楽文化会館
5. 15.〜5. 17.　ビデオ収録
5. 16.　取材
5. 20.　札幌道新ホール
5. 23.　埼玉会館小ホール
5. 24.　ミーティング、取材
5. 25.　横浜市教育会館
5. 26.　取材
5. 27.〜5. 28.　新曲リハーサル
5. 29.　衣装打ち合わせ
5. 30.　前橋市民文化会館(最終日)

U|ここまでずっと続いて…。小ホール・ツアーですね。

H|今までではいちばん長いツアーですよね。途中で家に帰りたいと思ったりもしました(笑)。

6. 1.　リハーサル
6. 2.　"キッズ・アライブ"汐留 PIT、取材
6. 3.　NHK—FM 収録、取材
6. 4.〜6. 17.　曲作り OFF
6. 11.　取材
6. 13.　NHK、LF 収録
6. 16.〜6. 18.　リハーサル
6. 20.　FM 東京収録　新宿パワーステーション
(12000名の応募者から600人を招待した公録ライブ)
6. 21.　アルバム『SEVENTH HEAVEN』発売、リハーサル
6. 22.　リハーサル
6. 23.　CX"サウンドスコール"収録、リハーサル
6. 25.　CX"オールナイトフジ"収録

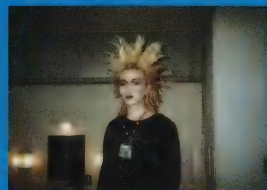
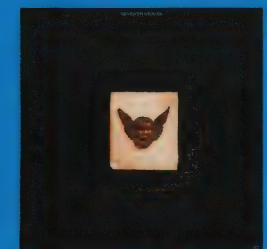
U|ああ、オールナイトフジも出ましたねー。時間帯がすごかったですね、オンエアが3時半か4時でしょう。

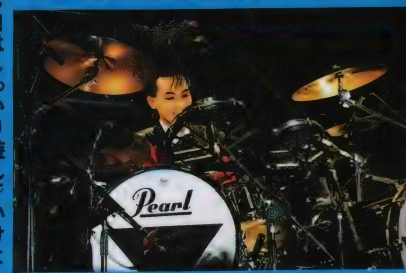
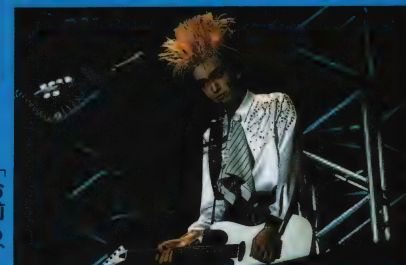
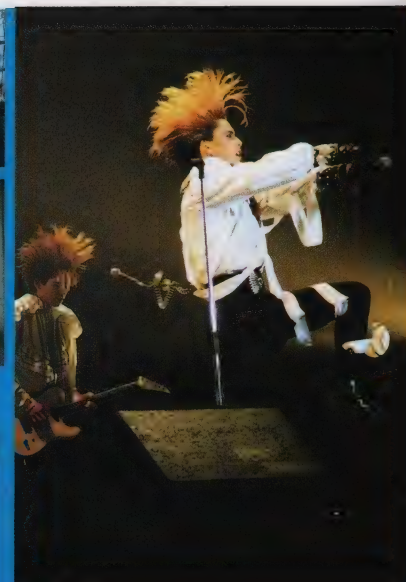
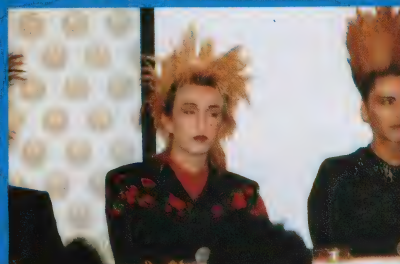
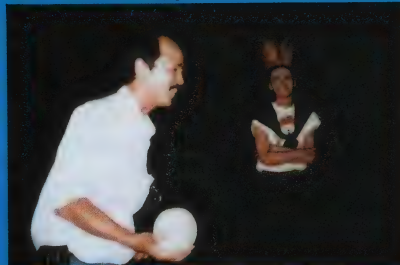
T|いつ出るかと思ったら、とんでもない。あれじゃ誰も見ねーや、って(笑)。

6. 27.〜6. 28.　取材
6. 29.　ポスター撮影
6. 30.　RF"どんとラジオ"出演、取材
7. 1.　リハーサル
7. 2.　川崎ファンの集い
7. 3.〜7. 6.　リハーサル
7. 4.〜7. 5.　取材
7. 7.〜7. 8.　シングル『JUST ONE MORE KISS』レコーディング
7. 10.　鶴岡市民文化会館
7. 12.〜7. 14.　シングル『JUST ONE MORE KISS』レコーディング

U|速攻ですね。まあ、2曲だからふつうか。この曲はカラオケでも聞きますって、違うか(笑)。

7. 15.　TVK"パチパチトマト"リハーサル　よみうりランド EAST
7. 16.　TVK"パチパチトマト"ライブ　よみうりランド EAST
7. 18.　NHK—FM、RF 収録

▼名古屋"ロック・ウェイヴ"も大型なイベント。野外・昼間ということもあり、爽快な魅力が強張されたステージ

▲"ショック・ツアー"最終日、前橋の楽屋にて。今井くんの七変化はいつ見ても刺激的

『SEVENTH HEAVEN』
VICTOR 2nd. ALBUM
1988.6.21. ON SALE

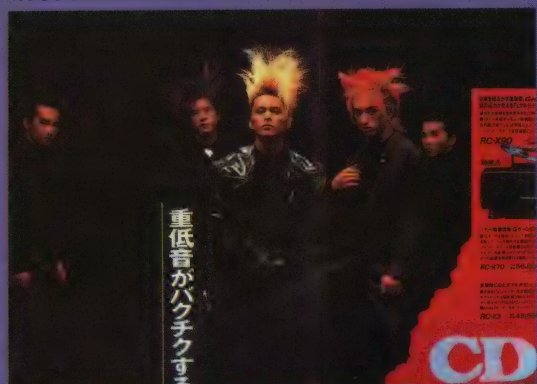
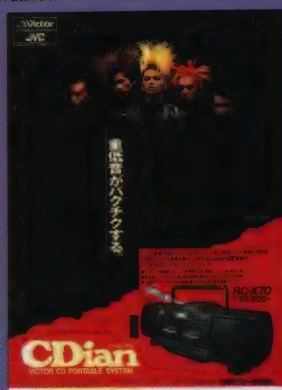
「お前ら、今日はしっかり遊んでいけよ」
「いつもは汚い恰好してるけど、今日はみんなチャラチャラしてます」
[1988. 4. 1 PIT]

▼桝岡マネージャーとアッちゃん

▲7.2.川崎ファンの集い。
バンドが大きくなってもファンひとりひとりを大切にするB-T。
心なごむひとときだ

1988.8.18.
スポーツ・バレー京都
"SOUND ON WAVE 1988"

1.PHYSICAL NEUROSE
2.…IN HEAVEN…
MC
3.DO THE "I LOVE YOU"
4.MISTY ZONE
5.DREAM OR TRUTH
6.AUTOMATIC BLUE
MC
7.ROMANESQUE
8.HYPER LOVE
9.VICTIMS OF LOVE
10.SEXUAL XXXXX!
MC
11.EMPTY GIRL
12.TO-SEARCH
13.MEMORIES…

「雨が降ったから京都キライになった（エーと言う事に）冗談（笑）」
「これからはBUCK―TICKは髪を立てたい時にしか立てないからな」
［1988. 8. 18 京都スポーツバレー］

▲フールズメイト89号の表紙となったカットもこの時期のもの

『JUST ONE MORE KISS』
VICTOR 1st. SINGLE
1988.10.26. ON SALE

▲「重低音がバクチクする」ラジカセのCF。
シングル・ヒットとのイメージが見事にシンクロした好例

◀ロンドン・レコーディングの模様を伝える
フールズメイト97号

1988.7.24.
札幌真駒内オープン・スタジアム
"ROCK CIRCUIT"

1.TO-SEARCH
2.…IN HEAVEN…
MC
3.PHYSICAL NEUROSE
4.VICTIMS OF LOVE
5.ROMANESQUE
6.SEXUAL XXXXX!
MC
7.EMPTY GIRL
8.FUTURE FOR FUTURE
9.MEMORIES…

7. 19. リハーサル、取材
7. 20. リハーサル
7. 21. TBS"土曜深夜族"収録
7. 22. 取材
7. 24. "HOKKAIDO ROCK CIRCUIT" 札幌真駒内オープンスタジアム
7. 27. 神戸フィッシュダンスホール
7. 28. 取材 今井寿×金子美香対談
7. 29. リハーサル
7. 30.～7. 31 CF"CDian"撮影

U|羽田で撮りましたね。中国航空っていうのが出てるんだけど、それ時間帯がけっこう空いてて、飛ばない時に貸してもらったんです。だから出てる人もみんなエキストラですよ。衣装もいっぱい持ってって。サラリーマンとかパイロットとか、あと旅行に行きそうな女の子の格好とか。

8. 1. リハーサル
8. 3. "ROCK WAVE 88" 河口湖富士急ユニファーフォレスト
8. 6. CF 撮影
8. 7.～8. 9. 曲作りOFF

U|これもよくわかんない(笑)。
M|今井からの申告で、曲作るからOFFにしてくれっていうんじゃなかったっけ?
I|OFFって言わないよね(笑)。

8. 10. 取材
8. 11. ジャケット撮影
8. 12.～8. 14. 取材、リハーサル
8. 15. "POP ROCKETS 88" 新潟湯沢中央公園野球場
8. 18. "SOUND ON WAVE 1988" 京都スポーツバレー
(桜井、今後は髪を立てたい時にしか立てないと宣言)

U|雨でしたね
T|これでアッちゃん頭おろしたっていう(笑)。途中で頭洗っちゃったんだよね。えーい、もういいやって(笑)。
A|それ以来ずっと。もう、好き勝手に。

8. 20. "KIRIN SOUND TOGETHER POP HILL 88" 石川県森林公園
8. 23.～8. 24. ビデオ撮影

U|これは『JUST ONE MORE KISS』のビデオですね。

8. 26. イベント"LOWSON MUSIC ING" 大阪御堂会館
8. 29. RF 出演、取材
8. 30. リハーサル
9. 1. アルバム『TABOO』レコーディングのためロンドンへ

T|実はすごいのがあるんですよ。今井が曲を忘れて向こうで曲作ったっていう(笑)。テープを忘れてったんだっけ。
U|アコースティックの曲だよね。
I|「サイレント・ナイト」。
T|あれ、実際はああいうんじゃなかったんだろう(笑)。
I|ちょっと変わった。でも今の方がいいよ(笑)。

9. 2. レコーディング開始
9. 3.～9. 5. リズム録り
9. 6. OFF キングズロードにてショッピング
9. 7. 取材、撮影
9. 8.～9. 9. リズム録り
9. 10.～9. 12. ギター・ダビング
9. 13.～9. 15. ギター・ダビング、ヴォーカル録り
9. 16. シンセサイザー録り
9. 17.～9. 19. ギター・ダビング、ヴォーカル録り

9. 20.　パーカッション、ヴォーカル録り
9. 21.　GREY HOUND にてライヴ

T|ライブもやったよな。

U|まあ、コンベンションですけど。日本のバンドが来たっていうんで、向こうの業界人を集めて。

9. 22.　ヴォーカル録り
9. 23.〜10. 1.　トラックダウン

U|でもロンドンて、ラップ野郎ばっかりいたんだよね。パンクスとか期待して行ったのに、ぜんぜんいなくてガッカリだった。

T|即死状態(笑)。

A|酔っ払い状態って(笑)。だけど、後半は帰りたくないと思いましたね。街並み見てるだけでも安らぐっていうか。

I|家とかは当たり前だったけど、カラーの屋根とかそういうのは感じよかった。

T|おっかけも来た!(笑)

U|あれ驚きましたね。来た来た、ホントかよ、みたいな(笑)。

10. 2.　ロンドン発
10. 3.　帰国
10. 6.〜10. 9.　リハーサル
10. 10.　“銀座音楽祭”出演、ゲネプロ
10. 11.　“SEVENTH HEAVEN TOUR”
戸田市文化会館(ファンクラブ限定ライブ)

U|帰ってすぐツアー。『TABOO』はできてるんだけど、『SEVENTH HEAVEN』の曲で回ったんですね。『JUST ONE MORE KISS』だけやってると思う。ほとんど会館クラスで、いちばん本格的なツアーだったね。

T|この日は確か、ファンクラブ限定。

U|ああ、ゲネプロみたいな感じのね。

T|だからアレですよ、ウチの場合、特典ありますよ(笑)。

10. 12.　LF“ファンファン TODAY”出演
10. 13.　渋谷公会堂
10. 14.　取材
10. 15.　群馬音楽センター
10. 17.　CF 撮影
10. 18.　浦和市文化センター
10. 19.　CF 撮影
10. 20.　平市民会館
10. 21.　千葉県文化会館
10. 22.　山梨県民文化ホール
10. 23.　アルバムジャケット撮影
10. 24.　CF 撮影
10. 25.　京都勤労会館
10. 26.　EP『JUST ONE MORE KISS』発売

U|ツアー、ツアー…。

A|これ全部、車だっけ。

T|車じゃない。バスとか電車とか、ふつうの。

10. 28.　平塚市民センター
10. 31.　大阪厚生年金会館
11. 2.〜11. 3.　川崎クラブチッタ 2DAYS
11. 4.　テレビ朝日“ミュージックステーション”出演
11. 5.　CX“オールナイトフジ”出演、取材
11. 8.　高知県民文化ホール
11. 9.　愛知県民文化会館
11. 10.　広島郵便貯金会館、TBS“ザ・ベストテン”収録
11. 12.　徳山市文化会館

U|ツアー、ツアー…。

11. 14.　福岡市民会館
11. 15.　鹿児島県文化センター
11. 16.　長崎平和会館

▲“SEVENTH HEAVENツアー”
当時のフォト・セッションより

11. 18.　熊本市民会館
11. 20.　新宿パワーステーション
11. 22.　新潟県民会館

U|ツアー、ツアー…。まだ終んないという(笑)。

A|あんまり…、ステージに立っちゃえば疲れとかブッ飛んじゃいますけどね。終った後の脱力感、終っちゃったな〜みたいな。始まる前はツライなあ、ヤダなあとか思うんだけど、終りに近づくと寂しいなって(笑)。

11. 24.　長野県民文化会館
11. 25.　金沢市観光会館
11. 26.　富山県民会館
11. 28.　NHK“JUST POP UP”出演、取材
11. 29.　愛知県勤労会館、取材
11. 30.　浜松市民会館、取材
12. 2.　RF ゲスト出演、取材
12. 3.　福島放送特番ゲスト出演
12. 4.　山形県県民会館
12. 5.　仙台電力ホール、取材
12. 7.　茨城県民文化センター、取材
12. 8.　宇都宮市文化会館、取材
12. 11.　QR“歌謡選抜”出演、取材
12. 12.　写真集撮影
12. 14.　札幌市民会館
12. 15.　取材
12. 16.　秋田市文化会館
12. 18.　郡山市民文化センター
12. 19.　岩手教育会館
12. 20.　青森市文化会館
12. 22.　写真集撮影
12. 23.　静岡市民文化会館
12. 27.　群馬県民会館(最終日)

U|と、ここまでですね。長い長い…。

T|このツアーはけっこうスランプだったんスよね(笑)。生まれて初めてってぐらいの不調だったから辛かったけど、逆にこの先は“もう恐いもんナシ”って感じになりましたね。

12. 28.〜12. 29.　取材
12. 31.　日本レコード大賞新人賞　日本武道館

U|この年はいろんなことありましたもんね。

T|89年がねえんだよ、あんまり(笑)。4月で一瞬引退しちゃうから(爆笑)。

TVK オールナイトライヴ　新宿コマ劇場

「BUCK−TICK は忙しいんです。
でも俺たち幸せです。
事務所やレコード会社を憎んでなんかいません(笑)」
[1988. 10. 13 渋谷公会堂]

「(EMPTY GIRL 途中でドラムとヴォーカルのタイミングが合わずやり直しになって)これもリハーサルで練習したんです(笑)。
ウケたでしょ」
[1988. 10. 20 平市会館]

「群馬県出身の BUCK−TICK です
今日はとっても自分勝手です」
[1988. 11. 2 川崎クラブチッタ]

▲2日間にわたる武道館でのステージは、ひとつの到達点というべき完成度の高さ。まさにNo.1バンドの風格

1989.1.19.
日本武道館

1.ICONOCLASM
2.TOKYO
MC
3.PHYSICAL NEUROSE
4.MISTY ZONE
5.ROMANESQUE
6.HURRY UP MODE
7.EMBRYO
8.HYPER LOVE
9.VICTIMS OF LOVE
10.SEXUAL XXXXX！
MC
11.SILENT NIGHT
12.ANGELIC CONVERSATION
13.TABOO
EN
1.TO-SEARCH
2.JUST ONE MORE KISS
3.….IN HEAVEN….

1989.1.20.
日本武道館

1.ICONOCLASM
2.TOKYO
MC
3.PHYSICAL NEUROSE
4.MISTY ZONE
5.ROMANESQUE
6.CASTLE IN THE AIR
7.EMBRYO
8.HYPER LOVE
9.VICTIMS OF LOVE
10.SEXUAL XXXXX！
MC
11.SILENT NIGHT
12.ANGELIC CONVERSATION
13.TABOO
14.JUST ONE MORE KISS
EN
1.HURRY UP MODE
2.TO-SEARCH
3.SEVENTH HEAVEN
4.….IN HEAVEN….

『SABBAT I』
VICTOR LIVE VD(9SONGS)
1989.4.21. ON SALE

『TABOO』
VICTOR 3rd. ALBUM
1989.1.18. ON SALE

『SABBAT II』
VICTOR LIVE VD(9SONGS)
1989.4.21. ON SALE

「みんなのこと骨のズイまで愛してます。5人をもてあそんでって下さい」
［1988. 1. 20 武道館］

1989

1. 1.　TVK オールナイトライヴ　新宿コマ劇場
1. 8.　NHK"JUST POP UP"出演、取材
1. 10.　リハーサル
1. 16.〜1. 17.　取材
1. 18.　アルバム『TABOO』発売
1. 19.〜1. 20.　日本武道館 2DAYS

U｜やっぱり節目ですよね。総合してみると、豊島、青年館、PIT、渋公、で、武道館と。
T｜初日は緊張したね。2日目は自分のペースでできたけど。
A｜緊張しました。
T｜1日目はあたま立ててたんだよね。
A｜そう。
U｜狭いなあ、すごい狭いと思いましたね。
T｜武道館初ステージなのに態度でかい(笑)。
U｜PIT の印象の方がぜんぜん大きいっていう。ヒデ、どうだったの。
H｜え、何が？
全｜(笑)
T｜しっかりしてくれよォ(笑)。武道館だよ武道館！
H｜1日目は緊張したけど、2日目は…、緊張しました(笑)。
T｜そうかぁ？　ビデオが物語ってる余裕のプレイだろ(笑)。
I｜ドキドキするっていうんじゃなくて、なんか体が動かないっていうか。
A｜俺、曲目まちがえて初日に2日めの曲やっちゃったりしたんです(笑)。みんなにやらせてしまったんですね。PA とか照明の人も、あせっただろうなぁ(笑)。

1. 24.　取材
1. 26.〜1. 28.　ビデオ編集
1. 29.　取材
1. 30.〜2. 5.　ビデオ編集
2. 6.　撮影
2. 8.　ビクター・ヒット賞パーティー
2. 9.〜　OFF(この間、桜井が香港へ、今井・樋口はインドへ)

U｜で、ちょっと OFF があってからツアー…。

3. 22.　"TABOO TOUR"　立川市民会館
3. 29.　山梨県民文化会館
4. 1.　茨城県民文化センター
4. 4.　鹿児島市民文化ホール
4. 6.　熊本市民会館
4. 7.　福岡市民会館
4. 10.　長野市民会館
4. 12.　浜松市民会館
4. 13.　名古屋市公会堂
4. 16.　広島郵便貯金会館
4. 17.　倉敷市民会館
4. 18.　愛媛県民文化会館
4. 20.　高知県民文化ホール
4. 21.　武道館ライヴビデオ『SABBAT I・II』発売

A｜タイトルは美術関係の本から。家で見てたら"SABBAT"っていうのが目について、邦題が"魔宴"だったんですよ。で、あ、カッコいいかなって(笑)。
H｜初めて見た人は、変な気になるかもしれないですけど。まあ、それも狙いだったんで。インパクトあるし。

今井、麻薬取締法違反で逮捕

M｜20日に高知が入ってたんですけど、そこで打ち切りですね。

M|この後、関西・東北シリーズに入る予定だったんですよ。5月いっぱいまで、全40本で19本残ってたんだと思います。

7. 17.　今井を除く4人、事件後初の取材

M|いろんな方面から直接言葉がほしいってことで、ずっと要望があったんですね。今井もその段階では、もう喋れることは喋れる状態だったんですけど、まあ、僕らが出てきて最初にお世話になった音楽専門誌から始めましょうってことで。のべつまくなしにやるより、まずそういうところから始めていこうと。

10. 1.　アルバム『悪の華』レコーディング開始

12. 29.　“バクチク現象”　東京ドーム

I|最初ドームって言われた時はさすがにビビッたというか、心配でしたけど。あんな5万人も本当に来るのかなあって。でも、もう決まっちゃったんだから、やるしかないと思ってやりました。

1990

1. 24.　シングル『悪の華』発売

2. 1.　アルバム『悪の華』発売

2. 8.　『HURRY UP MODE』リミックス発売

3. 2.　“悪の華ツアー”　大宮ソニックシティ

U|やっと今回のツアーがスタートですね。で、意気込みですか？(笑)

T|燃えてます！　24時間働けちゃうって？(笑)

U|でも、やってきたことがあるから今があるんだな、と思いますよね。間違ってなかったなって。

T|つくづく思うね。

U|これ、全部もう1回やれって言われたらヤだよ(笑)。

A|でも、ここまでやれたんだから、この倍はやれるかな(笑)。

H|えー、長いようで短かった数年間…(笑)。終ったわけじゃないんですけど。長いツアーだから、体に気をつけて…(笑)。

T|おジイさんの遺言じゃないんだから(笑)。

I|こうしてみると、充実した人生を送ってるなあと、そういう感じがしました。

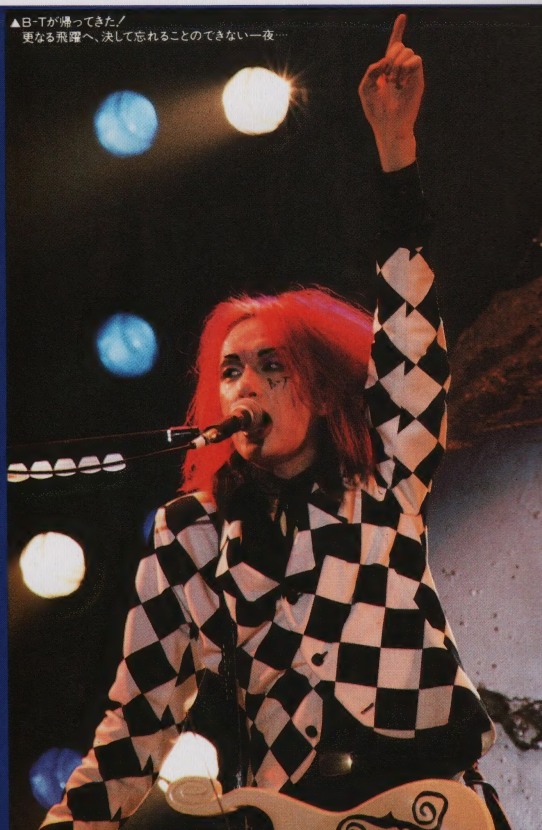
T|まさか昔、今井ん家でたまってる頃は、こうなるなんて思いもよらなかったもんな。

U|そういう予感なんて、ぜんぜんなかったですもんね。だから、本当に自分らで歴史を作ってるんだなあって。あ、でもこれからがもっと長くなるんだろうけど。

A|去年は今井に振り回されたから、今年は俺たちがひっぱり回してやりますよ(笑)。とりあえず、このツアーは1本1本思いっ切り。終った時の充実感をすごいものにしたいから、せいいっぱいカッコつけて…！

3. 5.　大阪厚生年金会館
3. 7.　神戸国際会館
3. 9.　大阪厚生年金会館
3. 10.　磐田市民文化会館
3. 13.　名古屋市民会館
3. 14.　名古屋市民会館
3. 17.　山形県民会館
3. 18.　福島県文化センター
3. 20.　鶴岡市文化会館
3. 21.　秋田県民会館
3. 23.　群馬県民会館
3. 26.　宇都宮市文化会館
3. 29.　八王子市民会館
3. 30.　京都会館
4. 1.　茨城県立県民文化センター
ビデオ『悪の華』発売
4. 3.　岐阜市民会館
4. 4.　四日市市文化会館
4. 6.　市川市文化会館
4. 10.　新潟県民会館
4. 12.　長野県県民文化会館
4. 13.　石川厚生年金会館
4. 17.　郡山市民文化センター
4. 19.　宮城県民会館
4. 20.　岩手県民会館
4. 22.　青森市文化会館
4. 25.　函館市民会館
4. 27.　北海道厚生年金会館
4. 28.　帯広市民文化ホール
5. 4.　徳山市文化会館
5. 5.　広島郵便貯金会館
5. 7.　松山市民会館
5. 8.　高知県民文化ホール
5. 10.　倉敷市民会館
5. 11.　香川県民ホール
5. 13.　島根県民会館
5. 15.　静岡県民会館
5. 21.　桐生市産業文化会館
5. 24.・5. 25.　横浜アリーナ
5. 31.　平市民会館
6. 4.　山梨県民文化会館
6. 7.　熊本県立劇場演劇ホール
6. 9.　福岡サンパレス
6. 11.　宮崎市民会館
6. 12.　鹿児島市民文化ホール
6. 14.　長崎市公会堂
6. 18.　那覇市民会館
6. 22.　浦和市文化センター
6. 25.・6. 26.　群馬音楽センター(最終日)

▲B-Tが帰ってきた！
更なる飛躍へ、決して忘れることのできない一夜……

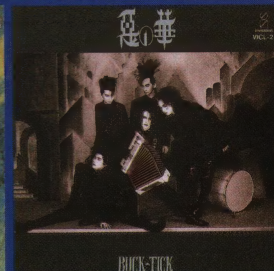
今は、すこしずつ落ちついてきています。自宅で曲を作ったりしてのんびりすごしています。この事でツアーが中止になったりして色んな形で負担や迷惑をかけたことをおわびします。
BUCK-TICKを応援してくれてる皆様へ
復活したときは、また楽しんでもらうのでよろしくお願いします。ライブ見れなかった人ごめん、かならずこの穴はうめます。
今井 寿

▲各マスコミを通じて発表された今井くんの“おわび”

1989.12.29. 東京ドーム

〜SE (バクチク現象のテーマ)
1.SEXUAL XXXXX！
2.EMPTYGIRL
3.HURRY UP MODE
4.TOKYO
5.SEX FOR YOU
6.MISTY ZONE
7.ILLUSION
8.悪の華
9.THE WORLD IS YOURS
10.ROMANESQUE
11.HYPER LOVE
12.VICTIMS OF LOVE
13.TO-SEARCH
14.FLYHIGH
15.PHYSICAL NEUROSE
16.JUST ONE MORE KISS
EN
1.ICONOCLASM
2.…IN HEAVEN…
3.MOONLIGHT

「BUCK-TICK現象と呼ぶ時は、自分たちにとって大切な時で。今日も大切なお客さまを5万人も……有難う。言いたいのは……とにかくみんな元気です。みんなも元気で安心した」

▲復活第1声、かなり突っ込んだ問答が行われたフールズメイトのインタビュー・ショット

『HURRY UP MODE』
VICTOR REMIX ALBUM
1990.2.8. ON SALE

『悪の華』
VICTOR 4th. ALBUM
1990.2.1. ON SALE

『悪の華』
VICTOR 2nd. SINGLE
1990.1.24. ON SALE

▲そして“悪の華ツアー”が幕を開く。
BUCK-TICK、無限の可能性を求めて

『悪の華』
VICTOR VD(10SONGS)
1990.4.1. ON SALE

BUCK-TICK SPECIAL ISSUE

フールズメイト6月号増刊HYPno.3

平成2年6月15日発行

〒151 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1305 PHONE:03-374-6117 FAX:03-374-6399

発行所　フールズメイト

編集人　羽積秀明

協力　ビクター音産　シェイクハンド

写真　松原研二　久保憲司　辻砂織　小松陽祐

AD　アンソニー・リー KARATH RAZAR　田中登百代 KARATH RAZAR

取材協力　麻田由記

見出印字協力　高橋幸宏(制作舎)

デザイン協力　榎本是朗

FOOL'S MATE extra issue, June 1990

*'HYP'*no.3

BUCK-TICK special issue

presented by Hideaki Utsumi, FOOL'S MATE, Inc.

Hatsudai-Haitsu #1305, 1-7-16 Honmachi Shibuya-ku, Tokyo 151, Japan. phone:03-374-6117 fax:03-374-6399

cooperation: Victor Musical Industries, Inc. and Shaking Hands, Inc.

photographs: Kenji Matsubara, Kenji Kubo, Saori Tsuji, and Yosuke Komatsu

art direction: Anthony Lee and Tomoyo Tanaka, Karath Razar

type-setting for head lines: Yukihiro Takahashi, Seisakusha

thanks to Yuki Asada, Zero Enomoto, Sanae Watanabe and Takami Suzuki

printed in Japan

HYP NUMBER 3
SPECIAL ISSUE
BUCK-TICK

HYP[ハイプ]NO.3●フールズメイト6月号増刊●平成2年6月15日発行●編集人/羽積秀明●発行所/フールズメイト
●〒151東京都渋谷区本町1-7-16初台ハイツ1305 TEL 03-3374-6117

雑誌07826-6　定価1250円(本体1214円)